春城路華
餘生吟哦

市島謙吉著

富山房發刊

春城隨筆

餘生兒戲

市島謙吉著

富山房

¥ 2.80

LICENSED PRODUCT

春城
隨筆
餘生見聞

紅讀書齋
求是學社
貴圖書館
藏書居常

春城泛筆

餘生晚歲

春城泛筆

餘生晚哉

著者近影

序

自分は十年ばかり毎年隨筆を刊行して來たが、國難が起つてから、紙を惜んで刊行をフッツリ止めた。併し折に觸れて閑筆を弄したものや、時に新聞雜誌に寄せたものは相當に溜つてゐる。此頃、病中に或る友人はしきりに刊行を勸めるけれども自分は目下草稿の手入や取捨に懶く、友人の勸めを一應拒んだが、友人は更に編纂は一任されたい、出版所も既に定めたからと再度の勸めに辭し兼ねて、遂に全部の草稿をさらけ出して其爲す所に一任した。此草稿の全部は時局に小補あるものでなく、自分が老後の兒戯と見做してゐるものである。書名を「餘生兒戯」としたのも其故である。

昭和十四年初秋

春城しるす

目次

自序……一
ス・フ隨筆
虎……二
隣人……九
敗荷殘柳……一四
人を酒の下物として……一九
望鄉……二三
田園の山水美……二七
市塵……三二
不滅の火……三九

八百膳……四四
梅干と鰹節……五〇
銀座の横町……五三
梅……五九
日日是好日……六三
話術落語について……六七
酒顚童子……七二
メスメリズムと宗教……七六
豆腐禮讃……八〇
俎上藝術……八三
きせるの趣味……八六
獄中の喫煙……九一
ビール決闘……九五
西洋の媚藥……九七

乞食と生田萬……九八
綠蔭閑語……九九
下駄……一〇七
也有と熱海……一一〇
田園山水……一一三
一葉女史許嫁の人……一一五
酒は大義の母……一二〇
石上流に進むの說……一二五
青丹よし……一二七
川柳……一二九
昨今の川柳……一三四
伊勢屋……一三七
雜誌漫渉……一三八
偶感雜錄……一四六

旅と紀行

文人の旅……〔一六一〕
水郷游記……〔一六八〕
越後新井郷川……〔一七五〕
モールスの「ジャパン・デー・バイ・デー」……〔一七九〕
昔の旅……〔一八七〕
私の初めて見た東京……〔一九五〕
血氣時代の富士登山……〔二〇三〕
支那の新日本史蹟を訪へ……〔二一四〕
旅行と科學……〔二二九〕

人

近衛霞山公追憶……〔二二五〕
大隈侯の壽齡の考察……〔二三二〕
軍人後援會長たりし大隈侯……〔二三八〕
青淵澁澤子爵に就いて……〔二四四〕
交通文化の恩人前島男爵……〔二五二〕
田中青山翁……〔二六二〕
小野梓氏の逸事……〔二七三〕
大石正巳氏と余……〔二七七〕
豐城星野恒先生……〔二七九〕
高田早苗博士を悼む……〔二九〇〕
林若樹君……〔二九五〕
安田善次郎君を悼む……〔二九九〕
石渡敏一氏……〔三〇五〕
谷村一太郎君の一周忌に際して……〔三〇九〕

畫家野澤如洋……〔三二四〕
澤本與一君を憶ふ……〔三二八〕
亡友二人を憶ふ……〔三三三〕
豪快兒長田秋濤……〔三三六〕
外人スネルの事……〔三三六〕

文藝

教育機關としての私塾……〔三四一〕
昔の大衆教育を憶ふ……〔三四八〕
鐵の鍛錬に倣へ……〔三五二〕
名家書翰蒐集の思ひ出……〔三五六〕
良寛禪師の手紙に就いて……〔三六八〕
長崎と市河寛齋翁……〔三七三〕
越後に於ける龜田鵬齋翁の逸書……〔三八〇〕

松浦北海に就いて……〔三八六〕
釧雲泉の事……〔三九五〕
贋物ものがたり……〔四〇七〕
大賀博士の蓮の研究……〔四一一〕
石割松太郎氏の祥瑞研究……〔四一六〕
軍國の讀書シーズン……〔四二〇〕
言行錄を讀んで……〔四二五〕
東京日日新聞の一萬號に際して……〔四三五〕
丸善の「學燈」……〔四四〇〕
吉田東伍博士地名辭書編纂の思ひ出……〔四五一〕
越佐人名辭書……〔四五四〕
「坪内逍遙」の刊行に際して……〔四五八〕
大久保湘南詩集に序す……〔四六〇〕
新潟の公園に長井雲坪の碑を見て……〔四六〇〕

文墨餘滴……〔四六五〕
國書刊行會の思出……〔四八九〕
紅霞山房印話……〔五〇〇〕
印話採餘……〔五四三〕

ス・フ隨筆

虎

新年の首端に其年の干支に因んだ事を話題とするなどは陳腐で智慧の無いことゝ知りながら、ことしは寅年であるから、虎に就て聊か語ることにした。

先づ虎の文學をと案ずると、虎は猛獸の王者だけに其威勢は猛烈で、猛虎一聲山月高しと云へば嵎を負ふて豪嘯する雄姿が偲ばるゝ。高言嘯虎の風をなすと云ふのは、虎の豪嘯を藉りて人の大言を形容するのである。猛虎深山に在れば百獸震慄すると云ふなど、他の獸類に恐れられてゐる。

ことしは寅の干支で強勢の歳であるが、時艱に考へ合せると善くもあり、又張膽明目大いに氣をつけねばならぬ暗示があるからにも考へられる。

諺にも云ふごとく虎穴に入らずんば虎子を得ずと、戰爭も徹底せねば得る所はない。併し騎虎の勢に乘ずるは往々失敗を招く。夫の暴虎の河に憑るは激憤自ら水に溺るゝ難があつて勇とは云へぬ。古語に山に上つて虎を捕へるは易く人に就て錢を借りるは難いと、腕力で虎を打つは難くないが戰局

を巧みに收める折衝が寧ろむづかしい。兩虎戰ふ時一狗の餌となると云ふごとく、日支鬪つて第三國が漁父の利を博する危險があることを思はねばならぬ。虎の威を借る狐と云ふは童話に聞くが、敵國は現に虎の威を藉り敗勢を回さんとなしつゝあるではないか。苛政は虎よりも猛けしと云ふが、敵國は連戰連敗の弱者だが、其苛政だけは虎に倍してゐる。虎は死して革を留め人は死して名を留むと云ふに、蔣將軍は何んぞ一死、名を留むるの擧に出でざる。

虎を藉りて教訓を寓した文學を案ずるに、古語に虎瘦せて猛聲を起し人貧なれども志氣を存す、などは名言である。

亦有爲の士はこれを擧ぐれば青雲の上にあり、抑ふれば深淵の下に在り、これを用ふれば虎となり用ひざれば鼠となる、とは漢書にある語だが、李白は此意を取つて、君臣を失へば龍魚となり、權臣に歸すれば虎鼠と變ず、と云ふてゐるのも名言だ。

實に權の歸する所は虎、權の無き所は鼠だ。世間鼠となつて深淵に潛み居るものの果して幾許ぞ、政治の要は人を用ひて虎たらしむべし、鼠たらしむ可らざる歟。井原西鶴は云ふた、恐るべきは虎の皮の褌にあらずして緋縮緬のふんどしであると、嬋妍の双ほど恐るべきものはない。

虎の恐ろしいのはそれがよく怒るからで、何故怒るか、實は臆病であるので、自衛のため人に嚙みつくのである。此事に就て蘇東坡は一小話を錄して弟の子由に示してゐる。

それに由ると、小兒を負ふた母が川に洗濯せんため小兒を野に游ばせて居ると、そこへ虎がのそ〳〵やつてきた。小兒は頑是なく無心で虎の恐るべきを知らないから、虎が近寄つても一向驚かず平氣で居るので、虎は手出しをせずに去つたとあるが、畢竟虎は臆病者で、人の恐れる態度を敵意ありとして嚙みつくのであつて、無心なれば敢て爭はないことは東坡の記した如くで、此文には教訓的含蓄があつて面白い。

東坡の記で思ひ出すのは、虎が人間の孩兒を拉し去つて乳を與へて撫育し

た實話がある。これはボルネオに事實あつた事で、孩兒は追々生長して人手に渡り、普通の教育を受けたと嘗つてボルネオに赴いた知人から聞いたことがあるが、虎は獰猛の動物ながら敢て惡性あるにあらず、人間に馴れれば豐干禪師の如く居眠りしながら虎に騎る人もあつた。

筆の序に虎に就てのエピソードを書きつけると、武將で虎を聯想させるのは加藤清正である。朝鮮の役に彼が虎狩をしたことから虎に因緣づけられたのだが、西鄕南洲は曾て虎狩の記を書いたことがあつた。其自筆を複製したのを見ると、確か清正の虎狩を叙したものであつたやうに思ふ。

我國の武將で虎を名としてゐる人に高虎輝虎などがあり、信玄は虎を印に刻してゐるし、西洋では近く虎の綽名を得たクレマンソーがある。我邦で虎を軍隊の名としてゐるのは、會津の少年軍白虎隊が著名の一例であり、其壯烈の最後に感じて虎の如き伊國の宰相ムッソリーニが、記念塔を贈つてくれたなどは好挿話たるを失はない。

尙ほ武藝關係で一事を思ひ出すのは、虎の卷の兵書である。これは兵法の奥義を書いてあるので、機密のKeyには、いつしか虎の卷が流用されるに至つたことは何人も知る所である。

我國には今こそ動物園に虎が居るが、昔は實物を見ることは容易でなかつた。然るにそれに拘らず、虎の圖が頻繁と作られて、名畫の虎が多く存してゐる。中にも應擧は寫實家であるだけに虎の畫に名作が多く、岸駒は生きた虎を飼養して、夫れを寫生したと云ふが、兎角あの畫家の人格に彼是の評があつて、應擧のより識者に喜ばれない。狩野芳崖はいつぞや或る展覽會に雪村の竹林の虎を見て驚喜し、一里もある道を馳せ、友人の雅邦に一覽を勸めたいと其家を訪ふたが、生憎不在であつたので、已むなく留守の妻女から筆硯を借りて、匆卒見たまゝのスケッチを作り、主人歸宅せばこれを示されたい、此原畫を見損ふては一生の不覺だと熱心に言傳を賴んだと云ふが、如何にも芳崖らしい言動だ。そのスケッチは今も橋本家に存在して近い頃の陳列會に原畫と

併せて並べてあつたと云ふが、傳ふるに足る逸話だと思ふ。

兎角虎を描くは、畫家の難とする所で、本場の支那ですら虎を畫いて成らず、猫に類すなど云ふてゐるが、我邦では實物を見ない寫生だから、死虎を睡虎に描いて識者の笑を取つたりしてゐる。

されば川柳子は「猫でない證據に脇へ竹をかき」など皮肉を云ふてゐる。

彼が如き猛獸の嫌はれもせず却つて我邦に喜ばれてゐるのは或は武士の强がりが馴致したのかも知れないが、小兒輩でもこの猛獸をこはがりもせず、却つて玩具として喜んでゐるのは何故であらうか。かの張子の虎の頭が左右にフラ〳〵動く姿の滑稽味と愛嬌味が、小兒をして虎に親しみを持たせるのだとすると玩具師の功は畫師以上であるとも云へるだらう。

隣人

隣人を愛せよと孔子も基督も教へてゐる。いくら朋友知己が多くとも、遠くにゐては急難の場合呼び聲が屆かないのでたよりにならない。善隣は大切だが、事實に於て隣り同士は概ね中がわるい。

隣人で思ひ起すのは其角の句である。「梅咲くや隣は荻生惣右衞門」とあるが、其角の隣家に荻生徂徠がゐたと見える。此句は徂徠を褒めたのか嘲けつたのか一寸迷ふが、多分後者であらう。梅は處嫌はずあの頑固おやぢの處にも咲く勿體ないことだと、解されないでもない。恐らく當人は隣り合つて互ひに降らなかつたと想像せらるゝ。同藝互ひに猜むと云ふが、往々除外例もある。

巖谷一六と日下部鳴鶴は共に書道の人だが、永田町のこまい小路に軒を並べて居た頃、毎日中よく往來して書道を語り、詩を直しあひ、遂に緣組までやつ

た。日下部辨次郎工學博士は卽ち一六の子である。詩人國分靑厓翁は國文家の某氏と隣り合つてゐたことがある。兩家の厠が接近してゐたので脫糞の聲まで耳に入る。

或る時靑厓翁厠で無心に苦吟してゐると、隣りの此聲を聞き自分のと思ひ違つて倉皇厠を出たと云ふ滑稽談もある。同一趣味の隣同士が同病相憐んだ一例は、饗庭篁村が向島にゐた頃、宿醉でしきりに吐してゐる聲を隣家の主人が聞き氣の毒に思ふて、平生往來もしない間柄であるのに藥を使に持たせて見舞ひしたことがある。隣家の主人も酒豪で同病相憐んだのである。

坪內逍遙はもと熱海の荒宿にゐたが、追々熱海が繁昌して逍遙の別莊は待合や割烹店に取卷かれて晝夜絃聲に妨げられ、執筆も叶はず睡眠も出來ないので、到頭荒宿を引拂つた。併しこれと反對に、わざと絃聲の沸く藝妓町に法律事務所を構へたものがある。それは亡友山田僉南で町は新橋の出雲町で連簷櫛比皆藝者屋であつた。

維新匆々大隈老侯の住居は築地にあつて、多くの同志が寄合つたので梁山

泊の名があつた頃だが、物騷時代で隣家の下宿屋には危險人物が巢を作つて、樓上より侯の居間を見おろして銃を擬すやうな亂暴をやつたと云ふが危險な隣人である。さうかと思ふと紅葉山人に「隣の女」と云ふ小說のあるごとく、隣家に靑年を惱ます麗人がゐて戀におちるやうなこともある。

同種の營業者が競爭のため强て隣家に移り、本家爭ひをした例はいくらもあるが、震災前銀座の一角に本舖みすゞやと云ふ針店に隣り同名の同業者が本舖と名乘つて現はれたことを想ひ出す。ちかくは新宿に伊勢丹と布袋屋が隣つて高層のデパートを建てたが、布袋屋は終に伊勢丹の併呑するところとなつた。

間斷なく騷音を起す隣家は尤も忌むべきだが、斯く云ふ自分も印刷會社を經營してゐた時、深夜業に輪轉機を動かして近隣の睡眠を妨げしば〳〵苦情を聞いた。毎月若干の慰藉料をやつたりして大いに煩はされた。機械の騷音でなくとも夫婦喧嘩の頻々とある隣家もいやなものだし、旅舍の隣室に男

女の客があつて、襖越しに其動靜を知るのも不快のものだ。

同じく聲でも敢て厭はないものもある。自分はいつぞや修善寺の溫泉に浴した時、旅舍が寺の隣地にあつて、居室が鐘樓に最も近かつた。朝夕梵鐘を飽るほど聞いたが案外不快を感じなかつた。自分の今の宅の隣に神道實行教の社殿があり、朝夕社鼓を聽き又柏手の聲を聽くが心が澄んでよい心持である。

奈須の御用邸附近に一群の別莊がある。其別莊區を「近光莊」と呼んでゐる。誠に光榮の事だ。自分の友人で新宿御苑の隣地に家を構へてゐるものがある。自分に莊名を撰べと云ふから「隣光莊」と命したのは近光莊に因んだのである。

こんなことを案出すれば際限なくあるが、國際的の「隣」となると、事が甚だ重大である。日本は環海の孤島だが、隣には厄介の大國が二つもある。これに煩はされることが日本の運命とも云ふべきだ。曾つては北には樺太があり

南には臺灣があり、西には朝鮮があつて、小なりと雖も隨分煩累を蒙むつたが、揚句の果我有に歸したから今は平和だが、常に事端を釀す大陸二國を蕩平する日は果して何れの時であらうか。

敗荷殘柳

上野不忍池辯財天境内の生池院を會場として、夏頃大賀博士等の發起でしば〳〵觀蓮會が催された。毎度案内を受けたが、何分會合の時刻が拂曉に近い早朝であるのに僻易して一回も出席しなかつたが、先頃更に敗荷を賞する會が催され、是非出席せよと勸められ、會合の時刻が午後であつたから、今度は出席を諾した。此日は偶々好日和であつたので、會に臨むに先だち、不忍池畔に筇を曳き、湖景を詠めた。今は水面全く露はれ、いつもよりも廣く見え水禽も居らず遊人も無く、如何にも物さびしき光景は最早秋とは云へず初冬の景色であつた。敗荷何れに在ると尋ぬるに、今は既に好時期を過し葉を存する枯荷とては幾んど無く、僅かに一叢を尋ねあてゝ見るに葉は聊か存してゐても最早萎縮して皆悲しげに水面に垂れ下がり、一雨來らば皆水中に委し去らんとするやうに思はるゝ程にて、莖のみ水上に現はれあるは趣味ありとも覺へず、但だ案外に興を覺へたは蓮房の莖を脱して水中に落ちたるが風の吹き

まくるに送られて、彼なた此なたの渚に群集してゐるさまは、一種の風趣ありとは云へ、そは肅殺の趣にて、坐ろに物の哀れをそそるものであつた。誰やらの詩に「殘荷落瓣魚鱗活高柳飄絲鷺頂涼」とあるのは、恐らく斯の風景を描したものであらう。

此日の會場である生池院は、三十餘年前に説文會のあつた時、這入つたことがあるが今は全部改築されて舊時の面目は尋ぬるに由も無い。自分は坐ろに當時のことを追憶し、説文會の列品中、中井敬所翁珍藏の狩谷棭齋自筆寫本古京遺文の一半を、大槻文彦翁の陳列品中に發見し初めて完璧をなしたることなどを想ひ起した。この寫本中に三枚賴山陽が寫字を助筆したものがあつて著名のものである。それはさて置き當日敗荷觀賞會に臨席の人々は十四五名であつたが多くは知名の老人で、宛がら尚齒會の趣があつた。最も高齡なるは伊藤松宇氏八十歳で、中村春堂、守田治兵衛氏なども見えたが、自分は此席に初めて花房有恒氏に會した。此人は佐渡出身の詩人大久保湘南の妹の良人で湘南が妹の天然痘に罹つたのを看護して忽ち感染して死したが、丁

度其時は余の會に來るの約あつて遂に來らず二三日を經て其訃を聞いたことなどを話し合つた。花房氏は揖東と號し席上卽吟の詩を示されたが、それは爰に割愛する。

此日は來會者に、蓮にちなむ書畫骨董を持寄るべしとあつて、種々のものが陳列された中に、蕪村書翰の中に「蓮枯で池めさましきしぐれ哉」の句があつた。攝津大掾(旭叟落欵)の小點に遊女を畫し「どちからの風にもなびく柳かな」の句が題してあつた。落語家圓朝が達磨を畫した幅に山中無曆日と題して「眼をとぢて閒定めけり露の音」の句が書かれてあつた。團洲が渡邊華山を演じた時舞臺で畫を作りそれを觀客に與へたことがある。其時の扇子が出陳されてゐたが、華山の筆意に倣つた竹がなか〳〵上乘の出來であつた。なほ此等の外に其角の扇面や角觝太刀山の普慈山の圖等も陳列されてゐた。自分の出品は銀製の蓮房の香爐、密陀塗蓮瓣外裝の佛器、鎌倉彫蓮花彫刻の圓卓、敗荷の根付蓮根の墨斗(すみたて)。大賀博士より贈られた五百年の齡を保ち居る蓮の種の外、維新直後大沼枕山を中心として觀蓮の詩會を催した折の應酬の詩を關雪

江が手寫したものなどを陳列した。骨董を携帶したものは自分の外には無かつた。

宴會に先だち茶筵もあつたが、旣に暮色蒼然として自分は窓を推して東臺を望み「鴉陣遠爭烟外樹露痕凉入水邊樓」の誰れやらの詩を口吟して興を添へた。茶會の次第は略するが、此茶會に出された菓子に就て、宗匠の挨拶に、會が餘り急に催されたので然るべき菓子を作る餘裕がなかつた。窮策ながら此菓子は蓮根で象眼したと云はれた。如何さま取つて見れば、蒸菓子の周圍に蓮根の斷片が張こんであつたので一笑しつゝ其意匠の妙に感じた。

宴會に移つて、いろ〳〵興味ある談話が湧いたが、席上大賀博士は耦絲研究の結果を說かれたので會衆は皆耳を傾けた。自分にも何か語れと笹川博士から命があつたので、攝津大掾の書畫を見て思ひつき、人形遣ひの名人紋十郎が曾つて假名垣魯文を訪ふて、庭に蓮で作つた草履の置いてあるのを何故と魯文に問ふと、自分は御覽の通り、書齋に佛像を置き、襖に古經を貼りこんで居る。斯く佛を崇拜して居る自分としては、庭の蟲を無意識に殺してはならぬ

と、わざとぶく〳〵した草履を置いて居るが、君も佛者を演ずることもあらうが、參考にしたまへと注意された。紋十郎も其意を體して近松の紀念に釋迦一代記をやる時に、修業中の釋迦も蓮の鞋を穿せる趣向を案じたと云ふことが當時の大阪の新聞に出たので、自分、わざわざ文樂座を訪ふたが、矢張跣足の方がよいと考へ直したと見えて、蓮の鞋を用ひなかつた、といふ一とくさりの談話を試みて責を塞いだ。

人を酒の下物として

酒の下物といへば、鳥獸魚介野菜の割烹と、誰もそれ丈で片つけるが、實はさう簡單でない。嚴格には、酒の肴といへないものが、割烹よりも、酒をたすけ、酒をすゝめるものがある。これも酒の下物で酒客によつては、これを缺くと、興味の索然を感じ、面白く酒が飲めないと嘆ずる。それは何物かといふと、酒の對手である。即ち人間である。この對手には心置きのない親友もあるが、これも簡單に片付かぬ。

＊

酒の對手には藝妓や幇間のやうな職業的のものもあつて、適當の對手を得難い時に、直ちに辯じ得るものはこれ等である。これ等は、もと〳〵酒興をたすける職業であるから、酒客に迎合し酒客がどんな無理をいふても、氣にもかけず、をかしく無くても笑ひ、嬉しくなくとも喜びさま〴〵の藝を演じて席を賑はし、追從をいひ、媚を呈して客をおだてる。實は酒客の對手としてこの上

のない調法の對手であるやうなれども、或る酒客はこれを餘り喜ばぬ。その態度が自然でなく、散財的であることなどが手傳つて、むしろ他の對手をほしがる。實に酒客の對手選みもさま〴〵で、例へば食物に辛きを欲し、酸味を望むやうに、對手が唯々諾々と迎合するよりも、むしろ反撥したり、憤懣したり、抗爭したりするのを喜ぶものがあり、甚だしきは、對手になることを忌むものをむしろ喜ぶものすらあつて、なか〳〵複雜である。人間には本能的に人を壓迫することに興味を持ち、人に物を強ふることを面白がるものもあつて、平生は控へてゐても、酒氣を帶びるとその本能が現れて、多忙で時間を惜しむものを強ひて引とめ、困るのを見て喜んだり、酒を嗜まないものに強ひて、酒をすゝめて困らしたり、だらしのない愚論を長々と聽かせて興がるやうなものがある。人を困らせて自から快とするのは宛ながら變態性慾と同一般で、對手にさるゝものがつらがればつらがるほど、一方が愉快であるのだから堪らない。昔の大名が難きを求めて興がつたりした例は勿論多いが、これに倣ふものが裕福の族に古來少くない。文人墨客などにも多くの例があるが、女性も決し

て例外でない。海山千年の女性となると、酒を藉りて男子を弄ぶことのあるのは珍しくない。

＊

人を招いて客を困らしめるのはまだしもだが、自から人を訪うてその家庭を困らせるのも、一段厄介である。しかし人困らせを此方が有效であるとして、この方を選ぶものもある。要するに、どれもこれも人を下物とする點において同一である。全體、人間を酒の肴にするほど、贅澤のことはなく、またこれほど面白いこともない譯だ、古人の傳に、往々客を好むことが見えてゐて、その人の襟度を表してゐるが、その實、人を酒の肴にすることが、その裏面に存することを見逃してはならない。蘇東坡は、自から餘り多く酒を飲まないのに、客にはいくらでも飲むに任したといふが、そんな連中に、東坡の下物になつたものが少からずあつたであらう。柳里恭は、あの磊落な大雅堂を、幾日も幾日も引留めて、酒の對手として、その都度寵妾ののろけを浴びせたので、大雅が遂には堪りかねて逃げ出したといふが、隨分酒の肴にされたことが想像される。

＊

人間の交りは、互ひ〳〵に利用するにありとはいへ、人を酒肴に充るといへば、甚だ無禮に似て、狂亂のものか、傲慢のものでなければ斯る無禮はなし得ないとするであらうが、實は酒を強ふる人は、決して狂亂者でもなく、隨分溫藉の人、重厚の人がこれをやる。必竟、己れが酒を飲んで興を感ずるから、その興を對手に移さんとして、酒を強ひたり、長座を餘儀なくするのであつて、決して惡意があるのでなく、寧ろ好意から發する業であるが、われ知らず軌道を逸して、對手の不快を招くことはあるけれども、それは決して計畫的でなく、われ知らず酒の昂奮がそこへ至らしめるので、罪を斷ずれば人にあるのでなく、酒にあるので、必竟、對手なる人間を酒の肴とするのも、煎じつめれば、酒の業に外ならん、斯う見ると、酒は人の口腹を喜ばせる本能の外に、俎上に出來ない精神的の下物を供する靈妙不思議の力を有するものといひ得よう。

望郷

誰やらの隨筆を讀んで一寸感じたことがある。この隨筆の著者のいふに、俺れは生粹の江戸ッ兒で故郷は卽ち常住の東京であり、別に「國」を有つてゐないから、時々淋し味を感ずることがあると、こんなやうなことをいふてゐる。これは田舍に出貫地をもつてゐるものを羨む口吻である。自分は初めこれを讀み、江戸ッ兒にそんな氣があるものかと怪しんだ。生れながら故郷に居るほど仕合せのものはない筈なのに何で淋し味を感ずるかと、しかしよくよく考へると江戸ッ兒に不滿もある筈だと思ひ直した。脚下に郷土のあるのは餘りに手近かで物足りない感があるのであらう。彼等が祖先の墓を拜せんとすれば少しく足を運べば遠からざる寺にある。親族緣者もまた概ね附近にゐるから訪問に面倒は無い。しかしその手取り早い所に寧ろ彼等の慊らぬ所があるのであらう。

＊

昔江戸ッ兒は江戸に生れたことを誇りとした。だから江戸ッ兒は足を都門の外に擧げないものが多かつた。乃ちかれ等は概ね旅を知らなかつた。當時交通も不便であつたからでもあるが、都外に生國をもたないから、旅をする必要もなかつたのであらう。大東京は全國の首都で文化の中心である。生粹の東京ッ兒は本所、深川、神田そのいづれに產湯をつかつたにせよ帝都に生れ、帝都を故郷とすることを誇りとして、田舍ものを羨むべきでないかに思はれるが、望郷の念は居なりでは起り得ない情懷で、かれ等はこれを羨むのであらう。

＊

懷郷の念などといふものは、所が離れてをれば起るもので、その懷郷の思慕の滿足を得ることが人生の快である。旅にゐるものが、切々歸國の情に堪へないのは誰にもある心であり、遠く萬里を隔てた外國で、ホーム・シックを起すのもこの故であり、懷郷の情ほど熱烈のものはない。その思慕を滿した時の情懷ほど愉快のものはない。この情は故郷が遠隔であればあるほど倍加し

故郷を省みることが疎であればあるだけそれだけ情も切なるものがある。都會を故郷とする人にはその情が無い。絶對に無いともいへないが甚だ薄いことは事實である。故郷思慕の情は、實は旅人の情であるといふてよからう。多くの人が都會にゐて、それが皆それ〴〵生國をもつてゐるのは其人が旅の人であるからだ。都會は旅人の淵叢で、江戸ッ兒から見ると寄生蟲のやうなものかも知れんが、今はそれが蔓衍して都會の人口の大多數を占めてゐる。彼等は生國を同うする同士集まつて、種々の團體や會合を結んでゐる。彼等は時々會して望郷の情懷を慰めてゐる。如何に彼等が望郷思慕の情に切であるかは三々五々人々が會合すると、話次必ず君の生國は何處ぞと質問することが通例であるによつても知られる。偶〻生國が同一であると分ると懷し味が遽かに沸いて、百年の知己であるかの如き交情が生ずる。宴席などで偶〻藝妓や樓婢の生國が客と同じであつたりすると親戚にでも遇つたかの如く、彼等は遽かに客を優遇するので、席にある他の客人は指をくはへて燒餅を起すやうなこともある。かやうなことを考へると都會土著の人が故

郷なる國をもたないことを淋しく感ずるのも無理からぬ情であるかも知れぬ。

＊

望郷の情は、人情の至微に屬し極めて靈妙なものであるが、東京生えぬきの人には、或は理解が出來ないかも知れない。かれ等は時に都門の外に出ることもあり、田舍を訪ふこともあるが、生れ故郷を訪ふものとは全くその感情が違ふ。それもそのはず、生れ故郷の山川は景趣の外に別な意味がある。かれ等は己が產みの親である。一木一草といへども、己れに歷史的緣因がある。いはんや郷黨においてはほとんど關係が血族的である。郷土の慣習に觸れ、郷音に接してすら郷情がむら〳〵とわくが、これ等の情は都會生えぬきの人が田舍を訪ふても到底感じ得ないものであることを思ふと、歸省ほど、人生の高尙の趣味はなく、これこそ田舍出身者が獨りほしいまゝにするものであるといふも强ち誣言であるまい。

田園の山水美

自分は日本のやうな山水國に生れながら、山水美を鑑賞する能力があるかないか、自分も疑つてゐる。日本の昔から、絕景といはるゝ所も一通り見てゐる。水電經營のため、これまで人間不到の山河が開けたので、それをも見てゐる。四條派が手本とした京洛の山水、南畫趣味の九州邊の風景、大陸的の北海道の風景も知つてゐる。外國は絕對に知らないが、支那の風景は聊か知つてもゐる。

＊

しかし好風景の標準は何んであるかを知らない。唯因襲的に支那の或る地點の風景、それに近いとか似てゐるとかいうて賞美されてゐる日本の風景を美として賞玩してゐるが、實は日本の風景は箱庭式で、奇形の山岳峽谷はあるが雄大な風景が乏しい。それが在つても日本人はそれを賞美しなかつた、自分なども矢張りその組であつた。が近年漸く雄大なる風景が名勝に加へ

らるゝやうになつたがこれは外人趣味の感化から多く來てゐる。日本は小國とはいへ、雄大な風景は決して闕如してゐない、それが漸く風景論者の注意をひき、十大風景などのうちに加へられて、範圍の廣くなつたことは慶ぶべきであらう。

自分は最近鄉國越後に歸省した。越後には相當山水の名所もあるが、常に目慣れてゐるためか、何等の奇も感ぜず、無意識に名所を過ぐるのが例となつてゐるのに今度は久方振り長時間汽車で上越線の越後風景を飽くまで見た。丁度挿秧が終つて、稻は四、五寸伸び、滿目の水田は萬頃一碧で四圍の山も昨年雪が少なかつたため戴白のものはなく、天も青く、水も青く、樹木も青く、人は宛ながら青い世界を行くごとくで、眞に一幅の青綠山水である。唯々山なく谿なく、どこまでも平坦なる水田で、目を遮るものがないが、南畫の山水としての奇は覺えないながら、その雄大さは眞に愛賞すべきものがあると感じた。自分はこの平淡なる青綠の風景を見て、坐ろにわが鄉國の蒲原が五郡の廣さがあり、その菰蒲滿目の原始時代は蕭然物凄いものであつたらうに、それが今、沃田

千里の田園美に化した。其變遷などを考へると風光美以外、別に感慨の深いものがあつた。

＊

昔の詩人がいうたことに絕景の所俗僧多しとあるが、絕景の處は奇巖怪石の美觀があるだけそれだけ耕地がないから僧とても生計のため、俗とならざるを得ぬ。西洋でも風景のよいところに吝嗇ものが多いといはれてゐるが、これも耕地がないとおなじ原因から來るのである。全體人間は、奇を好む性癖があつて、樹木などでも病のため瘤が生じたり、枝が彎曲したりするのを見て喜ぶとおなじやうに、落ちかゝる怪巖を喜んだり、落ち窪んだ深谿を珍重したりして、造化の妙工を弄した所だとするけれども、實は風化作用や浸蝕作用で出來た所が多く、或は造化の手工が行詰まつて遺棄した所であるのかも知れない。これも矢張り樹木の變態の如く、病的のものであるかも知れない。それに比すれば、限りない廣濶の山水こそ、造化の靈腕を揮つて成功したものとすべきであるまいか。

兎角拙劣の庭師は作庭に、要なき所に山を築き、樹石を置き、目を遮ぎることを何んとも思はないが、名人の作庭には、心して目を遮ぎるものを置かない。備前岡山の公園などがその一例で、そこに作庭の眞諦がある。この頃聞けば、大谷光瑞師は、久しく大陸に住んでその景に慣れた爲か、目を遮ぎるものが大嫌ひで、風流に出來てゐて日本の騷客に賞された三夜莊をめちや〳〵に改めたといふが、師の說では三百六十度の展望がなければ、好い風景といへないといふ論だといふ。東西南北の四方皆九十度でなければならぬとすると師は實に極端なる展望家である。自分は必ずしも師の說を可とするものでないが、展望が風景の大要素であることは賛成を表するものである。

市塵

人間はゴミの世に身を寄せて常にゴミを呼吸し、果ては塵と化するものである。ゴミは衛生の害をなす故に文化國においては空氣の淨化をはかり種々の設備をなしてゐる。工業都市では工場を民家と離隔し、鐵道の噴烟を忌んでは電氣を石炭に換へ、街路の不潔を醫するにはアスファルトで道を塗つたりして、しきりに空氣の淨化をはかるけれども、各戸の烟突は如何ともしがたく、公設浴場の烟突も急に電化することも成りがたく、なか〳〵ゴミと絶緣することが出來ない。

ゴミと絶緣せんと企圖するならば、筏に乘つて海洋に泛ぶか、高山に登るより外に方法はない。海洋と山嶽にはさすがにゴミはない。普通の民家においては如何に清潔にしても、暗室に一道の太陽の光線を導いて檢すると、ゴミのみなぎつてゐるのが肉眼でも見えるが、海洋山嶽には同じ方法で檢すると、さすがに微塵も存在しないことがわかる。更に塵外の地を求むれば、絶對に

人間の匂ひのない南北兩極がそれで、こゝは滿目白皚々で、氷山と氷洋の外ゴミといふものは如何に搜しても見當らん。淨羅の地といへば兩極であらう。

黃塵萬丈といふは大都會の形容詞ともなつてゐるが、これを如實に見るのは支那大陸で、燕京あたりのゴミの多いことは言語道斷で、汽車の中でもコップや茶碗に看る〳〵塵が堆積する。シャツのカラーがいつとなくよごれるので、一日に幾度も取り換へねば人前に出られない程ゴミが甚だしい。我東京の地質も輕鬆であつて、一雨到ると街路は泥濘が深く、ある氣節に武藏嵐が吹きまくると、目を明けることが出來ないほどゴミがみなぎる。しかし大震災後は道路が美化されたので、ほとんど一塵も留めないやうになつたが、それまでは隨分ひどいものであつた。全體我國には不良の慣習があつて、街路をゴミの棄場と心得、汚穢のものは皆道路に委棄したから道路は汚穢を極めた。今は街路に汚物を棄てることはなくなつたが、長い慣習はまだ拔け切れないのでやゝもするとそれが出ると、ある外國より歸朝の人が語つた。それによ

ると邦人がある外國旅館に宿し、室を掃除したゴミを廊下に放り出したので、館主の怒に觸れたといふたが、廊下を道路と心得たからこの失策をやつたのである。

廊下は一種の道路で館中の客人が往來する所だから最も清潔を要するのにゴミ棄場と心得たなどは滑稽の話といはねばならんが、日本の公德はまだ十分に進まない、公園に園遊會があつた跡に、折箱や果物の皮などが狼藉して散て、跡片付けに苦しむのでも知られる。ドイツのやうな森林を愛護する所では、森を步む者がシガーを棄てる時放り出すことはせず、必ず杖を以て土に穴を穿ち、それへ丁寧に埋めるのが例となつてゐると聞いたが、日本のやうな山火事の頻繁に起る所においては、宜しくドイツの公德に見習ふべきである。一本の烟草の吹殼が、幾町步の森林を燎く禍根となることを思ふと、戰慄に堪へないではないか。

ゴミといふてもその種類はすこぶる多樣である。鼻腔に入る細微なもの

もゴミだが、普通不用の物廢物などをもゴミといふてゐる。この範圍にはボール箱もあり、空罐もあり、紙屑もあり、庭園の落葉臺所の流し尻の野菜や魚の骨など枚擧の遑なく、かさばつたゴミも少からずあつて、その分量は一家においても數日積めばすこぶる大量となる。これ等のゴミは定期の大掃除で除かれ、腐敗しやすい流し尻のゴミは毎日ベルを鳴らして來る塵車に取去られる、これは確かに衛生設備の一進歩に相違ない。

自分はかつて家庭におけるゴミの始末について雜錄に書き散らしたことがある。それは大要左の如くである。

毎日二三回身邊に落ち來る郵便物の半ばは會社商店旅館などの宣傳廣告の類で、概ね一見直ちに反故籠に葬らるべき運命のものであるが、宣傳廣告の盛んである今の世の中において、その量はなか〳〵少くない。そしてそれが年一年益ゝ增加しつつある。尙ほこれ等の外に保存を要しないパンフレット雜誌の見本の類も少くなく、また到來物に附隨するボール箱、木箱、包裝の紙、薦包、繩、籃、樽などのかさばつたものも贈答の季節には大量に上る。これ等を

如何に仕末すればよいか、到底年二期の大掃除を待つ譯にはゆかない、そこで偶然考へたのは、毎朝の洗面用に湯を沸かすため竈を築いて見た。これが廢物掃除には最も調法で、あたら薪炭を用ひるまでもなく、無用の物をみなその焚料とするので、大抵一日溜つたゴミが翌朝始末される。そのためゴミは敢て目にもつかないが、若し竈がなく一週間ゴミを積み重ねなどしたら、隨分目の上にあがることだらう。毎年の大掃除に各戸の家前に掃き出す塵埃紙屑種々の廢物の量を見ると、むしろ小戸に多く大家に割合少ないのは、小戸は屋敷が狹く、始末がつかないからであらう。地積の廣い家には自分の如く竈がなくとも、何等かさばく工夫があるので小戸よりも廢物の排出が少ないのであらう？　實は排物の量は家の大小や家族の多寡に應ずるものであらう。しかし小戸といふても貧戸となると多くは排出する無用のものがないから、一概に家の大小に比例するとはいはれない、私はかつて大掃除の際にしみじみ考へた、ゴミを多く出し得ない家ほど哀れなものはない。彼等は米味噌の外何を買ふ餘力もないから家には紙袋一つない、何一つ餘所から贈り來るも

のもなく一片の引札すらかゝる家には飛んでこない。臺所の流し尻も無一物で、一家は全く空虛で、彼等をしていはしむれば、ゴミ一つなきぞ悲しきとかこつであらう。これを思ふと毎日不用のものが飛び込んできて、席を亂すことをうるさがるなどは、己れの仕合せを心得ぬものといふべきであらう。多くの廢物が出る家だとその家に餘裕があるからだと思へば、それを幸福として心ひそかに自祝せねばならんのである。

右は家庭におけるゴミについての所感であるが箇々の人家ばかりでなく市町村においてもそれが繁榮し、人口が增加し生活程度が向上すればするほど塵芥の量が增加する。ゴミの分量を以て市町村の繁閑吉凶を卜し得るといふとも過言ではあるまい。我大東京の毎日掃出すゴミの分量がどれほどであるか、自分はまだ調べて居らんが、手近に自分の鄕國の五千戸ばかりの町のゴミの統計がある。勿論これを以て大東京のを推定すべくもないが、試みにその町の統計をあげて見ると、昨十一年度の總ゴミ量は二百九十六萬九千

百キログラムで町の進歩に伴なうて毎年增量するとあるが、大東京のゴミはざつと五百倍と見ても實に驚くべき大量である。これ等のゴミはあるひは焚かれ、あるひは肥料となり、あるひは低地を高める料に供され、あるひは海面を埋める料ともなつて、こゝに廢物が種々に役立つてゐる。

火災は忌むべきものであるが、ゴミを一掃する最も大なる方法でもある。江戸時代に火事を名物とまで呼んだ程頻々と起つたが、これが自然の掃除法であつたともいへる。十六年前の未曾有の震火は最も大なる掃除を行つたが實は好ましい掃除法でない。自分などは仕合せに生れたからこの災に罹つた經驗がない。したがつてゴミも貧家不相應に多いが、敢て火災に罹りての掃除を欲しない。

街路の清潔は衞生に重大の關係があり、文化の進展に伴なうて漸く整ひつゝあるは喜ばしいことだが、公園は行樂の地で街路にも增して一段淸潔を要する。これについて思ひ起す一事は某宗教團體が信者の總動員を行ひ、市內大小の公園の掃除を行ひつゝあるのを見たのは二三年前のことで、自分は上

野の公園に男女二三百人が思ひ〳〵の服裝で、いやしからぬ婦人まで參加して掃除に沒頭してゐるのを見て、如何にも美事であると、感じたことがある。それは今でも時を定めて行ひつゝあるが、多分それは義務的の社會奉仕であつたらうと推量するが、如斯ことが大掃除を行ふやうに年二度定期に行はれたなら、誠に結構であると冀望に堪へない。

不滅の火

不滅の火と云へば、人は直ちに、筑紫の不知火（しらぬひ）を聯想し、火山を思ひ浮べ、大寺院の不滅の燈を想ふ。併しこれ等は必らずしも不滅ではなく、時に消長があつて、不知火は一局部に限られた燐火であり、火山も間歇的で時に終熄する。大寺院の法燈も時に滅するの盛衰がある。但し世界の廣き、何れの處にも間斷なく火が點ぜられて、嘗つて終熄を見ないのは喫烟の火である。古來種々の國土で峻嚴の法を設けて、この火を止めんとしても、嘗つて成功しないのは喫烟の火である。これこそ永久不滅の火であつて、烟草の歴史は乃ち不滅の火史である。

喫烟はもと蠻野の國から起つて世界を風靡するに至つた。喫烟の嗜慾は人間の本能であるかの如く、この嗜好に對しては、如何なる人も奴隷なることを甘んじ、烟草の前には皆跪禮を取つてゐる。纖弱の婦女子も、神經質の潔癖家も、仙人氣取の禁慾家も幾んど除外はない。此意味に於て此慣習の創造家

なる蠻野人は世界を征服したと云ひ得るのである。

すべての飲食に火は離る可らざる關係があるけれども、それは臺所の事に屬し、常住起臥火と離れてはならぬ。密接の關係のあるのはひとり喫烟である。今は調法のマッチがあつて、喫烟家はこれを常に携帶するけれども、これの無かつた當時を想ふと、發火の具は原始的の燧石を鐵器を以て打ち、その發火を「ホクチ」と云ふ綿に移した時があつた。喫烟家は當時概ね燧石袋を携帶したが、それを携帶しない者は、外出中喫烟を欲しても火を得ず、或は田間の農夫に火を請ひ、或は相知らざる民家に就て火を請ふたりした。どうしても火を得られない時は遠く火山の噴烟を望んで嗟歎することもあつた。此頃には烟草の吹殼も次ぎの喫烟に大切な火源で、喫烟家はそれを棄てず、丁寧に掌の内に存して次ぎの喫烟の用に供したものであつた。マッチが行はれてからも、登山などの場合濕氣に侵されてそれが發火せず、喫烟家が悲鳴を擧げた例も澤山にある。

大抵の動物は人間と飲食の嗜好を同ふするけれども、喫烟だけは人間に限

る嗜好で、これは人間の特權である。或る喫烟家は人間の萬物の長たる所以はこゝに存すると云ふたが、或はさうかも知れない。世界の爲政家は或る時代に百方これを禁遏せんとしたが、どうしても目的を達しないので終に降參して、禁遏を斷念すると同時に、進んでこれを奬勵して國家の稅源となすに至つた。爲政家の轉向も滑稽に近いけれども、實は賢明なる轉向であつた。明治の時代に岩谷松平が銀座街頭に天狗號のシガレットを賣り、「勿驚稅金百萬圓」と暖簾に書いたのは當時人を驚かしたが、政府が後に烟草を政府のモノポリーとして今日に至つたことを思ふと、岩谷天狗の宣傳は誇張でなかつたことが知れ、今日專賣局の發賣するシガレットだけでも幾億の多きに達し、毎年增加の傾向がある。政府の收入もそれに伴ふて倍加しつゝある。その勢に乘じて近かく烟草の價を引上げたが、そのために敢て販賣高を減ずることもないのを見ると、喫烟慾は實に豪勢のものである。凡そ火は物を燒き亡すもので多くの場合損あつて得のないものだが、物を亡ぼして得するものは、烟草に限ると云ふも誣言であるまい。

虎は死しても革を留むと云ふが、烟草は火に亡びて文化を生むと云ふてよからう。國税の重なる部分を占める烟草税が、如何に日本の文化を扶けたかを想はねばならない。私の所謂不滅の火は實に文化を醞釀するの火である。それは烟草である。煙草は元來熱國の產でこれを喫するに火力を藉るなど兎角熱に緣因がある。そして人間の情火、情熱、情焰も喫烟に負ふところが頗る多いことを感ぜざるを得ない。大にしては經國の大策も小にしては詩畫の思索に到るまで喫烟の幇助に據るものが多い。火のある所に心華が開くと云ふべきであらうか、ビスマークは大の喫烟家で出陣中ポケットに僅かに一本のシガーが殘つてゐた。その惜しい一本を割愛して瀕死の戰友に與へたのは友誼の發露であり、マジニーが亡命して龍動(ロンドン)の客館に潛んで喫烟中刺客が闖入したのを驚きもせず、シガーを與へて先づ喫せよ、而る後爲さんとする所をなせと落着き拂つて沈勇を示し、刺客を屈服したなどいろ〳〵の逸事もあるが、皆烟草の火を藉りての心華の發揚に外ならない。

昔は仁慈の天子高き屋に登り民家に烟りの揚るをみそなはし民の竈は賑

はひにけりと喜ばれたかに傳へるが、今は吐月峰に烟の揚るのを見て民衆生活の賑ひをトすることになつた。吐月峰に烟の擧らない家は寒く淋しい、概して幸福に惠まれない家である。工業の盛衰は烟突の多寡で判ずるとすれば、民衆の榮枯も鼻の烟突の烟の多寡で判ずべきであらう。

八百膳

江戸時代の繁昌の料理屋は概ね水邊にあつた。深川の平清、柳橋の龜清、向島の植半、山谷の八百膳、柳島の橋本等々、水邊にあつたものが繁昌した。當時電車自動車などの交通機關がなく、水路の交通が最も便利とされた。屋根船の發展もこのために生じたので妓と杯盤を載せ、秦淮の畫舫よろしく、水路に舟行することが行樂でもあつた。況して人目を避けて豪華の遊びをするものには、船は最も好適の機關で、船の赴く所に豪華の料理店のあつたのも偶然でない。江戸時代各藩の外交官とも云ふべき留守居役は、幕府の役人と密かに握手するには、人目を避け且つ豪奢の饗應を餘儀なくされたが、舟に連絡のある料理店が其會場であつたから繁昌したのに不思議はない。

私の主題としてゐる八百膳は山谷の堀に近く、且つ芳原への通路にあつたので、最も好位地を占め繁榮の鍵を握つてゐた。舟行の客、悪所通ひの人苟くも豪奢を競ふのに、この料理店を娯樂の道場とした。八百膳の發行した料理

の獻立表八百膳料理が、江戸代表の料理法とされた程發達したのも無理はない。當時通人と呼ばれた抱一上人が芳原への往復に種々の考案を授けたことは、今もいろ〳〵口碑に殘つてゐるが、當時各藩の留守居が、各地の割烹の粹を此家に授けたことも想像に餘りがある。即ち八百膳の料理通は、江戸料理の粹と各地の料理の粹とを併せて集大成したものと云ふべきである。

當時は賄賂苞苴が行はれ、八百膳の料理もこれに役立ち、どんな高價な料理も此店で容易に辨じた。或は二十人前の料理を實物で持込み、豪華の食器調度迄も併せて進物とした。幾十幾百の回數券のやうな切手も亦行はれた。隨分菓子器などに黄白の潜んでゐたこともあつたであらう。當時の八百膳には高貴の人々も駕を枉げたので、自然に一見識もあつた。眞僞の保證は出來ないが、八代目團十郎が或る時一座の俳優を率ゐて此家に一夕の宴を張つたことがある。宴果てゝ勘定書を見ると、案外に拂が嵩んでゐるので、何故かと主人に問ふて見ると、御一同に用ひた食器膳部は再び使用が出來ないので、皆様のお宅に送ることになつてゐる。料理代の外に其代も含んでゐると云

ふたので、流石の團十郎もガフンと參つたとあるが、當時の俳優は河原乞食の賤級に居つたので斯く特種待遇を受けたのであつた。

私は食味に道樂はないが、八百膳が大好きで若い頃度々訪ふた。時は明治であるが、其頃はまだ江戸時代に繁昌した面目が此家に存してゐた。料理も精選されてゐたが自分の最も喜こんだのは、此家に飲むと歴史的聯想がむら〳〵と起り江戸情調が浮んで居心地のよいことであつた。此家の庭は格別の趣向は認めなかつたが、襖や屏風や幅などに抱一の繪が多く、家の構造も瀟洒を旨とし、最も氣に入つたのは二階の上り段の構造と便所に長い緣があつた事などだ。當時は既に電燈が行はれた時であつたが、網行燈が昔通り置かれて、床し味があつた。食器などは特に珍藏のものを出してゐるとも思はれなかつたが、青華の陶磁器に鑑賞に値するものが多かつた。

私は或る時連れ無しで單獨に訪ふた。女中の挨拶にお獨りなれば酒を上げませんと云ふた。その譯を問ふまでもなく、單獨で大醉されては始末に困

ると云ふ意味だと察して、藝者を呼んだらよいだらうと云ふたら、それなら結構と云ふから、早速藝者を呼んで貰つて轍鮒の難を免れたことがあつた。一人客に酒を給さない家法も昔の遺法と推察された。亦ある花時に家族を伴ふて墨堤の花を賞した揚句立寄ると、來客が多く各室皆塞がつて居るので斷りを喰つたが、自分は遠くから折角貴店を志して來たのだから、どんな室でも差支ないと賴むと、主婦が出てきて、明いて居る室は自分共の居間の外にありませんお厭でないならそこでもと云ふので、自分はそれで結構と云ふて、奥まつた部屋に案内されたが、そこは夫婦の寢室でもあるかと思ひの外、相當立派な室で、室内に簞笥其他むさくるしいものは一切なく、中庭も添ふてゐたので、流石に八百膳の内證の奥床しさを感じたこともあつた。

或る時紅葉山人を伴ふて此家を訪ふたことがある。山人は大の食通であつたから、ひどく喜んだ。山人は飲を解しない代りに、食味には鋭舌を有し、日常の飲食を必らず日誌に記す程の人であつた。此時も膳部が出ると、向ふ付

に野菜の胡麻合があつたのを一箸喰つて、これはうまいと云ふたが、懷中から手帳を取り出して、合物の分析を始めて一々手帳に書き留めたが、七八種の野菜が湊合されてゐたので、自分も調理の精に感じたことがある。此頃山人は寫眞に趣味をもち、有名の料理店の板場を撮影したい冀望を抱き、此日も寫眞機を携帶してゐたが、料理屋の迷惑がることだから、言ひ兼ねて撮影を見合はせたことを思ひ出す。

私が國書刊行會經營の衝に當つてゐた頃、幸田露伴君に面倒な編纂を托したので、謝意を表するため、二年ばかり續けて、歳晩に幸田君を此家に招待した。生憎其頃は私は病後で酒を禁じてゐたので、酒豪の幸田君をもてなすには不適當の主人役であつた。幸田君はいかもの喰で有名な人だが、八百膳ではいかものゝ注文も成りがたく、かた〳〵場所も不適當であつたかも知れないが、私は禁酒のためにこの家の料理を滿喫してしみ〴〵割烹美を感じた。此家の料理の精を知つたのは禁酒のお蔭と云ふてよいのである。しかし自分が杯を持たずして酒客をうまくあしらふ事は困難の業で、兎もすれば客の方が

遠慮する。自分は幸田君に遠慮させまじと百方苦慮の末、君の得意の釣魚の談になると、君は快然種々の經驗を談ぜられ、私も大いに耳を傾けたが、君の酒も大いにはづみ、到頭釣の話で幸田君を釣り出したと一笑したことがある。

八百膳も大震災の前、内政の都合からか、各室の襖の名畫を剝ぎ取り、白張りとしたので、自分は不滿を感じたが料理もそれから追々下つて、宛かも乾物を喰ふごとく、ふつくりした味が全然無くなつて、時勢の推移は已むを得ないと思つたが、其後大震火は此家を嘗め盡して、江戸名物を失つたのは惜しいことであつた。併し自分は兎に角、江戸時代其儘の此家と割烹を知つたことをせめてもの仕合と思ふてゐる。

梅干と鰹節

此頃丸善の「學鐙」を讀んで面白く感じたのは、廣瀨中佐が露西亞に駐劄中、蒐集した圖書を、露都を立退く時、前に購つた書店の主人を呼んで、全部無償で與へ、且つ其折鰹節三本を添へて贈つた。店主は鰹節使用の心得がなく、架上に置いたまゝ數十日經てから中佐の事を思ひ出して、搜して見ても無いので段段調べた所、奴僕が掃除する際に、木片と見違へて煖爐に投じて焚いたことが分つたとあるが、如何にも外人には鰹節を焚料と見違ふ程理解がないのであらう。

これに就いて思ひ出す一話は、往年外國海軍武官が我軍艦某號を訪うた時、この武官は艦長室でいろ〳〵の談を交へ、日本の兵站のことに及ぶと、艦長は居室の棚から梅干を取出し、一顆を與へて試食せしめた。武官は峻烈の酸味のあるものとは知らず、口に入れて一氣に食ふと、驚くまいことか、且らくは苦悶して顏をしかめて一語を發することも出來なかつたと云ふが、鰹節と共に

一對のユーモラスな話で、鰹節と云ひ梅干と云ひ、共に日本特有の食物で、調法がられる軍需品であるが、それが外人に理解されないため、自然の滑稽を演ずるに至つたことに興味がある。

これに就いて更らに想ひ起すのは、故大隈老侯である。侯は菅公の苗裔で菅公が梅を愛したことは著名の事實で、侯は常に能く言はれた。日本軍の兵站の輕裝であるのは偏へに梅干のお蔭と云ふて菅公の德の一端を表された。九州邊では士風の質素を重んじ、飯時梅干のみを菜とする風もあつたと見え、前原の亂に誰も知る奥平謙輔は、自分の幼時吾家に宿つたが、酒の下物はいろいろ望みもしたが、いざ喫飯となるとすべての物を斥けて、唯梅干のみを以て喫飯を濟ましたものだ。

大隈侯も祖先の愛した物だから別して梅干を愛されたやうであつたが、侯の愛するものは更に他に一つあつた。それは鰹節であつた。侯は鰹節と大根おろしをこの上もない美食として居られた。或る年村井吉兵衛の京都の別莊長樂館に二三日泊られた時、主人は京都最上の料理で賄つたが、京都の料

理が侯の口に合はず、こんな時に鰹節と大根おろしがあればと、食事毎に歎聲を發せられたが、夫人が付き添ふてゐられたので、遠慮してこの好みを發表されず、東京へ戻られた時夫人からこの話が出て、大隈はいくらか痩せたやうだと語られたことがある。

斯やうな事を思ひ出すのも、實は自分自身も梅干黨であり、且つ鰹節黨でもあるからの事だ。梅干と鰹節ほど旅行に大切のものはなく、これを携帶すれば、どんな貧弱な粗食に出遇つても辟易することはない。

この頃の炎天に折詰が腐敗して、一擧幾百幾千の人が斃れた椿事を屢〻聞くが、梅干入りの握り飯を折詰に代用すれば決して、斯る不幸は生じない。

銀座の横町

私は例として毎日或る時間散策をやる、多くの場合足は銀座方面に向く。それも其筈、銀座は大東京の表玄關で、廣壯の建築もこゝにあり、百貨もこゝに輻輳してゐる。デパート一軒歩き回つても足の運動ばかりか眼の運動も出來る。銀座は文化的散策の絶好地とも云ひ得るが、併し毎日々々同じ所を歩き回ると、目が追々慣れて來て興味を感じないやうになる。

人間と云ふ奴は、兎角物飽する性があつて、太牢の大振舞ひでも度重なると飽がきて、寧ろ茶漬が欲しくなる。堂々たる大道を歩くより横道に這入りたくなる。横道は穢くあつたり多少の危險があつたりするが、そこに惹かれて行く、全體人間はマトモの道を外れて、横道に趨りたがるものと見へる。横道と云ふても必らずしも邪道を意味するものでないが、人に依つては邪道に陷りたい志願で陋巷に出入するものもある。阿嬌の潜む狹斜の巷などは危險な處であるが、耽溺的に暮夜節を曳くものもある。勿論これは一例に過ぎぬ

が、横道には種々人を惹くことがあつて、人がこゝに輻輳する。つまり趣味は大道よりもこゝに多く伏在して人を惹きつけるからである。

銀座の大通りではデパートを始め宏壯の建築美はあるが、大概大資本の經營に係り、多くは會社組織であるゆえに、體制はよく整つてゐるけれども、何もかも大まかでマトモで、大量的の趣味があつても、個性的の纖細な趣味が無い。全體大まかな趣味の飽きやすい譯は、單調でモノトナスであるからだ。併し大通りのやうな地價の高い處では、纖細の趣味は有り得ない。横町や裏通りなどは地價が二等も三等も下つた所であり、隨つて小店が多く此所に巣をつくる。こゝには各店がその個性を現はしてゐるから、建築も區々で統制がなくショウ・ウィンドウの飾り付も思ひ〳〵その個性を現はしてゐる。こゝにはさま〴〵の職業が雜居して居る。料理屋もあれば、酒場もあり、撞球場もあれば、待合もあり、藝者屋もあれば洋人の住宅もあり、大通りの商店は前面だけしか見えないが、裏通りは、納戸が見える、臺所が見える、そこにも亦おのづから一種の趣がある。名工や藝人等は決して表通りに住むものでなく、經濟關係

で裏町に潜むのが例であり、通人遊客の宅も亦此邊にある。私はこれに就て思ひ起すのは大震災前に江戸時代の名殘りであつた路次のあつたことである。狹い一本路の路次に棟割長屋に群居生活をやつた頃を思ひ出す。場末の路次こそ貧民の巣窟であつたが、銀座日本橋の裏通りの路次生活は洒落れた人の隱棲處で、人間の神祕のある所と思はれた。然るに災後斯る小路は擴大され、今は無いが、横町や裏通りにはなほ此面かげが存してゐるやうに感ずる。

私は近頃大通りの散策に飽きて、往々横町を縫つて歩く。建築が屋並みに様式を異にしてゐるのも面白く、時には建築意匠のみを味はつて歩く。西洋人の出してゐるビヤハウスの家の扉が大きなビール瓶に擬してゐるのも奇拔だ。私は佇立して詠めてゐると、突如瓶が動き出して、中から若い洋人が出てきたのに驚かされた。又種々奇を競ふ屋號や招牌を見て歩くのも一興で、隨分解し兼ねる謎のやうな洋式の看板もあるが、沙翁のジャ〳〵馬から思ひつき「ジャ〳〵馬バア」と名づけたバアのあることは誰も熟知であらう。ゑん

ごう屋と云ふ洋食屋の招牌を見ると隠豪屋と書いてあつたが餘計なお世話だが、飲豪屋或は宴豪屋と書いても欽まると案じながら過ぎたこともある。太古寮と云ふ看板のある割烹店を認めたが、馬鹿に時勢そつちのけの名を選んだものだと餘計な評をしたこともある。繩暖簾を一々喰ひ回はるのも一興であらうが、自分は濱作式の一二軒しか知らないがみな小さな家だが割烹の美は侮り難い。小間物なども和洋共に珍らしいものは裏町の店に認める。大通りでは洋物の小間物でもうまく賣れないと見えて、双葉屋の如きも大通りの店を撤した。珍物は小店に限ると昔から寸法が極つてゐるかのやうに、江戸趣味のしやれた物は概ね横町の小店に求めねばならん。こんなことを列擧すれば際限がないが、裏町の繁昌は多く夜間にあるのだが、自分は絶對に夜分出ないから夜景を説き得ないことを遺憾とする。

なほ近來世相の變化の一端として筆の序に書いておきたいことのあるのは、ビルディング内の飲食店に、日本座敷をしきりに作る傾向のあることだ。ビルディング内で客を迎へるには多く椅子テーブル式で簡單に賄ふことが

特色であるけれども客などを連れて飲食をするには粗略の觀があるので、普通の料理屋へ伴ふことになる。それが普通の小料理店が生きてゐる所以であつたが、ビルディングでは、他へ流れ行く客をも逃がすまじと、日本流の安座式の設備をやり、幾つも小座敷を作ることが行はれ出した。銀座の竹葉などは初めから二階には小座敷があり、近頃は下にも二三の小座敷を作つてゐる。新宿の三福や高野果物店地下の竹葉支店でも小座敷を多く作つてゐる。近年出來た上野の聚樂のビルディングでも或る一階は全部小座敷を作り、宛から別莊式の觀もあるが、これが段々と他所の倣ふ所となり、日比谷の美松と云ふビルディングは誰も知る如く、もとデパートとして建てたが不成功で、飲食場と變じたが、第一階は椅子テーブル式で、二階は全部日本風の小座敷經營となつてをり、東海道五十三驛に型どり、中央に砂石の道路があつて、處々に安倍川、天龍川、富士川などの杭が立つて居り、各室にはそれ〴〵驛名が附してあり最極點が京都で、それに入つて見ると、構造は純日本式で床の間あり床側があり、幅も額も掲けてあつて、普通の料理屋と聊かも異なる所がなく、料理も相當

であるから、ビルディング内に居る心地がしない。こんな設備が段々ビルディング内に起ると、一戸立の料理屋の存在が益々あやしくなる。これも江戸から東京への變遷の内に漏らす可からざる一世相であらう。

梅

今は梅が春を報ずる時節で、家園の紅梅も節序を違はず盛んに咲き出してゐる。梅は感心に霜雪を被つても平氣で百花に魁がけしてゐる。梅咲くや何か降りても春は春だ。梅は葉に先だつて花を發するから、ふだん朽ちてゐるかに見えてゐる樹に花が咲くと、おやおや此樹は生きてゐるなと氣がつく。源實朝の歌であつたか「古寺のくち木の梅もはるさめにそぼちて花もほころびにけり」とあるが、多分此人も自分と同じやうに花が咲いたのでおや〳〵と思ふたのであらう。雪まだ消えぬ寒候にただ此花のみあつて、其香に韻致あり、其姿に清楚の趣があるので、風流の騷客が血を湧かすのも無理ならぬことで、詩人は「詩骨梅花瘦」と吟じ文人は書齋を友梅書屋と名づけ、支那の好色天子に梅妃と云ふ寵姫があつた。

古來文人雅客が梅を愛する餘り、それを名にした人が少からずある。今咄嗟に思ひ出る名を擧げても二十餘に及ぶ。

梅關　梅軒　梅道人　梅溪　梅仙　梅逸　梅飈　梅外　梅室　梅顚
拜梅　梅癡　梅所　古梅　梅嵓　梅里　鐵梅　友梅　梅園　梅厓　梅
村　梅莊　梅堂　梅嶺　梅宇　梅塢　梅潭

探梅が早春の年中行事であるから、一と頃は寒候を物ともせず學生までも、方々の梅を探し歩いたことがあつた。同顧すれば今より三十數年の舊に屬するが、吾等も京濱間の梅の名所を歴訪したことがある。其際亡命して日本に來て居られた、朝鮮の貴族朴泳孝氏と到る處に落合つた。朴氏は大瓢を擔つた書生を從へて居られ、追々語を交へる間柄となつて、歸路につき新橋で酒食の饗を受けたことがある。これは日韓合邦前のことで、自分が此時の追懷を隨筆に書いたのを朴侯の目に留り、追懷の詩を朝鮮から寄せられたことを想ひ出す。

菅公は梅を愛したと傳へるので、大抵菅廟には梅がある。尤もこの高潔の花の富貴に侫せず、處嫌はずどこにも咲く「富む家も乏しき家も梅咲きぬ」で、一茶は「梅の木のある顏もせぬ山家かな」と讃し、其角は「梅が香や乞食の家ものぞ

かるゝ」と褒めてゐる。風流の騷客は梅に對して詩なきを恥とし、冷酒をすすりながら、悪詩を殘すが、實は梅の清麗を冒瀆するもので、梅には迷惑であることに思ひ到らないのだ。流石に蜀山は梅に代つて「おれを見てまた歌をよみさらすかと梅のおもはん事もはづかし」と皮肉つてゐるが、まことに同感である。

梅は月に配してもよく水に配してもよい。「暗香浮動月黃昏」の詩は、千古の絶唱とされ、月ヶ瀨の溪流に水に涵つて咲く梅は天下の絶景である。月と水の清は梅の麗質と能く調和する。が、その麗質は兎角梅を女性として扱ふことになつてゐる。これが梅の本意かどうか知らないが、必竟その清楚が麗人にふさはしいから斯かる扱ひを受けるのであらう。此頃もある旗亭の座敷に賴杏坪の松竹梅の詠詩が掲げてあつた。梅を何んと云ふてゐるかと見ると「妹也」とあつて、松竹の妹に見立てゝゐた。

其後木下逸雲が寫した鶯梅の幅を見ると「主鶯妾梅」の題字があつた。此外林和靖は梅を愛して配するに鶴を以てし「主鶴妻梅」と云ふてゐるなど、多くは

梅を女性に見立てゝゐるが、梅の樹を見ると鐵幹槎牙で、剛健な男性的のものであるのに、なまじひ清麗の花があるので、妻梅だ妾梅だなど云はるゝのは、梅には迷惑かも知れない。畫家は例として梅に配するに鶯を以てする。鶯も春と共に來る鳥であるからだが、鶯宿梅と云ふと、矢張り鳥が主で梅が從である。蓮月の和歌に「鶯の都に出ん中宿にかさばやと思ふ梅咲きにけり」とあるのは、梅を宿屋の女將と見立てたものとして、どうしても脂粉の氣が離れない。鶯は梅に配さるゝだけ美な鳥ではあるが、元來浮氣もので、貞節がなく、梅を宿とするのは此鳥に過ぎた仕合であるのに、動もすると仇な桃の花に心を奪はれて、その樹に移つたりする不埒ものである。

私は梅を女性扱ひすることを欲しない。臥龍梅など云ふ名が寧ろ梅にふさはしいもので、其清高の樹格をよく象徵する。梅は大丈夫的剛健のものとして取扱ひたい。梅に對して沙汰の限りの冒瀆は、性病に黴毒の名のあるのを、字畫が面倒だと云ふて音通で梅毒と云ふなどは、梅の清標を汚す尤も甚しいもので、梅のために其寃を雪がねばならん。

日日是好日

禪僧は好んで「日日是好日」の語を揮毫する。多分碧巖錄にある語であらうが、服膺に値する座右の銘と思ふ。人間は我儘ものの、愉快の事でもなければ、その日を好日としない。病氣の日、借金取の來た日、宿醉で頭痛のする日など、みな悪日として忌む。甚しきは、曆を繰つて厄日とあると、それを好日でないとして排斥する。考へて見ると實に勿體ないことで、人生僅に七八十年、光陰は矢の如くで遠慮なく過ぎ去るのに、光陰を惜しむことをせずに、或日に謂はれ無いケチをつけて、空しくその日を過すなどは、冥利に背くものといはねばならぬ。別して老境にゐるものは、前途幾許もない。どんな日でも、不愉快に暮してはならぬ。どんな日でも好日として樂しまねばならぬ。たとへ、不愉快のことがあり、凶事があつたにしても、吉日に引直さねばならぬ。その心掛次第で、どんな日でも好日になる。

これが卽ち禪の教であつて、例へば多少の勞役に服して何事か成れば、そこ

に愉快の心が生ずる。勞役に服する日を悪日と心得るなどは間違つてゐる。讀書をして、多少の興を覺えれば、それだけでも好日である。何か責任を果しても、其日は好日である。酒を飲んで愉快を覺えても、親族故舊と往來して情味を覺えても、其日は好日である。禪のこの語は、人をして日々を好化せしめんとするのであることを思ふと、確に貴い教訓である。

＊

自分は、或日再びこの語を案じ、樂天的の語であることを知つた。トルストイなどに、一日一善の著があるのも、毎日を好日化せんとするの業であらう。毎日善を爲すことは、事實出來ないが、日々善の語を錄することは、強ちむづかしく無い。吾等もトルストイに倣はんか。或る人問うて曰く、親族や友人の不幸に會した日は好日であるまい、日支の戰鬪が日本に不利な日は好日ではあるまいと。親族友人の不幸は悲しむべきだが、自分が不幸でないことを喜べば好日である。戰鬪が不利であつても、それが吾軍の志氣を皷舞し、大捷を博する導機と思へば、好日であると自分は答へる。元來、樂天家の胸次には屈

托がなく、世間の人が憂悶することまでも、頓著せず釋然たるものがあるから、どんな日でも、好日たるを失はない。乃ち世路の風霜も、練心の境と思へばその日は好日である。世情の冷煖も、忍性を養ふものとすれば修練の日は好日である。世事の顚倒も、これを修行に資すれば好日である。病の日は清閑の日として好日とすべく、孤獨の日は深慮の日とすればこれ好日である。

＊

私は毎日を好日としたいと力めてゐるので一笑話がある。つい先日、鄕里に校友會があるので臨んだが、百人餘の出席で、未曾有の盛況であつたので、極度の喜びを演べた。その翌日、少數の校友の宴に招かれ、この席は勝手氣儘の出來る寛いだ席で前夜よりも遙に愉快であつたので、また滿幅の喜びを演べたがわれながらよくお世辭をいふものと心ひそかに笑つた。實は毎日を好日にするの努力にほかならないのである。しかし日々を好日とするには、必ずしも多くの努力を要しない。實は好日は多く悪日は少いのである。

中井甍庵は、この間のことを「とはずかたり」に左の如くいふてゐる。

うれしいことは忘れやすい、心が解け緩ぶからであらう。悲しいことは忘れ難い、心結ばれて凝り固まるからであらう。人はよく憂き世の中だ、つらい世の中だと喞つけれども、實は嬉しいことは多くして、悲しいことは少いのである。雨降りつゞくこと度々であれば、人は誇張して年の半ばは日光を見ずなどいふけれど、雨しげき年といへども、九十日に過ぎることはない。（原文を時文に改む）

苟くも冷靜に考へれば、世の中は悲しき惡日は少く、嬉しい好日が多い。惡天氣は稀で好天氣が多い。これを逆に考へ、一概に不平をいふのは畢竟わがまゝ身勝手より起るものである。

話術落語について

小さん一流の落語家は滑稽を弄してよく笑はせるが、終局の所謂「おとし」の處に主な可笑味があるだけで、話が支離滅裂で筋が通らず、含蓄などは一切ない。流石に昔の心學者達の碎けた講話には、今の落語家などの及ばない滑稽があつて、話の筋も通り、寓意もあり、含蓄もある。鳩翁の心學道話などにはその標本となるべき譬喩的滑稽談が澤山にあるが、「屋根屋と疊屋の問答」の如きその一例たるを失はない。

屋根屋と疊屋の二職どちらが安全の職であるかにつき、兩人は嘗て爭ふた。疊屋が云ふには俺の商賣は安全だが、君のは危險だ。いつすべり落ちないとも限らないといふと、屋根屋は、馬鹿をいふな、屋根からすべり落ちるなどは素人にあるかも知れないが、俺らが仲間にはそんなものが一人でもあつた例しはない。これに反して手前の商賣はひどく安全のやうに云ふが、貴公ほど危

險な仕事をやつてゐるものはないといふと、疊屋はその意を解しかねて怫然として、なぜそんなことをいふかと詰ると屋根屋の云ふには、どんな家でも屋根の上で死ぬものはないが、誰も彼も皆疊の上で死ぬではないかといふたので疊屋はギャフンと閉口したとある。

つい此頃鄉里で發行する鄉土史料の雜誌に、八ッ目賣りの小話が收めてあつた。八ッ目は鰻に類した魚で、小兒の疳の藥として重寶がられ、可なり味のよいものである。其八ッ目賣りが巡査に衝突しての爭論がなか〳〵落語家の及ばない自然な滑稽の妙がある。

八ッ目賣りが「八ッ目、八ッ目やーい」と町を賣つて歩くと、どうした機みか、曲り角で、巡回中の巡査に衝き當つた。巡査「この奴め」八ッ目賣り「ハイこの八ッ目は五錢」巡査「太い奴め」八ッ目賣り「太い八ッ目は十錢」巡査大いに怒り「切つて仕舞ふぞ」と脅すと、八ッ目賣りは「八ッ目に切り賣りはございません」と一生懸命に逃去つた。

このユーモリックの問答は秀逸の落語とするの價値がある。

往年、圓遊といふ落語家が市井に持て囃された。此人が得意であつたのは、田舟を漕ぐ話と夜這の話などであつた。或る時吾等の酒席に見えたから、自分の云ふには、君は話術に長じてゐるが、もつと話題を選んだらどうか、吾等はいくらでも話材を有してゐると云ふと、圓遊は辭して云ふには、吾々は不肖にして受賣りの話はとてもうまくやれません。平生の話は皆實驗を語るので、ともかくも座興になるのだといふた。

いかさま圓遊の白白の如く、他人の談話を直寫することは實に難いことで、口頭は勿論筆記にしても其神髓を得ることは實に難い。近頃は速記術もあるが、拙な談話が拙其まゝに記錄されるので、能辯家は別だが、話術に長じない人の談話などは十分速記を直さねば物にならない。自分のやうに座談に下手なものゝ談話を筆記して雜誌などに登載さるゝことも時々あるが、多くの場合滿足したことがない。其筆錄を讀む時は、いつもハラ〳〵する。宛かも法廷で自分の斷罪の宣告を聽く時の如く、實に心安からず讀過し、どうやらか

うやら誤りがない時に、宛かも無罪の判定を得たごとく、初めて安心するが、斯る場合は實際に於て甚だ少い。自分の文を雜誌などに寄せて校正の誤りのある時も同様で、有罪の宣告を受けた時の如く實に不快を感ずる。併し筆記者の内に極めて稀であるが、速記よりも遙かに談話をよく寫して、自分の言はんとして云ふ能はざる所まで筆が及び粗笨の談話が美化することもある。自分に同趣味の友人があつて如何にも筆記が巧みであつたが、自分がハラハラせずに讀んだのは此人の筆記のみであつた。

茲に思ひ出す一事は、自分の說話を自分の目前に語つたものがある。それは昨年大隈侯の生誕百年祭を催した折、幹事が餘興にと、或る講談師を招いて來て、侯の逸事を語らせた。この講談師は人品のよい若い人であつたが、どんな話をするかと自分も傍聽席にあつたが、その說き出す話の十が十まで、自分の隨筆から出てくるので驚いた。最初は耳寄な話だ。自分の知つてゐる話と同じと思つて聽いてゐたが、矢繼早に出てくる話がみな自分の隨筆から出てくるので、自分の著述の朗讀を聞いてゐるやうな感があつてくすぐられる

やうに覺えたが、この時はハラ〳〵せずに濟んだといふのは、この講談師は自分よりも遙かに話術に長じ、原作に毫も潤色などを加へなかつたからである。そして最後に以上は皆春城先生の隨筆からと白狀に及んだが、よくも著者を前に置き臆面もなく語れたものと思ふた。

近頃ラヂオなどで人の小說などを語ることが行はれ出してゐるから、其一例かも知れないが、この談話は不思議に不快を感じなかつた。

そしてこの餘興のお蔭で宴會席に移つてから、席上侯に就ての談話を需められた時、先刻自分の追懷談を自分よりも能辯に語つた人があるからといふて、遁げを張ることが出來た。

酒顚童子

私が幼少の頃鄕國越後で毎々聞かされたお伽話は「酒顚童子」なので、聞く度毎に怖氣を催したものだ。ナゼ此話が頻々とお伽の譚となつたかと後に考へると、この童子は他國のものでなく、越後生れだといふことが談柄となつた一因であつたらしい。しかし酒顚童子は都近い丹波の大江山に住んだためか、その譚は日本全國に擴がつて誰知らない者のない程喧傳し、一時は錦繪などに盛んに圖された。その繪は自分の少年の頃しきりに玩んだものだが、猛獰なる鬼面の巨漢が、誘拐した嬋妍の美女を左右に置き、それに酌をさせて大杯を傾けてゐる圖がそれであつた。

私は酒顚童子を其名の如く、唯飲み拔けの飲徒で無賴漢の標本であるかに考へ、殊にその素性などを調べて見たこともなかつたが、此頃越後に傳はることの怪漢の素性や人と爲りを考へて見ると、種々の說があつて一致しない。出

貫地を西蒲原郡の砂子塚とするだけは一致してゐるが、其少年時の模樣などは甚だ異つてゐる。卽ち一說には婦女子を惱殺するほどの美少年で、且つ品行の正しいものとなし、他の一說は異樣の長髮を生れながらもつた惡少年としてゐる、孰れの說が正しいのか判じ兼ねるが、私は假りに前說に從つて說きたいと思ふ。其譯はその方に趣味があるやうに思ふからで、深い仔細のある譯でない。

此傳說に據ると、此怪漢は母胎に在ること三年、生れて僅かに一年の孩兒が、深夜梁上に攀ぢ登り堅餅を喰つたと云はれ、何となく異體をほのめかしてゐるが、生れながらにして容姿が秀麗であつた。其頃は少年を菩提寺に預けて教育する慣習があつたので、郡內の圓上寺に托してその雛僧としたが、この秀麗の雛僧は多くの女子に眷戀され、その艶書は積んで山をなすに至つたといふ。然るに雛僧はよく、戒を持して女を顧みなかつたが、ある時艶書を納めた筐を開くと、異色の烟霧が立ち上りそれと共に容色秀麗の靑年は忽ち神を失ひ、終に鬼となつて大江山に隱れ住むことになつた。其時齡十六歲であつた

といはれてゐる。

昔佛教の盛んなりし頃多くの傳説は宗教的色彩を以つて彩どられて、不思議なそんなことが毫も怪しまれなかつたから、隨分をかしな傳説が行はれた。この酒顚童子の傳説なども、恰かも安珍清姫の傳説を逆にしたやうな趣のあることを何人も氣付くであらう。安珍も容貌、秀麗の僧であつたと云ふが、此僧の場合には、眷戀した女子が、河に臨んで蛇と變じたと云ふ相違があるけれども色慾の妄念が人間を驅つて魔化せしめる點に至つては同一である。自分などは支那の土匪のことを想ひ、酒顚童子も掠奪を擅まゝにする土匪一般の惡黨に外ならないと考へたこともあるが、且らく猛獰醜惡の外相を離れ、嬋妍以つて人を魅した既往を思ふと、彼は殺人的色魔であるかに思はれる。彼はさん〳〵女人を惱ました應報に惡鬼と變じたが、愈ゝ惡鬼と變ずると、用捨なく色魔の本性を現はし、酒に沈湎して美貌の婦女子を手當り次第拉し來つて自家歡樂の用に供したのではあるまいか。同じ越後の傳説に、彼を以つて

生れながら長髪を有する異民族とする説もあり、人類學方面には多少考慮すべき材料らしくもあり、又猛獰なる惡鬼の素性としては斯る異民族系とする方が合理的かも知れないが、それ等の研究は考古家に委ね、自分としては且らく、酒顚童子を單に凶賊と見ることに倣はず、これを稀有の色魔と見んとするものである。

メスメリズムと宗教

印度では古くからメスメリズムが研究されてゐたと或る學者から聞いたことがある。佛教の盛んであつたあの國に、メスメリズムが早く研究されたのは無理はないと思ふ。どんな宗教でもメスメリズムが大切の役をつとめる、メスメリズムは陶醉など丶譯して、人の心を醉心地にする、そこに宗教が導かれるのであつて、宗教の種々の儀式作法もメスメリズムに罹らせる方便と見るべきであらう。坐禪は無我無心に導く方法だが、これもメスメリズムに罹らせる法である、宗教家の傳記などに信じ難い神祕のことが多いが、しかしメスメリズムに罹ると夢心地で種々の幻影を見ることは強ち不思議はない。種々の戒を設けて聲色を禁じ欲念を絶たしむるのも、メスメリズムに罹らせる地をなすものと言ふことが出來よう。心の空虛の時、宗教心が動くと云ふが斯る時がメスメリズムの起るに都合がよい時であるのだ。メスメリズムは人がかけなくとも自ら罹るものである。七日七夜斷食して七日目に觀世

音の來光を拜したなど丶いふのも、メスメリズムの作用である。基督教で懺悔を促す方便として冥想を行はせるが、これも一時メスメリズムに罹らせるのである。佛教の讀經は聽者に何んの事やら意味は分らないが、肅然たる聽聞は冥想と同じ效果を生ずるものである。

以上の如きことを擧げれば際限なくあるが、一歩を進めて宗教の最も成功したものは、卽ちメスメリズムの普遍に且つ容易に、人の心を支配するものであることに說き及ばん。すべて宗教は哲理に根柢を置くもので、その哲理はなか〳〵深遠のもので、これを理解するには相當の知識を要し、凡夫の力の及ばないものである。奈良朝に日本に來た八宗などは、むつかしい哲學で、專門家でなければわからないものである。クリスト教でも舊教はなか〳〵面倒のやうである。斯く面倒では、その宗教の行はるる範圍は知識階級に局限されて一般大衆には及ばない。これを普遍的に行はんとするには、簡易のものにせねばならぬ、教理を解し易くするは勿論、儀式や戒なども煩はしきを避け、何人も面倒を覺えず行ひ得るものとせねばならぬ。宗教革命と云ふも、必竟

或る範圍に局限された信仰を普遍的に擴げたに過ぎないのである。乃ちルーテルの宗教革命も、日本の法然親鸞の宗教革命も、共に宗教を簡單化したのである。簡單化したから廣く行はれることになつた。これが革命の成功である。

ただ單に「南無阿彌陀佛」の名號を唱へれば、それで足るとしたのが法然で、これなどは簡單化した宗教の方式で恐らく世界のどこにもあるまい、念佛は佛教の一方式であつて、敢て法然の發明ではないが、唯念佛だけで、卽ち六字の名號を唱へるだけで足るとなし、これを以つて一宗としたのは全く法然の卓見で、日本に初めて行はれたことであり、その大膽なる革命は眞に驚くべきである。法然の考では、人間は概して無知無能のもので、到底佛の助を仰ぐよりほかにないものである。ただ一心一向に佛に賴めば救はれるといふて、一切の戒から解放し、唯念佛を申せば、縱令罪があつても救はれ、その念佛唱名は雪隱の中に於てしてもよろしいといふから、民衆は靡然としてこれに赴いた。この宗教革命には無論反對もあり迫害もあつたが、法然に固く信ずる所があつ

て、巍然として立つた。勿論法然には他宗と論戰するだけの根據を佛教の成典にもつてゐたのみならず、長い宗教生活で得た體驗も有つてゐたことは勿論である。斯くして彼が一宗を開いたのは偉なりといはざるを得ない。

西行法師が伊勢の太廟を拜して「何事の在しますかは知らねどもかたじけなさに涙こぼるゝ」といふたが、崇拜は理窟でない。六字の名號にどんな意味があらうがなからうが、これを唱へる時心を虛うして佛に救を求める氣になればそこに己れの過を悔ひ、それを改める心も起るのでそこに宗教がある。法然は尤も簡單な念佛を以つて各自にメスメリズムを起す工風をしたといふも誣言であるまい。敬虔の情を以つて肅然念佛を唱へれば、自然人が陶醉郷に入り、平常にない心がおこる、それが神祕の心ともいひ得るもので、此心こそ佛に賴む眞心で、此心こそ佛の助けを得る心であり、此心が起れば宗教の目的を達する道程にあるともいへるのであるが、此心が卽ちメスメリズムの作用で生ずるもので、宗教家はさうとはいはないが、魔力でもない魅力でもない、己れの心に生ずる陶醉である。

豆腐禮讃

眞趣は平凡の内にありといふが、如何にも其通りである。平凡として多くの人の閑却してゐるものになか〳〵棄て難いものがある。必竟物に慣れるとそれが平凡となり、物が普遍すると何んの奇も感じない。世の中に此類のものが澤山あるが、食物でいへば、豆腐などはその一例であらう。豆腐ほど普遍的に行はれてゐる食物はない。どんな山村僻驛でも僅かに二三十の家があれば、そこに概ね豆腐屋がある。僻村の形容語に豆腐屋へ二里といふが、斯の如きは極端の僻陬をいふので、その裏をかへせば、大抵の處に豆腐屋がある といふことになる。それほど普遍に行はれてゐる豆腐は如何に製作される かといふに、豆を煮たり臼にかけたり、それを堅めて或る形とするまでには、なり面倒のものである。これが利潤の多いものであれば廣く行はれるのに 不思議はないが、何人も知るごとく、これほど廉なるものはなく、一時に多く作れば腐敗するので、宵越しの出來ないものだから、賣高は決して多くはない。

且つ朝食を目當にして作るから、夜の明けぬ内から製造にかゝらねば間に合はず、豆腐屋ほど朝起きのよい精勵家はなく、寒中曉天の勞働は實に思ひ遣らるゝが、薄利に甘んじて小村に幾代も此營業をつゞけてゐるのを見ると、妙なものだと思ふ位である。

豆腐の製造には、その巧拙と材料の精粗などで、佳否はあるにしても、概して萬人の口に適し好き嫌ひがなく、滋養分があつて消化し易く衞生的である。これが朝食は勿論他の食事時にも調法がられるのは、幾んど調理を要せず、直ちに食し得らるゝからである。本來此物は半ば調理を經て居るもので、直ちに汁鍋にぶちこめばそれで汁が出來る、ヤッコに切れば湯豆腐として寒候に喜ばれ、冷ヤッコとすれば暑候に珍重され、貧者は固より大概の家庭に喜ばれるのはその簡單なるが故である。およそ旅行などをして僻村に到ると、食ひ慣れないものが食膳に上り、隨分困ることがあるが、豆腐だけは求めれば得らるゝから凌ぎがつく。豆腐は味噌に次ぐの必要食物で、都鄙到る處に製造されてゐることを思ふと、吾等は今更ながら禮讃を禁じ得ない。

豆腐に淮南と云ふ漢名がある所から考へると、此物の本地は支那であるらしく、多分寺の食物として我邦へ輸入されたらしい。實は精進料理を作る材料としてこれほど大切なものは無い。若し精進料理から油揚を取り去つたらどんなであらうか。油揚も亦豆腐の一種で、精進料理の全局を賑はすものはこれである。乃ち魚鳥の肉に匹敵するものはこれである。昔から豆腐の調理がいろ〳〵と工風され「豆腐百珍」と云ふ料理書が正續二篇まで出版されてゐる。乃ち豆腐には二百通りの料理法があることが知れ、如何に多般多樣の種類が工風されてゐるかが分かる。都下には昔も今も豆腐のみで料理を營んでゐるものがある。根岸の笹の雪や上野池の端の揚げ出しなどがそれである。今は共に衰へたやうだが、昔は隨分繁昌したものであつた。豆腐は精進料理に大切な材料であるのみでなく、惣菜料理に缺き難いもので、家庭に於て最も大切がらるゝ關係から外國に遊んでゐる邦人が家郷を憶ふと共に、時々想ひ出すものは味噌汁と豆腐だといふが、如何さまこれだけは到底外國に求めることが出來ない。

俎上藝術

料理を一種の藝術としたことは古いことである。その藝術は遂に流派をも生ずるまでに至つた。五味を調和し氣節を考へて材料を按排するごとき料理の本領ともいふべきことは餘りにもよく知れてゐるからそれ等の事はこゝにはいはず割烹家の餘藝に近いことに就ていふと、昔は鯛や鶴などの魚鳥を割くに、客前に俎を据ゑ、料理手は式服を着けて、マナ箸で魚鳥を押へ、庖丁で肉を斷ち切るに作法があつて、一絲亂れず美事身おろしをやり、些しも手指の肉體に觸れないことを法としたなどは、割烹家の餘藝ではなく、有職家の一科の藝としたものでこの一例でも割烹が一派の藝術であつたことが理解される。彼等の庖丁の冴は凄いほど練磨したもので、手近の例を擧げると、柿や梨果などの皮をむくにはぐる〳〵環裁して幾尺幾十尺にも及び、嘗つて斷續しない。彼等は大根などの野菜で花を作り、色彩を添へるを以て、紅色の蕪や人參などで花瓣を作つてこれに點綴する。海鼠はぬら〳〵した最も取扱ひ

にくいものであるのに、それを堅に小揚枝大に細く千本に切つて揃へるなどもなか〳〵出來ない藝當である。彼等は小豆や胡麻や山の芋や栗などを材料として菓子を作る。菓子は元來料理から生じたもので、彼等の作る菓子には獨得の雅味があることはいふまでもない。彼等は俎上で植物を以つて簾を作つて刺身の座としたり、若くは筍で桶形其他の容器を作り山葵を容れたりもする。或は小さな籠を作つて豆などを盛つたりもする。箸や揚子や串などを削ることは勿論である。彼等の庖丁はこんなことにまで迨んでゐるが、如何にも巧みである。彼等の刀は宛がら畫家の筆の如く、何物も作り得られないものはないといふと少しく誇張に過ぐるけれども、彼等は往々精進料理に魚鳥と見まがふ物を作り添へて人を驚かすやうな惡戯もやる。いふまでもなく、色彩美は料理の一條件で、眼で食はせるものもある。寄せ鍋などいふものは、鍋の儘客に出すを例とするが、これには誰も知るごとく種々雜多の材料が組合はされて、色の配合に苦心を拂ふから、宛がら繪を見る如き趣を呈する。なほ大皿で客前に供するに盛り物などになると、殊に色彩に注意が拂

はれ、例へば海老の刺身には赤色の甲を添へるから、紅色が映發して一種の風致を爲す。青い野菜や黄ろい果物などを點綴して一層色彩美を添へることもある。總じて色彩美に大切なものは食器であつて、膳椀でも皿鉢でも德利や杯などに至るまで料理の色彩と調節するものでなければならぬ。いひ換へれば料理の色彩を發揮するもので無ければならぬ。赤い金襴手の鉢に赤身の魚肉を盛るなどは魚の色彩を全く滅却するもので沙汰の限りである。洋人は金襴手の皿を喜ぶけれども、我邦では茶人の工風で食器には染付の如き瀟洒なものを好み、料理人も茶人の遺法を踏襲してゐるため、食器の選び方が要を得て居る。食器それ自身の配合も、それ〴〵を竝べて見て色彩の調節を保つやうに工風するのが矢張り料理人の藝術であつて、更に背景なり座敷の青疊も床の幅も置物も、庭の緑なす植こみも、自然料理や食器の色彩美と調和するやう工風され、いはゞすべてが相倚り相扶けて混融オルガナイズされて一體となつてゐる所に日本料理の藝術がある。

きせるの趣味

今はシガレット大流行で、昔のやうに一掬の刻み烟草を烟管の火皿に盛り火を點して吸ふことが廢つた。但し全く廢つたのではなく家庭にはまだこの吸方が殘喘を繋いでゐる。併し今日では最早烟管の趣味を知るものが少なく、數月前の烟草雜誌「響」に、喫烟漫語といふ題で相當面白く烟草のことを書いてゐる人が、烟管で吸ふ趣味を解しないから、それを敎へてもらひたいとあつたが、それほど今は烟管は人と疎遠になつてきた。

習慣といふものは不思議に人の目を支配するもので、長い間烟管で喫烟することが風俗となつて、或る場面に卷莫を持出すと一向調和しない。舊式の劇などでは女房には長烟管がつきものである。花街の娼婦が卷莫で客と應酬するのも變なものだ。最初シガレットが行はれ出した頃婦人がこれを吸つてゐるのを見ると、何となく生意氣のやうに見えた。不謹愼のやうにも見えた。その人柄が下卑てゐるやうにも見へた。今日シガレットが盛んに行はれ

てゐる時ですら、なほ婦人に對して此感があつて、職業婦人などで無くんばシガレットを人中で吸ふことは不似合であるかの感がある。是れ實は烟管が婦人にふさはしい烟具であることを反面に語るものであると自分は思ふてゐる。烟管には婦人相應の優し味があり、上品味がある。婦人の烟管は女性相應に小形に優美に作られてもゐるが、その形式の故ではなく、シガレットを男性と同じやうに吸ふことが何となく荒々しく見えるからである。別してシガレット・ホルダーを用ひると益々婦人の優美性を害するの感がある。これは男子が斯く感ずるばかりでなく、婦人もその保守性から斯く感ずるらしく、今尙ほ烟管を用ひてゐるものが少なくない。烟管は喫烟の原始器である。世界各國の原始烟具は區々樣々で、ラッパのやうな短かい、今日のシガレット・ホルダーに似寄りのものが多いが、日本の烟管は其内でも中間の烟道の最も長いものである。最初外國から烟草が來た頃、人はこれを珍として、客を待つに烟盆に烟管と烟草筐とを載せて饗應に出したりした。或は從者に烟管を携帶せしめて外出した人もあつて、其烟管の長さは一尺若くは二尺にも及ん

だ。それが追々尺が縮まつたけれども家庭にはなほ長尺の烟管が用ひられてゐる。元來我邦の喫烟家はか斯る烟管に養成されたもので、一時西洋感化でナタ豆形の金屬製の短かい烟管が行はれたこともあるが携帶には便利でも烟道が短かいため、管が熱するので、喫烟の風味を害し多くの人に喜ばれなかつた。

烟管にはどんな處に趣味があるかといふと、一言にして盡し難い。今の紙卷烟草に就て難をいへば餘りに火が鼻に近すぎる。隨つて感じが强過ぎる。それに一旦火を點ずると、是非共一本を喫し盡さねばならぬ。一本の分量は人に依つては多きに過ぎるとしても、それを調節することが出來ない。卽ちシガレットは烟管に較べると强制的であり、分量が多いから非衞生的であり、全部喫し得ず餘りを棄てるから不經濟でもある。これに反し烟管の火皿は大小の差はあるが、概ね敷嶋一本を四分して、その一を詰める位だから、一本の敷嶋を四回に分けて喫するも同樣で、强制もなく棄りもない。羅宇の烟道は烟を調節するうち强烈な氣を緩和しニコチンやヤニも羅宇で避けることが出

來る。そして好むに任せて或は連續的に或は間歇的に自在に喫し得て毫も强制せらるゝことが無い。斯く語れば烟管の趣味の凡そはおのづから理解さるゝであらう。

烟管の吸口は金屬で作られてあるだけ、假令それが金銀の貴金屬でなくとも、口に含むと一種淸凉の感があつて、こゝにも熱に對する反對の趣味を覺える。或る神經性の人は往々吸口を嚙み潰すことがある。これは病的ながらそれほど吸口に親しみがあるからだ。譬ふれば小兒の乳房に於けると同じ趣がある。羅宇に溜るヤニは時々掃除を要するけれども喫烟家の內にはヤニは一種いふ可らざる味があるといふて、わざとジワ〳〵したのを喜んで吸ふものもある。此間の消息は烟管に親んだものでなければ理解の出來ないことである。尙喫烟家は常に烟管を弄んでグル〳〵回轉したりして樂しむ癖があつて、一刻も手離さぬ。これも畢竟烟管に非常の執着があるからの事だ。朝起きがけに一服喫して吐月峰をカン〳〵叩くのも陽氣で愉快のものである。

巻烟草は調法のものであるが、調法であるだけ事務的であることを免かれぬ。西洋でも自ら喫烟する毎に烟草を紙に巻いてシガレットを作ることが行はれてゐる。如斯は面倒臭いやうでもあるが、自製の所に趣味があつて我らが烟管で吸ふのと趣が近い。悠々のんびりと烟草を吹かす場合、一本のシガレットを一氣に喫し畢ることは如何にも忙はしく、悠々たる氣分を損ふ。農夫が田間の休憩時間に、烟管で氣を吐いてゐるのを見てものんびりした休憩氣分が看取される。が巻烟草は戰場などにこそよけれ、悠々たる生活には兎角調子は合はぬものである。

若しそれ烟管を骨董的に見ると、外國でのパイプ道樂があると同樣に、日本にも久しく工藝美の粹を凝したもので語るべきものが甚だ多いけれども、これは烟管の趣味といふより、寧ろ工藝趣味に屬するから爰に省略する。

獄中の喫煙

私は四十一二歳の頃、重患に罹つて醫戒を守り、十年間喫煙と酒を絶對に禁じたが隨分つらかつた。併し禁酒禁煙も習慣となれば、堪へ得るものである。が旅中の汽車や、旅舍の無聊の時喫煙慾が起つてたまらん事もあつたが、到頭戒を守り通した。この禁慾中は遊樂の興味などは絶無といふてもよく、花見などに出かけても何等興がなかつた。花よりも團子といふが、花よりも酒、花より煙とつくづく歎息したことがある。爰に思ひ起すことは獄中の喫煙である。獄舍に繫がれた經驗が無ければ知れないことである。獄舍は勿論禁煙の場所で、三箇月以上服役の囚人には工錢の内日に三錢の買物が許されてゐるが、煙草は絶對に禁じてある。併し如何に嚴重に監視されても往々喫煙の禁を犯すものがあつた。それは多くの場合、外役に出でゝ居る時監外にある囚人の朋輩などが、密かに一掬の煙草を與へたり、或は時間を豫約して煙草を獄舍の高い牆壁を越えて投げこむことなどが、煙草の供給を得る密計であ

るが、それが發覺すると犯者は闇室に入れられ數日間減食の憂き身に遇ふから、斯る密計は容易に行はれない。獄中の工場などは煙草の香氣が絶對に無いから、誰か一服喫してもその香氣で看守押丁がカンづき、彼等は即刻取調を初める。勿論囚人は巧みに煙草や道具を隠してゐる。大抵煙草は油紙に包んで地中に埋めて置く、(工場には油紙位はある)煙具といふても自製のシガレット・ホルダーでこれを喇叭と呼び、煙草をクサと呼んでゐる。共に囚人間の隠語である。

私の入獄中に一遍喫煙違犯で闇室に入れられたものがあつた。それは自分が或る囚人に金を與へたことが原因であつたので、自分にも或は累が及びはしないかと氣を揉んだが、幸ひに其事が無かつた。いくら獄中でも矢張り金の世の中だ、金があれば煙草でも何んでも監内に引込むことが出來るのだ。自分は地方新聞の記者たりし時、筆禍で罪を得て其地へ送らるゝ時、見送り人の或者が、若干の紙幣を私の乘つてゐた人力車の内へ投げこんだので、自分の體に多少の金が付き纏つたが、其金は旅中大部分費して僅かに五圓紙幣が一

枚殘つた。それを携帶の洋書の背に封じこみ監獄に入つたが、別に使用の必要も無かつたので、或る囚人の請ふに任せてそれを與へた。自分は其時云ふた「お前さんはこれをどう使用するか知らないが、どんなことがあつてもこの金の出處を明かしてはならぬ」と固く誓はせた。勿論この金が煙草を購ふ資となならうとは想像もつかなかつたが、後に至つて煙草を買つたことが知れた。勿論自分は一服でもその分配を受けたことはなく、亦禁を犯してまで一服二服の煙草を喫したいとは思はなかつた。當時はまだ紙卷の煙草が無かつた頃で、五圓全部を刻煙草を買つたとしたら、隠し切れない程多量のものであつたらう。若し又一人で内密喫したとすれば一二年で喫し盡せない量であつたであらう。全體囚人は喫煙慾の强烈なもので僅かに一掬の量を朋輩に與へても狂喜を博する程のものであるから、煙草を所持するものは獄内に肩身が廣く、大袈裟に云へば威福を弄し得る位なものだ。且つ他の囚人の日々許されてゐる買物と交換も出來ることだから、この人は多福長者である。それほど煙草は大なる魅力を有するものだが、段々その分配が擴がるにつれ監視

者の鼻が許さない事となつた。そして、某囚人は終に闇室に投ぜられ減食の刑を受けたが、金の出處はどう辯じたか、私に祟が來ずに濟んだ。自分は知らぬことゝは言へ喫煙に渇してゐた若干の囚人に煙草の振舞をしてやつたやうなものだと思ひ起せば一笑を禁じ得ない。

ビール決闘

獨逸の學生間に行はれてゐるビール・ユンゲはビール決闘とでもいふべきものだが、登張竹風氏は、日本に來た獨逸の先生から教はつたといふて左の如くその隨筆に書いてゐる。

ビール・ユンゲ「ビール決闘」なるものを先生から傳授された。そも〳〵ビール・ユンゲといへば、日本の大壜が一本はいる程の把手附の大コップで二人でビールの飲みつくらをすることなのだ。先生が審判官(アンパイヤ)で、先づ「ゼッツトー」(唇をつけろ)と第一號令がかゝる、次に「チートー」(飲め)の第二號令で飲み始める。息を繼いでは負けである。一息に飲み干してコップを逆まにして一滴の餘沫も殘さないほどに乾杯して、先きに卓上へコップを置いた方が勝となるのである。最後に先生が飲んだが流石に御大であつたとある。自分は好んでビール・ユンゲに用ひる手付の大コップを求めて多少所持してもゐるが、一回もこの決闘の眞似をしたことがない。自分は既に老ひ斯る

決鬪の相手になり得ないが日本の學生間にこれがまだ行はれてゐないかと思ふ。誰か發起して大會を催したら、自分は審判役位は務まるであらう。日本には古來名高い鬪飲が二度も行はれた。三回目の鬪飲は獨逸式がよからうと思ふ。ビスマルクヘリング若くはヒットラーヘリングを下物にして。

西洋の媚藥

人參の根が人體の形に酷似してゐるのみならず男女の形にも似てゐるので種々の迷信を生じ、靈藥として不相當な尊敬を受けるに至つたが、西洋にもこれと類似の植物があることを、牧野植物博士の草木志を見て知つた。それは地中海地方竝に小亞細亞地方に產するもので、マンドラゴラといふもので、この草の根も人參のやうに股も、腕も兩方に岐れて宛ながら人體の如くであるので、古來魔力のあるものとされ、或は戀リンゴ戀茄子など〻呼ばれ媚藥となつてゐる。西洋で有名のものであるに、何故か日本にはまだ來たことがないといふ。但しこの物は人參と異つて有毒のものだ。

乞食と生田萬

四五年前越後の柏崎の校友會に臨んだ折、或る知人の案内で八坂神社境内にある生田萬の墓を初めて拜した。生田は平田篤胤の門下で國學に精しく、大鹽平八郎事件後、救民のため義俠の擧をなしたので、大鹽事件と並び稱せられてゐることは自分の吸々を待たない。自分は此人の墓を拜して當時を追懷したが、近日相馬御風氏の箇人雜誌を讀み、此墓に就て一事を知つた。それは現在の碑は生田の恩惠に與つた或る乞兒が、舊恩を忘れず、遠く柏崎まで辿り來て其墓を拜すると、餘りに見すぼらしい貧弱のものであるのを歎き聊か溜めて持つてゐた四圓ばかりの金を、町の豪家今井家に托し、是非相當の碑を建て直して貰ひたいと賴んだので、町内の人々も乞兒の芳情に感奮して、今の碑が建つに至つたのだといふ。

綠蔭閑語

案山子

何等能なきものが人の上に立つて傲然としてゐるものを案山子だロボットだといつて輕侮するが、實は案山子もロボットも無能でない。案山子は曾つて放つたことのない矢で、禽獸を追拂つてゐる。そこに彼等の能がある。案山子は禽獸を威壓するのみでなく、人間を威壓するのもある。誰やらの句に「金ぬりの佛も人の案山子かな」とあるが、佛像も實は人間を威壓する案山子だ。併し斯樣な偶像でなく人間そのものが、何んの能ありとも知れずに、偶像の如く拜まれてゐるものがある。それは佛像のやうに燦爛たる光を放ちもしないに、其人は一世の崇拜の的となつて、其人の言ふことなら何事も爭はず、頗る押がきく、この器械はどこにも大切とされるが、なかなか得難い。團體などで種々の人物が備つても、それを統率するものゝないのにいつも困つてゐる。此人は何んの專門の藝當もなく、常に沈默で萬事人任せで、ろくに差圖もしな

い人物だが、それでゐて人に仰がれる德がある。此人は實は何人も持ち得ない一つの能を有してゐる。其能はあらゆる群小の能力を凌駕するの大能である。卽ち萬人の上に立つて其押へとなり其重しとなるのが、この大能である。ロボットに較べて云へば、最も大型のものである、奈良の大佛に遜色のない大ロボットである。我邦では妙なことには斯る大ロボットが多く薩南から出てゐる。西鄕兄弟だの其從弟の大山巖だの東鄕平八郎だのその性格はさまざまで甲乙は勿論あるが、皆スケールが大きく、武將としては將に將たる資格があり、人の畏敬を受ける天稟の素質が具はつてゐる。彼等は無能のごとくであつても、百能以上の大能を有するもので、世界の英傑は大概此型であるが、機械文明が進んで段々世の中がやゝこしくなると、この型の大ロボットが漸く減じ、今日僅かに世界の二三國に中位の此型の人を見るに過ぎない。

雲烟と人物

自分は山水を愛する癖があつて、數日山中に起臥することもあつた。どんな山でも段々目に慣れてくると山が平凡になつてくるが、有り難いことには

深山には雲烟がしきりに去來して、毎日景色が幾度も變ずる。山容峰態に意外の變化があつて、時には凡山皆雲中に沒して、雄峯ひとり突兀蒼穹を摩し、猛士長劍を撫するの概があつて、おやどこか別な山に入つたかと思はしむることがある。雲烟は實にくせもので、勝手氣儘に變幻の奇を弄し到底畫筆などの及ぶ所で無い、若し國家社會の相を山景に譬ふれば、國家無事の時には烟雨なく雷霆なく、天地靜謐見る所のもの奇を感ぜざるも、一朝風雲に會すれば、奇才の時に遇ふて崛起するものあるは、凡庸の山嶽皆雲烟に掩はれて、雄偉の一峯ひとり崛起するを見ると一般、大人物の興るのも奇才の出るのも多くは困難の時に在ることは、歷史の證する所であつて、時艱は譬ふれば國家社會の雲烟である。斯る際に興る偉人奇才は敢て他より來るにあらず、唯々時に遇ふて平生常人と同視されたものから起るのである。吾等は山中の雲烟の變幻を見て殊に此感を深うした。

福翁の訓言

福澤翁が義塾の學生に處世訓を講演した中に、こんな事をいふてゐる。

「馬丁が馬から餘り離れすぎて走つては、馬はついて走れない、人間も偉すぎては世間を指導することが出來ない。成功のコツは二三尺だけ先んずる所にある」と。

これは苦勞人でなければいへない名言だ、自分もある時いふた。今の世の中に偉い人と言はるゝやうになることは案外容易である。其譯は人に立ち優る地平線が甚だ低いから、何か一事に專らであれば、直ぐに地平線を拔き、其長所が他を凌駕してゐることが分つて、あの人は偉いといはれる。併しこゝに注意を要するは、地平線を拔くことが餘り高いと、常人の目に偉いか否かの判定がつかぬ。祕訣はすこしばかり地平線を拔くことである。乃ち福翁の意もこれに外ならないと思ふ。

大學と文部の對立

大學が自からその總長を選擧するはその自治權に屬すると主張するに對し、文部省ではそれを非とし、大學は比黨派閥で總長を選擧するから公平を得ないと、昨今爭ふてゐるが、大學側では文部省が總長を選んだら、果して公平を

得るであらうかと反問せんとしてゐる。大學内に派閥があると同じやうに、文部省内にも官僚の派閥があつて、總長は常に省内の强大なる派閥から擧げられるのが實際であるから、派閥を理由とする說は成り立ち得ない。

佐渡の金山

佐渡の金山は四百年の開鑿を經て、今は餘り多く出ぬと云はれてゐるが、しかしなほ深く鑿れば新鑛脈に觸れぬとも限らぬ。昨今政府が三菱と協同して大增產を企圖するといふ消息を聞くが、戰爭前にも佐渡の民家の敷地に砂金が混じてゐるといふので、其土地を購ふたこともある。慶長頃の記錄に據ると上杉謙信所領時代には餘程砂金が豐富であつたらしく、他國から佐渡に渡つた旅人が韮畑に砂金の交つてあるのに氣がつき、藥用といふに托して、畠の土を買ひ取り、それを船に積んで海中で土砂から砂金を採つたことが見へてゐる。佐渡でも漸く氣がつき、爾來畑土を賣らぬことにしたとも見えてゐる。採鑛法が甚だ幼稚であつた其昔、取扱粗漫のため、あたら含金の鑛石を無雜作に海中に投げ込んだ其分量も莫大のことであらう。坑道にしても技術

の進まないため、見のがした金脈が存してゐないとも限らない。今の技術を以つて再檢する必要があるので、棄石を調査したり、再錬したりすることも行はれ出した。相川の町のある所などは其昔金鑛が流されて、自然三角洲をなした所だと其道の技師がいふ位だからどれほど多量の金を潜めてゐるか分つたものでない。昔の世界人は東方に金島あり、それは扶桑國日本だとしたが、恐らく佐渡をいふたのであらう。若し透視的の眼光で見たら、佐渡の全島、或は燦爛目を眩ずる世界無比の金の大塊であるかも知れない。

臺所の標語

「皮は皮の藥、骨は骨の藥」と云ふ語が古く臺所に行はれてゐる。果してこの標語が今の榮養科學に照して眞實であるか否やを知らないが、物の節約をやかましくいふ昨今では宜しく取り上ぐべき標語だと思ふ。元來野菜でも魚鳥の類でも其皮に一種のうま味があつて食通は決して閑却しない。柑橘の皮などは取り去つて棄てるが、あれを細かく切つて味をつけると酸味があるのでうまいものである。柚子の皮も同類である。茄子の皮でも大根の皮で

も通例は棄てるが惜しいものです。南瓜の皮などは中實よりもうまいことが衆評である。魚鳥の骨に至つては鷄肋の味といふて骨邊の肉を食通の喜ぶのは多く知れてゐるが、骨を嚙むことを餘りやらん。自分の知人で魚骨を喜び肉を棄てゝ骨のみを喰つた故人があつた。私の鄕國では鮭の皮を薄くはぎ、それをぐる〳〵卷いて肉と共に麹でつけて、飯鮨を作るがうまいものである。昨今資源を惜しむ折柄、新たに工夫せずとも在來種々の料理法があつて、廢物たらんとするものを助けて口に上ぼす法がいくらもある。「皮は皮の藥」云々の標語は昨今玩味すべきである。

一騎打の飛行機

先頃の或る人のラヂオの放送に自分が同感を寄せた一節があつた。曰く、「吾が飛行機の操縱の巧妙なる世界を驚かしてゐるが、飛行機戰で吾方がいつも敵機を擊ち墜す快報を聞くごとに昔の一騎打を思ひ出す」と。飛行機は爆彈を敵の要所に墜すばかりが能でなく、敵機と戰つて、それを打のめすのも大切な任務である。徐州方面の空中戰に敵の八十機と我五十機が遭遇して敵

の五十機を叩き落したことは眞に巧妙で、宛がら源平時代の一騎打戰に騎馬で敵を射り、敵と組打をすると一般、世界の飛行術に超越して日本に斯る快腕のあるのは、我邦の淵源ある古武術より來るともいへるであらう。

下駄

今は下駄の用材は幾んど桐となつてゐるが、昔安下駄といへば杉材であつた。緒を立てる所に穴が穿つてなく、銘々が燒き火箸で穴を明け自から緒をすげたものである。越後の海濱柏崎や絲魚川あたりに濱下駄といふものがある。形は婦女子のポックリといふのに似てゐる。砂地を踏むに便利とされてゐる。これには櫻櫚の鼻緒が專ら用ひられ、鼻緒の穴が前後四つ穿たれてゐる。踵部の穴は前部の穴が磨滅すると前鼻緒を反轉して再用するためだといふが如何にも原始的である。

昔慶長の頃に江戸の町が泥濘深く、高い齒の下駄が流行したといはれてゐるが、足駄の齒は文化に據つて伸縮するともいひ得よう。足駄の齒の尤も高いのは藝道の方にある。操り人形師の舞臺用の足駄は高さ二尺乃至二尺五寸もあるといふが、恐らく齒の尤も高いものであらう。勿論これは身の丈を高くするための用で、歩行用でない。修驗道の山伏は一本齒の下駄を穿く、こ

れは支那にも古く行はれて、山を上下するには一本齒の方が便利だといはれてゐる。昔の花魁の下駄はポン〳〵下駄式であつたといふが、下駄裏に抽子（ヒキダシ）があつて、伽羅を焚くために香爐が裝置されたといふから、隨分重もくるしいものであつたと思はれる。

履物に就ては昔からいろ〳〵の書物が出てゐるから私はそれを繰返したくない。但だ一二附記したいのは、何事も同じことだが、都會が範を全國に示すので、履物もそれに漏れず、江戸ほど履物を吟味する處はない、通人などは履物に贅を凝らした。その餘風が今日も存じてゐるが、田舍はまだ履物には都會風が廣く及んでゐない。衣裳其他に贅を凝らしても、履物がそれに副はないので愛想をつかすことが再々ある。概して田舍には履物に注意を拂はず、宿屋などでは、特に注意しないので、客の履物を女中が勝手に穿き、兎もすると紛失するやうなことがある。履物を共用とする風がぬけないからだと思はれる。

藁細工の草鞋は日本特用のものである、藁は外國にもあるが草鞋は無い。

日本でも今はどうか知らないが伊豆の大島に草鞋が無い、あれば輸入品だと聞いたことがある。洋式の靴の行はれなかつた時、草鞋ほど戰時に大切なものはないと考へられ、林子平の海國兵談にも外國に働くものは、草鞋を多く貯へねばならぬといふてゐる。現に日本が初度使臣を外國に派した時、船中に立働くものは皆草鞋を穿いたのでそれが大なる荷物であつた。

木履に就いて横井也有はうまいことをいふてゐる。

木履々々、笠は東坡が春の野がけの尻にしかるる折もあるべきに、などや汝は夏の日の宰予が枕にも雇はれざる。日和つゞきて隙なる時は椽の下に寢ころび蚤（ツリガネヒリ）の霜夜にともなひ、又は坐頭の杖にさゝれて、日待の壁にふらつきては、かたぶくまでの月をも見るらむ。たま〳〵かるわざのつなわたりにはかれて高みに人を見おろす事もあれど、常に沓ぬぎにひざまつき、洗濯の日のこしかけとなりて、それよりうへの交はしらず（後略）

也有と熱海

坪内逍遙在世の時、屢〻訪ふて雙柿舍に宿したが、豫め寢室に充てた書齋には横井也有の俳席の記をものした横幅が常に掲げてあつた。逍遙は也有と同郷だから也有の筆蹟を珍とした。或る日熱海の某旅館に藏する也有の書卷を予の爲に借り受けて示されたことがある。詳かに覺えてゐないが、熱海の風景を賞した長文があつたと記憶する。此頃也有の鶉衣を讀んで見るに、拾遺の中卷に熱海紀行を載せてゐる。それによると延享のとし、祖母に隨從して熱海に浴し、熱海の景色を須磨に似たりと評し、例の間歇泉は其頃は勢ひのよい頃で、日夜六たび噴き出し、旅舍と湯本が近いため、沸き出る音高く山水浦波に響きわたりて、かしましく物すごかりしと書き、其頃には山に鹿が居り、鹿追ふ小屋もあつて鹿の聲は夜もすがら聞えて哀れなりとて、「夜は湯にぬれさす袖を鹿の聲」と詠じてゐる。滯在中には宮寺を訪ひ、又日金山にも登りたりとあつて、山上より富嶽を望んで「四方山のにしきや富士にはづかしき」と詠

じてゐる。也有の游びしは秋の紅葉の頃なりしが故に滿山の紅は富士に恥づと口吟したのである。此記の中今は傳說すらない都松といふ一史蹟を左の如く語つてゐる。

都松といへるは染殿の后の跡のしるし也と野志のいひ傳へなりと語る。何れの時にか柿本紀僧正染殿の后と事ありとて、さらぬ疑ひの科にて、こゝに流されて後失せ給ふ。后は八幡といはひ、紀僧正も宮といはひしが其仇名のうきをいとひて、二つの祠むかしは、互ひに相そむきてありし、今は八幡は外にうつして其謂も殘り侍らず、常に后のみやこを戀ひたまひしが、あとのしるしの松も都の方へ枝葉さしむかひければ、これを都松といひける。僧正の社のきはに大きなるさくらの有りし中此此うしろに御殿作りけるが、障りなりとて此木を伐りしかば、かの松も程なく枯れにけりとぞ。其木の共に枯れたるちぎりならば、ぬれ衣の名もいかなりけんと覺束なし。

松かれてどの木へ蔦や所がへ

僧正の祠は、ことに大きなる椎の木二本のはざまにあり。

御所柿の色にこりてや椎が本

これほどのローマンス、逍遙の作の材料ともなるべきを、柿を愛する逍遙が何とて此ことを語り出ざりしや、自分は此紀行で初めてこれを知るを得た。

なほ其中に業平井のあることを記し、爰に男女の常に水汲かげうつして、おのづから妹脊の媒となるとの言ひ傳ありといひ左の一句が載つてゐる。

豆ひきの影や井筒にまめおとこ

平左衞門湯といふは今もあり、平左衞門かひなしと呼べば聲に應じて湯湧き出づ。里の兒童はこれを呼び錢を旅客に請ふとあり、句に云く、

子どもいざよばれ紅葉に立田姫

木の宮眞鶴ヶ崎などにも句あれども錄せず、也有は歸路鎌倉に立寄り江戸に歸着とあり。

田園山水

今年の初夏鄕里越後へ歸省した折、白晝汽車で蒲原の平野を過ぎ、鄕土の山水を飽るほど見た。此日は偶ゝ好天氣で、一天片雲なく、揷秧は既に畢つて、稻は五六寸伸び、滿目の水田靑氈を敷くが如く、殆んど際涯を知らず、丘陵など目を遮ぎるもの一もあるなく、一望千里、樹木靑く、河川靑く、遠山靑く、一天亦靑く、人は萬碧の間に行き、爽快を感じた。實は自分はこの田園的平淡の山水に見慣れて、曾て奇を感じたことがなく、一概に平凡視してゐたが、此日は何故か不圖考へた。自分が見慣れた故に平凡視してゐた此山水は決して平凡でない、吾れ過てり〳〵と心竊かに恥る所があつた。吾等は常に奇巖怪石の重なり、飛瀑激湍の逆る所で無ければ、好山水でないとしたのは、今に迨んで吾が眼光の小を恥ぢざるを得ない。造化の作意は千變萬化である。奇峰飛泉のみが絶景の獨占ではあるまい。造化の傑作とするものは恐らく廣大無邊のものであらう、造化の誇はこれであらう。人間の見て奇と爲すものゝ如き、造化は

或は行き詰りの惡作として居るのかも知れない。夫の天半に落ちかゝつてゐるやうな危巖深く落ちこんだ谿道なきの峻嶺など、多くの風化作用や侵蝕作用で奇形をなしたもので造化側では出來損じたとしてゐるものであるかも知れないのを人間は却てこれを喜び、これで莫ければ好山水でないとして居るなど或は造化の失笑を博するかも知れない。詩人の語に好風景の處に俗僧多しとあるが怪巖飛瀑の景のある所は耕地がないから僧は生計の爲俗とならざるを得ないのである。絶景の國土の人民は吝嗇だといふのも必竟耕地が乏しいからの事だ。人の空腹を顧みず、奇山水を作るに專らなるが造化の本意であるとも思はれない。平淡なる田園山水奇は無けれども、人間の生を營むに大切なる風景はこれだ。これぞ造化が得意とし傑作とする者の一つではあるまいか、自分は鄕土の山水を見て、こんな空想に耽らざるを得なかつた。

一葉女史許嫁の人

自分は長い間毎日日誌を書き今も續けてゐるが、別に役立つこともなく、唯に習ひ性となつて續けてゐる迄だ。過ぎ去つた頃の日誌を讀んで見ても一向興を覺えない。他人の日誌などは、尙更のこと、自分に何か交渉でもあれば格別、左なくば讀む氣にもなれない。しかも此頃何心なく一葉女史の日誌の或る部分を明けて見ると、自分に因みのある名が二三出てゐるので、ツイ引こまれて讀んで見て、アッと思ふた。それも無理は無かつた。實は半信半疑といふよりも無關心で過ぎ去つた友人と一葉の關係を、一葉が細筆であり〳〵と描き出し、宛ら夢中映畫を見るの思ひがあつたからである。

一葉が若い男と對坐して打解けて談話を交へてゐる其男こそ私の友人で、今は故人となつたが、日誌に澁谷三郎とあるのが卽ち坂本三郎の舊姓である。坂本なる澁谷がある時の雜談中に樋口一葉は自分の稚な友達で許婚の間柄でもあつたといふたことがある。其頃一葉は旣に文壇に名を成してゐて、某

小説家と戀愛の浮説が立つたり、信夫恕軒翁が後妻に迎へたいなどいふ噂もあつたりして、一葉の名聲が高かつた時だから、自分は坂本の語るのを一場の出鱈目と聞流し、無關心に過ぎ去つたのであるが、卒然一葉の筆で坂本の言が眞實であることを聞かされては、私もアッといはざるを得なかつたので、日誌も役に立つものであることを感じた。

最初自分の目に觸れた一葉の日誌の或る頁から許婚の事は見えず澁谷なる坂本が一葉に對し、小説を兎や角評し、戀愛事件の浮説に就て坂本は潔白正直は人間の至寶である。潔白の身にもしシミつかば取かへしつくまじと戒め、坂本に説かれて新年に書きたる短册を寄せ、話次に一葉が自家の眼病を語り出で、澁谷はそれを憂ひて醫師に同行をすゝめなどしてゐる。其頃一葉の家庭も不如意で澁谷に對し左の如く語つてゐる。原文のまゝ其一節を掲げると「澁谷樣此次參りたまふ頃には枝豆うどんか新聞の配達なさんか知れ侍らず、其時立寄らせ給ふや、といへば必ず〳〵立寄らん、もし不義の榮利にほこり給ふに逢ひなば、斷じて顧みはせざるべし」と應酬し澁谷の身形などに就き

一葉の原文を引けば「身形などはよくもあらねど、金時計も出來たり、髭もはやしぬ、去年判事補に任官して一年半とたゝぬほどに檢事に昇進して、月俸五十圓なりといふ。我十四の時此人十九なりけん」など懷舊の情をも漏してゐる。此日誌は一葉二十一歳八月の「しのぶぐさ」の一節である。

自分の最初觸れた記事は以上の如きものであつたが、どこぞに許婚の事がありやしないかと、更に頁を飜すと果して、あり〳〵と書かれてあつた。原文は長いので全部引き兼ねるが、一葉は確かに澁谷と許婚の間柄であつて澁谷もこれを諾したるに仲人の取計らひがあしかりしか、一葉の母は怒つて破談にした。その原因は確と分らねど「原文にあやしく利慾にかゝわりたることいひ出で來れるに母君いたく立腹して」とあれば物質的要求などが破談の原因であつたらしい。澁谷は破談の後も交情前と異らず、或る時は昔の契りにかへり結婚をまとめんとしたることさへあると一葉の筆に見えてゐるが、一葉が意地張つて孤獨生活をつゞけた動機は、この許婚の破壞に由つたらしくもある。一葉の日誌の原文には、

我家やう〳〵運かたぶきて、其昔のかげも止めず、借財山の如くにしてしかも得る所は我が筆先の少しを持つて引窓の烟たらんとする境界、人にはあなづられ世にかろしめられ、恥辱困難一つにあらず、さるを今かの人は雲なき空にのぼる旭の如く、實家は聞ゆる富豪のいよ〳〵盛大にならんとするけしき(中略)今この人に我依らんか母君をはじめ妹も兄も亡き親の名まで辱かしめず家も美事に成立つべきながら、そは一時の榮、もとより富貴を願ふ身ならず、位階何事かあらん、母君に寧處を得せしめ妹に良配を與へて我れはやしなふ人なければ路頭にも伏さん、千家一鉢の食にとつかん、今にして此人に靡きしたがはん事なさじと思ふ、そは此人の憎くきならず、はた我れ我慢の意地にもあらず、世の中のあだなる富貴榮譽うれはしく捐てゝ小町の末我やりて見たく」云々。

私は以上一葉の文を讀んでその心事の慘澹たるに同情なきを得ない。兩人の關係に就て雜感を述べると、許婚と云ふものが案外成立しないものである。其破綻のため婦人に終生嫁せざる意地を張らしむることも亦珍らしく

ない。若し澁谷なる坂本が一葉と許婚を實行したとすれば、家運の傾いた樋口家は幸ひであつたらうが、一葉は恐らくかれが如き文名を博するに至らなかつたであらう。又一葉は澁谷なる坂本が正八位五十圓給の檢事補である時を知るのみだが、彼が其後行政裁判所の評定官となり、獨逸に留學し、母校の早稲田大學の法學部長となり、理事監事となり、大隈内閣の時、秋田、山梨の縣知事になる、此任歴を一葉の靈に知らせたいと思ふ。世間には澁谷三郎が後の坂本三郎であることを究めずに、輕々に一葉の日誌を讀んで居るものが少くないであらう。澁谷の經歴が前に掲げたごとき人であることを知らば、讀者も恐らくもつと注意を惹くであらうに、自分とても坂本の舊姓を思ひ出さなかつたら、一葉のあの日誌を或は無意味に看過したかも知れない。

酒は大義の母

考へて見ると、酒と勤王、酒と倒幕、酒と維新、何んの關係もないことのやうだが、實は決して離れた關係ではない。當時幕府を憤るものは天下に彌漫してゐた。ただ筆と口を箝せられて、口言ふ能はず筆馳するを許されなかつたから、識者はその鬱屈を遣るにはただ酒のみがあつた。當時の詩歌に悲憤の氣の滿るのも酒氣を帶びてゐるのも此故である。或るものは時勢に憤慨して酒に隱れた。或るものは酒詩に托して勤王を示唆した。山陽の修史も實に勤王倒幕を鼓吹するものであつた。藤田東湖が正氣歌、瓢兮歌を作つたのも謫居、酒を藉り幽憤を漏らしたのだ。此等が如何に當時の心あるものゝ血を沸かしたか深く語る迄もなからう。仙話に馬が瓢より飛び出す寓言はあるが、瓢より革命の生れたのは事實であつて東湖の知らないことである。併し瓢兮の歌は當時多くの酒徒を鼓吹した。其酒徒は概ね悲歌の士で、一轉國に殉ずるの士であつた。

誰か維新の革命に酒が與らずといふ歟當時第一線に立つた志士は僅かに酒を侶伴として其鬱を慰めた。彼等は幕府の逮捕に身の寄せ處がなく、多くは柳暗の巷に起臥した。彼等は醉餘に曰く「醉ふては枕す美人の膝、醒めては握る天下の權」と、彼等の境遇は實に危殆であつた、併し其意氣は旺盛であつた。彼等同志が幕府の目を遁れて同志と密會したのも多くは酒樓であつた。彼等が大義のため諸藩の連衡を策したのも亦酒樓であつた。彼等の避難所も慰安所も概ね酒樓であつた。彼等の或るものは外國使館を燒打するに爆彈を抱いて娼樓に投じ、そこを出陣の處とした。或るものは不意に捕吏に襲はれて殉難の人となつた。或は裸體の婦人の注進に依り逮捕を免れ、或は白粉臭の纖手に負傷の看護を受けたりした。志士の活躍の裏には常に酒と女が潜んでゐた。

第一線に立つた志士は死活の間に斯くも酒に親んだ、併しこれは娛樂のためでは無かつた。彼等は今日あつて明日無き運命の知れない岐路に立つてゐた。彼等が飲みかはす酒は多くの場合袂別の酒であつた。彼等は酒を藉

りて勇を鼓したり、危難を免れて自祝し殉難の同志を弔ひもした。其頃の旗亭の或るものは維新回天の酒保であつたともいひ得よう。凡そ革命は鮮血を流すのが例であるが、日本は幸にして餘り多く鮮血を費すことなくして濟んだ。其代りどんなに多くの酒を費したであらう。それは京坂江戸のみでない、全國の憂憤の士が酒を藉りて鬱屈を漏らした其量は莫大でなければならぬ。自分は嘗つて言ふに、維新の革命は酒臭い革命であると、勿論一場の戯言だが、志士の活躍に酒が鮮血に代つたのは目出たいことであつた。

酒飲むべし、兵用ゆべし、海内何れの處か此州に當らん、と喝破したのは頼山陽が攝津禮讃の詩である。攝津は酒の名産地で、山陽が一生讃美した「劍菱」も此地の産である。信長、秀吉が用兵の絶好地として、惜んで人に與へなかつた處も此地である。山陽は聞こえた酒客であつたから、詩も多く酒氣を帶びてゐる。彼の多くの書翰も酒くさい。或る手紙を讀んで自分の不審に思ふたのは書中にこんなことがある。「常用の酒が盡きんとしてゐる。近衛家から求めてもよいがやはり本場のものに限る」といふやうなことがあつて、自分は

一寸解し兼ねたが、實は酒の名産地池田伊丹が近衛家の領地であつたことを知らなかつたからであつた。當時近衛家の臺所には領地から貢いだ菰冠りの酒樽がいくつとなく、ゴロ〳〵轉がつてゐたであらう、多量の酒が剩つて、自然それを小賣にしたのでもあらう。別に不思議の話ではないが、近衛關白家が丹釀の小賣をやつたといふことが一寸おもしろい。

近衛家にからんだ酒の一大史話が、勤王の士橋本香坡に由つて語られてゐる。香坡は曾て池田伊丹の學校を督した關係上近衛家とも緣故があるので、その語る所は信を置くに足る、その挿話は左の如くである。

幕末國事の紛糾を極めた折、兎もすると宮中の御評議が夜に入ることもあつて、近衛關白も定刻退出が出來ず、圖らずも御陪食の榮に浴した。勿論酒も出たが、關白は一杯を傾けて、餘りに悪い酒で嚥下も出來ず、これが御料の酒かと驚いて、ハラ〳〵と涙を流したのは無理もなかつた。關白は常に天下第一等の酒を領地の供給で常用されてゐるから、實は世に悪酒あることを夢にも知られなかつたのだ。併し御料の酒を飲んで潸然涙を流され

たのは、皇室の式微の甚しいことを酒に由つてまざ〳〵と知り悲しまれたのであつた。關白は翌日早速自領の酒を獻上に及んだが、酒に御嗜好のあつた皇上はひどくお喜びになり、世間にこんな美酒があるかと仰せられ、爾來御料の酒は近衞家から獻上することになつた。

香坡の語る所は大略右の如くで、當時皇室の御不如意は想像するだに恐れ多い程で、或る逸話として傳へられてゐるのに據ると、皇上は文房を好ませられ、御意に適つた硯があつたが、御買上が出來兼ねたので、梁川星巖などの勤王家が同人の間に醵金して其硯を購ひ得て獻上に及んだこともあるといふ。斯樣の次第だから、橋本香坡等は宮中の惡酒を傳へ聞き、豫ねて倒幕に熱中してゐた同人を驅り集めて、丹釀の醉を藉り、皇室に對する幕府の冷遇を憤激し、倒幕の盟を一層鞏くしたといはれてゐる。

石上流に進むの說

二三年前放送局から十五分間の放送を賴まれたことがあつた。何を語るべきかと聊か困つたが、ふと思ひ出したのは、亡友井上圓了と日光に遊んだ時、圓了から得意の話を聞かされた事であつた。互ひに連れ立つて、例の赤かい蛇橋を渡ると、圓了は杖を駐めて、例の奔放落下する大谷川の激流を指してい ふには、この水勢の猛烈なるを見給へ、川一杯に散布してゐる巨石と水とが鬪ふの狀を見給へ、間斷なく落ち來る水勢の壓力は石を動かさんとするも、石はびくともしない。水の石に觸れて飛沫を揚げるのは永の憤怒の狀であるが壯快ではないか。といふて余を顧み、君は石があの重壓に堪へて動かないと思ふかも知れんが、實は石は動くのである。但し石は動くが水に押されて下流に就くのでなく、上流而かも勾配のある上流に遡ぼるのだといはば、君或は意外に思ふかも知れんが、理法然らざるを得ない。といふ譯は、水勢の壓力石を動かし得ないとなると、水は激して石邊に停頓して、そこの土砂を抉つてウ

ロを生じ、石下の土砂も緩むから、石は自然そのウロに落ちこむので、一歩上流に進む、二たび三たび繰り返せば、段々に上に溯ぼるのだと說かれ、當然の理ながら面白く感じ、人事にあてはめて見て、大なる教訓であると思ふた。世間壓抑一點張りで事を遂げんとするものが多いが、壓抑の結果恐るべき反動の生ずることを豫期しない。反動にも種々の相があつて、それが直ちに來るとは限らない。亦徐々に來る反動相は目睹し難いものがあつて、それが欝積すると、壓抑は寧ろ目的と反對の結果を生じ、水は石を壓して下流に押し流さんとするのに、却つて上流に押し上ぐる結果となるやうに意外の事が生ずるから政治上にも社會上にも他の人事に於ても、世の壓制家は深く思を致さねばならぬ。これが私の十五分放送であつた。

青丹よし

「青丹よし」は、奈良の枕言葉として古くから用ひられてゐるが、青丹の二字は果して何を形容したのであらうか。奈良の名高い寺々は皆丹碧に塗られてゐるから、それをば奈良を形容する枕詞としたのであるまいか。併し唯此寺寺のみの形容に止まるかどうか、寺が既に丹碧に塗られてゐるから、當時の皇居も官署も百官の住宅も矢張丹碧に塗られてゐたのではあるまいか、否々民家までも同しく丹碧を塗られたものがあつたのであるまいか、全體建築に彩色をすることは日本の風でなく、支那朝鮮の風であるが、奈良朝時代は唐風模擬の時代で、その蹟は今日法隆寺其他の寺々にあり〳〵と存してゐる。當時宮殿其他も彩色があつたとすると、奈良の都は滿目丹碧の建築を欝蒼の樹間に望んだので、如何にも丹青の二字は奈良の枕言葉ならざるを得ないやうな氣がする。自分はいつぞや五十嵐力博士に此事をいふと、博士の言はるゝには「青丹よし」は土色のことで奈良の都を奠める時の地ならしの光景をいふた

ものと、學者間に定說となつてゐるが、貫說も一說たるを失はないといふてゐられた。此頃淸原貞雄氏の「平安朝國民の精神生活」を讀んで見ると、その一三四頁に左の記事がある。

「青丹よし」なる語が奈良と云ふ語の枕詞となつてゐる事は、奈良の都が青丹を以つて塗られた家屋の楢比したものであつた事を示すものであり、家屋を塗るに青丹を以てすることの支那趣味である事は云ふまでもない。

とあるが「青丹よし」を建築の彩色と見るのは、ひとり自分ばかりでないと知つた。

川柳

自分は川柳を讀んで無聊を消すこともあるが、いつも讀んで感ずることは、秀句は如何にも感吟に堪へないが、解し兼ねる句が實に澤山にあつて、その解し兼ねる句に接する毎に自分はこれほど俗事に通じないのか、今のやうな年配になつても、まだわかり兼ねる世事がこんなにも多いかと不審に思ふこともある。今から考へると、青年時代まだ社會といふものを知らなかつた頃、川柳集を讀んだら、どんなであつたらう。遊廓のことや、世帶のこと、緣談のこと、さては借金の事などの皮肉が果して解し得たであらうか。皮肉の多くは人情の機微に觸れてゐるだけに、物の譯知りでなければ、解し難く味ひ難いものである。いくら年が老いても世の所謂木訥漢や唐變木などいはるゝ無粹者流は、假令說明して聞かせても會得の出來ないのは、全然知らない別天地であるからのことで、實に川柳を解し得る人はウブの人でなく苦勞人である。あぶない世渡りをした人であるとでもいふべきであらうか、社會の暗黑面は尤

も川柳子得意のねらひ處である。だから若し人の世間通か否かを驗せんとするには、川柳の或る句を試驗問題に出すがよい。直ちに其人が世事に通じてゐるか否かゞ判じ得らるる、といつぞや戯むれにいふたこともある。しかし川柳の中には或る過ぎ去つた時代に流行したことや、或る時代に限られた言葉やシヤレなどの編みこまれたものは考證家も往々解くことを難んずるものが多いから、後世謎の如くに聞えるものが多くあるのも無理は無い。川柳は其當時のことを材料に掴むからそこに活機もあるが、程經てやつと考證して解を得るやうでは興味は索然である。これを考へると、一概に古川柳に偏して喜ぶのも愚だ。新川柳に優秀のものがないと思ふは大いなる間違ひである。要するに川柳は頗る取捨を要するものと思ふ。今左に十數首を摘錄して笑資となす。

捨てる藝初める藝にうらやまれ
笑はれる度に田舍の垢がぬけ
質屋から出ると駕かき見違へる

抱いた子にたゝかせて見る惚れた人
相ぼれは顏に格子のあとがつき
人をくみ出すと井戸がへしまひなり
道問へば一度に動く田植笠
野雪隱地藏暫くかたな番
立ち聞に持つた十能の火がおこり
紙雛はころぶ時にも夫婦づれ
盃をまんなかへよめさしてにげ
言ひぬけをみんな女房に覺えられ
つかふ息子に福の神おつゝかず
聞かぬ振りするは娘の吉事なり
あたひ千金でかたはの嫁をとり
ない事を云ふ世の中と後家は云ひ
若い身で安請合の後家をたて

線香を先へしたので後家としれ
武士の喧嘩に後家が二人出來
お妾はもと民間に人となり
店賃の早く濟むのが圍者
檢校の妾顏よりはだのこと
おならまで帳面につく御大病
俗名で呼べば藥種は安くなり
百姓痩が妾の肉となり
御たねを宿さずんばと國家老
子を抱けば男に物が言ひ安し
我がすいた男の前をかけぬける
呉服店きせるを回はす不景氣さ
よく賣れるうしろに手代一人立ち
三線屋かたり出すかと思はれる

盃のもめる向ふにいゝ女
逃げのびた腰元前をよく合せ

昨今の川柳

川柳は逍遙翁が言つたやうにスパーク一閃の處に妙がある。機警も皮肉も要件ではあるが現實を剴切に説破することが尤も大切の條件であらねばならぬ。兎角舊川柳に解し兼ねるものゝ多いのは、現實が韜晦されてゐるからだ。例へば人の習癖などを捉へて材料とすることが頻々あるが、其習癖が今變つてゐると、理解が出來ず興味が全く無い。新しい川柳は現在誰も知つてゐる習癖を捉へるから、そこに新川柳は德をしてゐるともいひ得よう。故に今の川柳を一概に古川柳に劣るとは言へないと思ふ。左に明治大正の川柳のやゝ佳と覺ゆるものを摘錄せん。

爪先を憎らしさうに足袋屋嚙み
銀行員仕舞の札は強く刎ね
手の水を振つて豆腐屋剩錢を出し
輕業のやうに疊屋緣を踏み

氷店雪駄の客は足を上げ
此等は皆現在の癖を語るものである。人情の至微に觸るゝ一二を擧れば、
本復をすると藥價が惜しくなり
賴まれたやうに質屋の店で言ひ
づぶ濡になれば傘屋は通りぬけ
大聲で叱るは眞の親子なり
書置をみんな讀むのは他人なり
出戻りの姉は笑はぬ人となり
突き返す氣でゐたものゝ涙金
店番は奥の方から番をされ
媒人は隣りの藏も話しこみ
或る情景を宛がらの如く描き出したものには、
魚屋のギッシ〳〵と露地へ折れ
金魚屋の一足毎に紅く搖れ

鶏があはてゝ自轉車あはて
螢賣り小暗い町を選(よう)て行き
ツンのめりそうに鶏雌へ寄り
吃つてゐるやうに鶏水をのみ
汽笛一聲羅宇屋の車動き出し

諷世嘲俗の意を寓するものは、

心中の女ばかりが惜しがられ
會葬も尻尾の方は笑つてゐ
糟糠の妻は下宿の娘なり
心中のその親々は敵同士
大晦日あらん限りの嘘をつき
親の脛かぢりながらに親になり
教育があつて手輕く行かぬなり
尼とまでならねばならぬ美しさ

以上は秀句のみではないが、手帳の書留めにあるのを摘錄したに過ぎない。

伊勢屋

川柳に「國づくし暖簾(のれん)で出來る四里四方」とあるが、江戸時代には諸國の物産を持出し、その國々の名を記したノレンを店頭に吊した。宛ながら全國物産陳列所の觀があつたのだ。その諸國の内で近江と伊勢が最も著名で、近江乞食に伊勢泥棒などいふ惡名を附したが、實は彼等の運動が餘りに猛烈で他國の商人が太刀打が出來なかつたので、斯る惡評をやつたのかも知れない。伊勢屋といへばケチン坊の代名詞であるかのやうに、川柳子は「こはいこと刺身を食へと伊勢屋いひ」といふてゐるが、伊勢屋の食はせる刺身は腐敗に近いものであつたらしい。しかし彼等の成功も「ケチ」にあつたのかも知れない。堂々たる三井も伊勢ものである。今の松坂屋デパートも伊勢ものである。昔多く産をなしたものに、伊勢屋の暖簾をつるした呉服屋と質屋が多い。さればに川柳子も「呉服屋の臍の緒は皆伊勢にあり」といふてゐる。

雜誌漫渉

自分は日々種々の雜誌を渉獵して何くれとなく自分が敎はることがあると、それを切拔き若くは寫し取る習慣がある。世間では雜誌に就て敎はることを雜誌學問といふて卑下するが、實は自分など雜誌で學ぶことが多く、且つそれを感謝してゐる。雜誌に登錄されることは大抵斷片的の事で纏まつたことは少ないが、斷片的の知識は雜誌に由る外はない。種々の研究家も研究の一端を多く雜誌に由つて發表するから、これを見遁してはならぬ。自分は往年文人墨客の逸事を編輯したこともあるが、それに漏れた事實を雜誌に因つて少からず發見する。雜誌學問とて決して卑しむべきでない。今左に自分が近く雜誌其他に得た古文人の逸事を採錄するが、原文は長いから要略を叙する。

池大雅

大雅の素性はいろ〳〵といはれ、池無名といふ名は、池邊の棄兒を意味するなどの妄說もあるが、實は商家の子で、家號を菱屋といひ、父は嘉右衞門と稱した。大雅は四歲の時父に死に別れて母と同居したとあるが、今の研究家は此點に疑を抱き、父と死別でなく、家庭に何か醜穢の紛紜があつて、妻子は別居し、父と隔絕したので、母は事情を知るも他人に語るを欲せず、表面四歲で父と死別と傳へたといふ說がある。他人に語り得ない內事はどんなことであるか、大雅は俗稱を池野秋平と云ひ、母との同居時代菱屋の商號を名乘つたこともあるといふ。秋平は幼年から商家不似合の文藝の才があり、人にも認められて、二十歲位まで藝を以つて母を養つたといはれてゐる。過去帳には母の歿年が記されてあるのに、父は明記されてゐない。母は大雅に打明けずに死んだらしいといふのが、人見少華氏の說である。

大雅の相貌はどんなであつたらうか、これに就て相見香雨氏に據ると、中林竹洞と酷似してゐて、よく人が見違へたとある。これには確かな考證もあるが、爰には略する。尙大雅の家庭生活はどんなであつたかといふと、妻の玉淵と故紙堆裡に同寢したなどいふ貧生活が傳つてゐるが、かれが晩年住んだ葛原草堂の床の間の一隅に、奇拔の置物があつたといふことを相見氏から始め

て知つた。その置物の一つに支那の青龍刀で他の一は方一尺高さ二尺計りの頗る巨大な密臘の印で、鳳凰鈕で明人刻であつたといふが、多分五百羅漢の襖繪を書いた潤筆に黃檗あたりから貰つたものであらうと相見氏はいふてゐる。

大雅に就て耳寄りの話は、自分の鄕國の畫家五十嵐浚明が、京洛で大雅と交つたことである。浚明が京洛を去る時送別に大雅が書いて送つた「渭城柳色」の篆字額は新潟の割烹店鍋茶屋の有に歸し、同時大雅の書いた山水の畫は矢張り鄕人長井越作氏に歸してゐる。共に處を得たといふべきだが、何れも大雅の若書きで、大雅は浚明より廿三歳若かつたといふから、宛がら父子の如きものであつたらう。山水には柳里恭の題讃がある。大雅は里恭より畫の敎を受けたこともあるといふが、これも自分に初耳である。

山陽の室梨影

自分は聊か賴山陽の研究もやつたが、山陽の室梨影の素性を委しく調べることをしなかつた。然るに此頃滋賀縣の老友西川太治郎氏より左の書狀が

到來した。

（前略）多年判明せざりし賴梨影夫人の生誕地が去年始めて正確と相成、先月建碑式に參列致候。尙其後調査によれば梨影夫人は四歳まで生地三津屋に在り、夫より十二歳迄滋賀縣蒲生郡西大路親戚大崎嘉兵衞に養はれ、次で京都に移轉と共に入京十八歳まで小石元瑞方に奉公致し候云々。

とあるので、大略その生家が分つた。尙木崎好尙氏の編した梨影の小傳中から一二の事實を摘記すると、梨影の生誕地三津屋の里は、近江の犬上郡磯田村の湖岸に當り尾崎神社から程近く、東本願寺派田德寺前にところの舊家として知られてゐるのが、疋田藤右衞門の宅である。この匹田家が梨影の生家で養女となつた京都の大崎家も匹田家と同じく械屋（カセギヤ）又は「かせ屋」といふ屋號を用ひ、兩家の徽號は機織の絲をまく木具の「械形」工に、山形へをかぶせて、普通山工（え）と呼んだとある。又匹田家の附近の圓德寺に梨影の姉しゑが嫁してゐる。その寺には今も賴支峰の書幅を持ち傳へてゐるが、それは梨影の養家大崎家と賴家を結びつける屈强の材料であるが、支峰の詩は、

牖戸を綢繆して歳まさに深し、桑土新たに成る一宇の陰、獨り歎ず二親呼べども答へず、頼へに伯姉を留めて君が心を識る。

此詩の小書に云く

叔舅大崎大人の新居を賀す、時に王父母すでに逝き、獨り伯姉を存す、伯姉は卽余が萱堂なり、甥復(又二郎支峯)再拜

大崎家の當主は支峰が母方の叔父―梨影が其姉に當ることを云ふ、天保三年九月廿四日山陽葬式の時、燒香順の記錄に見える「械屋嘉兵衞」其人が、卽ち大崎家の先代―梨影の養父に當る。

狩谷棭齋建立の鳥居

狩谷棭齋の家は津輕藩の御用達をしたので屋號を津輕屋と云ふた。狩谷家の事蹟が弘前に多少傳はつてゐるだらうと思つたこともあるが、十和田湖に游んだ時、遂に氣がつかず、漫然過ぎ去つたが、青森市の南郊一里半、東津輕郡横内村に大星神社があり、通稱妙見堂といはれてゐるが、天御中主尊を祀り、舊幕時代改修して藩の祈願所とした。其參道に、丈餘の花崗岩の大鳥居が立つ

てゐるが、これこそ棭齋が建立したもので、狩谷家の御用達時代を語つてゐる。

右の柱に

爰修其祠我佚惟肅靈辰昭臨永賚多福

左の柱に

文化六年正月　狩谷望之建

と刻されてあるが正しく望之の揮毫である。邊僻の地に在るからでもあるが、これまで餘り人の氣のつかないものであるのが、森山泰次郎氏に由つて雜誌「集古」に紹介された。

瑞鳳殿の建築

仙臺に游ぶものは何人でも必らず藩祖政宗公の廟を訪ふのが常である。廟地は小高い丘陵で、天を摩する大樹が境を幽邃にして如何にも神々しい處である。こゝに木造の瑞鳳殿があつて、殉死の武臣十名の墓が殿の周圍を取卷いてゐる。自分は二度まで訪ふたことがあるが、この殿の建築に特徴があるとも知らなかつたので、別に注意を拂はなかつたが秋山定輔氏の傳中に左

の記載がある。

瑞鳳殿は見たところ左程大きくもない伊達家の家廟である。一寸見ては何んでもないが、見れば見るほど驚くことばかりだ。先づ同じ物が一つもない。こんな不思議な建築が世の中にあるか、何か同じ物があるだらうと思つて探しても一つもない。

第一に門柱、これが對でない、一方五尺なら一方四尺九寸である。瓦にしろ、建具にしろ、格子の目にしろ、全部違つてゐる。三の次ぎは四であるといふ具合で、到底數へられない。扉、片方が二尺なら片方が二尺五寸である。其扉に必ず蝶番ひの金具が附いてゐる、すると金具の大きさが、一寸、一寸五分、三寸といつた具合に違つてゐる。金具に打つ鋲釘に至るまで片方づゝ特別に拵へたものである。穴一つでも同じ錐で明けた穴はない。全部が全部一つ宛違つてゐる。同じものが決してない。」

……　……

時間經費其苦心これに要した總ての努力は大したものであつたに相違な

い。建物は小なりと雖も其の狙ひの高さに至つては、世界に二つとない全く獨創的な建築である。而して政宗が目指したところは何であるかそれは一箇の大教訓である。

人は千人萬人集まつても同じ人は一人もない。皆違つてゐる。一から十迄同じ人間はゐない。それほど違つた人間の集まりであるが、上に立つ者の考一つで、立派に統べ治めて行くことが出來ると云ふ意味である。たとひ人の貌形や心持は違つてゐても、治める人の心次第で、立派に統一ある國家が出來るといふことを政宗は此廟一つに依つて現實に教訓したのである。

果して政宗の教訓が此建築に寓してあるか否か知れないが當時各藩に非凡の藝術家があつて、互ひにその能を競つたから、斯る稀有の意匠を弄した事實があつても敢て不思議とするに當らない。

偶感雜錄

過去をいふ

いつぞやヒットラー氏は、日本近時の驚くべき文化を褒めた揚句、日本に就き強ひて不足をいへば、兎もすると振り返つて過去をいふことだと評した。卒然之を聞けば、日本人に對する頂門の一針であるかにも覺えるが、實は深く考ふべきである。文化の駸々として進む國運に際し、あとを振り返つて餘計な隙をつぶすよりも、ずん〳〵マッシグラに拍車をかけて進むがよいといふのも一說で、西洋あたりの文化國では敢て昔を語らない。しかし西洋諸國は日本と事情を異にし、過去に如何なる文化があつても、それは多く消滅し去つて何事も語るべきことが殘つてゐないのに反して、日本には過去の文化が嚴然存在して、それが新文化を裨補し、新文化と融合し、切つても切れない密着の關係を有して居る。これは日本のみに在つて他國に無いことである。日本が過去を振り返へるのは、空想に耽るのでもなく、過去の成功を誇るのでもない。

過去といふても活きてゐる過去で、それと現在式の未來の文化とに結びつけ、爰に日本獨自の新文化を作らんとするに、過去が大切な關係があるからの事だ。日本も一時過去を過去として一概に新奇の事に眩し、それに心醉し狂奔したこともあつて、猿の如き模倣國民だなどと嘲けられたこともあつたが、實は長い間の鎖國で、獨自の立派な文化がありながら、それを他と比較するに由なく、其實價を知らなかつたことがある。其頃は唯一圖に外人の啓發を受け、それに由り初めて日本の長所を感じたやうな始末であつたが、今日漸く日本固有の文化が他に比類のない日本獨特のものであることを感じ、在來の文化の上に新文化を築くには、新舊文化の調和融合を圖り我邦獨特の陶冶術を以つて、獨自のものとするには、その工作上過去を顧みる必要があるので徒らに戀舊思想に驅られてゐるのでない。

佐渡と流人

佐渡は昔の流謫地で、罪囚の或る者は遠く此地に送られた。恰かもロシヤが罪囚をサイベリヤに送るやうに、佐渡一島は牢獄の如き觀があつた。佐渡

ほど侮辱を受けた地はないやうに思はしめるが、しかし貶謫された人物の如何は一應檢討を要する。勿論常事犯や無宿のものなども多數にあつたであらう。それ等は大概金山の勞役に服したが、中には少からず國事犯もあつた。此等は時の政權に忌れて貶せられたもので、常事犯と同視すべきものでなく、一世を聳動するやうな人物であればこそ時の政權に忌憚され離隔されたのである。中には恐れ多くも天子もあり、高位高官の縉紳、拔群の武將、名僧知識もあつて、佐渡はそれ等を迎へるのを以て光榮とせねばならぬ人物も少くなかつた。寺が大人物の墳墓を有する故を以つて史蹟とさるゝからには、佐渡ほど大なる史蹟を有する地はないともいひ得よう。流謫されて後に赦免を受けたるものもあるけれども、多くは怨を呑んで佐渡の土となつてゐる。その銘々の履歷や時の權力に忌まれた所以を一々探討し、これを記錄し編纂したら、一部の貶謫史(實は一部の相剋史)が出來て、佐渡を永久に飾るものとなるであらう。我等は曾て佐渡に渡つて其講演會に臨み、如上の如きことを說いたことを思ひ出すが、佐渡が多くの名流を宿して如何なる感化を受けたか、そ

れ等を知らんと欲したが、遺蹟といふても眞野御陵其他四五の遺蹟が存するのみで、今は尋ぬる術もなく、坐ろに慨然たるものがあつたが、頃日手元に達した雜誌「高志路」を見ると、貶謫された名流が四十數名錄されてゐて、古きは養老天平の昔から南北朝時代にまで迨んでゐるが、この記錄に漏れたものが尙少からずあることを感じつゝ、感懷の一端をしるす。

ホルモンと樹木

老樹の枯死に瀕しつゝあるものを活かさんとするには、若木を其傍らに併植すれば、必らず效ありとは、桑駝師もいふことだが、其理は久しく分らなかつた。而るに今はホルモンの若返り說あり、動物が內分泌のホルモンの作用に依り育成されるやうに、植物に於ても、植物ホルモンの作用で老樹が若樹に由つて活氣を得るといふ事が今は理解さるゝやうになつた。但しホルモン說の出るその以前、早く老男子が若い婦女に接近すれば若返へるといひ長壽の一法であるといふた。或る女子教育に與つてゐる老教師に自分の老いないのは日々妙齡の女子に會してゐるからだと聞いたこともある。外人が時に

若い女を選んで祕書役とし、タイピストとするのも皆若返り説に基づかう。

日支水晶の相違

自分は時々思ふことだが、水晶といふものがよく日支兩國人の特徴を現はしてゐると。日本人は透明を缺く水晶を喜ばない。水晶といへば硝子のやうに少しの曇りのないものと思つてゐる。これが邦人の嗜好を現はすばかりでなく、邦人の性格をも現はしてゐる。邦人ほど心のサッパリして胸中に芥滯なく、透き通つて玲瓏なるものはない。篆刻家に聽くと邦產の水晶に刀を加へるとパリ〳〵して些しもねばり氣がないといふが、此點も邦人の氣風に似てゐる。しかしねばり氣がないために、篆刻家が運刀に遣り損ふことがあるやうに、邦人も事に臨んで失敗するのも直截に過ぎてネバリ氣を缺くからである。支那の水晶はどうかといふと概ねドンヨリした曇がある。これは支那の國民性に似て智の愚なるが如く、巧の拙なる如く、なか〳〵要領を得ない。よくいへば含蓄ありともいふべく、惡くいへば不純なりともいへるであらうが、支那民俗の胸中は宛がらその水晶の如く、忖度が甚だむづかしく、なか

〳〵容易に分り兼ねる。そのネバリ氣のある所も、亦支那民族の特徴をよく現はしてゐるかに思はれる。

ラスキン趣味

自分は毎度銀座を散策して、御木本の眞珠店の前を過る毎に、此家の息子が支豪のラスキン道樂で破產したことを思ひ浮べずに居られない。しかし實は委しい內情を知らないので、眞逆百萬圓位の道樂であの店が破產するとは思へない。或は息子だけの破產であらうか、ラスキンの原稿一枚を何千圓何萬圓に買つたと聞かば、或は驚く人もあらうが、西洋では驚く程のことではない。日本にもそろ〳〵此樣な蒐集家があつて欲しいと自分は思つてゐる。殊に自分などは圖書のコレクションに同感を有するから、御木本の破產息子に反感を抱き得ない。酒色の道樂で何百萬圓をも失ふ大放蕩家のある世の中、ラスキン趣味で身代を潰すのは、萬綠叢中の紅一點で、吾等はよくやつたといひたい。御木本の身代も實は水から築き上げたものだ。眞珠は培養で得らるゝが、文豪の草稿は天下唯一のもので培養で出來るものでないことを思は

ねばならぬ。

お世辭湯

明治の初年には東京の錢湯に、江戸時代の慣習が其儘殘つてゐて、今考へるとおかし味を感ずることがある。當時女湯に「お世辭湯お斷はり」の張札があつたなどは、後の世には何んのことか辨じ兼ねるかも知れない。當時女湯は、婦人の交際場ともいふべく、互ひに湯を汲んでやることが行はれたが、これがお世辭湯であるのだ。さなきだに女の入浴時間が長く、湯を使用することも男湯に比すれば幾倍であるのに、尙其上交際的にお世辭湯を取交すに至つては、水道の無い時代、湯屋の迷惑はいふまでもなく、斯る張札も現はれた譯だが今考へると一笑を禁じ得ない。

曉齋の逸事

河鍋曉齋に就て一つの逸事を得た。委しいことは三好學博士の學軒集に讓るが、要領を書くと、往年伊太利の曲馬團のチャリニーが來朝した時、曉齋は友人辻曉夢と見物に行き、チャリニーに請ふて二頭の巨蟒を寫生せんことを求めた。餘りに熱心に冀望するから團も許したが、曉齋は檻に近づき恰かも臥してゐた巨蟒を棒もて起し、恐るゝ樣子もなく、二人手分けをして一頭づつ寫生し、喜んでの歸路、ある旗亭に立寄り、一酌の際、曉齋は懷中より寫生帳を取出して一瞥すると看る〳〵顏色が變じブル〳〵慄へ出して坐に得堪へず、流石の酒豪も杯を納めて去つたといふ逸事は、當日目擊した辻曉夢が八十餘歲で今も存命して博士に語つたといふが、何故曉齋が自分の寫生を見て恐怖したかといふと、曉齋は性來蛇を恐るゝのであるが、曲馬團に就て恐れもせず實物を自若として寫生したのは、藝術に熱中のため恐怖の念が無かつた譯で、後にはその本性が現はれて醜態を演じたのである。卽ち同一の人間で心に兩面あることを現はした稀なる實例で、藝術に熱する時、一切の外念に累らはさるゝことのない教訓ともなる逸事である。

義經の七百五十年祭

源九郎義經の七百五十年祭が先頃營まれた。古來英雄型の人物は少なくないが、義經ほど不滅の喧傳を博したものは少ない。彼が鞍馬山に於ける修

行も、五條の橋に怪僧辨慶をしとめたことも、八島の八艘飛びも、鵯越の奇襲も、安宅の關の珍劇も、靜とのローマンスも、奥州遁れも、彼にはローマンチックの挿話が澤山あつて、軍談者流はこの上のない好材料としてゐる。源家の復興平家の征服には、何んといふても義經は首功であらねばならぬ。凱旋して鎌倉に入らんとすると、頼朝が腰越に扼して、入ることを許さない悲劇は、何人も彼に對して同情を禁じ得ない。由來義經は軍陣の人で政治家ではなく、戰鬪中非違のこともあつたに相違なく、頼朝が覇府政治の妨げとして、功ある弟を疎外したのは、頼朝の一見識ではあるが、頼朝の政治家的心事を知らないものは義經に左袒するものが多かつた。英雄の末路悲慘なるは、殆んど恒例であるが、しかし英雄を不滅のものとして彼は衣川に死なず、遁れて蝦夷に入り、又更に遁れて滿洲に入り、チンギスカンが、即ち彼の後身であると多くの人に信ぜられた如きは英雄の名譽とすべきであらう。

自分はいつぞや坪内逍遙と浮世繪を談じた時のことを思ひ出す。逍遙云く、牛若丸は浮世繪畫家の寵兒といふてもよい。牛若ほど浮世繪家の筆に上

り、それが青年にも大人にも喜ばれたものはない。妙齡花の如き美少年が、五條橋上で、辨慶の如き荒くれ男を相手にこれを足下に蹂躙し、遂にこの怪僧を終生の忠僕たらしめた如き、その史實はどうあらうとも、此繪は兒童には大人に對する優越を感ぜしめて快哉を叫ばしめ、大人に對しては男色の盛んであつた折柄その趣味を滿足せしめた。大人と少年双方を併はせ喜ばした繪はこれが隨一で、眞に浮世繪の傑作といふべきだと。

藝術家侮蔑の變遷

昔はすべての藝術家が皆蔑視された。支那で畫界の大家閣立本の如き官界に地位もあつたが、畫に巧妙であつたので畫筆を握ると同僚の輕蔑を受け、職工同樣に扱はれたので、子孫に遺言して畫家になる莫れと誡めたといふが、畫家と稱してゐたため殺さるべきが助かつた例もある。それは豐臣家に仕へた有名な狩野山樂で大阪落城の時、山樂は殺されんとしたが、松花堂は彼の助命を請ふた。その言ひ草は山樂は士分でない、その證據に落欵に畫師と署してゐるといふのであつた、それがために山樂は許された。

熱海に貫一茶屋があり貫一の句碑がある。百年の後貫一を實在の人として熱海史に考證を書くものが無いともいへない。それと同じく井原西鶴は例の好色家世之助を越後の寺泊に遊ばせてゐる、これも或は他日世之助を實在の人として寺泊の花柳年表などに編入すること無きを保し難い。

秋の人といへば誰しも名指すのは、西行、芭蕉、良寛などで鴫立澤に立つ西行、奥の細道を歩む芭蕉、五合庵に獨坐の良寛何れも寂莫を極めてゐるが、實は其心は春の如くで外目に見るごとき淋し味を感じてゐない。扨て今時どこに秋の人があるかといへば、蔣介石は正しく其人である。百戰百敗今は殆んどドン底に落てゐる。なほ參つたといはず、大言壯言してゐても、其心中には秋霜の寒冷に堪へざるものがあらう。

賭博國モナコ

世界の公認を得て居る賭博國モナコは吾東京の一區よりも小國で、國際聯

盟に加入も許れない國だが、近年佛國に合併された。これで愈々佛蘭西も放蕩者流の天國となつた。佛都は世界の淫賣所で、美人とシャンパンが名物で腰に萬金を纏ふて一夜に蕩盡し得る銷金窩といはれてゐるが、賭博所が加つて見れば遊蕩者の天國としてすべてが備つた譯だ。併しこれが佛國の幸か不幸か、佛人は云く、吾等は世界の遊蕩客から金をシボリ上げて、他日敵國と戰ふ軍資に供するのだと。

勇氣と修禪

昔名僧智識が白刃を恐れざる勇を示した例はいくらもある。人誰か死を懼れざらん。怯懦の心は誰にもある。唯名僧智識は怯懦の心を驅除するから、その殘る心は物に懼れず、死に臨むも自若たり。これを爲す法は禪を修むるに在り。乃ち心を臍下丹田に置けば、心は澄水の如く坦然たり。この法は鎌倉時代の武士に珍重された。北條時宗が元の大兵を殲滅したのも、修禪の勇より生じたといはれる。時宗は祖元禪師に自白して云く、人生の因りものは怯懦であるが、時宗は其怯懦の持主である。如何せばこの怯懦の念を驅逐

するを得んか。禪師云く時宗が怯懦の持主ならば、時宗を驅逐し去れ、自我あるが故に怯懦を生ずる也、自我を去れば、天地豁然として時宗もあらず怯懦もあらず、これを爲す唯坐禪して一切の雜念を去るに在りと。時宗と祖元の問答大略右の如し。想ふに吾將士も人なり、豈怯懦の念なからんや。唯戰場に立つと同時に自我を忘れて、忠君報國の一念の外何物もあるなし、これ彼等の勇なる所以、彼等の身を鴻毛より輕しとする所以、彼等の勇は時宗や鎌倉武士に比して遜色なき所以、神風の天佑を藉らずとも、大敵を殲滅する所以、彼等は出陣に臨んで別を親戚朋友に告げて云く、予を見んとせば請ふ靖國神社に來れと、彼等は出陣の時其心淨化して既に神となる道程にあるなり。その陣歿するや彼等は唯　天皇陛下の萬歲を叫ぶのみ、一言私事に及ばず。その最後の立派なる古武士も三舍を避く。これを以つて見れば戰場も又修禪の道場なる歟。

旅と紀行

文人の旅

貫之が海路、土佐に赴任の長旅や、菅公の大宰府に貶謫の羈旅の如何あつたか、そんな大昔の驛路の不便など今、想像も出來兼ねるが、近く德川期の旅を想ふても、その不便は眞に隔世の感がある。

封建の制下には諸藩參勤交替の事あつて、長途、衆團の旅があつたので、街道筋は、旅舍も人馬も調つたに相違ないが、街道筋を離れると、全く原始その儘が多く、殊に要衝には關所があつて、之を通過するに相當の手數がかゝり、天嶮の外に人嶮もあつた。

大水には川留めがあり、宿驛には雲助が跋跨し掏賊や泥棒が人を苦しめた。然し羈旅の蒙昧期にも旅を業務としたものがあり、旅を遊戯としたものもある。即ち今の郵便の役目をつとめたものは飛脚で、雲水の僧は修行のため嶮路を行脚し、觀光の旅は遊戯的のものであつた。

勿論、この外に公務のための旅行、商業のための旅行等もあつたが、私の今、いはんとするのは文人の旅で、遊戯の旅に屬する。たゞし嚴正にいへば文人の旅も決して遊戯の旅ではなく或る意味に於いて生活の旅であつた。

彼等は通例、遊歷の二字を用ひたが、實は觀光のためといふよりも潤筆を得るの旅行であつた。卽ち生活の資を得るの旅行であつた。西行や芭蕉などの世捨人の旅とは異つてゐる。

尤も文人の内にも種々あつて潤筆を目的としないものもあつたに相違ない。それは地理研究の旅例へば貝原益軒が夫婦連れで漫遊した如き、東西游記の著者橋南谿が醫術旅行で施療しつゝ歩いた如き、廣重が東海木曾兩道の風景を寫すために旅行した如き、本艸家が採藥のため旅行した如きはその例であるが、彼等と雖、全く潤筆に關係が無かつたとはいはれない。要はそれが目的で無かつたといふまでのことだ。

所謂、文人の遊歷は或る地方に知人があつて、多くの場合それが誘ふので毎

年の例として誘はるゝ事がある。また遠方なれば年を隔てゝ行くこともあり其誘ふた人が自然紹介者であつて或は書畫會を開き、詩會や俳席を設けたりして、自然その地にファンが生じ、旅囊に潤筆も入るので、それを資として方々へ遊歷を試みるものもあり、或は知己のために淹留を請はれて、龜田鵬齋のやうに、新潟に三年も留まつたものもある。

大概どこの都會地にも風流氣があつて、文人を喜ぶものがある。それは富豪に多いので文人は多くの場合その家に寄宿し、文筆を弄する傍ら、その家の事務を手傳ふたりするやうになつて、悪くいへばその家の居候或は幇間の如きものも無いではなかつた。

勿論、その家の主人はこの客を酒の友とし時には伴ふて登樓もやつたから、居候としては誠に仕合せのものである。家庭では先生と呼んで尊敬を拂ひ、自然家人と親しみ讀書や詩畫などを教える關係が生じ、或ひは村塾などに迎へられてその教授を司どり、或は聟養子に望まれて遂に緣組をやるやうな事も稀には行はれ、大概の文人は斯くしての一の停留所を築き、これを生涯の根

據地とするものが多かつた。

賴山陽などは屢〻京都から鄕里廣島まで長途の旅行をやつたが、途中に立寄る二、三の豪家があつて必ず世話になつた。これが卽ち停留場の一例である。

自分の鄕國越後は富饒暢氣な國で風流人や酒客が多く、殊に新潟の加き綺羅の地もあることだから、東都の文人は大概遊びに來てゐる。越後は雪國であるのと江戸とは遠距離であるため、來遊文人が足を留め、前に言ふた鵬齋の如き人もあつた。

どこの豪家でも文人を半歲や一年寄宿せしめることを、何んとも思はなかつたので、文人も居心地がよく、遂に長滯留をしてゐる內、追々交りが擴がり、諸方の豪家に轉宿することも起り、人の厄介になりながら潤筆を受けたから、旅囊を富ましたものもあつたであらうが、その稼ぎを家にまで持歸へつたものは、極めて少なかつたといはれる。殊に江戸お構ひで追放されたものや、火事

に燒け出されたものなどが、暫く其身を托して遊べただけでも彼等の儲けであつた。右の次第で何處の豪家にも彼等の墨蹟が多く存し、又種々の逸事も傳はつてゐる。所謂「旅の恥はかき棄て」で、磊落風をなした當時の文人墨客の殘した恥の跡も少くなく、それを摘發して笑ふのも亦一興である。

旅には失敗が多く、人はそれに興味を持ち耳を聳てるが常だが、文人にそれが殊に多い譯は、彼等の多くは磊落で世事に疎く、風土や習慣が異なるので誤解から滑稽を演じたり、旅費が乏しいので失態を釀したりするなどが原因で、文人の履んだ足の跡々はいろ〳〵笑話が殘つてゐて、そこに興味が存する。

私は曾て文人墨客の逸事を編した折、殊に彼等の旅に興味を持ち、文人の旅といふ書を編したいと志したが、今以つてそれは出來ないが、その志は今も棄てない。

試みに一、二の挿話を擧げると、山陽が廣島に赴く船中、嫗路藩の家老河合漢

年と乘り合はせ、或る津に船が着いても山陽は讀書に耽けつてゐたので、漢年は感心して誰何すると山陽であることが知れ、終生の交を結ぶ端を開いたことや、狩谷棭齋が説文學の大家山梨稲川を府中に訪はんと甲州の猿橋を過ぎ、旗亭に立ち寄ると一人の客から酒を薦められ、互ひに姓名も通ぜず獻酬して別れ、さて稲川の家を訪ふて遇つて見ると、その人が猿橋の旗亭に杯を取替はした人であつたなど、また卷菱湖が或る旅宿に泊すると隣室に稲川が居て宿の主人に隣客の名を聞くと、卷先生と言ふたので「あゝあのウソ字書きか」といふたのを菱湖が聽いて立腹し、果ては兩人書道を論じたが、菱湖はその頃説文に暗かつたので稲川に説破されて、爾來説文に志すやうになつたなど、簡單な挿話ながら、文人の旅には棄て難い雜談が少なくない。

今も昔も同じだが、文人墨客の旅は必らずレコードを殘す。此點は他の旅客に無いことであり、吾等が特に彼等の旅を多とする所以である。彼等は旅中必らず勝區を訪ふて、文なり詩なり和歌なり俳句なり又畫なりを殘すを例

とし、これがため世に風景を宣傳し又それにより名高くなつた山川沼湖も少なくない。

彼等の經過の地は寒驛荒宿も多く諷詠に入り、それが人口に膾炙して後人の栞となるので、文人墨客の旅は文化に裨益もあり、決して徒爾でない。隨つて彼等の旅が頻繁であり、且つその範圍の廣からんことを望まざるを得ない。

水郷游記

去年六月十一日十畝荒木畫伯並に同人數氏と香取鹿島を訪はんとて先づ銚子に赴き犬吠岬の鷄鳴館に一泊した。此市は先年亡友吉田東伍博士が客死した地で、その始末や終焉の碑を建てるなどで數次往復したので記すべきこともあるが、それ等は一切省略する。

翌朝四時半に皆々起床、海を望めば一天清朗、波濤靜穩にして海上無數の漁船の簇がつてゐるさまは、なか〳〵の壯觀で、發動機の聲と濤聲とが混錯して、遠く聞えるのが、何となく殺氣を帶び、源平頃の海戰は斯くありしならんなど〻想像を馳せ、朝餐に酒を命じて一行興を遣つた。日程に從ひ九時旅館を發し自動車にて川口に到り乘船した。北川口が利根の吐口である。

自分が利根の水郷に一游を欲したのは久しいことであるが、その機を得ず、空しく夢寐の間に心を馳するのみで幾十年を過ごしたが、漸く望を達する機を得たのは喜びに堪へなかつた。川口埠頭で、兼ねて用意の發動機船に乘り、

他人交へず一行團欒談笑して行くその快は言ふ可らざるものがあつた。川口より佐原まで水路九里、佐原に達するには午後となるので、船中酒食の用意もあつた。

自分は鄉里で信濃川其他の大川を見ても居るが、坂東太郎の稱ある利根は日本第一の巨川であるから、鹿島香取參詣と、風景觀賞の外に、水域地理を聊か研究したい念もあつて、特に利根川圖志などを携帶した。先づ尤も川幅の狹い川口附近の流域の幅員を圖志に就て案ずると、四町とあれどそれよりもものつと廣きを覺えた。漸く水域の廣ろい處に到ると渺々海上にあるの想があり、こゝは飛覺えた。此邊の兩岸には欝樹の間に人家が隱見し、風景凡ならず行機の演習地でけふも二機の活動を見た。或は此川を揚子江に擬して居るかとも感じたが、投彈の處に標示もあつた。機は一昂一低操縱の妙を示した。十二時近く微雨到り、晴天は破れたが幸ひに大雨とはならなかつた。行厨を開らき小宴を張つたが、船は間斷なく馳せて、息栖神社の華表を望む所に達した。豫ては上陸して參拜の筈であつたが、神社まで一里の道自動車の便なし

と聞き、船中遙拜して過ぎた。間もなく水域の最も廣濶の處に達した、此處は、鴨の獵區にて浪逆(なさか)の浦といふ。

自分はこゝに來て利根川が太古どんなであつたらうかと、種々の想像に耽つた。萬葉の和歌に徵しても、其頃川とはいはず、海といふたことから考へても、實に渺々たる大海原であつたであらう。恐らく筑波山を殘して常總二州の大部分は、水底にあつたらうとも想像された。長い歳月を經て、追々水域が狹ばまり、干拓の地も出來たが、今日とても太古そのまゝのものには、霞浦、與田、浪逆などの太湖があり、沼澤には印旛手賀等があり、干拓を經て島嶼となつたものに、浮島や十六島などがあるが、此等も舊記に據ると、天正以前には皆沼澤であつたといはれてゐる。

船は一時過ぎ大船津に達した。此處に潮來に通ずる現代的の長橋があり、近時架したもので、其延長五百五十三メートル、工費四十五萬圓を要したといふ、一行大船津に上陸、自動車を驅る十町、鹿島神宮の參詣に出かけたが、此神宮は太古よりの鎭座といはれ、香取鹿島兩神共軍神であるのみならず、治水にも

大勳のあつた神である。舊記で案ずるに鹿島神宮は武甕槌(たけみかづち)神を祀り、此神を奉齋する神社は茨城縣のみでも四百十社の多きを數へ、他の北方諸縣にも奉祀の社の多いのは、神威の北漸を語るものである。今鹿島神宮の創祀を尋ぬるに神武天皇の即位元年即ち紀元元年で、今を距る二千五百九十九年前、神宮の祭神が天皇の東征を援助されたので、勅に由り鹿島香取兩神を祀られたのだといふ。實は此祭神は天皇の御創祀前、既に此地に鎭まりましたので、此神は出雲國を中心として今の山陰山陽の兩道に勢力を有した出雲民族を從へ、進んで關東に出で、この鹿島に來り、當時東北に蟠居してゐた蝦夷の一族をも撫循せられたのである。船のみを唯一の交通機關とした神代に於ては、鹿島は交通に至便の處で、ために大和民族よりも先きに先住民族のあつたことが、多數の石器や貝塚の遺存に由つて證明されるし、なほ鹿島神宮を中心として東西南に相並んで圜狀を描き、六七町の距離を隔てゝ百數十の古墳の存在するのは當時の民族生活の遺蹟を語るものである。傳說に據れば、神武天皇の武甕槌神を創祀されたのは、その孫の命の在世の時代ともいふ。何れにして

も此神は我が建國史上最も功績あらせられ、民族史上開拓の地位に立たるゝ神であり、隨つて鹿島神宮は帝國東門の鎭護であるのみならず其地は我が民族發展の發祥地ともいへるのである。

この神宮の境内は二十四萬坪、天を摩するの老樹は道の兩側に立ち、林相は殊に美にして神々しさいはん方なし。樓門は寛永十一年本宮は元和五年の造營に係り、曾つて勤王家佐久良東雄が千樹の櫻を植ゑたのもこの境内で、今も尙若干存してゐる。坂路を下り欝林の間を行くに、御手洗川あり禊祭を營む所で清冽の水中に華表立ちあり境内の一淨區となすに足る。

吾等は參拜の後船に上り、四時頃、潮來を過ぐ、此地にはもと諸大名の藏屋敷があり、船主の立場的娛樂場として幕府も特に淫樂を許したため久しく風流の處とされ、宛ながら古代の津の國の江口や神崎に比されたが、今は衰へて特に遊ぶ程の價値が無くなつた。却つて近頃名所となつたのは浮島である。此島に近かく景行天皇駐驛の碑が建設されたことが、この水鄕に一段の光彩を添へた。景行天皇の皇子日本武尊は東征の揚句此地に薨去あらせられたの

で天皇は深く悲んで其蹟を訪はせられ、且つしばらく駐驛あらせられたことが歷史にある。併し久しく其地が疑問に屬し、決し兼ねてゐたが、追々の研究で浮島であることが決したので、爰に御遺蹟の碑を建設するに至り伯爵田中光顯前宮相が碑面の字を揮毫し、且つ除幕の際にも臨んだので、こゝに始めて天皇御ゆかりの聖地が定まり、一名所が加はつたのである。

浮島と共に島嶼をなしてゐるものに加藤洲と唱ふる小村がある。こゝには古來喧傳する十二橋があるので吾等はそれを訪ふた。こゝには一村を貫ぬく小河があつて、僅かの距離に十二の橋が架せられ、兩側の人家はこれに由つて交通してゐる。川が狹いのでモートルを止め舟に棹さして通過したが、川の兩側に樹が繁茂してあたりが薄暗く、河邊にいろ〳〵の花木を認めたが特に無花果の多いのに氣がついた。人家は格別貧戸とも見へなかつたが、全く原始の村を見る思があり、今の世にどうして斯る神仙的の幽鄕があるかを不思議に思はれた。

十二橋を過ぎ、五時半佐原に著、船を棄てゝ、十五丁香取神社に參拜した。こ

こは境内一萬五千坪、鹿取神宮に比すれば規模小なるも、朝野の崇拜は古來兩宮甲乙なく、今や出征者の參拜が盛んで、數百の男女の麕集を見た。境内に至德三年在銘の洪鐘あり、千歳壽齡の老杉があつた。此地に伊能忠敬の碑がありと知りながら時間なく訪はずに止んだ。一行は金田旅館に酒食して七時三十四分發歸京の途に就いた。

歸京の車中一日の游程を案じたが、此水鄕は單に風景美の勝區たるのみならず、我最古の史蹟に富んで俯仰感慨を惹くもの多く、水利に拓殖に究むべきもの少からず、一日の游程では餘りに匆々で見遁した所も多く、飽足らぬ心地せられ、切に再遊を欲するの情に堪へなかつた。

越後新井鄕川

自分の鄕里には阿賀、加治、新井鄕等の諸川があつて、落差の少ない平地を流るゝので、融雪の候と夏秋の淫霖に會すると、諸川一時に暴漲し、幾萬町の桑田は忽ち水を被り、人畜家屋の損ずるもの少からず、この水禍は吾鄕の大患であつた。明治以來漸やく治水策が講ぜられ、逐次奏功して慘たる水禍も舊夢談となつたが、これがため資源に治水費に、失つたものは實に莫大のものである。一昨年の秋新井鄕川の治水碑を建設するにつき、自分に撰文を囑せられたので、自分は特にその實地を檢分せんと歸省し、關係者の嚮導で隈なく水路を巡廻し、具さに水門閘門を始め開鑿の水路等を見た。

治水の檢分を了つた翌日、偶ゝ宇垣一成大將が青年會々長として新發田へ來られ、其日の午後吾が宗家に來泊せらるゝことゝなつたから、自分は接伴かたがた止まつて、大將を迎へた。大將には遇つたことはないが、先頃の流產内閣に同情を寄せてゐたから、欣んで迎へた。大將の年齒は七十を越へてゐる

が、余に比すれば幾歳かの弟分で剛健壯者を凌ぐの概があつた。飽まで世故に通じた人だから、一見舊識の如くであつた。大將の納涼がてら福島潟に舟游をと望まれたので、三艘の小艇を艤し、酒を載せて、主人幷に大將の隨員と共に舟游を試みることゝなつた。潟は宗家の屋後の川に通じてゐるのである。自分は前日檢分のため發動機船で匆々經過した處だが、圖らず舟游の機を得たことを快とした。舟は蘆荻の間を徐行し七八丁にして潟に出た。潟は流石に廣く渺々海の如く暮靄の間に遠く村里の欝樹を望むのみ何ものも眼を遮るものなく、漸やくにして日霽淵に沒したが月は未だ昇らず、風景蕭然たり、蒿師は小鮮を網みし、舟中の客はしきりに杯を擧げ、笑語各船に湧いた。此夕べ不幸無月なりしを遺憾としたが、潟の夜景は大いに客を滿足せしめた。斯くて歸路に就き、宗家に晩餐の宴を張りたるは八時頃にて、滿酌快談、余の酒量は大將に敵し得ず、幾んど醉倒するに至つた。川の治水の經緯は大略左の如くである。

吾が鄉里の郡名は蒲原郡といふが、その地名の如く昔は菰蒲相望むの地で、

天正年間溝口氏が封を新發田に受けた時、その封土は概ね沮洳の沼澤であつたといふ。其後數百年の開墾と干拓を經て、郡内一圓に沃土を來たしたけれども、今尙ほ舊態を偲ばしむるものは福島潟で現に五百町歩の水面を存してゐる。この水を排出するの河川は新井鄉川で駒林川新發田川を合して松ヶ崎に到り更らに阿賀野川と合して海に注ぐのである。此聚水面積廿四方里流路四里に及ぶ。然るところ沿岸の耕地は概ね低平で落差なく、毎年春季の融雪と夏秋の淫霖に會すると、諸流一時に增水して氾濫を來すのが常であるのになほこの季節は恰かも阿賀野川暴漲の時で、諸流の增水と共に奔放福島潟に逆流し、湛水渺漫吐くに由なく、萬頃の水田忽ち泥海と變じ、人畜家屋の被害十數村に及び、慘狀言語に絕するものがある。此故に早く寶曆の昔、山本丈右衛門に由り治水が策せられ、爾來幾回か治水は企圖されたが、皆功を奏するに至らなかつた。然るに近かく大正二年、郡内他の一川加治川の治水工事漸く成り、大正四年四月阿賀野川改修工事施行せらるゝこととなつて、氣運漸く熟し、新井鄉川の治水を策するはこの時に在りと、關係諸村蹶起し、大正六年水

害豫防組合を組織し、阿賀野川逆流を防止すると共に、松ヶ崎濱村の裏山を開鑿し、惡水を日本海に放流するの案を立て、大正九年始めて工を起し、爾來着々工を進め、阿賀逆流防止の水門を作り、通船を便する閘門を營み、魔所の稱ある一貫場の彎曲水路の改修等々を成就し、昭和九年三月全く工を竣るまで實に十五星霜を閲した。併し此後は亦昔日の患なく關係鄉民始めて堵に安んずることを得た。此工事費は約六十萬圓、內國費十萬圓、縣費二十八萬圓、組合負擔二十二萬圓也。

モールスの「ジャパン・デー・バイ・デー」

米人エドワルド・モールス先生は、吾等が學生時代に、帝大の豫備門に動物學を教はつた人である。先生は繪を書くことが達者で亦上手であつた。いつも五色のチョークで、黑板に種々の動物を描き、巧みに說明したものだ。蜻蛉などを描く時は、兩手にチョークを持つて、左右の羽を疾風の如く書いて學生をアットいはした。先生は口も達者で愛嬌があつたから先生は學生に喜ばれた。先生は自身動物學の書物を著はし、それを出版して教科書に充てられたが、書中の圖は皆先生の筆に成つたものであつた。

先生にジャパン・デー・バイ・デーといふ著がある。原書は頗る尨大のものであるが、その譯書は「日本その日その日」と題し、啓明會の出資で、科學知識普及會から昭和四年出版されてゐる。卷首に先生の教を受けた石川千代松博士の序があり、博士の嫡男欣一氏が曾て先生の家に寓した緣故で反譯してゐる。二卷で千頁もあるものだが、先生が日本に來て歸國するまで、四年間毎日〳〵

見聞したことを筆まめに書き留めたものゝ中から特に風俗習慣に關する事項を、先生の晩年本國で出版したものである。毎頁スケッチに滿ちてゐるのがこの書の特色で、その繪を見るだけでも吾等は陶然として愉快を感ずる。

先生が最初來朝した頃は明治の初年でまだ舊日本の事物がそつくり其儘にあつたので、新來の先生の眼には餘程珍らしく映じたらしく、あの鋭利な觀察力を以つて、吾等が通例意を留めないやうな物までも漏すことなく、例の畫筆で描き、一々所感が錄されてある。自分などは親しく教を受けた關係もあるから、毎頁懷かし味を感じて卷を釋くことが出來なかつた。先生は頗る日本通で、すべて好感を以つて日本を解し、其觀察が皆的確であるから外人の書いたものとは思はれない氣がした。先生は日本在留中北は北海道南は九州まで旅行をして、到る處風俗習慣を書き留めたので、日本を外國に紹介するには此上のない名著である。先生が朝廷から初め勳三等に後勳二等に叙せられたのは決して偶然でない。

先生が此日記を出版するに至つた動機に就いては序文に先生と先生の友

人で曾つて日本に三度も來たドクトル、ウォリアム・スターギス・ビゲローとの問答が載せてあるが、それが如何にも面白い。先生は例の軟體動物研究のため日本に赴くことをビゲローに報じてやると、ビゲローのいふには君の手紙で氣に入らぬことが一つある。外でもないが、君は高級動物を高閣に束ねて、不相變下等動物の研究を云々するが誰でも出來るやうな下等動物の研究に、君がいまだに大切な時を徒費しようとするのが氣に喰はぬ。君は日本人の方が蟲よりも高等な有機體だと思はないのか。蛇足類などは溝へでも棄てゝしまへ。蛇足類は棄てゝ置いても大丈夫だ、いづれ誰かゞ世話をするに極まつてゐる。君と僕とは四十年前親しく知つてゐた日本なる有機體は既に或る部分地球の表面から姿を消してゐる。吾々の年齢の人間こそ、かゝる有機體の生存を目擊した最後の人であることを忘れないで呉れといふて、先生の注意を促したので、さもなければ三千五百頁の日誌を世に示すことが出來なかつたかも知れないものが、遂に世に出ることになつた。これは全くビゲローの罵言的警告に由つたものでビゲローのいふごとく、同じ日本人でもモー

ルス先生渡來の時の日本人とは全然異つてゐるともいひ得るやうに今は西洋化してゐるのだ。此著書を讀んで見て興味のあるのは、既に化石になつた其昔の狀態が寫されてゐるからでもある。

自分は此書物に觸れて先づ稀有の日記の體であることを感じた。日本の畫家などに繪日記といふものがある。それは繪を本體にして多くは繪に物をいはせて、文字が聊か添へてあるに過ぎないが、先生のはそれとは違つて畫に就て一々細かな解說がある。そしてその觀察が皆的確である。普通畫家の日誌などは心覺えにスケッチを書くが解說を添へることは甚だ稀である。羈旅匆々の場合など無理もないことだが、先生の繪日記は全く選を異にして繪も精を極め解說も徹底してゐる。先生は物を見る其際に筆寫するのであつて、路上でも人を訪ふた時でも、宛がらコダックを携へて見た刹那に寫すと一般何物も遁さない。小兒が街頭で戲れてゐると立駐つて筆を走らす、見世物があると稠人の中でそれを描すといふ鹽梅にやるから、どの繪も寫實である。街頭に執筆中物珍らしげに人が立とまるので、それに妨げられてよく書き取

れなかつたと斷はりのある圖もあるが、それ等でさへ申分なく出來てゐる。大體は偶然目睹のものに卽興を感じて書くのだが、偶然の場合のみでなく、寫すことを目的として散策することが頻々とあつたと自白してゐる。日本の事物に興味を持つた外人は敢て少くないにしても先生のやうに興味を持つた人は他にあるまい。又先生のごとく丹念に繪日記を書いた人は斷じて他には無い。

先生の最初渡來の時は主として軟體動物研究の爲であつた。その時は江の島に腰を据ゑて漁民と生活を與にした。それから帝大の聘を受け、一旦歸國して更に渡來したのだが、あの頃の大事件は大久保公が暗殺されたことで物情騷然であつた。先生は現に其日記中に新聞の號外を收めてゐる。大學で初めてダーウィンの進化論を講じた時の感想も陳べてゐるが、西洋の如く宗教的桎梏がない日本では講說が樂で、聽者の熱心であるのと理解のあるのにも滿足したといふてゐる。始めて地震に遇つた時の感想も書かれてあるが、先生には頗る珍らしく、恐怖どころか愉快であつたといふてゐる。

先生は日本在留中目をまはす程多忙で動物の研究に日もこれ足らなかつたのに、大學へ聘されて間もなく京濱の汽車中大森の貝塚を發見し、それが又研究の新題目となり繁忙が亦加はつた。それのみならず先生は多方面に趣味區域を擴大し、陶器を自製するやら、謠曲を習ふやら、骨董漁りをするやら、幾んど寧日が無かつた。殊に爰に漏らすことの出來ないのは當時考古的蒐集家として著名であつた蜷川式胤、根岸武香、柏木探古、松浦武四郎等の諸家を歴訪してその珍襲を見、その指導を受けて、どんなに考古眼を開拓したか知れない。先生は隙さへあれば旅行を事とし、ビゲローと多くの場合同行で到る處骨董を漁つたから、先生の日本に關する知識は、斯くして驚く程の涵養を得たのは想像に難くない。

先生の日本に對する感情はどうかといふと、可なり日本を買ひ被つてゐたと思ふほど日本贔負であつた。先生は大隈侯が外交官に適當の人だと評した程如才のない人で、到る處人受けがよかつたのと、大學教授の肩書もあるのでどこでも好遇されたことなどが好感を博した原因らしいが、日誌中には九

州の旅行に就て左の如くいふてゐる。和船で或る地方に赴く時、途中の不安を感じて金時計と八十圓の貨幣とを身につけず、宿屋に預けた處、二三日を經て其宿へ歸つて見ると、時計も金も最初預けた其時のまゝ、亂れ筐に入れて、ソックリ床の間にあつたので、意外に感じたとあるが、先生が日本人を正直であり且つ禮儀に富んでゐると常に書いてゐるのは、こんな實驗から出てゐるのだらうが、實は過賞であるとも思へる。

先生の此日誌は今より約五十數年前の筆錄である。日清日露の戰爭は共に先生が本國へ歸つてからの出來事で、この二大國と戰つて、日本が捷利を得たるに就て、先生はどう感じたであらうか。恐く先生は其都度微笑を浮べて、俺の贔負の國を見よといつたであらうと想像される。現に先生は日誌の終りに感懷を錄してゐるが、それに據ると、先生はエンサイクロペディヤなどに、日本人は德川氏三百年の太平に慣れ淫靡の風が盛であるから、國民は懶惰で怯懦だと書かれてあるのを引き、その甚だ誤つた觀察であることを駁し、自分の日記は四十年前見た僞らざる觀察であつて、決して日本に佞するのではな

い、今日の發達を見れば決して自分の觀察の誤つて居らぬと固く信ずる由を高調してゐるが、誠にその通りである。

昔の旅

明治の初年自分の書生時代には東海道木曾路などには舊幕時代の驛路のさまが存してゐた。勿論大名の行列は見ることは出來なかつた。まだ雲助もゐた、飯もり女もゐた隨分女郎屋仕掛けの旅舍もあつた。各所に名物といはれた名殘のものもあつた。何しろ鐵道は當時京濱の外にない時であつたから、書生境界の自分は彌次喜多を學んでの膝栗毛で、一歩々々汗を流して備(つぶ)さに土をふんだ。それが四十日にも及んだから、愉快でもあつたが、難儀でもあつた。旅の趣味は全く徒歩にあるのだが、それは後日斯く感ずることで、其際は彌次喜太の樣に爆笑亦爆笑で洒落のめしてゐる譯には行かなかつた。しかし無責任の旅行で舊幕當時の羈旅の味を喫することは興味あることであつた。

どの宿驛にも立場々々に必らず一群の雲助がゐた、彼等は多く裸體の儘店頭に出しやばつてゐて囂々罵り合つて居り、中には丁半をやるものもあり、客

を見ると駕籠を強ひるので、うるさいものであり、亦無氣味のものであつた。彼等を雇はねば、即座に客を罵倒するを憚からないから、滅多に彼等を相對に話を交ふることも出來なかつた。或年正月の三日に函嶺を踰して靜岡に赴いた時などは、雲助が駕籠を舁いた。彼等は立場毎に酒手をねだるのを例として、うるさいものであつたが、少しばかり酒錢を與ふれば、直ちにそれが一杯の酒に替つて、しばらくは元氣よく山をかけあがる、それを思ふと酒手も惜しいものでなかつた。彼等は衣服を着けず、酒が即ち衣服であつた。彼等は賭博のためにふんどし迄失つて、陽物を竹の皮に包んでゐることも事實あつた。彼等は概ね無宿で天涯に家なく妻子もない、哀れな動物であるが、實は封建時代が產んだ一種交通の機關であつた。大名の行列などに幾百人の人足を要する場合、一呼辯じ得るのは、この雲助の一群であつた。當時人足は助郷と唱ふる方法で、宿驛外の村々に課したが、これが極めて惡制度で、庶民に難儀を及ぼしたことを思ふと、雲助はその難儀を緩和する機關であつたともいひ得よう。雲助は動もすればゴマノハイと同視さるゝが、ゴマノハイは一種の詐僞

漢で、雲助とは異なるものだ。昔の道中で尤も警戒を要したのは、このゴマであつた。當時旅客は金錢を盜み取らるゝの用心から、或るものは小さな盆栽の土中に埋めて携帶した。然るにそれが氣になつて入浴の時ソット窓外にこれを望むと、道づれのゴマは早やそれに氣づき、其夜盜み去つたといふ話を道中で聞いたことがある。自分は書生時代を經過してから箱根に遊んで、かつて一たび經過した舊道を駕籠で通り、雲助の歌を聽きたいと思ひ立ち、歌の心得ある雲助系の舁夫を探さしたことがある。僅かに一人夫六十計りのものを得て、昔通り駕籠を舁がせ、歌を唄はせたが、舁ぐと唄ふとはおのづから呼吸のシックリ合ふことを要し、なか〳〵うまい呼吸のものだと感じた。唯普通の樹木は既に伐り拂はれて曾つての如き物凄い風景はなく案外興味がなかつたことを思ひ出す。

封建制度の諸大名の參勤交代が宿驛に大なる旅館を經營せしめ、大名を宿す所を本陣といひ副本陣といふものもあつた。相當規模の大なるものではあつたが、大きな大名の行列は一萬餘にも及んだといふが、それをよく宿驛で

捌いたものといつも想ふことである。隨分宿驛全部が宿屋である所もあつたとはいへ、本陣以外の宿は皆小なるものであるのによくも扱はれたものだ。自分も度々本陣に泊まつたことがあるが、高級の室は一段高く作り、大名の座所などは相當美を凝したものであつた。すべて大名の宿泊する時は前以つて先觸があつて、宿屋では大名の紋章を染抜いた幔幕を張り、宿の前には何々殿御宿泊と大書した立札を立てたもので、その立札が多く其家の誇として永く保存されたものだ。

自分が明治の初年に東海中山兩道の旅をした頃は、さびれてはゐたが、旅館は幕府時代其儘であつた。どの宿も客の風體を見て、それに應ずる室を與へ、待遇もその室と相當するものであつたが、道中通が教へたことに旅客として尤も大切な心得は、茶代を着匆々與へることである。茶代の高に由つて待遇ががらり變り、忽ちに立派な室に取替へ、座蒲團でも寢具でも全部改まり、細かにいへば風呂の案内も早く來り、行燈の燈心も幾本か加はり、宿の番頭のお世辭も下婢のサーヴィスも宛がら舊知に對するごとく深切になつてくるので、

そのげんきんさは眞に驚くべく僅かに二三百文を張りこめば待遇に雲泥の差があつた。饗庭篁村は番頭の口を藉り、例の皮肉の筆で「夜具はお龜末ですがお宅にゐらつしやるお積りで御ふしよう下されたい」といはしてゐるが、茶代の次第で身分不相應の寢具にありつくことは決して難事でなかつた。

宿驛の繁賑を極めた大名更替時代旅宿と枕席に侍する道中女の設備のあつたことはいふ迄もない。幕府はしば〳〵取締つたが、なか〳〵其效がなく、大體見遁してゐたらしく、宿屋に依つては、宛然大娼樓の觀を呈するものもあつた。自分が明治八年初めて祖父に伴はれて東京に遊學した時、宇都宮の某旅宿の壯大な設備を見て、貸座敷かと見違つたことがある。此宿では老人と少年同行では相手にならぬとしたか、頗る貧弱な矮室に入れて冷遇したので、祖父は怒つて其宿を去り、薄暮二里疲れ足を引ずり雀の宮まで歩して宿したことがあるが、當時の此旅館などは道中女の淵叢であつた。

伊勢の古市の油屋などは旅舍で娼樓を兼ねたものであつた。伊勢音頭を呼びものにしてセリ出しで數十人の女を左右より踊りながら出し、客をして

其中から意中のものを選ばしめたものだが、座敷などは大名のそれに擬し、客も大名の態度に擬せしめた處、芳原に似てもゐるが、セリ出し丈は古市の特色であり、明治初年禁じたこともあるが大隈參議が外國技師を伴ふて燈臺設計に出かけた折、外人の所望で臨時にやらせた處、縣知事は油屋からサン〳〵油を取られたと大隈侯は語られたが、これは伊勢の一名物で、道中女の内でも公然のもので、女は客に長滯留を勸めるため、金を浪費せしめず、又客と別るゝ時古風に客に手紙を寄せる習慣もあつたが、今は無くなつた。自分はセリ出しの車仕掛を特に一見したことを想ひ出す。

自分は木賃宿に宿した經驗は二度ほどある。實は安どまりで眞の木賃宿ではなかつた。一回は御嶽山の麓の福島で同社連がどこの宿でも滿員を告げてゐたので已むなく安どまりと標榜した所に宿つて見たが、自炊の必要もなかつたので却つて贅澤をやり一向木賃味を感じなかつた。却つて甲州路二日間殆んど人家の無い處を旅行し、漸く一軒の百姓家に宿した時は、數十人一室に合宿し、夜中馬の嘶く聲を枕上に聞くなど、坐ろに羈旅の哀れを覺えた

ことがある。

自分は川留を喰つた經驗が無いでもない。それは大井川ではなく、越後の高田にゐた頃、親不知の嶮所を訪ふての歸路姫川が暴漲して已むなく附近の驛舍に二日間空しく滯在し、無聊を慰するため、其邊の名所を探訪したことがあるが、僻地に侶伴もなくブラ〳〵してゐることは如何にも馬鹿々々しく、大井川の川留も斯くあらんとしみ〴〵思ひ遣つたことがある。しかしその近邊の名所を知つてゐるのは、實は川留めのお蔭といふてよいのである。

昔の乘物で自分のすきなのは駕籠である。今でも駕籠のある所にはわざと乘ることがある。烟草を燻らせながら舁夫と談笑するのものんきでよい心持である。一瓢を携へて微睡を買ひ、睡眠を催すのもよい心持である。昔無くて明治に開けた乘合馬車は、隨分いやなものであつた。快速である所に長所もあるとはいへ、ガタピシで寒中などは膝が冷えて、坐睡もならず、あのラッパの聲はしみ〴〵厭氣を感ぜしめた。却つて昔風に乘合船に乘るのがいん氣でよい心持がした。乘合船には度々乘つたが、どれも鮨詰で幾んど身體

を伸ばして眠る餘地もなく窮屈であつたが、同乘の客が退屈凌ぎにいろいろのことを語るのを聞くのも一興であつた。東京に初度這入る時(明治八年)の川船には、深夜物を賣る船がやつてきて、酒食を賣つたので、淀のクラワンカ船も思ひ出された。

私の初めて見た東京

私は幕末に生れたが、江戸を全く知らない。明治八年に東京に遊學して初めて東京を見た。維新後都の面目は變つてゐたに相違ないが、それにしても江戸時代の面影がどこかに殘つてゐた。何分十五六の少年時代で、觀察も屆かず、六十餘年の昔となるから、記憶にあることが幾許もない。聊か當時の感想を書かんと筆を執つて見ると、まるで夢中に夢を探るごとくで朦朧としてゐる。先づ東京に入つて眞先きに見たものは、何かといふと、兩國橋であつた。私は越後から會津道中で、古河で夜舟に乘つた。其舟の兩國橋下に達したのは翌朝の六時頃で、幼少から聞いてゐた橋に接近して何となく懷かし味を覺えた。舟つきの陸上には多くの人が立つてゐて、船頭と應答してゐるのを聞くと、齒切れのよい江戸辯の爽かさは、私を引立てゝ愉快であつた。落着いた宿は馬喰町の商人宿で、徒歩で町を見物しながら、兼ねて定めてあつた宿に入つたが、宿が期待に背き、貧弱であつたのには、不快を感じ、都不似合の宿でない

かと同行の人に苦情を鳴らしたが、其頃は東京の旅館は大概商人宿ばかりで、結構の整つた宿は幾んど無かつた。それも其筈、江戸時代には諸藩の人は皆藩邸に泊つたから、旅舍の設備の不完全であつたのも無理でない。此頃は後のやうに爲替の便も十分利けず、郷里から送金する時は、出京してゐる仕入商人に立替を頼んだので、此用事で一二の商人宿を訪ふたこともあつた。

宿屋は商人風の打算的で、朝飯は出すが、午と晩の食事はどうするかと、聞かれるのが例で、私はこの質問をひどく厭がつた。

二三日は東京市中の見物で方々見て歩いた。上野には維新の戰爭の彈痕の存する黒門があつた。まだ博物館などは無かつた。皇城の周圍を徘徊して、その規模の大きいのと、濠の松樹の風趣に感服した。皇宮はまだ御造營前であつたが、諸大名の屋敷や旗本の屋敷も元のまゝ存在してゐて、それを檢討して歩くのも一興であつた。芝の增上寺を訪ふた時感心したのは門前の松で、日光を漏さぬ程に茂つて、夏日の炎天に凉を納るゝにも好適の處であつた。掛茶屋などもあつてそこに休憩もした。案内者の語るに、この境内は三十萬

坪あるといふたのには一驚を喫した。今大隈板垣兩雄の銅像の建ててある所も境内で、私が東京に出てから數年の後であつたが、こゝに數軒の溫泉つきの割烹店が出來て遊樂の地となつたこともある。

或る日は銀座を見物した。こゝこそは舊江戸の何物をも殘さない、全くの新天地で、日本の玄關はこゝだといふので、政府は特に財政の豐かでない當時、二百萬圓の資を投じて兩側に洋館を建築した。その洋館の建築式は今の式とは趣を異にし、飾りは圓柱が多く、皆白堊に塗り立て、大きさは大中小の別があつたやうに思ふ。何分煉瓦構造が珍らしいので此市街を銀座といはず煉瓦といふてゐた。柳を街樹として植ゑたのは後のことで、其頃は松と櫻が植ゑてあつた。煉瓦家屋に住み慣れない人達は、政府がしきりに移住を勸めてもなか〳〵住まないので、隨分明き家が多かつた。偶〻其頃の新聞紙を披いて見ると、五月二十三日の東京日日の記事に銀座の不體裁を左の如く云ふてゐる。

京橋より新橋の煉瓦石の街衢は誠に立派なる物なれど、兩側の花樹の間の蘆簀張は甚だ雜風景なり(中略)煉瓦石造りの家屋に住む人が、立派な圓柱の間に、麁末な板圍ひをするやら、見とも無い庇を付けるやら、折角高く出來た入り口へおかしな壁を付けて低く拵らへ直し古雨戸や油障子を立てる。甚しきは簷下に薪や明俵を積み空樽を並べ、屋臺店を引つけなどするは、只その見苦しきのみならず、火の要心も甚だ惡し。

こんな狀態で、銀座もまだ整頓して居なかつた。但し、此年の八月頃から瓦斯燈が點ぜらるゝことゝなり、千里軒の二階づきの馬車が淺草と銀座の間に開けてゐた。この銀座街頭で最も目立つた洋館は尾張町の日報社で、もとゑびすや呉服店が破産したあとに日報社が移つたのであつた。此ゑびすやは三井と肩を並べた島田組の經營であつたのだ。數年後自分が日報社に福地を訪ふた時には、ゑびすやの遺物である惠比壽の大幅が應接の間に掲げてあつたことを思ひ出す。

見物の一日を觀劇に費したことがある、この觀劇中の災難は時計を掏られ

たことであつた。田舍書生が銀鎖をこれ見よがしに腰邊に露はし、廊下にウロ〳〵してゐると、忽ち盜難に罹つた。これは親戚から貰ひ受けた最愛のものであつたのに、上京早々この痛事に遇つた。

一應見物が畢ると私は親戚の家に寄食することになつた。其家は下六番町に在つて隣りに番町學校がある。其學校は今も存在してゐる。私は此家から毎日一ツ橋の東京英語學校に通學したが、毎々九段坂を上下した。あの坂は近年勾配を減じて、なだらかになつたが、其頃はなか〳〵の急勾配であつた。靖國神社境内は書生時代の散策地で、しば〳〵社後の庭園に遊んだが、九段坂の上から飽きる程遠方を馳眺し、後には何んの感じも無くなつたが、最初馳眺した時に驚いたのは、東京は大都會でありながら、森林が莫迦に多いことに氣が付いた。諸侯の屋敷は幾んど一村をなす位のものでそこに多くの樹木があつたから、別に不思議はないのだが、初見には東京は森の中の町だと感じた。

私の毎日通學した英語學校は舊高田藩主榊原侯の屋敷で、門も元のまゝ、中

の諸室もそのまゝで、疊を揚げ障子襖の代りに硝子戸をハメタ丈で、それが教室であり、校長其他の事務室となつてゐた。庭園も元のまゝであつたが荒廢に歸して見る影も無かつた。概してこの屋敷は小さなものであつた。此學校に隣つた開成學校、後の東京大學は木造の洋館であつて一時間に合はせのもので無かつた。この構内には外人を置く講師館も數棟あつた。柵外一ツ橋の濠の邊に松の樹があつたが、これが首くゝり松と唱へられてゐたが、當時もこの松の邊りは寂寥たるものであつた。

當時の書生々活は質素なもので親戚の主人は工部省の可なりの役人であつたが、子供が多いので、家庭の三食などは隨分お粗末であつたが、自分は漢學塾に育つたから、粗食などは何んでもなかつた。毎日學校の辨當は餡パンで濟ました。其頃東京でうまいものは、燒芋と大福であると感じ、牛肉などは滅多に口に入らなかつたが、その頃神田の美土代町に西洋料理屋があつて、そこへ親族に連れられて行くことが此上のない喜びであつた。勿論神保町は其頃飲食店が軒を並べて學生を待ち、學生が金を散ずる所といへば、此町であつ

たが、私などは東京へ出たばかりの身で、その邊へ寄りつきもしなかつた。

當時洋學書生間の流行ともいふべきは馬琴の八犬傳や弓張月や俠客傳など大部の小說を讀むことであつた。此等江戸時代の小說を讀んでゐないと同窓間に肩身が狹かつたので、私も毎夜深更まで讀み耽けつた。これが私の小說を讀んだそも〳〵の初めで、當時文化的の西洋小說などこそ讀むべきに却つて江戸時代のものが洋學生の間に流行したのは妙な現象だが、當時はまだ文化的新讀物が出なかつたことも一原因であらう。麴町にさる大きな貸本屋があつて、錢湯に行く序には必らず立寄つて、いろ〳〵の本を借覽したが、あの頃の貸本屋は確かに大衆的圖書館であつた。

私は東京に出た當時は可なり勉强したので、方々へ出歩くこともなかつたが、自分の身を寄せた親族も、越後もので、東京の味噌を嫌つたので、仙臺味噌を買ふにも、足を芝の日蔭町まで運ばねばならなかつたので、私も時々買ひにやられた。番町から芝まで可なり里程がある。俥にも乘らず、重い買物を手に持つて往復することは相當骨が折れた。今考へるとよくあんなことがやれ

たと思はれる。亦更に思ひ出すことは私の叔父が上京した時、日曜毎に訪ねたが、その寓所に到るにはどうしても柳原を通らねばならなかつた。其頃は夜鷹なる私娼が、あの邊に出沒して、通行人を引かける頃で、暮夜歸へる時は如何にも氣味がわるかつたが、幸に無難であつた。あの頃の柳原は隨分さびしい所であつた。

あの頃の東京の道路は隨分汚なく、塵芥は盛んに道路に投げ棄てる、牛馬は街路に糞便を垂れ流す、雨天になると道路は泥濘が深く、迚も靴などで歩行が出來ない位で、小路などは殊に汚穢を極め犬の糞や人間の小便で、臭氣が鼻を撲つて不快を極めた。違註罪と云ふ微罪を取締ることに警察が鋭意したのも無理からぬことだが、違註罪は多く罰金を課したが其條目は數十件に及びなか〳〵煩はしいものだ。さなくとも威張つて人の氣をわるくした邏卒は、無闇に人を叱喝したので、これほどいやなものはなかつたが、今の整頓した市道を見ると眞に今昔の感に堪えない。

血氣時代の富士登山

旅は多少冒險であるだけ興味がある。其際に興味が無くとも後の追懐には確かに興味があつて、長く忘れない旅の味は冒險旅行に存する。しかし血氣の時代で無ければ冒險はあり得ない。自分は青年時代旅が好きで隨分各地を遍歴したが、計畫的に冒險旅行をやつたことは一回もなく、偶然冒險らしい旅を經驗したのは富士登山であつた。

時は明治十一年と記憶する、東京大學にゐた頃、夏期の休暇に四十日間の旅行を試みんと、自分より三つ四つ年長の同窓と連立つて、極めて質素の旅行を企てた。兩人は申合せに一日一人の旅費は一圓を越ゆ可らず、車馬には絶對に乘らぬ事と定めて東京を發し、箱根の舊道を經て山頂に達すると、他の一人の同窓に出遇つた。

其友人のいふのに普通の官道を經ても興味は無からう。この湖水を渡つて姥ヶ湯と言ふ溫泉に浴し、翌朝富士の麓に達するがよからうといふに任か

せ、この友人をも伴うて湖水に船を浮べたのは確かに一興であつたが、この友人と別れて、姥ヶ湯に辿りついて見ると、餘りに設備の貧弱なる溫泉場であるのに一驚を喫した。今は相當の溫泉場になつて居るかも知らんが、其頃は宿屋といふても僅かに一二軒位に過ぎず、自分等の投じた宿は疊もなく莚の上に煎餅布團で一夜を明かさねばならぬ始末で、食物なども幾んど口にし難いもので、殊に不快を感じたのは虱が多く一睡も出來兼ねたので、翌朝は朝餐も攝らずに出發した。

これより程遠くもない御殿場をと心掛けて歩いたが此邊一帶は葭蘆が叢生し道も定かに分らず、矢鱈に歩いてもなか〳〵御殿場らしい所に出でず可なり時間を費したので、遂に道に迷つたことに氣がついた頃は幸ひ御殿場附近であつたので、或る茶店に走りこんだが、此處の茶店は流石に整頓してゐたので、丁度午頃であつたから朝食をも兼ねて酒食すると、昨夜不眠の疲勞が出て、前後を知らず二時間餘りグッスリ寢た。

これより富士の麓の須走に達したのは夕景であつたが、或る旅舍に就て案

内者を頼み、食糧を注文して直ちに登山を始めた。これは須走の宿に一夜を明かすよりも、山の或る地點まで行き、翌朝の御來光を見んとしたのである。しばらく行くと外國人が籃輿で山を下つてくるのに出遇つた。その人は大學の歴史の教師クーパー教授であつた。山中の様子を聞くと、ひどく荒れて居るから用心せよとの注意を受けた。富士山には古來山開きの日が定つて居て、其日に先だてば暴風などで危險があるといはれてゐる。實は我等の登山は山開きの定日より三日程前であつた。眞逆三日前だからとて荒もあるまいと樂觀して段々上つたが、追々暗くなつて、晝食場に達した時は日は全く暮れた。麓から此邊まではまだ樹木もあつたが、誰一人通るものもなく鳥が塒を尋ねてガサ〳〵と飛ぶ音を聽くのみで轉た天地の寂寞を感じた。夜中これより上に登ることは出來ないと强力がいふから、晝食場に泊ることにした。ここは粗造ながら木材建築の小屋で、中に大きな火爐があつて、飲食物も寢具も一通り備はつてゐた。吾等の外に先入の客が二三人ゐたが、共に爐を圍んで談笑し、酒食して材木のブロックを枕として寢たが、山中に一夜を明か

すことが生れて初めてゞあるので、何となく興味を感じた。併し屋外はすさまじい風が吹き荒すので、明朝の天候を氣遣ひながらも疲勞のため早く眠りに就いた。

翌朝こゝで太陽の上るを拜せんと期したが、昨夜來の雨風はやまず屋外に出ることすら出來ないので、折角拂曉に起きたが御來光を見ることは成らず一心に天候の回復を祈つて時を費した。幸ひに八時頃風が漸く靜まつたので出發したが此處より上は樹木もなく、山骨は露はれて定まつた道もなく、勾配は歩一歩毎に急になつてきて、見上れば際限もない高さだが、頂上は雲霧に掩はれて辨じ得ない。血氣の吾等は初めて靈山に觸れた喜びに危險を忘れて躍進したけれども、氣は焦つても足は意の如くならず、其内に又々風が起つて礫を飛ばすので、吾等は辟易し巖蔭に隱れて幾度か小憩して辛うじてこれを避けた。幸にして疾風は間歇的に起るので、風の止むを待つては攀ぢ、風起れば又巖石に伏したり或は岩蔭に隱れたりした。この時自分をして鄉土の親不知の嶮をしみ〴〵思ひ出さしめた。

我等の意氣は如何に旺盛でも斯る高山に攀ることは實は始めてゞ、形容にこそ山に攀づるといふが、これはその字義のごとく岩角を掴んで一歩々々進むのだから、歩するのでなく實に攀づるのであることを會得した。されば岩角に觸るゝ所のものは手袋、股引、足袋など皆破れた。杖と頼んだ洋傘も遂には折れるに至つた。斯る困難を經て數時間を費し、可なり登つたと思つても里數を計れば僅かのもので七合目まで達するにはまだ餘程の時間を要すると強力の語るを聞きガッカリした。相當の疲を覺えても休憩する所がなく、五合目六合目あたりに石室があつたが、何れも封鎖されてゐて入ることが出來ず、いかさま山開き前は斯るものかと初めて三日前でも旅客を待つ設備がないと感じながら若し七合目に達してもなほ石室が封ぜられてゐたなら、我等は力を併せて封を解かんとまで決心し奮然突進したが、その時ばかりは實につらかつた。渴しても一滴の水がなく、憩はんにも腰を託するの平地が無かつた。漸く七合目に達して喜んだのはこゝの石室の戸が開いてをつたことで、我等はこゝに救命を得た。

この石室は可なり擴く爐も設けてあつた。薪も相當に積んであり、莚などもあつた。たゞ食物は何もなく、僅に發見したのは手つかずの梅干が一樽あつたきりだ。何分時間は既に午を過ぎてゐるのに、食を取らずにやつてきたから、先立つことは午餐を認めることであり宛らロビンソン・クルーソー宜敷と言ふ狀態で、銘々立働いて席を作つたり、薪を焚いたり、湯を沸したりしてやつと食事を濟した。此日はまだ絶頂まで登るに十分の時間があつたが、天候が追々惡くなつて風が吹き荒すので、七合目から頂上まで此分では到底上り難いと强力がいふので、不本意ながら、今夜はこの石室に一夜を明すことになつた。

扨て此一泊に就いて尤も氣遣つたのは食糧が十分であるか否やであつた。强力は、今夜と明朝の食糧は十分だから、明朝天候が直れば一氣に頂上に達し直ちに下山すれば差支ないといふたが、若し明日もこゝに滯留となればどうなるかやゝ取越苦勞で考へれば心細く感ぜられた。

彼是評議中に二人の海軍士官が强力を伴ふてやつて來た。彼等も烈風に

辟易して命からゞ〳〵やつてきて見れば、火爐もあり人間も居るので喜んで飛び込んだのであつた。吾等は珍客の來たのを喜んだが、彼等に對する第一の質問は食物の有無であつたが、失望したのは彼等が何も持たぬといふことで、足るか足らぬか覺束ない我等の食糧を此客に割いては愈ゝ大變と心窃かに氣を採んだ。そこで再び食糧會議を開いた結果、强力共のいふにはこの烈風で我等一人では山を下ることも再び歸つて來ることも出來ないが、二人の强力が結托すれば無難に上下が出來るといふから、こゝに活路を得て、强力を食糧求めに晝食場まで遣すことになり、銘々種々の注文をやつた中に海軍の士官達は薩摩出身だけに、燒酎二升の注文をやつた。彼等は直に山を下つたが、風は尙咆哮してゐたので、彼等は果して復歸するかどうかと心窃かに氣に病だが、その内に一人の壯漢が何か擔つて戸口まで來り中を覗いて遽かには入らず驚いた樣子で漸く這入つて來たのは、この石室の主人であつた。彼は云く、あなた方はよくもこんなシケ時にやつて來ました。火を焚いてゐて下さつて我等も助かります、と謝しながら、食糧の事をいふと、米は聊か持參しまし

たが、鍋釜の設備はありませんといふ、併し布團は二三枚持參したといふから聊か心強くなつて居る所へ、二人の强力も歸つて來たので遽に室内に歡呼の聲が起り、士官連中は祝杯と號して、燒酎を沸かして飲みはじめた。自分は燒酎を好まず、殊に熱燗の燒酎などは絶對に飲んだ經驗がないので躊躇したが、しきりに勸めるから試みに飲むと案外うまく、寒冷冬の如き高山ではいくら飲んでも醉を發せず、忽ち五六合平げたのも一興であつた。この夜は夜具が全員に對して不足であるので、自分は爐邊の焚火に溫まりつつ夜を徹した。

翌朝卽ち登山の三日目に起き出でゝ見ると、矢張晴天を得ず風が烈しいので困つた。風の收まるのを待たんと、案外皆々落付いたのは糧食があつたからのことだ。士官連は屋外に出て間もなく兎を生捕つてきた、我等は寒氣に顫へながら、風景を詠めんと屋外に立ち、下界を瞰ると白雲が立ちこめて宛ら大洋を望むごとくで島のやうに見えるは山の嶺の雲外に出てゐるのであつたが、この白雲が風の作用で忽ちに收り、亦忽ちに密集する變幻出沒の狀は斯る高山にあらざれば目睹の出來ない光景で、我等をして崇高の感に堪へざら

しめた。

士官連は捕獲の兎の肉を軍刀で斬つたが、醬油も鹽もないので梅干の酢で食つてうまい〳〵と喜び、斯る遊戯で時を移す內幸ひに風も和らいだので我等は勇を鼓して登つた。山は愈ゝ嶮岨で勾配の急なるに苦しんだが、幸ひに突風に襲はれなかつたので難なく八合目に達すると、仕合せにこの小屋には持主が居た。この八合目は各所から登山するもの〻落合ふ所であるだけに、建築も木造で、多少飲食物の備もあるらしく、爐には大きな鍋がかけられ、味噌汁が沸き立つて居た。我等は寒氣に堪へず、躍り込むやうに、土足を火爐近く入れて暖を取り、强力に持たせた殘飯を、この味噌汁に投じて雜炊を作つた。二日間冷飯で濟した貧腹には此溫い雜炊は宛がら大牢の如き味があつて、食器の不潔を顧みる遑もなく、皆々四五杯平げて快哉を叫んだ。今でもこの際の雜炊のうまさを想ひ出すことがある。

これより山頂まで尙二合の距離があるが、愈ゝ近づいたのに勇氣もいや增して、無茶苦茶に突進すると、山頂は濃霧に鎖されて、咫尺を辨ぜず、ただ殘雪の

甚だ多きを知るのみで、何も見えざるには失望した。豫ては絶嶺より道を轉じ雪路を踏まずに、山の反對の側より下らんとしたが、須走の宿より借り受けた綿入の服を返すことが出來難い程寒氣の強さに辟易して已むなく豫定を改め舊路を戻ることにしたが、歸路には須走まで一條の砂路があつて、それをすべり下るのを、富士登山の一快として居るのも道理此路は熔岩の粉末となつたものが不思議にも一石をも雜へず山の頂上より山下に及び、人が足を投ずれば砂は流れて一瀉千里の勢で人を山下に導く。其道の左右には草鞋の廢りたるが堆積し、氣溫は一歩毎に上騰して綿入を着しても尙寒氣を覺えたるものがこの沙路疾走中には暑氣の甚しきに堪得へず、遂に半身裸體となるまでに至り、二日がゝりで登つた山を僅かに一時間餘ですべり下つたのは、この特有の一路に據るので、我等は快感を禁じ得なかつた。須走の宿屋に着すると、多數の泊り客が出でて吾等を取り卷いた。何故と聞けば、山に登つて二日間下山しないものは、これ迄無い、何か間違でもあつたのかも知れないと、登山客をみな引とめて、あなた方の消息を待ちつゝあつた所だといふ。意味は

分つたが、彼等は吾々に就いて山中の狀況を知らんとて、口々に種々の事を質問するので我等も閉口し、五六の委員を選ばせてそれに語ることゝなつて僅かに包圍を脫し、吾等は彼等に向つて靜かに山中烈風の危險を語り、山開き前の登山は戒むべきだと說いたが遮蔽物のない富士の如き山に風と鬪ふことは實に危險で風度に由つては吹き飛ばされないとも限らぬと、今想ふても慄然たらざるを得ない。

支那の新日本史蹟を訪へ

軍國の昭和十二年は去つて更に軍國の昭和十三年來る。

昨年の半歳は時艱に吾れも人も緊張又緊張で、一刻も心身の弛緩がなかつた。國讐の首都は舊臘陷落したが未だ平和は來らず、本年も亦緊張を續けねばならんが、この新年を利して心身に多少の弛緩を圖るのも、精神動員の一助たらずとしない。人間の心身は些の弛みなくして持ち切れるものでない。然らば何を以つて心身の弛緩を圖るべき歟。それは旅だ。一にも旅、二にも旅、旅ほど氣を轉ずるによいものはない。旅は鬱屈を散じて快活にする。美麗なる山河を跋渉して心目を怡しましむるも可、溫泉につかるも可、スキーで遊ぶも可、神社佛閣に賽して武運長久を祈り、國運進展を願ふも亦可だ。要は緊張を一時解き弛め、更に緊張の地をなさんとするのが新年旅行を欲する所以だ。多少休養の時を有することは、徒らに家居して祝酒や祝餅に飽かんよりも、旅に出づべきだと吾等は主張する。

偖て新年改めていはんとすることは旅行先の選定である。旅行區域は銘銘勝手に好む所に從つてよい譯であるが、こゝに宛ら天から命ぜられたかの如き旅行先が目前に出現した。そんな遠くもあらぬ隣邦で幾十億の資と幾萬の鮮血を灑いで開拓した處で、名山大川に於て歴史的舊蹟に於て世界に冠たり、その土壤の廣さも亦宇内に匹儔のない大陸が、今後吾等の旅行區と自然に定まつた。それは外でもない、卽ち支那である。支那は世界の旅客が最も珍とする國で、いくら遠くとも一たびは必ず訪問する處だ。その譯は世界の驚異なる宮殿城廓その他大規模の史蹟が甚だ多いからである。就中我國は支那と同文の國で文化も共通であり、我邦人は支那の歴史に一とわたり通じて居るので別して支那に興味をもつてゐる。自分などは往年僅かに支那の或る部分を見たに過ぎない。北京天津青島旅順濟南位さへ見ないのだが、それ丈ですら滿足して歸つて來たやうな始末だ。支那ほど漫遊しておもしろい處はないと今も思ふてゐるが、取りわけ近く四十年ばかりの星霜を經て我邦人として忘れ難い國となつた。それは何かといふと我史蹟が盛んに支那

に出來たからだ。支那の名高い名所舊蹟は支那式の歴史を有してをり、古く我邦人はそれを辿つてゐたが今は多くの名所は日本の史蹟となつた。日本が支那と兵を交へたのも、また露國と兵を交へたのも、共に支那の舞臺であつて、多くの地點は日本の戰蹟である。なほ今回の戰爭に於て更に一層大區域に亙つて日本の史蹟が殖えた。上海が陷落したのみならず首都南京も陷落した。これは勿論曠古の大史蹟であるがこの陷落までに幾十百の要地が我がために血塗られ、我が砲彈の洗禮を受け秦皇の偉業たる萬里の長城までが我が涙ぐましき史蹟となつた。この險難の要塞に吾軍が食はず飲まず數日力戰したことを思ふと、眞に墮涙の史蹟である。敵前の渡河、その川にどんな支那歴史があらうともそれはどうでもよいので今は我が勇敢の武功を傳へる名所となつた。河を渡るに橋なく亦舟なく、我工兵が身を水に沒して人柱となり、架橋に替へたなどはその川は無名であつても、今一大名川となつた。あの山嶽あの沼澤あのクリークあのトーチカ等皇軍の觸れた所は皆吾人に思ひ出深い史蹟である。最早支那の古ぼけた歴史地理の案内書を携へて、古

戰場を探るに及ばぬ。近く皇軍が占領して日章旗を飜へした幾十百の新なる戰場こそ探訪して無限の感慨を惹き起す所である。若し空爆の跡を見んとならば、幾丈の高き城壁の破れたるを見よ。堡壘の崩れたるを見よ。市街の焦土に化したるを見よ。皆これ空爆の洗禮を受けたる遺跡で、觀者をして戰慄毛髪を立たしむる。古來支那には義戰が稀で古戰場多しと雖も義戰の跡は寥々である。唯義戰の跡を印したのは、今次の皇軍の膺懲戰である。東洋の平和を庶幾する爲の戰鬪で、私慾の爲にする戰鬪でない。これぞ義戰で、聖軍といふも過言でない。皇軍の灑ぎたる血は正義の鮮血であり、皇軍の放つた砲彈は義彈である。義の赴く所魔軍挫け妖陣潰え、連捷一回の敗を取らざる戰鬪は、戰史稀有の例で皇軍の名譽となすに足る。即ち近く支那に殘した戰跡は我が名譽の遺蹟である。今次の戰爭を經て支那に於ける我が史跡は愈々多くなつた。旅行者のため一大名區が開けたといふは此故である。これからの旅行者は支那に行け。到る處の要地は皆我が名譽ある史蹟である。これほど意義ある名所を訪はずして、旅行者は何れに往かんとする。支

那は僅かに一葦帶水の近きにあつて、今は飛行機の便もあり、內地の山水明媚なりとも、それは何時にても賞することが出來る。隣邦の新戰場こそ、天の麾きつゝある旅行區で、砲煙の餘香を存する時に遊ぶこそ感概も深く興趣も多からん。敢て旅行者に勸む。

旅行と科學

自分は旅行を好むけれども、老來それが出來ないから、好んで人の紀行を讀み、或る時は外人の冒險紀行や高山登攀記或は漂流記などを讀み耽つて、僅かに興を遣つてゐる。旅行記を讀む毎に畫筆の必要を感じ、自分に聊か風景のスケッチを作る能があつたらどんなに仕合であらうと思つたこともある。科學者の旅行記を讀んで、更らに感ずることは、旅行者には科學上の知識が最も必要で、これが無ければ何百里を行くも盲目旅行で、究極旅行にこの知識は尤も大切であると、しみ〴〵と感ずるのは、自分にその能が無いからのことだ。

科學者の紀行も餘りに專門的のものは素人に理解が出來兼ねるが、觀光的紀行など一概に專門に偏しないものには、風光以外に何物かゞある。それは普通旅客の氣づかぬことで、宛がら沙礫の內に珠玉を拾ふごとく、人をしてアッといはしめる。實は空疎の紀行に意義あらしむるは、科學者の觀察であつて、何等風光なき所にも、兎もすると大收穫のあるのは科學の齎らす所である。

全然科學思想のないものゝ觀光は、唯風景美に接するを快とするのみ、その絶景となすものは、眼に快感を與へるといふに過ぎない。乃ち紅葉は赤く、新綠は靑い、といふて賞するのみで、其他に頓着はない。彼等は風景を如實に形容せんとして詩想を錬れども、山は高く水は淸く、淵は深く、瀑は激し、雲烟は迷ふなどいふに過ぎない。彼等は山を見るも其地質を知らず、森に入るも其樹種を辨ぜず、歩々草鞋の履む路上に花あれば僅に意を注ぐのみ。灌木雜草に珍種ありとも一瞥を與へず、匆々に過ぎ去る。斯くの如きは盲者の旅行と何んぞ選ばん。これを彼の植物家の行手の樹木や、路傍の雜草や、蘚苔地衣の微に至るまでぬかりなく意を注ぎ、珍種を探り得れば快と叫び、隨つて得れば隨つて收め、携帶の筐便々として滿るを大收穫として喜び、奇種を探らんためには險難を厭はず、動もすれば食を廢し、動もすれば露營し、宛がら軍人の敵に對するごとくなるに比すれば同日に語る可らざるものがある。

斯くいへばとて、觀光旅客に專門家の如くせよといふも出來ない相談で、自分のいふのは科學思想が旅行者に必要であるといふに過ぎない。更に委し

くいへば、大學の豫科では博物を敎えるが、實地に臨んで餘り役立たないから、一段高い造詣が欲しいといふまでである。これは必らずしも無理な註文でない。少しく勉むれば出來得ることである。若し科學的知識がありとすれば默々數里を行くの退屈もなかるべく、風景以外別に得る所もあらん。多くの觀光客は風景區に達する迄五里或は十里、何んの興味を覺えず歩き唯汗を流すのみだが、これは盲者旅客の爲すところで、畢竟科學知識の缺如にあることである。

今の山嶽登攀家は險山峻嶺の頂を窮むれば、直ちに山を征服したと誇るも、彼等は唯絶巓に達したるのみ、彼等は他の何ものをも問はないのである。彼等は何人も難しとする山頂に登攀して奇景を探りたりとするも奇景は何んぞこれに限らん、ただ科學者のみ乾坤の極祕を探るの鑰を有し、あらゆるものを探險して餘す所がない。如斯くして初めて山の征服の讃辭を許すべし、山頂に達したる故を以つて征服の二字を私するは借上の沙汰といふも可なり、山を冒瀆するものといふも亦不可なからん。

人

近衞霞山公追憶

近衞文麿公は、林内閣の後を承けて到頭大命を拜し、内閣の首班として政治舞臺に立れた。政治ファンは一齊に公の登場を拍手で迎へてゐる。公は、昔から關白の家柄で前代篤麿公も首相たるべき人と目されてゐたが、早く薨ぜられたので其事なく、今その令息が貴族院議長の榮職を踏んで首相となられたことには何の不思議もない。現公爵の政治的智能は、或は先代に優るかとも思ふが、今はそれ等を批評する時でなく、吾等は此場合前公爵の追懐を禁じ得ない。

前公爵は忠愍公の嫡男で霞山と號せられた。公の風貌は今も腦裏に深く刻まれてゐるが、堂々たる體軀で、上品この上ない風姿の人であつた。名門の人は鷹揚に過ぎたりして、交はりにくいものであるが、霞山公は侵す可からざる威容を備へて居られながら、極めて親しみ易い人で、公に對話してゐると、宛がら春風の間に居るかの氣がした。

公が嘗つて神田に住された頃、自分の小宅も公の附近にあつて、公に出入りの魚屋が自分の家にも毎日來て、近衞さんの召された魚は何々であるなど報じ、同じ魚を買はされたことも度々あり、家内などは後には今日は近衞さんは何を召されたかと聞くやうになり、近衞公と同じ魚類を口にした日が多かつたから、魚屋が口腹的の紹介者であつたともいへるのである。

拜謁を得た動機は、何んであつたか思ひ出せないが、最初お訪ねした時は、高田早苗氏と同伴であつたことを思ひ出す。公は貴族院議長であられ、名議長と稱されてゐたが、相撲に大なる趣味があつて、相撲のある日は毎日回向院へ臨まれた。そこで兩院掛持だなどゝ公を評した。吾等が初めて謁した時も、公の應接所には、相撲場の太鼓櫓の模型が置かれてあつた。公は相撲に趣味があつたのみでなく、頗る相撲巧者で毎日の勝負を事前に豫言されて、幾んど百中の趣があつた。我等が初めて謁した時も、公の談はおもに相撲に關してゐた。

私や高田君が頻に公に接したのは芝の紅葉館や藥研堀の大又などであつ

たが、我等は共に杯を擧げながら、ある時つくゞと考へた。霞山公は斯く磊落に我等と交つて居らるゝが、昔を思へば攝關の御家で、吾等平民が英姿を拜することすら出來ない高貴の人であるなど考へ、公に向つて、あなたの御家は日本に於ける大切な國寶であるから、御自重なされねばならんなど申上げたこともあつた。

公は獨逸に學ばれたので、自然外遊中の朋友が多かつた。そこで、公を中心とする此等の人々が一團となつて時々會することになつた。その會名は別に無かつたやうだが、十二三名の人々の多くは獨逸で公と交つた連中で、今記憶にある人々は、北里柴三郎、秋月左都夫、河島醇などで、高田君と自分は獨逸に關係はないけれども加はつた。この會はいつも龜島町の偕樂園で開くのが例であつて、自分は多くの場合幹事を擔當したが、實に談論風發の會で、河島醇氏などは長廣舌を揮つたもので、議論を以つて終始した愉快の會合であつた。ある時、誰の發議であつたか、議論ばかりでは興が無いから、藝者を聘すべしとあつたので二名ばかり侍らしたが、折角呼んだ妓を閑却して、何れも議論を闘

はすので、幹事たる自分は、手持無沙汰の妓を相手に飲んだ酒と支那料理が調和せず、三日醉といふ嘗つて經驗の無い苦惱を感じてから、自分は支那料理を好まないことになつて、今に於ても滿足に喰つたことがない。餘談に筆を馳せて恐縮するが實は支那料理に妓を招くなどは野暮の骨頂である。別して論客の多い席には全く無用のもので、その後は妓を呼ぶことは絶對に無かつた。

この頃、公の機關雜誌「精神」といふがあつて、讀賣記者であつた藤野といふが編輯を擔任した關係で、自分も聊か手傳つたこともあるが、この稿を起すに就て探して見たが、一册も見當らない。

自分などは、公の尊父忠凞公にお目にかゝる機會を得なかつたが、今も忘れぬ一二の逸事がある。或る時、某史學家が老公に謁して、談は平安朝のことに渉り、史學家はしきりに清盛の名を連發するので老公は聞き咎め、平相國殿のことかといはれたので、史學家もハッとして赤面したといふ。清盛は歴史中の人物であるけれども、關白家の忠凞公としては、清盛は先輩關白であり、呼び

棄てにされないのは道理である。史學者も氣がついて見ると、歴史中の人物の多くは、近衛家と御親戚も少くないので、滅多なことをいへないと深く感じたといふが、實は我等とても尊稱を用ひず、三藐院、豫樂院などいふてゐるが、近衛家との談話に敬稱なしに、その祖先を呼ぶこともあらば、甚だ失態であるに相違ない。近衛家の反故の内には、清盛重盛などの手紙が今も存してゐる位で、この家柄は眞に貴い活ける國寶であるのだ。

序に尚一事の語るべきことがある。自分は嘗て賴山陽が篠崎小竹に酒の周旋を賴んだ手紙を讀み、その中に、自分の好む酒は近衛家から購ひ得られないでもないが、成るべくは本場から買ひたいとあつたので、初めは妙なことに思つたが、その後漸やく解を得た。實は近衛家の領地は灘であるために年々貢として若干の酒を納めた。近衛家でも剩つた酒を賣られたことがあつたらしいので、賴山陽の手紙に云々とあることが分つた。近衛家の領地は、右の次第で酒に不自由は無かつたが、皇室に於かせられては、何事も御不自由であつた折柄、常に悪酒を召されてゐた。或る時宮中で家凞公(豫樂院)に酒を賜つ

たが、餘りの惡酒が御料となつてゐるのに驚き、それよりしては近衞家から領分の酒を獻上に及び、聖上は始めて斯る醇酒を口にしたとお喜びになつたので、家凞公も坐ろに落涙に及んだといふ逸事がある。

話は霞山公の事に戻る。廣島に臨時議會のあつた歸路京都に立寄つたが、吾等四五の衆議院議員は、公に對し一夕惡戯を試みたことを想ひ起す。公は俵屋に投宿され、吾等は勝手な醉狂の出來る旅舍を選んで泊つた。その時、誰かゞいひ出した。近衞さんも獨居では定めし淋しからう。こゝにお迎をしてはと動議が起つて皆々賛成したので使を出したが、公は喜んで直ちに我等の宿に來られた。そこで宴會を開いたが、吾等の惡戯といふのは外ではない。公に對し飽くまで關白殿の待遇をなし、一と芝居打つて興ぜんとするのであつた。公の著前に公の狎妓を物色した所、幸ひに來席した。妓の名は忘れたが、如何にも品位の高い麗人で、公の妃に擬するに適當のものであつた。そこで上段に金欄の坐蒲團を二つ並べて席を作り、公をこゝに請じ妓をも強ひてその側らに坐せしめ吾等一同は特に次室に坐して、何れも平伏して、關白殿の

枉駕を光榮とする挨拶までは全く芝居がゝつてゐたが、この假裝遊戯は長く續かず、宴が開けると大亂痴氣が演ぜられ、銘々隱し藝などをやつたが、公にも是非にと強ひたところ、公は堂々たる風貌に似ず、優しく手毬歌を唄はれたのには一同覺えず喝采して、一夕の歡を盡したことがある。

公の政治上の事蹟に就ては言ふべき事が少くないが、それは公の傳に盡してあるから吾等の呶々を要しない。公の經綸は立憲主義であつたが、黨派に偏することは無かつた。外交に就ては專ら對支外交に努力せられ常に國權主義で、當時の言葉で對外硬であつた。公は伊藤公の推薦で西園寺公と共に洋行された關係もあるが、公の見識は時の政府に超越して嘗つて所信を枉げられなかつたので、追々伊藤侯との間に乖離を生ずるに至つた。公の公たる所以の一端はこれに由つても見ることが出來る。

大隈侯の壽齡の考察

大隈侯は八十五歳で薨去され、既に十五年を經過した。侯今在さば正に百壽である。侯の誕辰百年を記念する會が隨處に催さるゝのは偶然でない。誰かこの國步艱難の時に方り侯を偲び、侯若し在さばの歎きを得んや。曠古の此大戰を侯は見ずして去られたが、實は此國難を侯にお見せしたかつた。又侯のお力を藉りもしたかつた。是れ國民一般の至情で、侯の百年記念においてこの情の最も高潮に達するを覺える。

自分はこの機會に侯の壽齡に就いて多少の觀察を試みたいと思ふ。侯の百二十五歳説は、學説に基くもので侯の私説でない。現に大醫メチンコフは百五十歳説を主張し、人間の眞の働きは百五十歳からだといふて、保健のため家庭を離れて食養生もやつたが侯よりも早く歿した例がある。侯はこの説を固く信じて宣傳もされた。九州漫遊の時醫科大學の講堂で大醫の面前に堂々と説かれたなどが其一例である。侯は曾つて京都の西本願寺を訪れた

時、光瑞法主と長幹を角して立たれた時、法主は自分も壽齡百歳以上を期するが閣下に五歳讓ると謙遜したこともある。侯は京都に遊ばれる毎に、舞踊の名人片山春を招かるゝのが例であつた。春は侯と同齡であつたので、侯は此婦人にいつも百二十五歳説を説かれた。春は侯より十五年後れて、ツイ此頃百歳の壽を保つて歿した。侯は理想の天壽を保ちたいと内心努められたかの如く、晩年は隨分養生され毎日灌腸し酒は絶對に廢し、例の不自由の足で、毎朝庭園に運動をされた。侯はいつもいはれた。俺は片脚が無い代りにその血液が他に繞つて體力を助けてゐるから、他人よりも壯健である筈だと。侯はいつも鑊鑠として元氣がよかつたので百二十五歳は兎も角或は百歳位まで壽命があるかと窃かに思つた位であつたが、不治の病患には勝ちがたく遂に薨去された。

八十五歳の天壽を保てば敢て不足はないが、侯の如きは一日長らふれば一日だけの效果があるから、八十五歳は強ち長いとはいへない。いくら長く生きても何もしない人物は、齡百に達しても尙小兒同類のものであるが、侯の如

き人物の年齢を算するには自ら別法がある。普通は四時の曆法で年齢を算するが、人間の活動力を計算の土臺とする算法において、侯の如き不休不憩の活動家は、縱令壽は八十五齡であつても、その活動力から打算すると幾倍するものがあるに相違ない。

侯は維新倥偬の際に身を起して當時最も困難を極めた外交財政の局に當り、盤根錯節を切り開いて遂に立憲の基礎を定め、幾度か朝に立つて革新政治に貢獻された經歷は爰に繰返すまでもないが、侯と他の元勳政治家と異る所は、他の政治家に在つては野に退けば同時に閑雲野客で、唯別莊で日を送るのが常であるのに、侯においては、在朝の時も在野の時も、得意の時も失意の時も少しも變らず、奉公的努力を寸時も休まなかつた。

侯は薩長藩閥政治家に壓迫されて隨分失意の事が多かつたが、侯の失意の時は即ち野人として奉公に手を伸す時で、侯の失意は寧ろ社會を益したともいひ得るやうに、侯の努力が多かつた。侯は明治十四年の政變に在野の人となられたのが劃期的の進退で、其後幾たびも朝に立たれたけれども、侯の在野

の奉公の方が長かつた。侯は常に語られた、先輩は不幸にして早く死んだが自分は幸ひに生を偷んでゐる、先輩に對して安逸を貪るべきでない。と暗に自愛をほのめかされた。

侯の居常は他の元勳と異なつて日々多數の新聞記者と會談するが務であつて、時局に對する日々の意見は、一世を指導する權威があつて、幾十年の長き都鄙の新聞は侯の說話によつて賑された。侯は一生筆を執らない人であつたが、若し日々幾段を埋めた新聞の論說を編纂したら定めて尨大な著書となるであらう。侯は外客とも多く語られた、外客は霞ヶ關を素通りして先づ侯の說を聞いた。侯は國民外交をやつた最初の人で、且つ尤も有力の人であつた。在野の侯の一言隻語が外交界に重きをなした。侯は時々旅行をされ遠く九州までも行かれた。それは觀光の爲でなく、敎化旅行であつた。到る處都會地には數日足を駐めて、請ふに任せて一日五六回の講演をされた。侯は老いるに從ひ益ゝ寸陰を惜まれ、講演と講演の間に無駄の時間のあるのを厭はれ、日程は連續的に作らねばならなかつた。侯は虛禮を排して、どこに往つ

ても休憩所に入らず直に演壇に立たれた。侯は議會を解散し總選擧に自ら陣頭に立つて、汽車で各地を遍歴し、僅か一二分の停車時間でもプラットフォームの群衆に一々呼びかけて、ムダに通過されなかつた。これは西洋諸國に珍しくないが、我邦に於て首相が西轍を踏んだのはこれが初めである。

侯の寸陰を惜しまれた一斑は以上の如くで侯は徒らに理想の壽説を頼りとせず、營々時間經濟に力められたから、その時間を精算すれば事實侯は幾十年の壽齡を延ばされたも同然であるが、侯は尙身後の事に想ひ到り早く千秋萬歳の延壽法を工風された。吾人の侯を偉とするは殊にこの點にある。それは何かといふと早稲田大學の建設である。これは元勳政治家が箇人で起した唯一の例で、其創業の時に識者は早くいふた。侯の維新以後の功績は少なくないが、この學校の建設こそ侯の偉蹟として長く末世に傳はるであらうと。果して其通りで、侯は歿しても侯の精神の存する早稲田大學は既に五十年の發達を經て押しも押されもせぬ帝都に君臨する大學府となり、年々萬餘

の得業生を出して既に天下は其校友を以て滿ちてゐる。彼等は皆侯の兒孫と一般、侯の魂魄は彼等に宿つてゐる。侯は曾て松方侯の兒孫の多きを羨み、俺には子は少ないが、門前には常に萬餘の兒孫が居るといはれたが、誠に其通りで侯は地下に眠つて居られても、其兒孫は今現に國家に奉仕して居る。侯は生けるも同然である。これを思ふと侯の學校建設は不死延命の祕術で、私が侯の壽齡を千秋萬歳といふも此故である。

軍人後援會長たりし大隈老侯

大隈老侯生誕百年の記念祭に際し、沸き出る百端の感想の中に、侯が軍事に關する事蹟如何と、聊か意を注いで見たが、自分の貧弱なる記憶を辿つては、語るべき多くの資料が無い。併し僅かに存する遺蹟の内に佚す可らざるものがある。

侯は元と軍職の人でないから、軍務に關して多くの事蹟があらう筈もない。併し侯は武人の家に生れた。侯の先考は鍋島藩の命を承け幕末長崎に祗役して、國防の衝に當つた人である。若し維新が無かつたら、侯は先代の軍職を繼承されたであらう。侯は折に觸れて自らを野武士といはれた。亦父が長崎の海警に當り、事あれば烽火を擧げる役目であつたから自分も幼少から烟火戯を好んだなどゝ語られた。侯が長崎で西歐の學問を修業されたのも鍋島藩と長崎が大なる關係があつたのに由來するのであらう。

維新後一切の軍務は薩長に歸し、文武の畛域が截然と區分され、侯は起身の

初めより文治の衝に當り、久しいこと軍務に携はることは無かつたといふよりも携はることを許さなかつたといふが實際である。併し侯は早くから全國皆兵説を唱へられた。我徴兵制度は山縣公に由り確立されたけれども老侯の贊助に由つたことは掩ふ可からざる事實である。

薩長が堅く鎖した門戸を開いて老侯を迎へたのは、自分の記憶では、後に政友會の總裁になつた田中義一が、麻布營兵を司配してゐた頃、軍隊に對し一場の講話を老侯に求め、老侯は快よく應諾されたのがそも〳〵老侯が軍隊に接觸された最初であらう。此事は別に奇とするに足らぬことだが、當時はこれを異數とし田中の行爲を大膽なりとした。それほど軍門は入る可からざる所としてあつたのである。老侯は後に推されて軍人後援會の會長となられた。侯の聲望を以てして而かも閑地に在られたから、此上ない名會長を得た譯だが、其端は麻布聯隊訪問に發したといふべきである。

老侯は爾來旅行の都度、兵營のある地には必らず迎へられて軍隊に講演さるゝことが例となり、いつも有益の講演をされたので、將士は皆喜んで靜聽し

た。自分が老侯に扈從した旅中、老侯が兵を談ぜられたことが幾回かある。或は軍隊の將士に對し、或は戰歿軍人の家族に對し老侯の熱誠なる雄辯はいつも會衆を感激せしめた。

侯は兵營を訪はれて、重なる少數の將校に對して講演さるる時は諄々乎として、二十分或は三十分に亙つて說かれたが、その說かるゝことは陳套を脫して同じ忠誠を談ぜられても侯獨特の雋味があつた。そして稍〻多數の軍人の集團に對して講演さるゝ時は、雨天體操場の如き處に壇を設けて、軍隊的敬禮の下に、昂然壇に上つて僅かに三分若くは五分を超えない程度の演說をさるゝが常であつたが、その演說は宛がら寸鐵骨を鏤する銳利のことばで、片言隻語の贅辭なく、その氣魄は三軍を叱咤するの意氣があり、侯の態度は實に崇高を極めた。自分は侯に侍して幾十回長短の演說を聞いたが、軍隊に對しての演說の如く簡潔なるはなく、只此場合程侯の威嚴の堂々たるはなく、全く自分をして天下一品であると感ぜしめた。世間往々侯の雄辯宏辭を長江に比するものはあるが、侯の小品演說の優れたるを知るものが少ない。侯の演說

の長所は一瀉千里の快にも在るが、これは或は學ぶべく倣ふべし、簡にして要を得、寸鐵人を殺すの小品演說に至つては學んで得べからず、實に侯獨り擅まゝにするものと謂はなければならん。

侯が山梨縣の甲府に招かれ、官民のため一場の演說を試みられた。其時は日清戰爭の收局に近かい頃であつたので、侯は特に世界近世の戰蹟を語られたが、我等は此演說に驚かされた。侯の記憶に富まるゝことは誰も承知してゐるが、此時の演說ほど侯の非凡の記性を現はしたことは無かつた。侯は數字を以つて軍隊、軍器、輜重、軍費、國債等に到るまで仔細に說かれたが、もとより一片の書留を携帶さるゝでなく、矢繼早に唇頭を衝いて出る數字は繰り出し方が如何にも巧妙であるので、聽者をして毫も倦怠を生ぜしむることなく、約一時間半ばかりに亙つた演說は聽者をして陶然醉はしむるの妙があつた。西洋歷史專攻の浮田和民博士は侯に隨伴して聽者の內にあつたが、この演說を聽いて全く舌を捲かれた位で、自分は今もこの演說を忘れ難い。蓋し侯の演說の最も事實に富んだ稀有の大演說といふべきであらう。

侯が北陸地方を漫遊された時は、旅順攻略の後であつた。旅順戰に多くの我將士を失つたのは越中の富山縣であつた。侯は軍人後援會々長であられたから、富山の地には旅順戰歿の將士を弔ふの大演說が無ければならなかつたが、東西兩本願寺の別院は、相競ふて法要を催し侯の來場を請ふた。侯は快諾して、第一日は東の別院に赴かれたが、此時位盛んに人の集まつたことは空前で恐らく絕後であらう。來會の大多數は戰歿者の家族で幾千人の數に達し堂に入り兼ねるものが寺の境內を塡めた。侯は定刻壇上に立たるゝに先ち閉されてあつた佛間の戶を特に開かせて、侯は先づ長揖して佛を拜されたので聽衆も皆和して拜した。侯は徐ろに演壇に立つて、旅順戰の大要より說いて、戰歿將士の忠勇義烈に及び、白骨の文を宙に讀まれて遺族を慰め、忠誠の國家存立に大切であることをいふて演說を了られたが、ずゝり泣く聲が、堂に滿ちたのも誠に道理であつて、我等も侯の傍らに侍して貫ひ泣をした。あの演說は情意竝び到り且つ愛國の至誠を遺憾なく吐露した實に上乘のものであつた。

侯は翌日午後西本願寺の別院に赴かれたが、昨日入院の出來なかつた面々は、朝早天から遠方より來つて詰めかけ、開會數時間前に早く堂は立錐の地なきまでに塞がり、幾百の人は境內に滿ち、門前にも人衆が充滿して侯が入場の時は、道が塞がつて如何に警察が制しても其效なく、自分は已むなく、侯に事情を具して、車中で數分の演說を請ふた。侯は直ちに車を停めて、堵列の群衆に一場の挨拶をされたが、群衆は漸く滿足して初めて道を開いたので、侯は辛ふじて寺に入られたが、斯る混雜は實に空前であり、亦實に壯觀であつた。

侯の西別院に於ける演說は、前日のと趣は變つたが、矢張り追悼演說で、多大の感激を與へたことは前日同樣で、侯が軍人後援會長として滿腔の精神を發揮されたのは侯の經歷中特記すべきものと信ずる。吾等は今旅順攻略の時より幾倍する國難に會し、侯を偲ぶと共に侯の軍部關係の逸事を思ひ起すのも蓋し偶然でない。

青淵澁澤子爵に就いて

澁澤子爵が他界されて早や七星霜を經た。子爵は幕臣から身を起して維新の鴻業に參畫し、其閲歴は多岐多端であるが、最も大なる足跡を殘されたのは經濟界に於てであつた。大隈侯は維新當時を回顧して語られたことがある。云く、幕臣の内から拾ひ上げた傑物は二人あつた。一は澁澤で他の一は前島である。當時取調局を設けて人才を集め、勝手に横議せしめたが、以上二人も其内に在つた。當時幕臣に信を措くは不用意だと推するものもあつたが、侯は頓着なく勝手に言はんと欲する所を言はしめた。澁澤子は當初臣節を重んじ、明治政府に投ずるを躊躇したが、侯は子爵に向つていふには、既往の事は一切水に流して、これより君等と共に新天地を作らんとするのだ。一臂の力を假すのも男子の一快事であるまいかと、宛がら創世主の如き態度であつたので、子も悅服して侯の意に從つたとは、子爵がしば〳〵いはれたことである。

前島男は隱れもない郵便制度を確立した功勞者で遞信事業はすべて男爵の力に負ふてゐるが、澁澤子の擔任は更に大且つ廣いものであつた。前島男は能吏を以つて許すべき人であつたが、澁澤子は政治家を以つて見るべき人であつた。實業界に馳驅したからといふて單なる實業家と見るべき人ではなかつた。政治的才能があつたから、廣汎なる實業界を總攬し得たのであらう。子爵の氣宇は大きかつた。子爵は一黨一派に偏する人でなかつた。伊藤公が初めて政黨を組織した時、子爵に來り投ぜよと慫慂したが、子爵は應じなかつた。子爵の意は蓋し報國の道は自由の歩みにあるとしたので、平素の心條を曲げなかつた。子爵は終生不偏不黨の人であつた。

子爵は明治の初年に官仕して理財の難局に當られたことがあり、銀行を創立して長く第一銀行の頭取として聞えた。諸般産業の振興に參畫した多くの事業の中に製紙事業もあつて今は隆盛を極めてゐる。偶然かどうか分らないが、王子製紙の工場は子爵の飛鳥山邸の眼下に在つて、黑煙が往々庭内に

入るのを子爵は寧ろ喜んでゐられた。凡百の工業の創建の時子爵の力を藉りないものはなく、餘力は教育や社會事業にも及んだ。そして國家に大事件の起つた際には必らず後援をされた。乃ち米國が邦人排斥をやつた時などは、老軀を提げて、米國の要所を歴訪し國民外交を行はれたなどはその顯著な一例である。

若し子爵が官仕の人であつたら、大藏、農商務の席は其專有であつたらうが、子爵の志は官仕になく、あらゆる拘束を脱して自由を歩むことであつた。そしてそれが國務大臣以上の蹤跡を殘した。子爵は晩年まだ三十餘の會社に關係があつたが、自由濶歩のため、概ね相談役顧問の地位に在つて、事業を守り立てることに專らであつた。いふまでもなく自己を利するやうな事は一切關係が無かつた。子爵は社會、教育事業のため自から進んで多くの寄附金を募集された。これに由つて立派に成立した事業は少なくない。子爵は常に言はれた、世には富を作る人は澤山あるけれども、富を分配する人が無い。自分は不肖ながら、其衝に當らうといふて、どんな事業でも有益となれば率先し

て資金の募集に力を貸された。多くの社會事業は實に此人に負ふ所が多く、當時財界の或る人はいふに、澁澤さんが死んだら、寄附ごとが衰微するであらうと、子爵は斯くいはるゝ程、諸方面の事業を援けられた。

子爵は實業界の耆宿として重望を負ふてゐたから、諸會社の間に葛藤が起つたり解き難い紛糾が生じたりすると、子爵に調停を依頼するやうなことが頻々とあつた。それ等のために實業方面の有力者は子爵の邸に常に詰めかけた。子爵は葛藤紛糾を裁決調停するに老練で、如何なる場合でも相手方を巧みに説服した。子爵自身も俺が宅は勸解裁判所だといふて笑はれたことがあるが、全くその通りで、法廷を煩はさず圓滿に解決した事件が少なからずある。子爵はこれを以つて天職ともされ、亦趣味ともされたかに思はれる。

子爵の趣味は活動にあつて、朝、家を出ると馬車自動車を驅つて幾十の會社銀行學校其他の集會に出席さるゝが常で、幾んど家に落ち着いて居らるゝことは少なかつた。海運橋附近に事務所があつて、毎日こゝに臨んで人に接せられた。自分も或る時訪ねたが、應接所は來客で滿ち着順の番號で呼ばれて、

子爵の室に入る有様は繁昌の醫者よろしくであつたから、應接室に入ると椅子テーブルも備へて在つたが、子爵は立つて居らるゝので、客も亦立つて、立談で用を濟すことが常であつた。子爵の毎日の生活が如何に繁劇であつたかの一端が窺はれる。

子爵は斯く繁劇の生活を營みながら、繁忙に紛れて、事を疎慢に附さるゝことは無かつた。早稲田大學で基金管理委員長であられた時、自分は或る時飛鳥山の邸に訪ふと病床にあられたが、其際は枕邊に用を辨じた。其時感心したのは、早大の計算書を閲覽されてゐたことである。學校の事などはこの繁忙の人に閑却されてはゐはしまいかと祕かに思ふてゐたのだが全く裏切られた。子爵は何事にも責任を重んずる人であつた。

子爵は早稲田大學の演壇にしば〳〵立れた。我等も其都度演説を聞いた。いつも謙遜の態度で摯實の辯を揮はれたが場面に應ずることを巧みに述べらるゝので、聽者を惹きつけた。士魂商才の子爵の演説は一般實業家の及ぶ

所でなかつた。子の論語を演説に引用さるゝことは隱れもないことであるが、その應用が如何にも巧妙であつた。子爵は論語を金科玉條とされた丈に、漢學者よりも精讀もされ、又活用もされた。往年伊豆の湯河原に保養中、旅館に訪ふて見ると、机の上に論語が開いてあつて他には何物もなかつた。子爵は片時も論語を身邊より離されなかつたやうである。

子爵は詩書にも長じて居られた。前島男の生誕碑を建てる時に揮毫を請ふた。尺餘の大字を喜んで書き與へられた。それは刻して越後の男爵の舊里に建つてゐる。子爵は繁劇に日を送られながら、尙綽々餘裕があつて、曾ては德川慶喜公の傳記の編纂を思ひ立たれ、しば〳〵公を自邸に招請して正確な資料を求められたことがあり、我等が下村觀山に畫をかゝせる會を設けた時、子爵も此會に參加され、會員一同飛鳥山の邸に招かれたこともある。あの忙しい人にゆつくり話を聞く機會は此會の折を除いては無いので、子爵の閲歷は此會で聞いた。子爵は幕末身は主計の職に在りながら、某劍客を逮捕せんとするに誰も恐れて行くものが無つたので子爵は敢然捕手を率ゐて赴か

れた。これに就て子爵は語られた。幕吏の怯惰は如斯であつたので幕府の運命も迫つたと歎じたが、果してその如くであつたなどの追憶談も出た。其際自分は子爵の號の青淵の典故を聞いたら、子爵は自分の實家は染物屋であつたので、それを紀念するために命じたので、青淵は卽ち藍壺を意味するのだと語られた。

子爵の長い生涯には種々の逸事があるが、子爵自身の語られた一遺事を語ること丶しよう。往年子爵は大隈侯と共に岡山縣へ遊説に同行されたことがある、其際自分も一行に加はつてゐたが、汽車が吉備津神社の邊を通過する時、子爵はこゝで思ひ出す事があると語り出された話は一行を破顏させた。子爵は幕末に民兵を募るため此邊に來たことがある、その頃はまだ血氣な時で、つれ〴〵の旅が淋しく一夕の春を或る娼樓で買つた。翌朝は素知らぬ顏で、籃輿に乘つて四五の供勢を連れて出發すると、カゴ側にバタ〳〵草履の聲がするので不審に思ふて窺ふと、それが前夜の敵娼で、緋縮緬の蹴出しをあら

はに歩るいて居るのに一驚を喫した。あとで聞けば客を見送るのが此邊の娼樓の慣習だそうだが、あれには困つたと一笑された。

子爵晩年の或る時語られた。祖徠はあれほどの學者だが死前には精神に異情があつたか、「紫雲がたなびいて俺を迎へに來る」といふたが、俺はそんな耄碌はしたくないと。子爵は確かにその期待の如くであつたが、流石に記性が衰へて、よく物忘れをされた。自分は子爵の死前近かく、早大の重大事を報告のため飛鳥山を訪ふた時、朝まだ早く、勿論子爵に直接面會の積はなく、執事を經て傳達を期したのだが、執事が出勤前で、已むなく待つてゐると、子爵はどうしてか自分の訪問を知られて、面會するからと在つて、應接室へ出て來られた。自分は意外のことに恐縮したが、自分の言ふことを靜かに聞かれて、例の如く快濶の應答があり、平生と毫も異なる所が無かつたが、別れる時學校の會には決して御出席に及ばないと再三申したのに、其後拙宅へ幾回か缺席の旨を電話で申越されたので、初めて子爵の記性の弱まつたことに氣が付いたが、これが子爵に面晤の最後であつた。

交通文化の恩人前島男爵

交通文化の恩人前島男の業績を語る前に、斯人の經歴の大要を知る必要がある。男は越後高田の近在、津有村の上野家に生れた。幕末四方に奔走時代には、卷退藏或は來輔とも名乘つたが、幕吏前島錠次郎を嗣ぐに迨んで、前島を姓とすることゝなつた。男は早くから蘭英の學を學び、志海軍に在つたので航海・測量・汽關の學を修めた。曾ては紀州藩の船艦を操縱した事があり、英學の教師として薩摩に聘せられたことがあり、星亨が男の英學の門人であることなどは世間の餘り知らないことである。男は活眼達識の人で慶應二年に、早く漢字廢止を唱道し、幕府に建議をした。乃ち漢字廢止論者の第一號は此人である。幕末維新の過渡期に、逸早く東京に遷都を主張し、政府に建議したのも此人である。大隈侯は曾つていはれた幕吏で新政府に仕へたものゝうち、掘出しものは前島と澁澤で幕臣なるが故に疑惧したものもあつたが實に双璧であつたと。徳川魁之助(後の家達公)が六歳の時初めて登城された時隨

伴したのも前島男で、大政の局面に異變がなければ、此幼童こそ城の主人であるべきに、世の變轉に落涙したといふは男の感慨であるが、此幼童が家督を相續するに方り、徳川氏の藏は新政府の封ずる所であつて、饌椀の調度すら無かつたのを、其封を解くに苦心斡旋したのも亦男であつた。又竹橋騒動の時早くも探知して其變に備へしめたのも此人であつた。斯る業績の數々は此短紙の盡し得る所でないが、男の一生を通じての大なる事蹟は、明治三年早く郵便法を定めた事である。自分は曾つて其業績を叙した事があり、略々それに盡きてゐるから其全文を次に掲げる。

何んの事業でも創業が困難で、それが成功して久しきを經、社會に同化する樣になると、創業の困難を想ふものゝないのは輕薄のことながらそれが人情である。郵便法の如き、今の文化國に共通して、何人も日夜その惠澤に浴してゐるが、さて創業當時の事を考へる事がない。創設者が誰であつたかさへ知る事が少ない。此法の行はれない前、如何に通信が困難であつたかを想ふ者も甚だ少ない。

明治維新の直後十數年間西洋の文物を移入するには概ね外人を傭ひ來りその指導に由つたもので、郵便の如きも傭外人の教へたものであらう。日本に制定された郵便條例は西洋のそれの飜譯であらうなどと想像するものが今でさへ無いでもないが、郵便は全く外人の指導に由つたものではなかつた。

官廳の例として屬官や技師が實地の事をやつて、上官は唯喫煙しながら決裁の判をつくのみで、そして其功は上官一人に歸するのが通例であることを思ふと、郵便も亦此例に漏れないと推測するものもあらうが、郵便に於ては全く其選を異にし上官それ自身の考案になつたものである。

英國のローランドヒルに據つて案出されたポストは世界に大なる恩惠を寄與したものだが、吾郵便法の創設者前島男は當初此人の名すら知らず、勿論郵便法の大略をも知らなかつた。唯粗漫ながらポストに似寄りの事を工夫したのが抑々の初めで、其頃官命で洋行したのが此人の郵便研究に好機會を與へた。男の談話に據ると外國船に乘つて初めて郵便箱に觸れ

たといふが、英國に赴いては實地にポストの運用を見、其規則の研究も出來たので、こゝに男が抱いた粗案も本格的になつたのである。

前島男が何んの動機で郵便の便法を案じたかといふに、當時の交通不便が示唆を與へたのである。男は幕末に九州邊にしばしば往來して大なる旅行者であり、しみ〴〵通信の不便と旅行の困難を感じたから、自然にそれに打ち勝つ便法を案じたことを想像するに難くない。男自身も已れの旅行が郵便法を施行するに、相當に役立つたといふて居る。各地宿驛の狀況、都邑の繁閑等は郵便實施に大關係があつて、男はその知識の持主であつた。當時遠隔の地に通信するには飛脚の機關に由る外は無かつた。これに信書を托し、金錢をも托して發送した。飛脚には態飛脚といふのがあり急飛脚などいふのがあつたが、何にしても人間の脚力には限りがあるから、勿論緩漫のものであつた。そして多くの賃銀を要した。非常の用件があるでなければ、急飛脚に由るものは無く、多くは幸便といふ言葉もあつた如く、飛脚のついでに賴んだから江戸を外れて二三里外にある所へ手紙を屆ける

には意外に多くの日子を費し、又持込料を別に徵した。當時の書信の往復は多くの場合月に一回もなく、年に數次往復するごときは裕福の家でなければ出來兼ねることで、その不便は實に言語に絕した。

當時の通信の困難と今日の三錢四錢の印紙を貼ると、確實且つ迅速に信書がどこにも達する郵便の便利を思ふと眞に隔世の感があるが、通信といふと飛脚を聯想するので、飛脚を卑下した維新の當初に於て、心ある官吏でなければ郵便を重んぜず、隨つてこれが經營に國費を出し惜んだので、經營者に取つて頗る苦痛であつた。當時政府の飛脚に仕拂ふ月額は一千五百圓といふ僅少のものであつたが、その金額内に收支相償ふ計を立て、或る地區を劃してやり出したのが最初の踏出しであつた。

郵便法も段々に行はれたが發信の數で郵便料を平均するのだから、發信の數が最初甚だ少なく收支が償なはなかつた。一方には飛脚連中が此爲に職を失ふことを氣に病んで競爭的運動をやり、當時の宿道の運搬機關であつた、傳馬助郷(此等は强制的に人馬を徵發する苛酷の因襲法)なども追々

恐慌を生じて郵便の新法に對抗する運動を起したので、驛遞當局もこれを鎭撫するに相當の苦心をした。内國通運會社が起つて、傳馬助郷を其範圍に收めたのも全く郵便法實施の結果である。

郵便法の最初施行された時には世人は奇異な思をした。政府が飛脚營業をするのだから無理もなかつたが、最初局を開いた江戸橋に發信人がやつてきて、いろいろの我儘をいふた。ヤレ料金をマケろヤレ茶を飲ませろなどいふて、宛がら商店の如く遇したので、局も其頃は郵便役所と稱して多少の威嚴を添へたといはれる。郵便函にも多くの人が慣れず、投簡は甚だ少なかつたので、閑人のことを郵便函といふたりした。田舍の赤毛布連は郵便といふ新語を解し兼ね滑稽にもこれを小便所と解した奇談もあるが、小便の便の字と上に垂の字があるから斯く誤解したのも無理は無かつた。

あらゆる困難を押し切つて、追々此業も進展したが、其苦心は容易でなかつた。當時江戸橋に構へた郵便役所も崩れかゝつた廢屋で、上官は居り所を得ない程の狹隘で、押入を破つてそこに坐したので三伏の夏時は隨分閉

口したといはるゝ程何もかも簡素一點張で、新聞の運搬に自然馬を用ゐることになつたが、馬の置き所がないので、長官の私宅に二頭の馬と馬丁まで置くことが止むを得なかつたといはれてゐる。

當時種々の困難があつたのに打勝つて西洋同樣の郵便法を設定し得たのは全く前島男爵の獻身的努力に由るので、宛がら自家の道樂の如く其完成に憂き身をやつした。明治三年前島男が大藏の租稅の權正に任じ、驛遞司の長官を兼ねた時から初まるのだが、前島男は妙に郵便事業に趣味があつて、此事に力を專らにした。外國に官遊した用件は外の事であつたが、勤めて郵便法を研究し遂に歸朝後自薦して驛遞頭となつた。その熱心さはこれでも推し得るが、男は百難と戰つて、郵便に附隨するあらゆる計畫を遂行した。乃ち郵便貯金、郵便爲替、後には電信電話にも及び、又海運業にも海上保險や海員拔濟の法もその基礎を立てた。男が如何に此制度に熱中したかは、郵便爲替を計畫した時、時の內閣では爲替業は銀行の掌るべきもので、資金の潤澤ならざる郵便局の行ひ難いものである、恐らく之を行はゞ必

ず損失を生ぜんといふて反對があつた時、若し損失を生ぜば私財を以つて贖はんとまでいふて裁可を請ふたと、男自身の談話にも見えてゐる。

維新匆々の際何事も創始で事に當るものは概ね自分の仕事であるかの如き心持であつたとも聞くが、男の如きは全くこの適例で、男は郵便制度を立てる最初には自腹を切つてまで遂行を期し、常に局員を奬勵するに自宅に招いて酒を與へたことも頻繁にあり、局員も艱難を辭せず手足の如く働いたといはれる。郵便法が意外に早く日本に確立し、國際郵便條約にも參加し得たのは全く男の不斷の努力に由つた故である。外國では日本の如き未開の國に郵便の國際相互條約など成り立ち得ないと一時日本を嘲つたが、それが立派に加盟出來たのも男の功といはねばならぬ。男の懷舊談に據ると、郵便法を成立せしむるには可なり難儀を感じたが、併し明治政府が自分の爲すに任して敢て干涉を加へなかつたことは自分の最も愉快とする所だといふたが、若し政府が男に一任しなかつたら、恐らく郵便の制定は餘程遲れたであらう。亦政府が如何に信賴し委任しても當時の如き官

吏氣質が無かつたら恐らく成就しなかつたかもしれない。

以上は郵便法制定の經緯であるが男は郵便に伴ふあらゆる重要經營を成し遂げた。乃ち船舶鐵道等陸海回漕の革新を始め郵便爲替郵便貯金海上保險海員拔濟電信電話等あらゆる遞信事業に手を下して皆成功した。男は明治十四年の政變に大隈侯と相携へて下野したが遞信事業の内で男の手を煩すべきものが二三殘つてゐて、それを處理することが時の遞信大臣榎本武揚を惱ました。時は明治廿年男はその位置の低きに頓着なく入つて次官となつたが、全く遞信事業愛撫の情から起つたので當時君の手で處理されたものは、定期刊行物小包郵便金子入郵便(價格表記法)の事などで皆緩急適當の處理を得、そして遂に電話の創設にも及んだ。男は在官三年餘で官を辭されたが、爾後終始電氣に趣味を持ち電氣學會にも與つて大なる功績があつた。男は電氣をシムボライズするに種々苦心して繪畫であらはされたことなどもあつた。各所の私設鐵道建設に力を致され、男に由つて起つた鐵道も二三ある。又曾ては早大の前身に校長となられたこともあり、早稻田の經營に成つた日

清生命保險會社の社長となられたこともあつた。併し男の業績は要するに交通文化にあつて、凡そ遞信事業で端を男に發しないものは一もないといへる位である。男は政治家的の人といふよりは寧ろ能吏といふべき人で、廉潔恪勤、官界の軌範と仰ぐべきは此人であつた。すべて男の創始に係る遞信機關が、確乎として紊れず、儼然信を中外に博してゐるのは男の如き能吏が精神を籠めて終始愛護したからといはねばならぬ。

田中青山翁

何人も田中光顯翁に百壽を期したが惜しいかな九十七齡を以て白玉樓中の人となられた。三十數年交誼を辱うした自分には、特に哀悼の深甚なるものがある。翁の奉公の事蹟に就いては餘りに顯著で自分の呶々を要しない。自分は翁の趣味方面のみに就いて聊か知る所を錄して、翁を偲ぱんとする。

珍書の寄贈に驚喜

翁が宮相であつた往年、支那の提學使數人が來朝した。その中に黃紹箕といふ好書家があつて、祕府の書籍を拜見したいと懇望した。その頃或る事情で祕府の御藏書は何人にも閲覽を許さない事になつてゐたが、折角の懇請だから、大隈侯から特に交渉の結果許されて、自分が黃紹箕外一人を伴うて圖書寮で十數部の貴重書を拜觀した事がある。この時は宮相の警欵に接しなかつたけれども、他日交誼を得るの端は、こゝに發したともいひ得るのである。

自分はその頃、早稻田大學の圖書館を督してゐた。彼の法隆寺の寶什、皇侃

の禮記の義疏が、翁の有に歸したと聞いたのもその頃であつたが、或る時、翁の複製されたコピイを圖書館に寄贈を請ふた處――翁はその頃小石川の芭蕉庵住居時代で、早大と極めて近距離にあつた。――使にやつたものが間もなく戻り、その携へて來たものを見ると、それはコピイでなく、原書に熨斗をつけ、一簡を添へて贈られたので、自分はびつくりした。「驚喜」といふ極度の喜悅は、自分の生涯にこの時初めて感じたので實に驚いた。この書こそ支那に於ける逸書で、曾て光明皇后の御料であつた證據に、卷尾に「內記私印」の藏記があり、他日國寶となつたものである。

濶達な高い人格

右の貴重書の寄贈を受けながら、未だ翁の警欵に接するの機會を得なかつたが、その後伊豆の韮山に、友人高田博士の別莊に游んでゐると、翁が高田を尋ねて來られた。翁の別莊はもと久保扶桑の營んだもので、高田の別莊と隣つてゐた。この時初めて翁に接し、先年祕府の御本の拜觀を得たことやら、皇侃の義疏を割愛されたことなどについて厚く禮を述べ、談は端なく典籍の事に

渉り、一時間餘應酬したが、翁は談次、俺の處に相當苦心して集めた若干の古文書がある。多くは天平時代のものである。自分が藏してゐても永久の保存は覺束ないから早大で保存して貰ひたいといはれて、寄贈を約された。自分は重ねての寄贈を喜んで謝した後、顧野王の玉篇の舊鈔本の翁の有に歸してゐることを思ひ出し、試みになほ御架中に存するかと問ふと、翁は漸く思ひ出されたごとく、アーあれも寄贈しようと約されたので、自分はこの時も再び驚喜した。この書も後に國寶として登錄されたが、この玉篇の殘缺は他にも存してゐるが、翁の藏本は大字本で、字數の最も豐富のものである。自分は敢て寄贈を欲する意があつて、その存在を問ふたのでないのに、恰かも謎をかけたやうな始末となつて、内心恐縮したが、翁の濶達さと、物その處を得れば何物をも手離すことを躊躇せられない、高い人格に深く感服した。

得意の刀劍談

翁の別莊に高田と共に招かれ、午餐の饗應を受けたのは翌日で、この日話題に上つたのは、翁の最も得意とせらるゝ刀劍談であつた。翁は壯年時代に早

くも刀劍に深い趣味と鑑識があつて、常に名刀を佩びてゐたと語られた。初めて高杉東行に會した折、挨拶が終ると高杉に貴下の佩刀を拜見といはれて、得意の刀を示すと、高杉も餘程の鑑識があつたと見えて、熱心に懇望したので、已むなく割愛したが、實は自分の最愛のもので惜しかつたと語られた。維新後、名刀が廢りゆくのを惜しんで、岩崎彌之助に、その保存を慫慂するため、自分の最も珍重する二三刀を與へたといふことなども語られた。又明治大帝御佩刀の二刀まで、翁の獻上にかゝることも承はつた。翁が古今の名刀を評された中に、今も耳底に存して忘れ難いものがある。

翁は云く、日本の名刀を求むれば、勢ひ一條帝の御宇に溯らねばならぬ。源平二氏の寶器としたものは皆この頃の作で、上方がその產地であつた。正宗などいふ相州產は、斬ることのみが能で、實は士官一輩の佩刀に適し、將に將たる人の佩刀に適しない。將帥は騎馬の人であるから、その佩刀は長からねばならぬ。長ければ重いから輕く作らねばならぬ。輕ければ折れ易いから、輕くして且つ堅牢でなければならぬ。なほその上にヤキもニホヒも品位が高

くなければならぬ。凡そ此等を具備する刀は源平時代に在つた。源平二氏が寶刀としたものは、實に末世の研究でもこの上ないものだと語られた。

古寫經の蒐集

翁は晩年維新志士の遺墨を多く蒐集されたが、翁の書畫趣味は、これ等凡庸のものでなく、最も高尚のものであつた。乃ち、翁が殆ど半生蒐集に沒頭されたのは古寫經であつた。自分が、大正天皇卽位の歲、初めて翁を岩淵の別莊に訪ふたのは、翁の古寫經を見るためであつた。翁は自分の所望を喜ばれ、俺も寫經の蒐集に隨分骨を折つて居るが、誰も見に來るものがないといはれ、早速二十數卷の逸品を取り出して示された。それの多くは天平經であつたが、流石に嚴選されたもので識語に非凡のものが多かつた。翁の趣味は、紺紙金泥經や地模樣のあるものなど、俗に喜ばるゝものは一切排して、高雅無比のもののみであつて、大に眼福を得た。翁のこの蒐集は後に根津氏に歸し、その家に就いて全部を見たこともあるが、それは幾百卷の多きものであるに一驚を喫した。

明治大帝の尊像

自分が岩淵で翁にお目にかかつた時古經の外に拜見したものは、明治大帝の御銅像の寫眞であつた。正面側面背面等から撮影した數枚の御眞影を、蒔繪の盆に恭しく載せて特に拜觀せしめられた。自分は座を改めて謹んで拜觀した。翁のいはるゝに、この尊像を謹製するに、宮內省で彼是の議もあつたが、皇后陛下の御許を得て、大帝の御身長を正確に御測り申上げたのは光榮であつたといはれた。その時の話に、大帝の尊像をあの時御製申上げねば、他日必ず悔があると思ふたから、自分はこれを敢てしたが、大切なことは設令俗論があつても押切つてせねばならぬ。若し自分が過てば切腹するまでの事だといひ、正倉院の御物を寫して、一册の本として世に出したことにも及び、あれも大切の事と思ひ、勅許を得ずに作つた、若し奏請して勅許を得られないとすると、永久に複製が出來ないから、御叱りがあれば無論切腹の覺悟であつたと語られた。あとで考へれば、尊像といひ、正倉院の御物といひ、末永く萬衆の拜し得るのは、全く翁の御蔭といはざるを得ぬ。

翁は又幾種萬葉集の貴重の古鈔本が諸家に寶物として死藏せられてゐるのを惜しみ、斡旋してすべてを世に出された。これにより萬葉研究家に大なる裨益を與へたことはいふまでもない。又翁には「古芸餘香」といふ十册程の著書がある。これは祕府の貴重書を解題したもので翁ならでは出來難い仕事で、典籍界に益するところ少なくない。此等は皆翁の趣味の現はれでもあるが、亦公益を思うての業でもあるので、翁の勞を多とせねばならぬ。

翁の作庭趣味

自分は、翁の小石川に於ける芭蕉庵所在の家を訪ふたことはないが、岩淵並に蒲原の別莊を訪ひ、後者には曾て一泊したこともある。それに就いて思ひ出すのは、翁の作庭趣味で、その巧妙の意匠に少からず感服した。人も知るごとく、宮内省技師の作庭には、自から一種の形式があつて、それに由つて作られた、華族諸家の庭を一と目見ると直ちに判るが、翁の作庭は獨自の意匠に成つて全くその選を異にしてゐる。翁の作庭術は極めて自然に本づき、必ず水が潤澤であつてそこに趣致がある。翁自身もいはるゝやうに、別莊地を相する

に先づ水の手を考へて決するとあるごとく、岩淵に於ては、屋後の高地の水を鐵管で引いてあり、蒲原の別莊には、自然の飛瀑があつてそれが溪流となつてゐる。岩淵の庭園は豁然たるものであるが、屋後から落ち來る水が書齋附近の池に先づ注がれ、それが庭の一隅に流れる。其處は勾配のある地勢で、外部から見ると欝樹を以て蔽はれて目に入るものはないが、水に沿ふて歩して見ると、歩々景色が變じて、そこに奥床しい趣があつた。蒲原の別莊には、庭の一帶に溪流が貫通して、宛がら深山にあるが如き趣致がある。翁は語られた。自分は茶人の趣味を解しないと。或は然らん、而も翁の作庭は、茶人の意匠よりも遙かに自然で、且つ大規模である。翁は確かに作庭家として許さるべき人であると感じた。

武弁的氣格

翁は極めて人を遇するの厚い人で、毎々別莊に翁を訪ふ時は、電報で到着の時刻を報ずることになつてゐるが、停車場に着くと必ず迎への車が來てゐる。漸く別莊の玄關に達すると、翁はいつも袴を着けて迎へらるゝが例で毎に恐

縮する。東京へ出て來らるゝ時は茅屋を訪問せられ種々お話を承はるが、その中には明治大帝の御居常を談ぜらるゝこともあり、往々祕密に屬することもあるが翁は竹を割つたやうな人で官僚臭氣は絶對になく、武弁的の氣格がどこかに閃めき、是と信ずれば躊躇なく行ふ流儀で、俺には難しとすることは絶對に無いと自白して居らるゝ。翁が物惜しみせず、如何に貴重のものでも、人に與ふるに吝かでないところは、世にあまり例を見ないが、如何にも痛快を感ずる。

翁に對して或る時代に難癖をつけたこともあるが、自分などはあの人に暗い處があるとは何としても考へることが出來ない。自分は曾て翁を名刀に比したことがある。それは左の如くである。

翁は刀劍の鑑識家であり名刀の所藏者でもあつたが、實は翁自身名刀その物の如き人であつた。翁は武弁起身で、その性格に武弁の閃めきがあり、名刀の如くやゝ匂ひに至るまで品位が高く、事を行ふに電光石火も雷ならず紛糾の亂麻を割く常瑣事の如く、その斬れ味のよさは竹を割るが如く、人に對して

城府を設けず、胸次清朗祕密といふものを知らざる如く、直截にして是と信ずれば何事も躊躇なく行ふ。常に云く、吾れに難しとすることは何も無いと。而も責任感が強く、若し誤れば自刄して謝するのみといふ。如斯して名刀の動く所何ものか敵し得ん。翁の一代の成功もその斬れ味に因るならんが、翁に多少の累をなしたるものも亦、その斬れ味のよきに因するなきか。翁の如き純潔の人に、或は何か暗き所あるかの如き難癖を附したることのあるのは、名刀が餘りに斬れ過ぎて、誤解を生じたるにあらざるなきか。翁は刀を脱して空しく刀室に藏むるを欲せず、往々斬らずんば已まざるの概があつたなどが、或は累を釀したるにあらざる歟。これは武弁の人に有り勝の事とはいへ、翁のために惜しむのも、翁のために辨ぜざるを得ないのも、實にこの一事である。

翁は晩年悠々自適しつゝ、多摩に聖蹟記念館を、水戸に常陽明治記念館を作つて、只管明治大帝に對する奉仕に餘念が無かつた。又それと同時に、翁は維新勤王の同志を追憶し、その遺墨を蒐集し、それを適當の處に贈つて慰靈顯彰

人

につとめられた。早大に維新志士の遺墨の少なからずあるのも、皆翁の寄贈にかゝるもので、その人の忌日に會すれば、必ず香を獻じてその靈を慰めてゐる。

小野梓氏の逸事

小野梓氏に就ての思ひ出は、曾て隨筆に書いたこともあるが、西村眞次氏が書いた小野氏の傳を讀んで見ると、五十年前の舊が偲ばれ、いろ〳〵胸に湧き來ることもあり、又これまで知らなかつた事を知り得たこともある。小野氏の土佐に於ける家は何を業としたかといふに藥種の販賣業をやつたと、小野氏自から記してゐるが、その賣高を見ると、一向振はなかつたらしいから、長くこの營業は續かなかつたと思はれる。小野氏は肺患で斃れたが胃病が痼疾で、英國留學中に早く此疾患に惱んで、亞米利加に轉地したといふことも初めて知つた。腸胃が丈夫であつたら、たとひ肺患に罹つてももつと壽命があつたであらうにと痛惜を禁じ得ない。一二忘れてゐたことを思ひ出すが、吾等五七の同人がしば〳〵氏の橋場の居に訪ふて毎々晩餐に饗應を受けることが例であつたが、或る時どうしたことか日が暮れても晩食にありつけないので、内々空腹を感じてゐると、同人中山田(一郎)が、何か言ひ出して「太白を擧げて

祝すべきだ」といふたので、小野氏も初めて氣がつき晩食を家人に督促され、其時は酒まで出されたことを思ひ出す。隨分吾等は小野氏の臺所を煩はしたものである。もう一つ思ひ出すことは小野氏は前島男から其長女を同人の岡山(兼吉)に嫁したいと頼まれたことがある、氏はそれを全然忘却してゐる中、岡山は別に婦を定めた。前島男はこれを見て不快に感じ、岡山を詰ると、岡山は何等小野より相談を受けないといふて小野氏の怠慢であつたことがわかり、岡山は氣の毒に思ふて、自分に擬された婦人を高田(早苗)氏に世話することになつた、それが今の高田夫人である。

小野氏が東洋館書店を開くに就き出資した人は義兄の小野義眞氏であるが、其出資額は二萬圓であつたことを初めて知つた。氏の歿後其跡を承けて富山房を經營したのは坂本嘉治馬氏で義眞氏はこの開店に氣乘りせず、坂本氏は切々請ふて僅かに二百圓の出資を得た、それが坂本氏の今日ある所以だと氏の自白である。小野氏は幼名[illegible]一(テツイチ)であることも初めて知つた。龍を四つ合はした字などは初めて見た。氏の實父もなか〳〵の文字通であ

つたことが知れる。氏の生存中吾等は皆嚢中一物もない窮措大で、同人中岡山だけは辯護士であつたから相當の收入があつた。小野氏が病中金融に困つて、一二度融通を賴んだことが日誌に出てゐる。勿論期を違へず返濟してあることも分つた。

西村氏の傳に書かれてゐない一二の事を想ひ出す、其存同衆は小野氏が專ら力を入れた會で、其會に聊かの資金のあるのを、辻新次氏が保管して利に利を積んだものが、可なり殖えてゐる。辻氏は大内青巒氏と相談して、小野氏は早稲田の大學に最も關係が深いから、同校に寄附するがよからうといふことで私に其話があつた時、念のため菊池大麓氏の同意を得て貰ひたいといはれたので、京都の帝大總長であつた菊池氏に相談したが、何故か承諾されなかつたので、それなりになつたが、其金は今どうなつてゐるか。

なほ一つ傳中にないことを思ひ出す、小野氏は内閣に直屬する會計檢査官として銀行を調査して銀行の鼻を明かしたことがある。其頃各省の銀行預金を調査するに何日某省と豫告を發して銀行に臨むことが例となつてゐた

から、銀行にはちやんと用意があつた。然るに小野氏は思ふのに從來の如きは眞の調査でないとなし豫告を發せず、突然銀行に臨んで一時に各省の預金を檢査したから、銀行は大狼狽で馬脚を露はしたことがある。これが嚴正なる小野氏の性格の一端を語るものである。

大石正巳氏と余

大石正巳氏も八十一歳で歿した。自分の青年時代には馬場辰猪と共に名聲を齊ふし、曾ては農商相にもなつた。自分が此人を知つたのは、後藤象次郎伯と大同團結の遊説に越後に來た時で、自分は新聞記者時代でしきりに改進黨を盛り立てるに沒頭してゐた。在京の友人連は改進黨の悲運を見て、大同團結に參加し、後藤の越後へ乘り込むに就て、大石は友人連から、越後の改進黨の向背は市島の手にあるから、それに相談せよといふて紹介狀を携へて來た。大石氏は新潟に着すると直ちに自分に名刺を通じたが、自分は或る酒樓に氏を伴ふて、越後の政情を語り、漸やく發芽せんとする改進黨を既に成長してゐる自由黨と合同するの非なるをいふて、互ひに政治談をぬきにして宴樂に興を遣つた。大石氏も面白い襟度の人で、私の一言で遊説を試みることもなく、三日間同醉の間は一語も大同團結に及ばなかつた。夜分の外泊は同宿の後藤が燒餅を燒くからといふて歸つたが、他の有志者とは殆んど遇はずに三日

人間同醉したのは奇といふべきである。實は自分は大石氏を捕虜にした氣持で自由黨連と大石を一緒にしないやうにと策したのであつた。彼等は折角の客人を私一人に壟斷されて憤激したが、大石氏は後藤にすべてを一任して平然としてゐた。其頃大石氏もまだ若かつたから、〇〇の取持をせにやなるまいと、且らく坐を外すと早や目的を達してゐた機敏さに舌を捲いたが、氏のあの頃の態度はどこかに大きい處があつたやうに思はれた。晩年禪を修るに熱心であつたことなどを思ひ合はせると、早くからその素があつたやうにも思はれる。七八年前早稻田に小野梓君の追悼演說をやつた時、久方振に遇つたが、それが最後であつた。

豐城星野恒先生

八月初旬歸省の折、鄉里水原の父老に招かれて、一場の講演を試みた。會場は宇岡山の小學校で、自分の初めて登場した學校であつた。講堂に歷代の校長の寫眞が揭げられてあつたが、星野先生の肖像は、初代校長として特に大きく畫かれて床脇に揭げてあつたから、自分は講演に先ち謹んで禮拜したが、其際先師に對する感想がムラ〳〵と湧いた。自分が先生の敎を受けたのが小學令發布以前で、袖之葉に設けた弘業館時代であつたが、後に小學校が出來て先生は其敎鞭を執られたから、如何さま先生はこの小學の初代校長に相違ない。當時校長の名は無かつたかも知らんが、事實上校長であられたのだ。自分は圖らず、先師の肖像の前に講演するのは頗る奇緣であるとも思ひ、聽衆の中に先生の敎を受けた人をも若干認めたから、講演の末段には終に先生の事にも及んだ。

自分が弘業館に學んだ頃は十二三歲の少年であつて、當時の事は餘り記憶

に存してゐないが、先生が東京に移られた晩年には、時々往復もしたので、弘業館時代の門生としては割合長くお交りを辱うした。隨つて多少先生に就て語るべきこともあるが、順序を追ふていふほど多くの材料が無いから、漫りに思ひ出るまゝを語ると、先生が還曆の齡を迎へられし頃、先生の文集を出版する計畫があつた。其發起者は、帝大側の門人服部宇之吉博士外二、三子であつた。自分も舊門人として此擧に參加したが、最初の計畫は餘りに小規模で、自分の意に滿たなかつた。先生も恐らく不滿であらうと想像された。服部氏は何分資金が乏しいので立派のことが出來ないのを遺憾とするといはれたが、自分は舊門生から募れば三、四百の資金は容易に集まると思ふから、もう少し張り込みたいと申出た。服部氏は之を聞いて喜び、若しそれが出來れば仕合せだといふから、自分は直に弘業館時代の門人名簿を搜し出して調べて見ると、生存者も可なり多くあるので、自分から勸誘狀を發すると、續々應募があつて、容易に豫定額を超えた。斯くして豐城文集三卷の出版が成つたが、その體裁等はすべて先生の意を承けて、重野安繹博士の文集に倣ふことにした。

博士は滿足を表され、事に與つた五、六の門人は、赤門境内山の上の亭に招かれ謝禮の饗應に與つたことを思ひ出す。此會には服部氏の外に田中義成博士も出席された。

先生の還曆の賀を催した時も自分は與つたが、先生は家族同伴で出席され、出席者は三、四十名もあつたらうが、直接教を受けたものゝみであつた。先生は謝辭と共に靑年時代の閱歷を語られた。自分は先生の口から鹽谷宕陰の門下にあつた頃の苦學談を聞いたのは初めであつて、深く感激した。當時の漢學塾はどこも苦學の道場であつたのだが、先生のは特に學僕としてゞあつたから、その苦行は一と通りでなかつた。鹽谷の塾は宕陰の號の如く、愛宕下に在つたが、あの邊は水のよからぬ處で、學僕たる先生のサーヴィスは毎日或る地點から飲料水を運ぶことであつて、なか〳〵難儀であつたと察せられる。尙宕陰先生が講釋などに諸侯を訪ねる時はいつも隨伴したが、跣足で草鞋を穿いたお伴で、寒中などは諸侯の玄關に火鉢も給されず、一時間、二時間も待たねばならなかつたといはれたが、内々書物を懷ろにして待つ時間、讀書もされ

たであらうが跣足で寒氣と闘はれたことを想ふと、隨分つらかつたらうと、此邊の經歷を聽かされた時は、吾等は暗涙を禁じ得なかつた。

先生が宕陰の塾に居られたのは十年間であつたといふが、學僕から塾頭に推され、終には養子にと所望されたとの先生の自白であるが、先生は志す所あつて養子の勸誘には應じられなかつた。これに由つて見ると師の先生に對する信望は一と通りで無かつたことも知られ、先生在塾十年間如何に學問に精進せられたかも想像される。

先生が業成つて歸國されたのは明治元年で先生三十一歳の時であつた。明治二年二月水原に越後府が置かれ、同七月先生を迎へて教師とした。これより先き慶應二年外城附近字袖之葉に校舍を新築し、溫故堂と稱せしが、先生を迎へるに及んで弘業館と改稱した。溫故堂は元と陣屋内にあつた好學の代官の講書の處とし、曾つては賴支峰を講師としたこともあり、溫故堂は實に支峰の命ずる所と聞くが、先生の水原に來らるゝまでに多少の變遷あり、越後府廢せられ水原縣となりたる時、弘業館は縣學校の資格ありしが、水原縣の明

治三年三月廢せらるゝと共に縣學校なるを止め、家塾の心得を以つて先生をして教授せしめた。先生は官吏にあらざりしも權大屬を以つて遇せられた。

自分の入學したのは明治三年頃であつて、幼年ながら寄宿をしたから、校舍の模樣を朧ろ氣に記憶して居る。建物は大きくもなかつたが正門を入ると玄關があり、玄關を入ると四十八疊の講堂があり、西南に床があつて孔子の畫像があつた。これは文晁の高弟依田竹谷が足利學校にある吳道子の墨本を細寫したもので、代官小笠原信助の寄贈であつた。床の左右には押入があつて圖書を藏し、堂後の室は書生の寄宿舍であつたが、緣續きで先生の室が書齋と寢室の二つあり、別に小玄關に附屬した一室があつた。先生は毎朝講堂に出席し生徒に教へられたが、寄宿舍が狹隘であるので、多數は講堂に寢た。自分は寄宿生の最年少で特に先生の書齋の次室に置かれ、毎朝先生の書齋を掃除することを擔當し、寄宿生の三食は余の居る室で取り、十五六人のものが居並んで、先生は上席に坐して必らず食事を與にせられた。食事の給仕は年少者なる余の擔任であつた。漢學塾はどこでも粗食が通例で、朝は必らず粥を

すゝり、魚肉など曾て膳に上つたことはなかつたが、先生も同一の食事をなさるので誰も不平を鳴すものはなかつた。先生は酒を好まれたが校外で飲まるゝことはあつても、自室で内々飲まるゝことは決して無く、如何にも謹嚴の人であつた。

此學校の學生は七、八十名はあつたであらうが、多數は通學生で、町の子弟が多かつた。此等學生の中には諏訪山(今の聖籠)の大野塾より轉じて來たものが若干あつた。安孫子石太郎、羽田文藏などがそれで相當の學力があつた、三浦春作(後に宗春といふた漢方醫)なども吾等より先輩で先生の補助として教へたこともある。なほ此外記憶にあるのには先生と同郷の田澤忠松といふがあつたが、頗る勉強家であつた。此等の連中は論語の輪講などをやつたが、私など少年は素讀が專らで、史記の一册を讀むのが日課で、史記が終ると前後漢書を一册讀むのが日課であつた。先生は毎朝象牙の箸で字を突き、むづかしい字を指して質された。斯して史記、漢書は讀過したが、内容が一向記憶にも無いが、字だけは讀めるやうになつた。大人連は課題の文を作り、我等は詩

を課された。

水原の舊記錄に由ると、明治四年廢縣と同時に水原局よりも水原町に於て學校を維持すべしとの命があつて、舊陣屋敷地及建物の拂下を官に請ひ、十一月二十五日爰に弘業館を移し、舊校舍は賣却さるとあるが、自分等もこのため舊陣屋に移つたが、此處は越後府の長官名和道一の宿所に充てたことがある。自分は幼少ながら長官に侍して毎日素讀を受けた所で、自分には馴染の場所であり、舊校舍に比すれば手廣であつたが、校舍には不適當であつたと思ふてゐる。此移轉後自分は家政上の都合で、當時中條字西條の家に歸り、それからは築地の肥田野竹塢先生を師とし、毎日一里餘の道を往復したが、翌年であつたか新潟に英學の新潟學校が設けられたので進んでそれに入學したから、全く先生と消息を絶ち、先生の動靜を知らずに過ぎた。後に聞けば明治五年七月學校は公立水原校と改稱され、その後も教授として在勤され、尚其後、文部省の布告に因り水原小學校と改つても在勤を續けられたが、明治八年の三月辭任されたのである。即ち先生の水原在住は六年間に渉つてゐる。

先生が水原を去られた同じ明治八年自分は新潟學校を去つて上京し、東京英語學校に入つた。自分が東京で身を寄せた家は親戚の熊倉美雅の宅で、熊倉は工部省に出仕してゐた。確か翌年であつたか、先生は不圖熊倉方へ來られ、一、二箇月客となつてゐられたので、爰に端なく先生に會することを得た。此家に曾つて水原で先生の教を受けた熊倉の長男興作もゐて工學寮に學んでゐた。先生の上京は仕官の目的であつたらしく、毎日しきりに新律綱領を調べてゐられた。多分司法官の登庸を望んでゐられたやうに見受けたが、先生は終に重野安繹翁に知られて修史局に出仕さるゝことゝなつた。先生が國史の專門大家となられたのも、帝大教授となられたのも、學位を得られたのも皆端をこれに發してゐる。

先生に豐城の號のあるのは水原の外城に居られた時自から命ぜられた號で、外城在住の記念とも見るべきものである。先生の晩年酒次親しく此號の由來を語られたことを思ひ出すが、豐城は外城と音通であるけれども、實は先生の抱負が織込まれてゐるのである。支那に干將莫邪の名劍の埋藏されてゐる處は豐城縣で、この名劍のある故に紫雲が棚引いてゐると後漢書に載つてゐる。先生は豐城の地名よりもこの名劍を己れに擬し、俺のコンナ田舍にクスブッテゐるのは、名劍の埋沒してゐるのと一般、多分外城の上空に紫氣が立ち上つてゐるに相違ないと、虹の如き氣を吐かれたのが此號の由來であるが、先生の上京は青雲に登るの第一階であつた。先生が修史局に奉仕して終に國史の大家となられたのは當然とはいへ、實は大なる豹變であつたのだ。先生は宕陰の門に專ら經史を修め左傳は最も得意であられたと聞いたが、その史學は支那の史學で、先生が水原に來られた當時は、國史に全く通ぜず、地方の豪族などに招かれ、其宴に國史の談が起ると、先生は受け答が出來ず、赤面されるほど暗かつたとは、常に先生に隨伴した三浦宗春が語つた所である。當時の漢學隆盛時代には支那歴史が偏重され、國史が閑却されたことは確かに缺點であるが、學殖ある先生が國史に轉向の結果、遂に大家となられたのも不思議はない。併し弘業館時代の先生を知るところから見れば、所謂君子の豹變ともいふべきであらう。

先生が帝大の教授となられた頃は、小石川傳道院附近表町に住はれた。拙宅は極めて近かつたので、しば〳〵往復したが、一時先生から頻繁の訪問を受けたことがあつた、それは先生の家庭に先生を煩はすことがあつて、その處理を自分に依頼された爲であつた。先生の嫡子の婦が自分の政友加藤政之助の娘であることなど全く知らずに居たが、家庭の折合上離縁の斡旋を求められたので、已むなく加藤に示談して其目的を達したが、自分も兩間に立つて可なり面倒を感じたことがある。亦先生の長女が埼玉縣の富豪竹井耕一郎に嫁してゐることも自分は全く知らなかつたが、竹井は早大に憲法を講じてゐると、肺患に罹つて平塚の病院に入つたから、自分が見舞に行つたら看護の婦人が卽ち先生の長女であつたので驚いたこともある。なほ先生の一女を永井柳太郎に嫁せんとされたことがあつた。その時も自分に斡旋を頼まれたが、それは成功しなかつた。晩年の先生と自分に斯る家庭上の交渉がいろいろあつて、先生の宅に饗應を受けたことも二、三回あつた。

先生は晩年中症に罹られたが輕症であつた。併し毎次の手紙は嫡子幹君

の代筆であつた。但だ自分の宗家の繼志園の碑文を先生に請ふた時は、先生は自筆で長文を稿された。その文は未だ石を刻するに及ばず、拙筆に記して今に園内の室に扁額となつて掲げてあるが、此額の掲げてある室こそ戊辰の兵燹を免かれ、一時水原の學校に寄附し、そこに先生が起臥された緣因もあるので、先生は病を力めて園記を選ばれたのである。

先生は晩年貴族院の勅選議員たらんとの望があつて大隈侯の斡旋でどうかならんかと内相談を受けたことがあるが、當時はいろ〳〵の事情で、それがたやすく運ばなかつたが、其内に先生は鬼籍に入られた。葬儀には自分も與つたが、夫人も間もなく簀を易へられた。

先生は通稱恒太郎、名は世恒(つぐつね)、字は德夫、豐城と號し、明治六年通稱を恒(ひさし)と改められた。天保十巳亥七月七日中蒲原郡白根町に生れ、父は嘉之助、母は板谷氏、家世々農を業とした。十二歳の時僧環洞に師事し二十一年江戸に出で鹽谷の門下に學ばれたことは前に錄した通りである。

高田早苗博士を悼む

本年一月から病褥に就かれた高田博士は吾等が回春の期待その甲斐なく、餘病のため終に不歸の人となられた。命數已むを得ずとしても、八秩の歳を迎へるため、もう一二箇月長らへて貰ひたかつた。博士は七十九歳で祕かに八十の壽を期して居られたのに、寔に殘念のことであつた。

自分は博士と同窓で同齢で、二十歳頃から殆ど六十年の友誼をつづけた。それのみならず、博士の一生の事業は種々あれど、自分はその大部分の共同者であつた。委しくいへば、自分は博士の副官らしい位地に立つて、その行徑を同じうした。博士は常にいはれた、僕は君より早く死にたい、多分君は僕の經歷を書いてくれるであらうと、この言が事實となつたことを思ふと胸塞がつて哀傷の情に堪へない。自分は博士の事蹟を錄する能は持合せないが、博士の生涯を通じて知る者の一人であるには相違ない。

博士の生涯を語る機會は他日あるであらう。今は唯思ひ出のあるものを

アット・ランドムに語るに過ぎぬ。先づ學窓時代の事を追憶すると、君(博士と呼ばずに君と呼ぶ方が親しみがあるから以下君と呼ぶ)の才能は早く書生時代に知られ、君はいつも同窓の儕輩をリードした。君は英文學に相當の天分があつて、學窓時代早く沙翁劇脚本を講じ、幾多西洋小説を渉獵した。若し君が文學に專らであつたら、坪内逍遙はひとり文壇を擅まゝにし得なかつたであらう。併し君は早く方向を實務に轉換して、政治や教育に携はつたので、遂に稀有の教育行政家となつた。

君は英國の歴史に通じ殊に英國憲法に精しかつたので、初期議會に列した頃は憲法學者として令名があつた。君は大隈侯の帷幕に在つて、立憲改進黨の創立に與り後には文相として入閣もした。君の政治的生活に語ることも多いが、しかし、君の志は寧ろ教育に在つたので、政治的生活は比較的短い、唯初期の議會に最少年齢の範圍に在つた君が、剛腹の星議長を彈劾して院外に放逐したことの如きは吾が議會史上永く傳はるべき偉績で君はこのことの爲め暴漢の兇刄に負傷したけれども、君の政治生活は短いながら華やかなもの

であつた。

君の生涯の大なる功績は何といふても早稲田大學を守立てたことである。君はこれがため四十年間間斷なく心血を灑いだ。君は學長總長となる前に久しく學監の職名の下に努力した。其職名の如何に拘らず、終始事實上の校長であつた。東京專門學校時代には、或る勢力の壓迫が激しかつたので、それと鬪ふて屈しなかつたのも主として君であつた。後に學校を大學の位置に進め理科を開くに至つたことを初め、燦然たる諸學科を整備し、大學の面目を保たしめたのも皆君の企畫に係るものである。

大學發展の經緯は茲に委しく語ることが出來ぬ。それは他日に讓るとして君が經營力に就て聊か語つて見ると、君は吾等同窓者の期待以上の經營家であつた。君は決して計數の頭腦の持主でなかつたが、君の常識は何事をもなさしめ又曾て誤ることもなかつた。君の實行力は實に盛んで、一事を成し終れば更に第二事に移り、常に仕事を進めて行き少しも倦むことなく、その積年の努力の效が、早大今日の隆盛を生んだのである。

或る方面の學究連は曾て君を評して俗物といふたことがある。これは偶々學者に不似合な世才を豐富に有することをいふたので、君のメリットを損ふものでない。君は斯る批評を受ける程世間的事業上の才幹があつたから、一學府を守り立て得たのである。君が學究達に推尊さるゝ大學者であつたとしても、唯箇人として偉いといはるゝに止まつたであらう。これを早大の發展で多數の人才を造就したことに比したら、もとより言ふに足らないであらう。

君は學校經營の餘力をもつて、學校に附屬出版所を起し、又別に二大會社を起して共に成功した。其一は日清印刷會社であるが、これは成功の後秀英舍と合同して、今は大日本印刷會社として斯界に雄視してゐる。他の一は日清生命保險會社で、これも隆運に居るが、この會社は君の支那旅行の留守中、高等商業學校の出身者と我校の出身者が共同で一社を結ばんとした時に、君が旅より歸り、共同を非としたので、早大の地盤を利用し單獨に經營することになつたのである。君が當時早く他日を洞察して共同經營を非としたのは、一見

識と見ねばなるまい。

君の積年の勞は神經衰弱症を生じた。その第一回は洋行中歐洲の大戰に遭遇して、歸朝の後この症は可なり君を苦めた。幸ひに癒えたが其後又再發して到頭大學總長を辭するに至つた。今度は三回目で飲食を厭ふの症狀で僅に酒で榮養を取つたやうな始末、若し酒を嫌ふ人であつたら或ひは死期を早めたかも知れぬ。返す〳〵も君が八秩を目前に控へてそれに及ばざりしは遺憾の極みである。

林若樹君

長らく病床にあつた林若樹(若吉)君も遂に不歸の客となつた。顧みれば、此人とは隨分長い交りで、安田善次郎君がまだ部屋住で善之助といふた頃、欣賞會といふ書物の同好會が、安田の本所の邸に催されたが、自分も會員として毎會林君と接した。其頃は幸田露伴、赤松範一、三村竹清、和田萬吉、水落露石などが思ひ〳〵に種々の圖書を持寄つて互ひに鑑賞したが、林君は最も熱心に自慢の圖書を持ち來つて鑑賞に供した。それから二十年前稀書複製會を起し、稀書の出版を企て、それが今も持續してゐるが、この會もいつも安田邸に催され、林君との交りも繼續して、林君が毎會持ち來る稀覯の書を見て、益を得ることが多かつた。

自分は林君と互ひに家庭に往來するやうな交際は無かつたが圖書の交は深かつた。今思ふに世間趣味家、蒐集家などいふものはいろ〳〵あるが、君のごとく青年時代から、趣味一點張りで一生を通した人は恐らく他にはあるま

い、實に珍らしい存在である。君は有名な軍醫の家に生れ、相當の教育を受けたが、身體が羸弱であるため、弱年から若隱居同樣、別に仕事はなく、唯好む所に從つて物數奇三昧に一生を送つた。曾ては根岸武香、山中共古、坪井正五郎などゝ交はり、人類學的考古趣味に耽つたこともあるが、終生沒頭したのは、珍奇圖書の蒐集であつた。彼の若かつた頃はまだ掘出し物のあつた時分で、相當の鑑識もあり、資力もあつたから、しきりに蒐集につとめ、それが長く續いたから、彼の珍藏は豐富のものであつた。彼の家は蘭醫であつたから手は自然蘭書にも延び、傍ら金石類にも及んだ。

林君はしば〳〵旅行を試みたが、それはいつも珍奇な物を得ることが目的であつた。其事は末段に掲げる三村竹清氏の談話に讓るが、林君は唯多きを貪るのみでなく、よく讀み且つ案じ、考證までもやつた。得る能はざる圖書は自身で謄寫もやつた。圖書を愛することは確かに妻妾以上であつた。しかし晩年財政が豐かでないのに、數年病床にあつたので、最愛の書物を時々賣却に附したが、それにしても其歿後の賣立には、和漢書三萬圓を拔き、洋書一萬圓

雜品一萬圓に上つた。書舗や好書家が爭ふて高く評價したのは林君の餘德といはざるを得ない。

林君は居常群書堆積の中に起臥する人で、病臥の日も群書の間に床を設け、人と接見するには僅かに一席の座蒲團あるのみで、處構はず便器などを狹まくるしい處に置くので、友人などが訪問するとその蕪穢の處に食事を供せらるゝので、皆々閉口した。彼はどこまでも自分の趣味道樂が主で、細君の如きは嘗て一たびも觀劇をしたことがなく、子女は四人もあるのに、細君に一任して一向自身で構はなかつたといふ人もある。書物の賣立があつた時に、或る人は「林さんの奥さんが娘を緣づけるに、やつと活路を得られた」といふたが、或は其家庭の實情を穿つたものであらう。

林君は軍醫洞海の家に生れたので、多くの人は洞海を父と思ふてゐるが、洞海は祖父で、父は研海といふて名醫であつたが、早世したので人は多く知らない。左に竹清氏の談話を藉り、林君の面目の一端を髣髴せんとする。

林きんは旅行好きで伊勢へも一寸一寸見えられた、見えると悠々と半月以上も

私の宅に滞在してゐた。時は大抵晩秋で、それから私を誘ひ出して旅行をした、京傳勘定で中々細かい。長崎へも行つた、熊野へも行つた、行く先々で林さんは書籍はもとより樣々の品物を買ひこまれた。歸りに大阪で別れると、其又歸りに伊勢へ寄つて半月位居る。其頃の林さんはまだ獨身で、お鑑さんといふ叔母さんが世話をして居られた。もう洋服ではなくいつも和服で殆ど銘仙の絣にきまつてゐた。足袋は白足袋よりはかず、帽子は鳥打、誰かに貰つてきたといふ天鵞絨の襟のかゝつた時代離のした外套を、晏平仲の一狐裘のやうにいつも着てゐた。此外套は永い間着てゐて病臥される前に新調のものと變つたが、とにかく衣食を節し、といつても、食は中々やかましいから衣の方だけかも知れぬが、極端に節約して皆本に入れ上げたらしい。林さんは家柄ではあり、決して貧しい所ではないが、それでも世の所謂鉅萬の富を擁して、欲するが儘に書を蒐めた人と同じくはない。一口物をどかりと買ふのがすきで、隨分無理をして蒐められたと思はれる。君が瀕死期が數日に逼つたと醫師に言はれた時、ほしい本を持つて來たら如何するかと愚問を發したら、林さんは莞爾として、そりや無論買ふさ、だつて死ぬことゝすきなものとは問題が別だらうと言はれたこともある。

安田善次郎君を悼む

安田善次郎君の訃に接したのは餘りに唐突であつて愕然とした。つい一週間前君の宅で例の稀書複製會の同人と會した時は、君の健康に何等の異狀も無かつたのに、二十四日(十月)の朝、新聞を披くと、君の死亡廣告が出てゐて、忽ち幽明相隔つる人となつたのに啞然自失し、人間の運命の果敢なさを今更ながら痛感して眞に斷腸の念に堪へなかつた。

病症をと問へば十二支腸潰瘍で急遽病が革まつたといふ。折柄嗣子夫妻の洋行中であるから誠に生憎で、享年僅に五十六歳、病症から推するに、君は近年酒を節してゐたが、一時豪酒であつたから、それが禍ひをなしたのかも知れない。

追想するに君との趣味の交りは古いことで、今より三十數年の舊に遡ぼらねばならぬ。君がまだ善之助といふて、本所横網に部屋住みであつた頃、君に由つて催されてゐた欣賞會に入會した時から交りが始まつたのである。此

會は馬琴などが昔やつた耽奇會に倣つたらしいもので會員には幸田露伴、林若樹、赤松範一、三村竹清、水落露石などの好事の士が、毎會珍奇な書物其他を持寄つて互ひに鑑賞した。自分と和田萬吉氏は後ればせに參加したが、毎會深更まで趣味談を闘はして面白かつたことが、今も忘れられない。珍本奇籍を鑑賞するのみでなく、更に進んで稀本の複製を企てたのはその後で欣賞會の會員たりし、安田、林、三村、和田と余の外、内田貢、山田清作などの發起で出來た稀書複製會は、創立後既に二十年に垂んとしてゐるが、此會を中心として間斷なく安田君と交はり、一層深厚になつた。この會は世上に僅かに一二本傳はるのみで將さに絶えんとする軟派の趣味の種々の本を複製することを目的として、百方博搜の結果隱れてゐる奇籍珍本が世に現はれ、それが原本ソックリ本彫に付され、刊行されたものが五百册にも迨んでゐるが、此事業のために安田君は終始自宅を會席に充てられ、種々援助を與へられたことは勿論、君の豐富の珍籍も多く複製のために提供された。毎月會する都度君の蒐集に係る奇書を示され、これに由つて眼福を得たことは少なく無かつた。

私は性來愛書癖があつたけれども、趣味は何れかといふと、堅い方の書物にあつて、所謂軟派の書物を解するもので無かつたが、欣賞會竝に複製會に由つて啓發され、軟派本に就ての智識を得たのは君のお蔭に由るといはねばならぬ。安田君は部屋住の若い時分から愛書癖があつて、手元不如意の時早く珍書の蒐集を始め、專ら軟種の本に傾倒して、獲る所も多かつたが、不幸にして大震災に遭ふて全部烏有に歸したのは、如何にも惜しいことであつた。

安田君の趣味の範圍は震災後大いに擴大し、その蒐集は軟本に限らず、稀觀の古書といへば、古經よし古文書よし古活字本よしといふやうに博搜の結果、世に珍奇といはるゝ貴重書は大抵君の門に輻輳し、善本と知れば聊かも財を吝まず之を購ふことを快としたから、其蒐集は莫大のもので特に建てられた書庫も忽ち狹隘を告ぐるに至つた。君は財の豐なるに任せて、徒らに多きを貪る亞流ではなく、圖書に對しては鑑識があり、晩年の蒐集は殊に科學的で、宋元の漢籍には指を染めなかつたが、和本に至つては書史の材料として備はらざるものなきに至り、實に偉觀であつた。

四五年前各圖書館の書物通が日本書誌學會を創設した時、君は其邸を同人の會席に供され、その藏書を常に研究材料に充てられたため、便宜を得たことが少なくなかつた。或は雜誌を發行し、或は善本の標本を續刊し、數々古書の展覽會を催すなど、君に負ふ所が多かつたことは周知の事實で、絮說を要しない。君の財界に於ける功績は世人多く知るも、君の趣味的方面を知るものは餘り無い。君のこの方面を理解しないものは、動ゝもすれば資產家の道樂だと輕々に言ひ去れど、君が圖書界に盡した功績は決して沒却すべきでない。

尙ほ附記を要するは、君の金石趣味である。君はこの方面にも可なり蒐集に努力した。君の滿架の古鏡は千枚にも及んでゐるだらうが、みな稀覯珍奇の名品で、某著名の藏鏡家のコレクションが全部君の手に移つてゐるので、全部が極めて精選されてゐて、世の多きを貪ぼつていかがはしい劣品を混藏してゐる者とは全く選を異にしてゐるから、藏鏡家としても好古界に名高かつた。君は若年の頃から古錢家の守田寶丹と交はり、金石家の香取秀眞、三村竹清などの人々とも懇親であつたので、君の金石趣味の淵源も略ゝ推察に難く

ない。君は嘗つて寶丹の鼓吹で古錢の蒐集に指を染めたとも聞いたが、その蒐集は或は大震火で亡びたかと思ふ。この消息は君の生前終に親しく聞くことを得なかつたが、藩札狂と自稱した前田惇が半生蒐集に沒頭した幾萬の古今各藩各種の紙幣は、自分が大阪で前田の家に就て閲覽したことがあり、博物館所藏のものより豐富のものであつたが、これが前年君の購ふ所となつて、今は帝國大學に寄附されてゐるが、これは硬貨ではないが、君の金石蒐集の經歷の一端として漏す可からざるものと思ふ。尙又君は近年しきりに糸印の蒐集に熱中し、その收獲は千餘に及んでゐる。この糸印は古來好古家が愛玩する所のもので、奇古の文字と鈕に雅趣のあることが喜ばれ、百顆を藏する故を以つて著名の人もあるが、佳種を得ることが容易でないため、好事家は百も有すれば自ら足れりとし、人に誇つたりするのに、君の蒐集はこの部類のあらゆるものを網羅し、恐らく君が此蒐集の第一人であらうと自分は思ふてゐる。

私は君とは久しい交りであるが、君の財界に於ける事業其他に就ては全然無交渉であるから、何等いふべきことを持たない。君は極めて溫雅な人であ

つたが、親讓りの剛健の氣象は確に看取せられた。君は愛書と金石癖の外に、謠曲能樂に造詣が深く、どんな事を問ふても、立どころに明晰の答を得た。君の趣味は段々向上して、晩年は正倉院の御物拜觀を此上のない樂みとし、毎年拜觀を繰返し、今年も十一月には奈良行を豫定してあつたのに、それも果さずに長逝した。

自分は友人を持たぬでもないが、同趣味の友人は甚だ少ない。殊に安田君の如く自分と同趣味であるのみならず自分の及びもつかぬ趣味の寶庫を開放して、自分に眼福を與へ、自分の心田を開拓してくれた友人は君の外にないのに、其人を失つた自分の淋しさは何んとも言ひ難いものがある。併し君を失つた悲哀は廣い範圍に於て自分に百倍するものがあらう。眞に國家の大損失である。

石渡敏一氏

昨年の一月下總中山の法華經寺を會場として國醇會を開いた時、石渡敏一氏の追悼會を兼ねて氏の未亡人も來會されたから、自分は席上氏を追憶する一場の談話を試みた。それは大要左の如くである。

氏と同窓時代、氏の家は越前堀の水邊に在つた。寄せ木細工ともいふべき數寄を極めた家であつたが、氏の先人も趣味的の人であつたことが家の建築で想像せらるゝ。時々訪問して氏の北堂から種々の饗應を受けたことを思ひ出す。氏は後に他に移居したが矢張り越前堀であつた。氏は生粹の江戸兒で、先考は幕府の御舟方を勤めたもので、曾て其所藏の船歌一卷を示されたことがある、將軍乘船の時篙師の唄つたものだといふ。罪囚を島に流す時なども矢張りお舟方が管掌したらしい。そんな關係で此家には傳馬町の牢屋の圖と多少の文獻もあつて自分がそれを手寫したことを思ひ出す。此牢屋の圖が機緣となつて學窓時代、氏と刑餘の者を保護する必要を論じ、兩人で其

案を錬つたことがある。囚獄の實地を知らない我等はいろ〳〵考案すればするほどわからなくなり、果ては穂積陳重博士を訪ふて、外國の制度を聽いたこともあるが、兎角實地に卽した案が立ちかねて、結局兩人匙を投げ、お互ひの内入獄して實地を踏んで見ないと、適確の案は立たないとやめたが、何んぞ圖らん、後數年、自分が其役目に當らんとは。自分は鄕國の高田新聞の記者たりし時筆禍に罹つて八箇月繫獄の身となり、備さに獄舍の辛酸を嘗め、後獄司より特別の優遇を受け、其囑に應じ、監獄論十篇を著し、獄内の事情にも通じたけれども、出獄後氏と會して獄中の經驗を語る機會もなかつたが、程經て國醇會へ氏を誘ひこみ、自分が一夕獄中の追憶談を會でやつた時、氏も出席であつたので氏に始めて報告したやうな譯で、互に學窓時代の事を追憶して感慨に堪へなかつたことがある。

氏が外國に遊學されたのは、此日御出席の奥さんを迎へられて間もない後であつたやうに覺える。歸朝の後は氏を早稻田大學に迎へて、相當長年月に亘り法科の學生に教授して貰つた。其頃自分は學校の經營に任じてゐたか

ら氏と欵晤する機會が多かつた。又此頃は我等大學の同窓達が折節牛肉會を開いたので、其都度同席もした。自分と氏は專門違ではあるが、趣味的に投ずることが多かつた。氏は骨董趣味があつて、茶器を愛玩し、殊に陶器に就て相當鑑識もあつて、自ら窯を作つて樂燒を試みられたこともあり、書畫にも趣味があつて、川村雨谷や川村清雄などゝ交られ、いつも神保町の某骨董店に道具漁りで出遇つたものだ。氏は圖書にも嗜好があつて、吾等の圖書館協會に投ぜられ、その評議員に列せられたこともあるので、趣味的に交はる機會が多かつた。曾つて協會の總裁德川頼倫侯を奉じて我鄕里越後へ赴いた時氏も一行中にあつて、兩人相携へて春日山に謙信の遺蹟を訪ふたこともある。氏は觀光が好きで晩年はしきりに同人の團體と諸方へ旅行されたやうである。又氏は晩年和歌を詠ずることを樂みとしていつぞや十數首を示されたこともある。自分の同窓中、氏の如く多趣味の人は他に無い。

氏は早く司法次官になられたが、大臣までは行かず、貴族院議員となり、樞密顧問官となつて終つた。氏は恬淡溫藉の人で官僚の臭氣は一切なく、又同時

人

に政治家肌の人でもなかつた。氏の嫡男莊太郎氏は卽ち平沼內閣の藏相で、未曾有の難局に當つて活躍された。この追悼會席上未亡人は左の和歌を詠ぜられた。誠に時にふさはしい名歌であつた。

袖のつゆこぼるあしたのこのごろを
なごむ日ざしに今日ぞとけぬる

鉚　子

谷村一太郎君の一周忌に際して

谷村君と自分は隨分長い交りである。回顧すれば自分が早大の經營に與つて屢〻大阪に出張した頃、君は藤本ビル・ブローカーに勤務してゐた。自分の大阪に出張した要務は、早大の基金を募るためであつて、二三箇月も滯在したことが數年續いた。君は財界に關係があつたから、自分の募集事務を助けられた。早大は君の母校であるから自分の成功を常に念とされた。自分は大阪の長滯陣に倦んで時々泊りがけに京都に遊んだが、君の家は京都にあつて、大阪へ日勤されたのだから、自分の京都へ行く度毎に、旅舍へ着すると、直ちに君に電話を通ずるが常で、君は間もなく來訪された。君は京都に於ける自分の唯一の談敵であつた。日曜などは終日京都の名所を案內され、君の厚意で知ることを得た名所は幾十と數える程あり、君は寺院に趣味があつて、相識る寺院が多かつたので、君の案內で便宜を得たことも少なくなかつた。いつも連れ立つて歩くと、食事時には種々の割烹店へ案內され、これがため大概の

料理屋を知るやうになつたのも君のお蔭である。君は自分と違つて酒を好まなかつたが、喰道樂であつたか、京都の割烹店には該博の知識があつた。いつも勘定は自分にさせないのがあの人の流儀で、こんな事で君を煩したことも輕微でなかつた。想ひ起せば大隈侯が京都に遊ばれる日の定まつた時、自分は偶然京都に居たので、大隈家の依頼に依り、侯の旅館祇園の中村樓に就て、侯の嗜好の食物や料理の調味などを指圖したことがある。其時も君は同行して種々斡旋され、果ては可なり散財をしたが、此場合も君は何んとしても私に勘定を拂はせないので、自分は可なり爭ふたことを思ひ起すが、君はいつもコレ式の事といはん計りに、金錢の事を毛頭意に介してゐなかつたのは、君の人格の高い閃きであつたと、自分は感服してゐる。

君は晩年集書につとめ頗る圖書に趣味があつた。自分の最初交はつた頃は、多少圖書に趣味があつたらしいが、折々書物に就ての相談を受けたり、帙や箱の題識を請はれたりしたが、まだ集書に力を入れらるゝことは無かつた。然るに其後五七年經てからだと思ふが、熱心の集書家となつて、東京へ來らる

ると必ず拙宅を訪はれ、自分はいつも同伴して都下の書肆を歴訪することが常であつた。又君は種々の紹介を以つて藏書家を訪問し、其藏書の閲覽をされた。集書の皮切りは經濟に關する稀覯の文獻であつたやうに思ふ。或る時拙宅を訪はれたから、自分は君に贈るに慶長の檢地帳を以てした。それが君の鄕國越中のものであつたから、君は大いに喜ばれたが、自分は其價を問はれても絶對に言はなかつたのに、君は義理堅い人で、二十日計り過ぎると再訪され、加賀の名工の鑄た釜風爐を贈られたので自分は恐縮した。その風爐は松雲侯の愛用品を摸したもので、侯の題字が摸刻されてゐるので、自分はこれを珍としたが、今は君の遺物となつたことを悲しむ。

君の集書の範圍は追々擴大され、五山版古活字本等にも及んだ。京都に於ける君の周圍には好書家が多く其刺激もあつたであらう。中に就て古活字本を博搜した高木氏とは特に別懇の關係があり、君の親戚には圖書通の新村博士があるので君の趣味を助長するの後援となつたと推想される。君は藤本銀行頭取といふ多忙の身であつたが、圖書の事としいへば遠きを辭せず行

いて捜索をつとめ、深更と雖も同好の人と對話した。君が中症に罹つたのは不幸であつたことはいふまでもないが、君は此病の爲に繁劇の頭取を辭し、悠々自適の身となつたので、これよりは保養がてらに專ら圖書界に遊び、一意集書を力むることゝなり、不幸の病患は或意味に於て君に幸を齎らしたといひ得よう。

日本圖書館協會の大會を金澤に開いた折には、君は中症に罹つてゐた高木氏を扶けて金澤に出張され、私が松雲公の圖書の業績を講演した時には、現に傍聽席に交つてゐられ、講演後誠に處を得た講演だと喜ばれたが、其際開かれた大規模の圖書展覽會に、君の藏書が多く出陳されてゐて、君の藏書の豐富であることを會得したが、これが私の君の藏書を見た初めであつた。何分混雜の際で其折は熟視も出來兼たが、其後京都に遊んだ時、初めて君の改築の家を訪ふて君の藏本の多くを閲覽した。それは皆稀覯の珍書で、關東では到底獲難いものが多く、中には足利尊氏の藏記のある書物もあつた。京都の著名の寺々が出版した古活字本で、我等の曾て見及ばないものも少からずあつて、君

の蒐集の精力と鑑識に服した。實は君の集書を始めた十數年前には、私が手ほどきをやつたもので、斯道の先輩顏した時もあつたが、君の藏書を見るに迨んで、私は心窃かに愧ぢ、君に向つて集書の精力も鑑識も今は君に及ばぬ、君は實に出藍の人だと、戯れながら放言したことを想ひ出す。

私は君と長い交りであるが、君の實業界に於ける業績に就て何も知らぬ。唯こゝに洩らしてはならぬ事は君は銀行頭取在職中視察のため外國に赴いた事がある。其視察は必らず君の實業生活に益する所があつたであらう。君と交際した實業家や君の麾下に在つて業務に從事した面々に聽くと、異口同音に君の人格の高かりしことを說く。衆目の見る所、君は實業界の鷄羣の一鶴であつた。君は京都の產ではないが、京都の早大出身校友中の一鶴であつたのに、惜しいかな君の中症は再發して斯人を失ふた。京洛風光に富むと雖も同好の此友無くして誰と共にか遊ばん。爾後京洛に疎遠となつたのもこの故である。叙してこゝに到ると感慨無量である。

畫家野澤如洋

野澤如洋は弘前の人で京都の畫壇では竹内栖鳳と技を爭ふた程の手腕があつたが、一向に聞達を求めず、赤貧衣食に窮しても、斗米のために畫を作らず、任俠貧を訴ふるものあれば、己れを犧牲にして何人をも厚遇し、好んで酒を飲み斗酒猶辭せざるの量があつた。この人の東京に來るや我等同人はこれを珍とし、幾回か杯酒の間に交つたが其都度席畫を作り、立どころに數十幅をなす、その手腕の凄さ、人を驚殺するものがあつた。此人の得意は馬を畫するに在つたが、何に寄らず優れた技を有し、畫題を出して求むれば、言下に筆を着け、嘗て思索するやうなことは無かつた。此人は一日千畫を作つたことすらある。嘗ては支那竝びに歐洲大陸を巡遊したこともあるので、外國の風物を寫すにも妙を得てゐた。自分は曾て酒を設けて席上高陽酈飲圖を寫して貰つたことがある。これは長さ三間もある長卷で、百にも及ぶ人物が點綴さるゝので、普通の畫家ならばこれを書き終るに、數日を費すであらうに、如洋は酒を

酌みながら一時間ばかりで全部書き終つたのでその神速に驚いたが、人物の神采の躍如として原圖よりも優つてゐたのに、敬服したことがある。氏の畫名は漸やく揚り、皇族方の愛賞を博して愈ゝ名聲喧傳するに至つたが、不幸にして七十二歳で鬼籍に入つた。此人には錄すべき奇拔の行爲も少なくないが、それ等は同鄕人薄田貞敬の著した傳に盡されてゐるからすべて略し、如洋歿後追會會を催した折の余の追憶談を左に揭げ故人を偲ぶことゝする。

自分が如洋君を知つたのは、薄田君の如洋傳を讀んでからである。其後親しく酒杯の間に快談もしたが、自分の第一に感じたことは、如洋君に於て所謂古文人の面影を見ることを得たと云ふことであつた。明治以來文人肌の畫家は富岡鐵齋あるのみといはれたが、如洋君は鐵齋にも優して眞の文人肌で、全く徹底したものであつた。文人には文人臭味があつて、そこに厭味が伏在し、外面は文人らしいが、內實は世俗智一杯といふのが多くあるが、如洋君はこれとは選を異にし、純潔の文人である。生一本まじりなしの文人が明治昭和の時代に存在したといふ事は殆ど奇蹟に値する。君は敢

て大雅堂の如くでなく、もつとさばけて世の中を廣く呑んで居る。何から何まで知つて居りながら、それで文人の風格を守り辛抱して居た。これは肚の底に國士的の高いものがあつて常に志節を砥礪した結果であらう。文人畫家仲間だけでない、天下の士として廣く見てもあれだけの思ひ切つた純潔の人間は少ないのである。隨つて如洋君の畫は囚はれない藝術で、金錢の爲に書いたものでない。君の畫はどれほどのものかといふに、親しみのある人の畫に就ては往々評を誤るから自分はそれを避けるが、世間自から定評があるであらう。

如洋君の席畫と速筆は天下逸品であるが、或はそれを濫作として難ずるものもある。昔から大家は席畫をやらぬものといふた。難者は多分これに拘泥してゐるのであらうが、如洋君をしていはしむれば、席畫は易きに似て易きにあらず、大家といふものはそれを難しとしたからやらなかつたのであらうと。事實自家の畫室でなければ滿足の畫のかけぬ人が多い。燒炭や羽箒を使用する畫は人の見ぬ畫室で出來るものだが、如洋君は決して

處を選ばなかつた。そして筆を止めて考へあぐねるといふ風は絶對に無かつた。神あつて導くが如く、些の澁滯なく出來たものは皆生動して、即興の作でもすべて本格の畫であつた。速筆濫作と非議するのは如洋君には當らない。實をいへば、畫かうと思ふても筆力及ばずして、思ふ樣に樂にすらすらと書けないやうでは、修業が足らないので、眞の藝術家ではない。如洋君の如き、速筆では或は古今獨歩と云ふも過言でないかも知れない。

如洋君の鬼籍に入つたのは惜むべきだが、有體にいへば、君は富まずに死んだのは仕合かも知れない。兎角金に有りつくと藝が鈍るのが人間の弱點である。如洋君は漸やく金が出來かけて、それが十分でない所で死んだから、君は晩節を全うし得たとも言ひ得よう。

澤本與一君を憶ふ

澤本與一君の歿した時、自分は突然其訃を聞いて驚いたが、青山齋場に於ける告別式に臨んで更らに驚いたのは其葬儀の如何にも盛んであつたことである。齋場附近は幾んど會葬者で溢れ、辛ふじて式場に入ることが出來た位であれほどの盛儀は稀に見るものであつた。こんな事をいふと、君に對し無禮に當るかも知れないが、あの人が活版小僧であつた頃から知つてゐる自分の頭に、一種他人に無い感動を興したのは強ち無理ならぬ事だ。君は活版小僧から新聞記者、參與官、衆議院議員、東京市助役と、其間僅に三十數年に過ぎなかつたであらうに、あの人の出世は最後の盛儀が示したやうに、稀有といひ得るやうなものであつた。

自分が讀賣新聞の主筆時代にあの人は社の印刷所の文撰小僧であつた。工場は編輯局の隣室であつたのであの人は校正刷を携へて頻々編輯局へ出入した。いつも局員がかれにからかつたが、なか〳〵才物であつたので、自然

局員に愛された。此時分中井錦城が編輯にゐた。此人は岩國出身の秀才で、新聞記者として珍らしい能力の持主であつたが、澤本が同縣の生れである所から、誰よりも中井によつて早く君の才幹が認められ、活版小僧などにして置くのは惜しいといふので、拾ひ上げて、早稲田大學へ學ばせた。多分東京專門學校時代であつたらう。學費を給したのも中井であつたかと思ふが、確かな記憶がない。

讀賣といひ早大といひ、共に自分に緣故があるが、君が成業の後、記者として投じた新聞は、自分の鄕國で曾つて自分が主筆であつた新潟新聞であつた。其頃は自分の親友なる坂口五峯が自分の跡を受けて社長であつた。今は忘れたが、君がこの新聞に投じたのは、多分私の紹介であつたと思ふ。兎に角この點に於ても自分とは緣因があるのである。

君は其頃まだ二十臺の若者であつたが、才氣があつて文章も器用に書いたので、社長から認められて間もなく主筆に推され、社長の宅では家人の如く扱ひ、社長は子の如く愛した。後辭して新潟を去る時は、社長は特に破格の金を

與へたことが後日知れた。それは社長が晩年東京に病んで療養の費用多端の際君は舊恩を思ふて、五百圓の金を贈つた。坂口は返金を期してなどゐなかつたのに、意外の贈金を得たので、あの男は感心に舊誼を忘れないと私に語つたことを想ひ出す。

君は新潟を辭してから大阪に赴き、大阪新報の記者となつたが、同新聞社に變革があつた時罷めて久原房之助の祕書を勤めたこともあつた。其後江木翼が司法大臣となつた時其祕書官となり初めて官仕した。江木は同縣の先輩であるから、其祕書官となつたのは自然の關係で、誰も適任と思ふた。全體君は祕書役としては最もハマリ役で、才氣もあり筆も達者、事務にも熟し立働くにも輕快で、人に愛さるゝ型でもあつたので、大臣に重寶がられたのも偶然でなかつた。君は何年であつたか鄕里から衆議院議員に擧げられたが、祕書官となつたのは、其後であつたらう。尙其後遂に外務省の參與官となつた。君が民政黨中頭角を擡げてゐたことが、是等の經歷に由つても窺ふことが出來るのである。

晩年は議員在任のまゝ、東京市の助役となつた。第二助役であつたが、實權は君の手に歸し、牛塚市長も君に信頼してよく任じた。併し君が在職中に起つた電氣爭議は容易ならぬ難局であつたが、君は熱誠を以て局に當つたので令聞があつた。不幸劇務の爲健康を損じて不歸の客となつたのは惜しいことで、黨の同僚は勿論市に直接間接にある幾多の人から惜まれた。君の葬儀の盛んであつたのは、則ちその反映であつた。

自分と君とは種々の緣因もあるが、實は互ひに舊情を叙する機會が無く、委しく君の徑路を知らない。上陳の中にも或は思ひ違ひや脫漏もあるかも知らないが、今は取調べる遑がない。

擱筆に臨んで一言したいのは、兎角才人は往々才に任かして道を踏み違ふことが有り勝であるが、君は苦勞人であるから常に堅實に歩んで嘗て歩を失したことがなく、義氣に富んで人の急を救ひ、財囊を空うすることが屢々あつたと聞いて居る。又青年期に自から苦學生であつたことを忘れず、學資のない書生を助けることを使命としたかの如く、住宅の附近に特に一戸を賃借し

て貧書生の宿泊所に充て、就學の世話をすることを趣味としたといはれてゐる。これに就ては夫人の内助も少なくなかつたらうと想像される。君は常に讀書を好んで、一種の人生觀を抱き、道學的宗教を奉じて、功利を貪らず、或る機會に隱退して、寺院式の居所を營み、讀書三昧で日を送らんとの考もあつたといふが、僅かに五十六歳を以つて死んだ人としては、餘りに早く悟脫に近かい考を抱いたものだと、親近の人から聞いて感心したが、窮苦は人を玉成するの實例を目のあたり見るのは斯人である。

亡友二人を憶ふ

自分は越後の高田に記者生活をした頃の亡友を時々思ひ出す。其頃の友人で存命の人は竹村良貞氏あるのみで、二三十年前に歿した友人が二人ある。共に慶應義塾の出身者で、小坂駒三郎、枝元長辰の二氏だ。小坂は後に東京で竹村を輔けて、帝國通信社を經營したが、氏の高田時代は中學の教頭であつた。紀州の人で自分より三歳計り年長であつたが、世故に通じた老成の人であつた。兩人共無妻の頃で、或る家に同宿して寢食を與にしたので最も親密の關係があつた。小坂は餘り酒を好まなかつたが食通であつて、或る時小坂は自から獻立を案じ、料理人に調理をさせて或る茶人を招待したことがある。小坂はなか〳〵器用な人であつた。時々閑を得ては連れ立つて五智や青海川邊へ一夜がけに遊びに出かけたことを思ひ起す。いつも自分が醉倒すると此人が深切に世話を燒いた。共に東京に出てからは、互ひに多忙であつたので、帝國通信社の會議には時々顏を合せながら舊情を語る機會がなく、永久に

別れたのは遺憾に堪へない。

枝元長辰氏は鹿兒島出身で、新潟日々新聞に聘せられて佐瀬精一と共に記者たりし際はまだ自分と交はりはなかつたが、同新聞が不況で解任して歸京の途次高田を過ぎ、自分を高田新聞社に訪ふて來たのが交りの始まりで、其折は雪中であつた。初對面ではあつたが、雪中歸京するのを氣の毒に感じ、自分の客として高田に引き留めて同宿し、毎日編輯を手傳はせ、時には自分に代つて社説を書いたこともある。文筆には長じてゐなかつたが、極めて純良の好人物であつた。自分は毎朝枝元の請ふに任かせて、バックルの文明史の原書を讀んでやつた。三四月高田に留まつたと記憶するが、其間は全く自分の客分で一錢でも社より出金させなかつた。この食客が或妓と戀に落ちたのも、青春時代無理もないが、自分には可なり厄介な食客であつた。しかし斯る關係で外泊する時は必らず私の許を得た純眞さに自分も此人を愛した。此人は東京へ戻つて、改進新聞といふ今の都新聞式の繪入新聞の社説書きとなつて、一時社會で受けたことがある。枝元の武骨漢に似ず、平易に書くことが案

外にうまいので、高田在留時代の筆に比して大いに進境のあるのに驚いたこともあつたが、行き違つて東京では一回も出遇はない中に早く歿した。それから數年の後であつたが、高田へ行くと、或友人が私を訪ひ來つて、君に是非遇つて貰ひたい女があるといふて私を拉してさる酒樓に登ると、そこへ出て來た妓が枝元の舊知己で、自分を見るとさめ〴〵と泣き出したのには自分もも て餘した。併し月下氷人である自分に對し、涙を以つて挨拶したのも至情であるので、酒次懷舊に耽つたことを想ひ起す。

豪快兒長田秋濤

長田秋濤が歿して既に二十年になる。同人は秋濤の爲碑を建んとして昨今其計畫中である。自分も長い間の交りであるから、此場合思ひ出るまゝを叙して、故人を偲ばんとする。

長田秋濤は名門の子で父銈太郎は佛語が堪能で佛國辨理公使となり宮內省の權大書記官となつた經歷があり、其門下に大森鐘一、平山成信があり、其親戚に成島柳北があり、關谷貞三郎があり、尾崎利準があり、同窓には井上準之助などがある。そして秋濤の交りは官海にも文壇にも藝術界にも廣汎に渉り第一流の人は抵ね交友であつた。

秋濤は父の遺鉢を紹いで佛語に堪能であつた。又佛蘭西文學に造詣があり、我小說界に又劇界に佛蘭西派の諸作を寄與したことが甚だ多い。又依田學海に學んで漢文に相當の力があり詩書を能くした。秋濤の一面は文墨の士であつたが、他の一面には多少の經綸もあつて、晩年圖南の策を建て南洋を

實踐するに至つた。

以上は秋濤の輪廓であるが、今考へると秋濤は不思議とも云ふべき存在であつた。較ゝ誇張したいひ方であるが、彼ほど愛すべき素質を有するものは無かつた。彼ほど磊落なものは無かつた。彼ほど人交りのよいものは無かつた。彼ほど情にもろく溫い同情あるものは無かつた。そして彼ほど人に屈しない男は無かつた。彼ほど貧を何んとも思つてゐないものは無かつた。彼ほど才氣があつて才子ぶらないものは無かつた。彼ほど教壇で書生に喜ばれたものは無かつた。こんな風に褒め立てると彼ほど圓滿の好漢は無いやうであるが、彼は餘りに放縱で、取締りが無かつたことが缺點であつた。彼は酒を好んだ。酒資に窮する時には平氣で知人に徵した。彼れの財囊は常に空であつたが、その滿ちてゐる時はこれを散ずることを何んとも思はず、欲しがるものがあれば惜氣もなく與へた。しかし世間はなか〳〵彼を理解しないので、彼は終に八方塞りで、酒屋も米屋も寄りつかず、朋友も多く離れたが、若し彼に相當の資財があり、堅實の番頭の彼の尻拭ひをして歩く者があつた

ならば、彼は立派な殿様であつたらう。豪い貴公子であつたらう。彼は志を得て後爲すべき放埒を、志を得ない前にやつたから、一時は窮盧に呻吟し、家の雨漏を傘で凌がねばならぬやうな悲境にも立つた。

今度碑を建るにつき彼が逸事錄のやうなものが頒たれた。自分は可成それに漏れたことを補足かた〴〵二三の思ひ出を語る。

彼の我儘を如實にあらはした有名な逸事は、逸事錄にもあるが、彼は初度の洋行の歸りに、錢もないのに一等船客となり濟まし、横濱に着くと、迎への人に二百圓拂はせて平氣であつたなどは彼の我儘を如實に語るものである。彼は若年の時山縣公に愛され、長じて伊藤公に愛された。一時公の落胤でないかとまでいはれたほど親密で、洋行のつれ〴〵などに、彼は公に調法がられた高級祕書であつた。彼に「戀の那破崙」の著があるが、あれは公の船中の無聊を慰するため譯說したものだといはれてゐる。彼は公の隨員として各國の元首に謁見し、宮廷の盛宴にも列し、花の如き宮嬪から勳章を着けて貰つた快感をしば〳〵聞かされたことがある。彼は粗豪に見へながら、外交の儀禮に通

じてゐるのは公の引き廻しに據るのである。彼は觀世清廉が或る失態から南天棒の抑留する所となつたが、それを救ひ出したのは彼の俠骨に由るので、當時自分と高田博士は湘南に居つたが秋濤は清廉を伴ひ來り、南天棒と交渉の始末を語り、清廉をして我等のため二三番の謠曲を謠はせたことがあつた。

秋濤が交つた藝術家の内に洋畫家の河村清雄があつた。此人も彼と投ずる所があつて、深く交つた。或る時河村は秋濤の家に宿し、翌朝彼のために畫を作るとて、板を求めたが、秋濤はそれを調へる錢がないので、浴場の戸を打ち破り、其板を供した。河村はそれに薔薇を畫したが如何にも逸品で自分も一見したことがある。彼が帝國ホテルの支配人たりし時、或る西洋婦人の室に呼び入れられ、戸をロックして裸體で迫られた。婦人の意は宿料を踏まんとしたのだが、豪放の彼も、これには辟易して辛うじて難を免がれたことを彼自身より聞かされた事がある。紅葉館のウェートレスお絹を愛し、遂に拉し去つて終生愛したことは有名なロマンスだが、何故か秋濤會が出した逸事錄には全然此事が無い。或は彼のために忌んだのかも知れないが、このロマンス

を缺いては、秋濤の傳記も寂寞を感ずるから、自分は特にこれを補足する。逸事錄はこのロマンスを省きながら、秋濤が京都に於て旅中の大隈侯の紙入から百圓札を失敬し筆者の私と共に酒資に供したといふ記事があるが、これは眞赤のウソで斷じて斯る事はない。彼は磊落であつても枕捜し同樣の事をする卑劣漢ではなかつた。自分もかゝり合で迷惑であるから、爰に誤を正して置く。

以上の如き瑣事を思ひ出せば際限なくあるが、此邊で筆を收めて、彼の人爲を評すると、彼は玲瓏玉の如き人物で些しも邪氣はなかつたが、不謹愼と放縱は彼の缺點で意外の寃罪を招いた。それは露探の嫌疑で法廷の審問を受けたことである。法廷の係り判事は偶然自分の門下生格の人であつたから、自分は百方秋濤の寃を辨じた。この嫌疑の次第は別に確たる事實があつた譯でなく、秋濤が意外に金廻りのよいのは、或は露國公使館あたりから貰つたのではないかといふ位のことであつたと思ふが、不思議に此事がやかましい沙汰となり、係り判事は自分の辯明に一應服しながら或る夜上官から特別の訓

令があるので有罪と認定することが已むを得ないといふてきたので自分は一驚を喫したが、今になつても此謎は解き兼ねてゐる。然るに今度秋濤會から出した逸事錄を見ると、左の如くあるので更に驚いた。

露探說の理由とする所は左の如し。

一、開戰の前年來朝したクロパトキン將軍が上京中、谷中天王寺にある居士の父君銈太郎氏の墓前に美事な花輪を捧げねんごろに參詣したところから見ると、クロパトキンと長田家は怪しい。

(銈太郎氏が露國辨理公使として滯露中クロ將軍と交際してゐたゝめに、思ひ出るまゝにクロパトキンが墓參したまでのことで問題にならない)

一、秋濤は露國公使館に出入して公使から金を貰つてゐた。でなければあんなに堂々と遊び暮すことは出來ない筈だ。

(居士が露國公使ヒトロボーと交つてゐたことは事實だが、公使と交つたのは居士一人でなく、居士が公使館に赴く時は必ず和田垣謙三博士と同道であつた。むしろ居士のみを疑ふ方が怪しい。また居士の自宅外に於ける

大名暮しは誰から金を貰はなくとも出來たものである所以は、伊藤公といふ後楯があり、佛蘭西の銀行家カアン氏からの月額數百圓の顧問料の仕送りもあつたのだから、飲んで遊ぶに不自由のある筈はなかつた）

一、稀には居士の「嫌英思想」や「北支南進論」を理由とするものもあつたが、居士の思想が日本を救ふ事を目的とした事は明かであつたが、「日英同盟」禮讃時代のことだから、有象無象には眞諦が分らなかつたかも知れない。明治三十四年九月公爵近衞篤麿、公爵伊藤博文、子爵榎本武揚其他朝野各派の贊成を得、榎本子會頭として後年の日露協會となるべき機關に、居士が中田敬儀、内田良平、鈴木於菟平等と共に幹事であつたことが注目されたなどは、まだ尤もらしいが、「クロパトキン將軍と須磨の浦に釣舟を浮べて水深を計つた」など大時代的なデマに至つては問題にならない。だが世論喧々囂々として秋濤居士伊藤公の身邊には危險が迫り、新聞紙は筆を揃へて書き立てた。だが、戰後この「露探事件」の正體は判然し、桂太郎公の旨を受けた大浦兼武一派の虛構であることに決つた。伊藤公の資本的背景に對する桂公の資本

的背景の戰鬪がこの虛僞事件を生み出した。いひ替へると三井三菱の爭ひであつて、桂公の常套的思考法からすれば秋濤居士を露探として世の攻擊の的とすることは、居士の親分たる伊藤公に波及することゝなり、伊藤公の失脚とまで行かなくとも努力をそぐことは出來る。加之、自己の背後關係者を喜ばせることになると、先づかうあつて、一石二鳥どころでなく、桂公は三四鳥を射落す算段だつたといはれる。外交的對立からいへば、居士の北支南進論に基く伊藤公の親露外交に對する桂公の親英外交の爭でもあつたが、根も葉もない虛構事件であるだけに、才物桂公も才倒れになつた形であつた。（桂公はこの種の戰法を用ひる常習者で、後年西園寺公をやはりこの種の手で倒さんとして矢張り成功しなかつた）。

自分は以上の記事を讀み初めて謎を解き得たが、それと同時に官僚政治家の陰險惡辣手段にあきれ返へつた。

秋濤は明治四十五年頃神戸に移り後に播州垂水に移つて、大正四年五月南洋諸國の視察に出かけた。これは伊藤公の遺命に基くといふが、某官廳から

囑託を受けた視察であつた。圖南錄は卽ち此視察を錄した紀行で、これより益ゝ自主的南進論を主張せんとしたのに、歸朝後幾ばくもなく病を得てアッケなく斃れたのは惜しむべきである。自分は大正四年の十二月校用で大阪に出張してゐて、稀有の事だが、微恙に罹つて旅館に寢てゐると、秋濤が訪ねてきていふには、南洋の紀行を漸やく書き上げたが、どうかこれを早大出版部から出版して貰ひたいと、風呂敷包から取り出して草稿を示された。自分は直ちに諾したが、多少直すべき所があるからといふて、後から草稿を送るといふた。その際に秋濤の語るに、俺には危險の病がある。一旦病毒が頭に上れば、それで往生だと、戯れであるかの如くいふのを寢ながら聞いてゐたが、別るゝ時南洋から薫香を持つて來たから草稿と共に君に遣るといふたのが最後の言葉であつた。然るに三日程經つと、其訃音に接したので實に驚愕した。秋濤の病は尿毒症であつて、果して頭に上つた爲往生を遂げたのだ。草稿も薫香も其後余の許に來らず、草稿は林田雲梯其他の友人の手で出版され、自分は約を食んだのではないが、自分の手で出版しなかつたことを遺憾とした。死

に瀕してゐる人に訪はれ、自分が病床で應接したことなどを思ふと眞に感慨無量である。

外人スネルの事

明治の四年頃自分が新潟學校に在學の少年時代、スネルといふ外人が新潟にゐた。古町の表通りに木造の洋式建築があつてそれに住してゐた。この建築はペンキも塗らない、澁引きの板普請であつた。時々長幹の主人が犬を伴ふて街頭を徘徊するのを見た。それが武器を輸入して會津庄内などに供給した商人で、官軍が新潟に攻入つた時打ち放した大砲も此男の輸入に係るといはれたことをあとから明治初年發行の小雜誌で見たこともあるが、併し委しいことは一向知ることが出來なかつた。然るに木村毅氏の書いたものを見て、初めて此男が意外の山師であつて、會津藩に調法がられたことなどが相當委しく分つた。此男は銃器彈藥を賣込んだのみならず、砲術を教へたともある。大倉喜八郎などは此男の方へ出入して武器賣買の呼吸を覺えたのだといはれ、長岡の河合繼之助にも接近して武器を用立てたともいはれ、武器の仕入れに上海へ往復したこともあり、十五代將軍慶喜公の弟昭武が外國か

ら歸朝の途次、隨伴の澁澤榮一に遇つて、北海道を共和國として德川氏を大統領にすべしなどゝ建策して澁澤に斥けられたなどの逸事もある。スネルが上海から歸つて來ると、會津も降伏してゐたので、今度は會津の爲亞米利加のカリフォルニヤ州に移民を獻策し、明治二年彼は妻子の外十數名の移住者を伴ふて、茶桑竹などを移植用に携帶し、カリフォルニヤに於ては、會津の公子も跡から渡來して來住するにつき、その先發だなどゝ大袈裟の吹聽をしたが、此移民は全く失敗に歸し、彼は妻子と共に夜逃げをして、同行のものは英國に取殘されてミジメの目に遇つたが、彼は再び日本に歸つて來た。多分自分が新潟に見たのは、米國から逃げ歸り、會津に入ることも出來ず、新潟に住したからであらうと思はれる。

スネルが經營した植民地は名づけて若松といふたとあるが、會津が背景であつたことがこれで知れる。彼は一時會津に信用せられ、移民費も會津から出したらしい。彼は其頃松平姓を冒し、相當地位ある日本婦人を妻とし二人まで子があつたといはれてゐる。なか〳〵の大山師だが、米國へ伴つた日本

人

人を置去りにしたので、皆々に憎まれ、日本に歸る途中殺されたといふ評判すら立つた。彼がカリフォルニヤに殖民に着手したことは事實で、その蹤は今も存してをり、其際に掘つた井戸や植ゑた木も今なほ殘つて居るといはれ、近年日本人の渡航するものは其遺蹟を訪ふものが多い。この遺蹟の内に一基の女性の墓がある。それはスネルの小兒のおもりに連れた十七歳の女子の墓で、此女はおけいといふて置去りを喰つたものであるが、或る米人の家に身を寄せてゐたのが十九歳で歿し、墓は大理石で作られ、日本文字が刻されてゐるといふ。此墓は久しく淫賣婦の墓と思はれ輕視されてゐたが、日本移民第一號の女性の墓として今は日本の訪客に珍とされてゐる。スネルの妻は如何なる素性か、其所持品の内に貴族的の衣裳や調度があるので身分ある婦人と推測されてゐるが判然しない。おけいは栗橋邊の農家の娘で村の青年と戀に落ち、驅落して横濱方面に困つて居たのが、スネルに誘拐されて米國に渡つたのだと傳へられてゐる。

文藝

教育機關としての私塾

統制ある教育法の下に大中小の學校が起り、全國にそれが普及して國民教育が行屆いた今日、顧つてそれが無かつた當時の教育法を追懷すると、特に隔世の感がある。當時とても、教育は行はれたが、それは隨分亂脈のことであつた。各藩に於てはそれ〴〵藩學があつたが、それは主として藩士の子弟を教育する機關であつた。民間では兒童教育に寺子屋があつて讀み書きを教へた。高級の教育には最高學府として江戸に昌平學校があり、心あるものはそれに學んだが、多くは私塾に學んだ。私塾といひ家塾といひ或は村塾などいろ〳〵の名はあつたが皆同じもので、德川期に於ける國民教育の大切な補助機關であつた。

大概當時相當の學者の存在してゐる所には、其學者が家塾を開いて子弟を教へた。例へば中國筋の菅茶山の廉塾などは、頼山陽が一時塾頭となつたので、地方ながら今も知られてゐる。江戸は勿論學者の淵叢であつたから、多く

の家塾私塾があつた。そして維新後までも成立してゐた。乃ち安井息軒の塾、芳野金陵の塾(二代目は芳野世經)三島中洲の二松學舍などがそれである。洋學の私塾には中村敬宇の同人社、尺新八の塾の外に最も大きいものに福澤の慶應義塾がある。醫學の塾には長谷川泰の濟生學舍、女流の塾には跡見や棚橋の塾、大阪では藤澤南岳の塾、緒方洪庵の醫塾など一々數ふるに遑がない。

地方に在つて學問に志あるもので上京して以上の私塾に就たものは無論多かつたが、地方に於ても學者のある所には自然私塾があつた。大抵當時地方の富饒の家の主人は學識があつたので、鄕黨のため教育奉仕で塾を開いたから、好學の徒はそれに入つて學ぶものが多かつた。尤も私塾家塾といはずおのづから同樣の事をやつたものもあつた。乃ち富饒の素封家などは近傍の學者を迎へて、それを今日いふ家庭教師として、己れの子弟を教育せしむる傍ら、近鄕の學に志あるものを延いて學ばしめた。これも一種の私塾と見られないこともない。この迎へられた學者は二年も三年も其家の客となつて、親族當ならぬ關係を生じたものもある。自分の鄕國越後などは富豪が多い

ので、自然其家の主人に學問があり、大きな家塾を開いたものも二三あつた。殊に自分の鄕里は天領であつた關係から偶ゝ好學の代官が來て鄕黨を教育したことが因緣となり、稍ゝ組織立つた教育が行はれた。有志の醵金で學舍まで設けてそれを弘業館と名づけ、自分も幼少の頃はその教育を受けた。

私塾は或除外はあつたにせよ、概して極めて小規模で、塾生は多く家庭の人として取扱はれた。隨て束脩も月謝もなく、食費すら取らなかつた塾もある。遠來の塾生は寄宿をしたが、特に寄宿舍の設けがあつた譯でなく、宛ながら學僕の如く家庭の人として、掃除位の家務を助けた。素より家塾は營利を目的とするもので無かつた。勿論多數の學徒を收容した塾では束脩や月謝や食費を取つたのもあるが、維新後まで存續した東京の家塾の中には下宿屋に代用されたものもあつた。貧生は費用がかゝらぬ所からこれに宿して勝手なことをやつた。これは家塾の頽廢で偶ゝ規模が大きく寄宿舍の設備があつたので、却て此禍を招致した。

私塾は右の如く概ね小規模であつたから、先生自ら箇々の塾生に教へた。

塾頭のある所では、先生を手傳つたが、其教へ方はよく屆いた。講釋でも輪講でも作文詩などでも、先生が親身に教へたから、門生もしみ〴〵その教を會得することが出來た。此點からすると一堂に幾十の學徒を會して一齊に教授するのとは甚だ趣が異つて教育が徹底した。殊に先生が全く營利を離れて教へたから、眞の師弟關係が生じ門人は長く師恩を忘れなかつた。乃ち倫理的效果は確かに私塾教育に多かつた。今の多數を會しての教育は種々なる教師がそれ〴〵の科目を受け持ち學生の箇性はなんであらうとそれには頓著なく、ただ講堂で一と通り講義をすれば、あとは路人同樣といふ始末だから、師弟の情誼も薄く、兎もすると月謝で學問を購ふといふやうな觀念を持つものすらあり、倫理關係は起りやうがない。支那では營利的教育を皮肉つて學店と名づけてゐるが、今の學校教育は惡ざまにいへば其趣が無いでもない。

昔し百般の藝術に師弟の關係がやかましく、その奧義を教はるまでには、多くの歲月を要し苦辛の修養を積まねばならなかつたが、門人の內に其家庭に生活することを許されたものを內弟子といふた。此內弟子こそ師の身邊に

つき纏ひ、日常師の動靜を見、師に親炙の結果師の教を受くることが、他の門人に比すれば甚だ多く、成功者は內弟子に多かつたので、一般の門人は內弟子を羨んだ。實は師に親炙の機會が多ければ斯る利得がある筈である。私塾に於ける塾生もいはゞ內弟子の如きものであるから、その教育の效果も他の藝術同樣著しいものがあつた譯だ。

私塾は專ら漢學教育をやつたとはいへ、漢學には種々の學派もあつた。又漢學の外に皇學を主とした塾もあつた。實は混然たるものであつたが、塾の中心はいふまでもなく統率者たる塾主で、その人には主張があり、又特殊の見識もあつて、それがおのづから塾風をなした。勿論塾主の性格もさま〴〵で、奇拔な人もあり溫籍の人もあり、謹嚴の人磊落の人と其性格は異つても、多くは何等拘束を受けない民間の自由人であつたから、塾生も自由の教育を受けた。當時の學科は今日の如く複雜廣汎で無かつたから、學徒は深く一科を修め、隨つて圖ぬけた逸材も出た。當時修業に辛苦が必隨條件であつたので學徒は辛酸を嘗めることを意に介しなかつた。彼等はこの點に於て硬教育を

受けた。この教育は心膽を錬るにも效があつた。當時は官祿を受くる人を造るよりも獨歩の人を造ることが主であり、技師的人物を造るよりも經世的大器を造ることに意を用ひた。感傷的女性的の性格が排斥せられて線の太い人間が養成された。血氣の青年は往々軌道を逸する腕白もやつたが、元氣旺盛で他の塾生と喧嘩もやつた。悲歌慷慨は彼等の最も好む所で、英雄を崇拜し、俠客を喜び、義のためには身を犧牲にするの道義心もあつた。如斯は自由人の私塾に特有の薫陶ともいへる。自分等の經驗によるも、帝國大學の初期には教師は皆自由人であつて往々學徒と結托して相剋的運動を爲すこともあつたので、それを取締るため教授を官吏としてから、紛爭は絶えたが、學生の元氣はその後沈滯して舊日の觀が無い。教師の性格が如何に教育に影響あるかは、この實例に就ても見ることが出來よう。

幕府の末期には一世の風氣が漸やく幕政を忌むこととなり、それが獨立獨歩のあらゆる私塾に反映して慨世憂國の氣が漲り、そこへ外國との接觸から生じた國難が拍車をかけて、所謂志士なるものが天下に充滿した。そしてそ

の溫床は實に私塾だつたのである。彼の松下村塾の如き微々たる小塾が多く有爲の人物を產み出し、明治の新天地に大なる寄與をしたことは何人も知る所だが、これなども吉田松蔭の如き大人物の薫陶に由ることではあるが、當時の風雲に駕した好例であるといはざるを得ぬ。

井然たる教育法が全國に布かれた今日、振り返つて舊時の家塾や私塾の散漫なる教育を見ると、優劣の比較は愚の至りであるが、併し長短はどの教育にも存在する。今の國民教育は行屆いてもゐるが、其造就し出す人物は皆技師的人物である。技師的人物は勿論今の世の中に必要であるから、これを排斥するのではないが、技師を作るの教育は經世的人材を造るの法ではない。人材教育は技師を養成する教育を超越するもので無ければならぬ。此點に於て今の教育法に缺陷がある。舊時の私塾教育に弊なしとはいはぬが、人物を造就するには却つて一長があつたと信ずる。といふても今更私塾制度の復興を主張するものでない。併し私塾制度の長は採つて以つて人材教育の志料とし、一般國民教育の外に別に造士教育を經營するの必要があると信ずる。

昔の大衆教育を憶ふ

昔各地に寺小屋があつて兒童に讀み書きを教へた。尙ほ大人に對しておのづから一種の教育法があつた。西洋の所謂るアダルト・エデュケーションともいふべきか、それは專ら市井の間に行はれ、その教育を司つたものを心學者と呼んだ。此心學者は通俗講話で倫理道德を教へ、齊家處世の道、兼ねて經濟の術をも說いた。この講演を聽くために、有志は講社を組織し、其會員を講中といふた。この講中は講演を聽く外に、座右の銘ともいふべきものを印刷し、施本として頒つやうなこともした。此座右の銘はどんな野人にも分るやうに巧みに書かれ、繪も添へてあつたが、講中は柱などに貼りつけて常に其教を守ることを勸めた。この教育は相當の效果があつたが、それも其筈、指導者は立派な學者であつた。最も著名な人には石田梅巖、手嶋楮庵があり、亦鳩翁と呼ばれた人もあつた。此等の人々は多くの門人、歸依者を各所に持ち多く通俗の書を著はした。彼等並に其門流の講話は同じ聖賢の教を說くに、儒

者が堅苦しいことをいふのに反して極めて平易に且面白く語り、巧みに譬喩を用ひ、隨分詼諧をも加へたから、聽者はその講話に陶醉し、宛ながら寄席に臨んだやうに樂みつゝしみじみと教を受けた。この心學者流は儒者と異つて、世間の實際を知るの通人で、その言ふ所が世相の琴線に觸れ、實地に卽した說法であつたから、聽者は皆頭を下げた。我々は其書き殘された鳩翁道話などを讀んでみて、その說き方が如何にも深切でその譬喩が如何にも巧妙であるのに敬服させられる。この講話で經書の本文を長く腦中に印するものもあるが、全く說明の巧妙に由るのである。

この心學者流の脈を引いて、種々通俗的の教訓書が一時出版された。乃ち「商人生業鑑」などいふ書もその一例である。此頃赤堀又次郎氏の史談隨筆を閱するに、此書から大黑天の像に就ての一說が引かれてゐた。心學者流の說き方の一斑も知れるから、左に拜借する。

大黑天は福の神なり、橋板にて作るがよし、之は人の足の下に住む心にて、身を愼み、少しも高ぶらず、頭巾は上より押へる心、上まぶたを厚く作るは、下を

見て上を見ぬ心米二俵ならでは持たぬは足るを知るなり、ニコ〳〵笑ふは愛敬の心を現はし、分限よく知惠かしこくても隱れ蓑、隱れ笠に包んで、人に見せぬやうに愼み僭上の心なく、黑米飯を食して奢をたしなみ、打出の小槌は油斷なく手をはたらかせ、かせぎいだし袋は持ちたるものを片時も放さぬ用心とおもひて信ずべし。

とこんな風に說いてゐる。故事つけであるとはいへ、說き方は如何にも巧みである。大體心學者流の敎方は當時の事情に應じ消極的であつて、致富の法も儲けるより失ふなと敎へ、冒險を戒め物は八分目といふて控へ目を說き、鑵持はやりを使はぬといふて、金持が金をつかはぬの意を寓し、財寶は土中に埋藏して人に知らすな。人がそれを見たら蛙になれ、自分のみに金となれと祈つたのも、皆消極的致富の敎であつた。

心學者流は常に節儉を說いたが、勘忍函を作ることを勸めた。金錢を使ふ時辛抱して一割位の金を使はず、此函に投込んで置けば、自然に溜つて他日の用に供することが出來ると敎へた。或るものは子孫への遺言に、金は漫りに

借りてはならぬ、併し時には借りて早速に返金せよ。絕對に借りないといざ、借りねばならん時が來ると、人は破產と合點するものだといふた。嫁を娶るには成るべく叔伯父母に育てられた女子を選べ、この女子こそ苦勞を知り役立つものだといふてゐるなど皆實驗から捻出した敎で、苦勞人でなければ知らないことである。

以上の如き市井の大衆敎育はすべて消極に偏し、今の時勢に飮らないやうでもあるが、併し中には今時でも服膺に價する敎が無い譯でもない。別して軍國下の今日持久戰の覺悟を要する時に於て、資源の節儉が最も大切である。金箔や金粉の節約、ガソリンの節儉、綿毛の節約、包紙の節約等は旣に實行されてゐる。今日は積極的に儲けるよりも、寧ろ無駄を節する時である。一錢でも節約して貯金をすることが、國家に忠なる所以である。幾億の國債も國民の貯蓄が旺盛であれば敢て憂とするに足らぬ。國家總動員といふも、畢竟此心がけでなければならんのだ。現下の國難軍事行動は飽まで積極で無ければならんが、銃後の事は寧ろ心學者流の說に學ぶべきことが多い。私が昔の敎育法を憶ひ出づる所以である。

鐵の鍛錬に倣へ

我等は昨今頻りに鐵饑饉の聲を聽く。鐵價が日一日昂騰して鐵筋の建築工事は中止するの止むなきに到り、政府も鐵の儉約をつとめるに至つた。これは畢竟軍備擴張の世界的競爭に因るもので日常の談柄も自然鐵の問題に觸れ勝で、鐵には全然門外漢である自分も或る席で左の如き說をなした。

冶金界には鍛錬が最も大切で鍛錬の結果は一片の粗鐵も黃金に齊しい價を有つに至る。或專門家に聞くに原價五圓の銑鐵を或程度鍛錬するとそれが十五圓の釘となり更に一層の鍛錬を經ると三千圓の針となり、尙更に高度の鍛錬を經ると鋼(ハガネ)となる、これが黃金に比すると一段價の高貴のものであるから鍛錬が如何に冶金に大切であるか容易に理解さるゝであらう。

日本刀は日本獨特のもので如何に科學が進んでも分析作用でこれを造ることが不可能とされてゐる。實に鍛錬は力＋Xで超科學のものであるから

だ。このXは何であるか、一種の神祕のものである。全體に大切なものは双金で斬れ味の利鈍は繫つてこれにあるが原料は何かといふと玉鋼といふ鐵でこれを幾十回も鍛へた結果が双金といふのである。斯くいふと簡單な工程らしく聞えるが實は頗る複雜の工程で原料を幾回も碎いたり折つたり重ねたり割つたりして火に投じたり水に浸したりして、十回二十回或はそれ以上鍛錬の工程を累ねて初めて双金となるので、その勞苦は眞に涙ぐましいものである。

この工藝には古來峻嚴な作法があつて工場には一切の不淨を避け、工匠は齋戒沐浴して精神の統一を圖り一心不亂で無ければならぬとされてゐる。この工場は神聖なる靈場で宛ら精神の修養場と一般、工匠の精神が透徹せねば成功されぬとされてゐる。いひ換へれば工匠の精神が鐵に乘り移らねば鐵を靈化し得ないとされ、種々の祕傳はあるにしても最も大切な條件はこれであつて、精神の乘り移らない刀は死刀である。この意味に於て刀は確かに活物である。工匠が終始敬虔の態度を守るのも此故で、佛師の佛像に一刀三

禮の禮を執るのと同樣である。日本刀には日本の魂が籠つてゐる。この點斷じて他國の追隨を許さない。

＊

私は不束ながら冶金家や刀匠の口眞似をしたが實はこれを人事に欽めて見たいと思ふのである。活物にあらざる鐵ですら鍛錬を經れば活物に近いものとなる。

活物である人間は何故に鍛錬を忽せにするのだらうか。人間の能力の發揮は鍛錬に因るものであることは特に絮說を要しない。同じ教育を受けても大器となるものがあり鈍物の嘲りを受けウダツのあがらないもののあるのは鍛錬を經ると經ざるとに因るものが多い。世の諺に苦勞は人を玉成するといふが、多くの成功者は皆苦勞人である。苦勞といふは卽ち鍛錬であつて、その苦勞の大なるものは火に投じ水に潛るの甚だしいものもあるが名刀を得るに幾回か双金を水火に投じねばならぬと一般で、學業が如何に優秀でも苦勞の經驗のないものは未完成の人で到底世に立つては人後に落つる不

幸が生ずる。活社會は戰場であるから鍛へない人はその殺伐の場に立ち切れない。まして覇を爭ふなどが出來よう筈はない。

我々はしば〳〵耳にすることであるが某は天才であるが惜しむらくは夭折したとか、某は富豪の子だが營養足つて才が伸びないとか。斯る訴へを聞く傍ら、君等の耳を驚かすのは、某宰相は嘗つて役場の給仕であつたとか或は某工場の職工であつたとか、牛乳配達であつたとかいふ事實である。併し一考すれば驚く可きことでない。

要は鍛錬を經たるものが成功し、然らざるものが成功しないといふ當然の理合に基くものである。これを思ふと學業が成つたといふて安心が出來ない。彼等の修業は半途である。學業を終れば別な道場で修業せねばならぬ。それは活社會である。活社會の槌に叩かれ水火を潛つて鍛錬を經ざればその人の利鈍はまだ定まらないのである。今の教育は理智に偏して心身の鍛錬を忽視してゐる憾がある。私が鐵の鍛錬に倣へといふ所以である。

名家書翰蒐集の思ひ出

私は往年名家書翰の蒐集に沒頭したことがある。十數年に渉つて相當の收獲があつた。有體に白狀すると、編纂とか研究とかの目的で、特殊の志料を得んと試みたのでなく、漫然と手當り次第儒者、歌人、畫家、俳人の區別なく、知名の人の尺牘であれば、何んでも寄せ集めたのが手初めであつた。これを始めた動機は、世間の富豪は一幅幾千圓の書畫を購ふが、自分のやうな窮措大はその眞似が出來ない。しかし幾千圓を拂つて一幅の書畫を購ふよりも同じ價で幾百幾千通の名家の筆蹟を購ひ入れる方が遙かに利巧で趣味も深い筈、二三千圓の金を費したら、恐らく大概の名家書簡は手に入るであらうと。最初このやうに高をくくつてやり出したので、實は貧乏相應の發意であつた。

何んの蒐集でも同じことだが、初めは甚だ容易で、追々困難を感ずる。名家書翰など著名の人のは、書畫屋に搜しても續々手に入る。それが強ち高價で

もないから、手に唾してあらゆる書簡を徹底的に蒐集したいやうな氣も起つた。しかし人間の欲望は際限の無いもので、およそ有觸れたものが集まると、欲望が更らに增長して、獲るに困難なものが欲しくなる。儒者ものでも畫家でも名僧や歌人俳客などでも、それぞれ系統を立てゝ集めて見たくもなる。例へば徂徠の尺牘だけでは滿足が出來ず、その門流の尺牘を集めたくなり、芭蕉の手紙だけでは物足らず、十哲の書簡を集めたくなる。斯うなると、漸く蒐集に難きを感ずる。なほ欲望が益々進展すると、工藝家の書翰を集めたい氣も起る。これは筆蹟として僅かに書翰だけが存するものであるが、書畫屋などの取扱はないものであるから、それを得ることが甚だ難い。女流の書翰なども歌人俳人は別として、多く存在しないものであるから、これを得ることが難い。但し斯る得易からざるものを得んとするのも一つの興味で、一概に熱中するとなると、書翰蒐集もなか〳〵骨が折れ、僅かに二三千圓を投じて徹底的に蒐集せんなどの初一念はいつしか解消して、追々多費を要することになる。

私は最初德川期以前にも遡り、戰國時代の古簡をも得んと志したが、餘りに廣汎に渉るの不可を思ふて斷念し、德川期に限ることゝした。いはゞ德川期以前のものは古文書として一類をなすもので、多くは短簡で形式のみが多く、德川期のものゝ如く情味が無い。又明治以後のものも一時除外したが、遂ひにはこの除外を破ることになつた。右の如く範圍を狹ばめて、博搜をつとめたが、何んとしても手に入らないものが若干あつた。それを得るには如何なる犧牲をも辭さなかつたが、終に手に入らなかつた。私の乏しい經驗に由ると、名家手簡の稀れなるものは、木下順庵、中江藤樹、山鹿素行などで、この内僅かに順庵を得た。順庵は新井白石などの師で、錦里先生といはれた大家だが、何故か墨蹟が甚だ少なく、これを得るには大犧牲を拂ふことが已むを得なかつた。

蒐集も廣汎に渉り或る程度を超へると廉價なものでない。併し私の經驗に由ると、一萬二萬の資を投じて珍幅を得るよりも娯樂と興趣は手簡の方に

確かに幾十倍するものがある。その趣味の一端を擧げると、多數の書簡を寄せ集めて時代で類別すると、その時代におのづから特徴がある。例へば赤穗義士の手簡には元祿的の特徴のあることは爭はれない。地方的にも自づから一脈通ずるものがある。水戸の烈公や藤田東湖や櫻田浪士の書簡を見ると、水戸風が漂つてゐる。學者の門流にも勿論相通ずるものがある。卽ち徂徠派や闇齋派、賴家等に皆爭ひ難い脈絡が通じてゐる。系統を立ててそれ等を見ることも一興であるが、書信は多く内事を語るもので、往々祕密に屬するものがあり、意外の事が知れるので、それも一興たらずとしない。又書信ほど其人の性格を赤裸に現すものはないから、人物研究にも大切な資料である。森鷗外が北條霞亭の傳を書いたが、霞亭其人を躍如たらしめたのは、全く多くの遺簡が其材料となつたからである。家族交友の間に取交はされた書簡の情味を味ふことも頗る興味のあるもので、或は詩歌や繪畫を點綴したものになると一層の興味があり、時代々々に流行の書簡箋があつて、種々の地模樣や彩色に飾られ、封筒にも時代々々の特徴があり、それ等を檢討することも一興、

であるが、書や文體を見て得る所のあるのはいふまでもなく、追々蒐集したものを分類して裝潢に附し、架上に載せて見るのも一快たらずとしない。

書簡蒐集にも流儀があつて、代表的に一人一通を得ればそれで滿足する人がある。或は幅などに仕立てるため長簡を喜ばない人もある。これ等は書畫趣味家に屬し、內容に重きを置かない人である。書簡の興は筆蹟の如何にも由るが、內容の豐富にあることは勿論である。自分などは重複を厭はず寧ろ長簡を喜ぶ側である。蒐集の途上には續々重複のものに接着するを免かれないが、重複を避けようとすると欲しいものを逸することが屢々ある。蒐集家は好む所に偏して某々大家の尺牘に限り、それのみを多く蒐集する人がある。それ等は豐富の處に價値があるから重複を厭ふべきでない。但し筆者が平凡であれば例外である。兎角書簡を選ぶの要訣ともいふべきは名家が名家に與へたものが上乘である。如何に名家の書簡であつても宛先が平凡の人であつては、其內容は見るに足らないものが多い。大人物が大人物に

與へたものには、下に置けない內容のあるのが常である。

私はよく人から君が十數年精根を凝して數百卷集めた書簡の中で、君の珍重するのはどんなものだと問はれて、答に窮することがあつた。私の珍とするものは少なくないが、珍重がるに種々の意味があつて、大づかみにこれ〳〵といふことが出來ない。稀覯の點にも、能筆の點にも、能文の點にもそれ〴〵珍重すべきものがあるから、實物を離れては說明も出來兼ねる。唯に內容の點から、自分の珍としたものを少しばかり擧げて見ると左の如きものである。

澤庵禪師の長簡　澤庵時代の書簡は概ね短文であるのに、これは一丈許の長簡で、世間で澤庵は權門に媚び、權門からの依賴であると早速揮毫するといふ評判を辨疏した長文で、自分(澤庵)が柳生但馬守の依賴とあると、打措かず直ちに揮毫するのを見て、彼是非難するのであらうが、但馬守には再生の恩誼があるから特別であるといふて、細かに尊號事件で柳生家へ身を寄せた經緯を書いてゐる。

加茂眞淵の假名文　これは眞淵門下に其人ありと知られた才媛倭文子が、病氣療養のため伊香保の溫泉に行く時、送別に寄せた長文で、宛がら慈母が子をいたはるごとく、細事に至るまで嚙んで含めるやうに書いた慈恩の書簡である。

雲華上人の佛像に關する書簡　雲華は本願寺の學僧で、賴山陽とも交はつた風流の人であつた。此僧が巡錫中或る地方の豪家で奈良元興寺の舊藏である小佛像を見て、垂涎三尺に及び、人を介してその割愛を得んと熱中し、往復十幾回に及び、終に其望を達した時歡天喜地と喜んでゐるが、此一件書類が纏つて一卷となり、無心をいふて目的を達するまでの經緯が、卷中の書面で悉されてゐて、一讀大いに趣味を覺へる。

橘曙覽が君公の台臨を報じた書簡　曙覽は越前に於ける近世の大歌人で、早く隱退して乞食同樣の陋屋に居ると、或る時春嶽公が不意に駕を枉げられたので曙覽も意外の事に驚き、且つ終生の光榮として喜んだが、其際の喜びを委しく書いてをるので曙覺の手簡中の壓卷である。

池大雅の和歌に就ての尺牘　大雅堂は冷泉家に就て和歌の教を受けたもので入門間もなく疾病に罹り、身を動かすことが出來ないので、已むなく妻の滿池を代人に差出すとあつて「朝に道を聞き夕べに死すとも恨なし」といふてゐるのが如何にも大雅らしい面目がある。妻滿池は卽玉瀾女史である。

夜半翁蕪村の手紙　此手紙は或る版木屋に與へたもので、寒菊の畫を彫らせ彩色を加へさせて見ると、如何にも彩色の加へかたがよくないので、校正摺りにさん〳〵筆を加へて指圖をなし、それに一簡を添へて、餘意をこと細かに縷述してゐる。蕪村の俳畫などを見ると、如何にも磊落さうに見えるが、苟くもせざる細心のほどが此手紙でわかる。

韓天壽袴の注文の手紙　韓天壽は伊勢の豪家で三井家の親族で名を中川長四郎といふた。法帖道樂で身代を潰した程の趣味家であるが、此手紙は袴を注文するにつき縞柄の實物標本を紙中に張りこみ、なほ其上に自身繪の具を以つて縞を畫してをる。これもその細心の一端を語るものである。

渡邊崋山曲亭馬琴宛書簡　崋山は馬琴の嫡男琴嶺と畫では同門の誼みがあつたので琴嶺が死ぬと、馬琴の依頼で崋山はその遺像を畫してやり、厚く悔みを陳べ、その内閒を得て、貴老の肖像をも畫すとある長簡で、饗庭篁村翁珍藏のものであつた。

柳亭種彦の長簡　これは名古屋の門人仙果に與へた長文で、水滸傳の譯し方を教へ、種々家事上のことにも及び、面白い手紙であるが、種彦の書簡にこれほど長い情味の籠つたものはない。これも篁村翁から割愛を得たものである。

田能村竹田の長崎紀行入の長簡　これは竹田が初めて長崎に入り、支那趣味の種々のものを目擊し、宛がら洋行でもやつたかの如く喜び、長子に報じた手紙で、その長さは七八尺にも及び、長崎紀行とも見るべきものである。

自分の珍とした書簡もまだいろ〳〵あるが、拙ない筆では形容も出來兼ねるので僅かに一端を擧げたに過ぎない。特に注文があつたから、それに應じ

たまでである。

私は書簡蒐集で多少のレッスンを得た。いふまでもないことだが、古人の書簡を多く渉獵すると、手紙は文も書もよく書かねばならんとしみ〴〵感ずる。拙なる手紙は設令ひ相當知名の人が書いたのでも、保存するに氣乘りがしない。手紙の上手下手が處世に大切な關係があることが分る。賴山陽の文に於ても書に於ても手紙では古今獨歩の名人と私は思つてゐるが、あの人の手紙が如何に多く保存されてゐるかは、民友社編纂の二册の書簡集を見ても分るが、あれに漏れたものが實は少くないのだ。あの人の書簡がなぜ多く殘つてゐるかといふと日本外史を著して勤王の名を博したためではなく、存命中友人でも其手紙を粗末にしなかつたからで、あの人程手紙をうまく書く人は學者文人の内に無い。あの人は意動けば筆これに隨ふので、どんな手紙でも情味が濃やかで、人を恍惚させる妙があるからだ。學者に書を能くする人はいくらもある。徂徠などは山陽以上だが、手紙となると山陽程の妙がない。兎角能書の人が手紙上手とは極つて居らぬ。名高い書家は立派な字を

書くが、手紙となると甚だ拙な人がいくらもある。手簡の妙は習熟から生ずるものであることを知つた。これも一つ得た教訓である。學者は多く世事に疎いから、學殖はありながら人情を動かす手紙が餘り多くない。漢文などで書いた手紙は何んといふても我國では第二等に落る、どうしても情がうつらず、委曲の意が盡せない。

手紙は情の使者で、書狀といふは書情であり狀袋は實は情の袋である。支那の詞に「山に上つて虎を捉へるは易く、人に就て金を借りるは難い」とあるが、手紙を上手に書くものは、巧みに人の心を捉へて、快よく金を出させる。情意の至つた手紙ほど力强いものは無い。隨つて處世の術としても手紙に習熟せねばならぬ。名家書簡を集めることも、實は手紙を習ふ一方便である。

兎もすると名家手簡を單に書畫の一類となし、一知半解の書畫商に雷同して、書畫値のないものは顧みず、委棄するが常であるけれども、書簡を愛玩する人はこの陋習に超越せねばならぬ。これが私の得たレッスンの一つで、書簡

を保存する要もこれから生れてくる。昔芭蕉に飲食の世話をした人は、毎日寄せてくる手紙をすべて天井に貼つたといふが、これも散佚を防ぐ一法に相違ない。大隈家に幾萬通の書簡が夫人の聊かの注意で保存され、私は幾日か手紙の太洋に棹す思をなして調査した經驗もあるが、幸ひに保存されたればこそ、傳記を作るに非常の助けとなつたのである。私は多くの書簡を集めた際に、何人とも知れない不明の人の書簡が時々他の書簡に交つて手に入つた。私は或る經驗から之を決して棄てなかつた。といふのは變名や戯名などで知名の人の手紙を發見することが再三あつたからである。師友の手紙を漫りに棄ててならぬことは絮說を要しないが、地位ある人は自然地位ある人と交はるから、この人々に向つて私は特にこの注意を與へたい。書簡保存の必要を切實に感じたのも亦書簡蒐集より得た一經驗である。

良寛禪師の手紙に就いて

良寛禪師の手紙に就いて感想を書けとの依頼であるが、自分は餘り多く禪師の手紙を見て居らぬ。禪師の書簡集は未だ出版されても居らず、相馬御風氏の書かれた隨筆も手近にないので、調べて見ることも出來ないから、曾つて觀た僅かの手簡に就て朧げな感想を陳ぶるに過ぎない。

良寛は筆無性の人でなく、字を書くことが好きであつたやうに思ふ。人に頼まれもしないのに興至れば鍋蓋や屏風や幅などに書き散らして隨分人を困らしたことが度々ある。自分の友人の家に宿した時、其家の愛藏の應擧の仔犬の幅に狗子の賛を書いて、主人を驚かしたなどは其一例である。當時乞食坊主と侮つた此僧に、大切の幅を汚されたといふて主人は歎息したといふが其幅は後に良寛の讃があるため重んぜらるゝことになつた。自分も見たことがあるが實に優れたものであつた。これは餘談であるが、良寛は書を能くしながら又書くことを好みながら、手紙はメッタに書かなかつたやうに思

ふ。備中の圓通寺に出かけてから、二十年の久しき禪師の消息が一向に知れず、近年研究家が調べても其間の事が何も分らないといふのも、鄉里と全く消息を絶つたためであらうと思はれる。鄉國には親族も故舊もあるのに、書信は幾んどしなかつたらしい。雲水僧として消息を絶つのも不思議はないが、禪師は手紙を書かない人であつたことの一證となならう。但し絶對に書かないのではなく、越後へ戻つてきてから、懇意の家に寄せた手紙は今も保存されてゐるが、それはすべて簡單に當用を辨ずるものに過ぎない。米がない薪が盡きた洗濯を頼むなど、いはゞ事務的のもので稀に卽吟を紙端に錄したり、厄介になつた禮を述べたりしたものも無いではないが、それは寧ろ異例と見るべく、極めて懇親の家に僅かに存してゐるに過ぎない。良寛禪師を談ずる每に引合に出る人は、云く芭蕉、云く一茶、云く曙覽、この三子である。今手紙の上から是等三人と良寛を較べて見ると、おのづから良寛の特色が現はれる。芭蕉は或る時富饒の門人の別莊に起臥して、幾んど每日寸簡を寄せて母屋から物を請ふた。其手紙は大抵三四寸の小箋に書いたもので、それを受けた門人

は散逸を恐れて、すべて天井に貼りつけ、後に刊行したので後世に傳つてゐるが、それを見ると往々句も錄してあり、其需むる處のものも單純でなく、酒や砂糖や菓子や可なり贅澤のものを求めてゐるが、良寛は決して贅澤品の無心をいふて居らぬ。曙覽は雜炊の美味を歌つて貧乏趣味をさらけ出してゐるが、其友人に與へた幾十通かの手紙を自分が藏してゐたことがあるが、其手紙は如何にも周到のもので、どの手紙にもよい筆を買ひ求めてくれと、此點は餘程贅澤であつたが、良寛はあれほど能書であつても、筆硯などに頓着しなかつたらしく、兎に角貧乏趣味は似てゐても手紙は甚だ趣が異つてゐる。一茶も貧乏趣味では曙覽に讓らず、年末隣家の餅つきに涎を流して句に詠じてもゐるが、手紙となると隨分情懷を盡してゐる。要するに三子の手紙は寧ろ通例で、良寛禪師のものは當用を辨ずる丈のもので、其無心も全く雲水僧的のもので、玆に可なりの徑庭がある。世には後世自分の手紙が傳はるべきを豫想し、意を用ひて書く人がある、卽ち山陽や象山などはそれであるが、良寛にはそんな用意は絕對になかつた。良寛は生活のため止むを得ざる場合でなければ手

紙を書かなかつたらしい。そして手紙を書く時には、懇意の家の妻君が讀み違へないため、例の難讀の文字を書き和らげて幾んど小兒の字のやうなものを書いてゐる。これが禪師の手紙の一特徵で、どこまでも手紙は當用を辨ずれば足るものとしてゐる。良寛は勿論詩や和歌に隨時その情懷を叙べてゐるが、大體手紙を情懷を陳べる道具として居らぬ。それ故に良寛の手紙に書畫的鑑賞に入るものは少なく、多くの場合名も錄せず、紙の持合のない時は反故裏に書いたり或は厠紙などを用ひて居るが、そこに禪師の素朴の處、一點衒氣のない處が現はれてゐるといふことが出來よう。良寛の無邪氣さは種々のアネクドートで傳つてもゐるが、其殘された手紙こそ無邪氣を如實に語つてゐるものが多い。爰に良寛に就て從來謎となつて解しなかつたことがある。それは何かといふと、禪師に左の和歌がある。

このごろの戀しきものは濱べなる
さゞえのふたを戀しがつてゐるとは

宛がら小兒の欲求の如くであるが、これを無邪氣と解すべきか、他に意味があるか、久しく研究家も頭を惱したが、多く

の人々はマサカさゞえの蓋を繼しがるでもあるまい。さゞえの蓋は多分錢の隱語であらうと解して良寛ほどの淸僧も錢を欲しがつたと解するものもあつたが、其曲解を正す丈の文獻が無かつたので人々は惑ふた。然るに漸くにして此謎を說く文獻が高野辰之氏の手に入つた。それは禪師が弟由之に與へた手紙で、其中に良寛は鹽の容器を得たが其蓋がない、さゞえの蓋が丁度それに適ふから搜してくれと、器と蓋となるべきさゞえの蓋を自ら圖して、此和歌が書かれてゐるので、爰に初めて謎を解き得たが、良寛の無邪氣さは此手紙にも現はれてゐるので、玆に引用して淸僧の寃を注ぐ。此手紙は高野氏の近著「藝淵耽溺」に寫眞となつて收めてあるから、就て見らるべし。

長崎と市河寛齋翁

德川期の我鎖國時代に、支那と和蘭に限つての開港場は長崎であつた。外國物貨の入り來る處はこゝのみであつたから本邦南端のこの一港は實に殷賑を極めた。苟くも珍品を獲んとするものは此を決してこの南方の一港を睨んだ。書畫であれ骨董であれ、百般の雜貨、唐風洋種のものは此地に由つて獲得するの外に道が無かつたから、諸大名も人を特派して茶具や香木を購つた。支那の書畫や圖書を欲するものも爭ふてこゝに來た。織物、珊瑚、鼈甲などの裝具を求めんとするものもこゝに輻湊した。隨分諸大名の間に競爭が起つて、派遣の役人が失敗して切腹した慘事もあつた。鎖國の日本には外國品は何物でも破格に珍しがられたから、長崎は憧憬の港であり、苟くも商人たるもの、一たびこの地を踏まねば恥辱とされ、宛かも今日の洋行の如く彼等は、何ものをも犧牲にして此地に到り且つそれを誇とした。

商人のみでなく、文人、墨客、醫師、僧侶の如き、或は支那の文人と交はるため、或

は洋醫の教を受くるため、或は隱木卽一流の黃蘗僧を訪はんため、知識階級の資力あるものは多く此地を見舞ふた。彼等は全く外國の一端を目睹したかの如く喜んだのも無理は無かつた。そして是等の訪問は自然外國の文化を誘致する助けともなつた。西洋醫術や博物科學の開けたのも、支那文學、書畫藝術などの進んだのも皆長崎のお蔭であるといつてよろしい。當時隱元、木庵卽非の如き名僧が長崎に住したのみならず、優れた洋醫や畫家なども頻々と來た。それを一々擧げるのは此稿の目的でないから略するが、蜀山人や賴山陽や竹田なども此地に遊んで、如何に喜んだかは、その殘した日誌や手簡詩文に徵して明かである。蜀山は目睹の事を巨細に幾十通の手紙に認め、それを家人に命じて保存せしめ日誌に代へたものがあり、竹田が長崎の狀況を長男に報じた長簡は自分の藏したこともあるが、宛かも支那に遊んだごとくで、見るもの聞くことの珍らしく愉快限りないといふて居り、山陽も流連して、幾多竹枝の存することは誰も知る通りである。勿論當時は長崎の大繁昌時代で、支那趣味の人和蘭趣味の人を極度に喜ばしたのは想見に餘りがある。自

分などが二度まで長崎を訪ふたのは、勿論繁榮時代の後であるけれども、支那風の寺々を訪ふて名僧の故跡を尋ねるだけでも興を覺えた。更に文化の源をなす遺址を探つて愈ゝ興を深くした。長崎は他國の客に深切で、酒樓に上つても食饌が美で、不知不識人を流連せしむる所である。

私は長崎が好きで長崎に關係ある書物を好んで讀過するが、去年の夏頃市川三喜君から、其先代米庵、寬齋二翁が長崎に遊んだことを考證された一書を贈られたので、打措かずそれを讀んで見て面白く感じたことがいろ〳〵あるが、特に寬齋翁の長崎行に就ては、これ迄何事も知らなかつただけそれだけ、面白く感じた。米庵の長崎行は賴山陽のそれの如く、當時長崎にゐた支那文人等と交る位の事で一應の漫遊に過ぎなかつたが、寬齋翁は一年有餘の長滯在で、殊に當時の奉行牧野成傑の幕賓として、唐船の荷物吟味の檢使を勤めたのだからなか〳〵内容がある。市河家には其頃長崎出先から家に寄せた書簡が三十通もあつて、いろ〳〵の内情を細かに報じてゐる。それを材料として編せられた此書は、寬齋翁の此方面の行蹟を知る唯一無二のものであること

を私は特に吹聽する。

翁が長崎に赴いたのは文化十年六十五歳の時で、七月二十五日江戸を發し、中山道を經て、九月七日に長崎着、翌文化十一年九月廿三日、長崎を去る迄約一箇年にわたつてゐる。奉行の牧野は翁の門人で、翁の娘が行儀見習として奉行の奥向に奉仕してゐる間柄である。翁は書畫や骨董に鑑識もあつたから、其鑑定役として常には、役所内の長屋に住んだが、鄭重の待遇を受け、荷物調べには檢使の役目を勤めた。此役目は好事家には目の毒ともいふべきもので、翁も家に寄せた手紙の内に、慾が段々長ずるのに困ると自白してゐる。およそ長崎は前にも述べた通り當時は珍品の淵藪であつたから、長崎奉行たる人は、好事の諸家から種々の物を註文されることが幾んど常例で、牧野奉行もこのために千兩位立替拂を要したといふことも翁の手紙の内に見えてゐる。全體品物檢使の役得は、掘り出し物を手に入れることであつたのだが、奉行も斯の道に相當の鑑識と趣味があつたので、翁の勝手にもならなかつたことが手紙の上に見えてゐる。すべて物の品種や價格に祕密もあつたらしく、家に

寄せる手紙に價は決して口外してはならぬと特に注意してゐた。

その頃三希堂法帖が初めて舶載され、文墨の人はこれを獲んと憂身を窶した。米庵もしきりに望んだが、當時三十兩の價で、翁の財囊はこれを獲かねて、大分困り、結局價を江戸渡しと交渉が成つて手に入つたが、實は此帖は勾勒本で、正本は到底得らるゝものでないことを翁自身もいふてゐる。翁の蒐集は主として圖書類にあつたらしく、珍らしい書籍は多く翁の手に歸してゐる。三希堂法帖の價に辟易した翁がよくも買ひ集めたと思ふ程種々の書籍類が手に入つたことは各通の手紙に見えてゐるが、他に書畫骨董もある。歸宅の上方々へ土産にするため買取つたものもあつたであらうが、其數も決して少なくない。翁の最後の書信に述懷して長崎滯在は面白かつたが、併しツラカツタと自白してゐる。翁はそれほど趣味慾の增長に閉口したと見える。併しとの慾を充たすに奉行も相當理解して遣つたと想像されもするのだ。

江戸から翁に註文した品物の内に我等に理解の出來ない象汗の一品がある。象は其頃初めて日本へ來たもので、赤の木綿に象の汗を拭ふたものだと

いふが、何んの用に供したものか、或は天然痘が其頃流行し翁の愛孫も留守に此疫で死んでゐることを考へると、痘瘡を醫するものであるかも知れない。手紙の内には富山藩からも註文があつたやうに書かれてゐる。尙手紙の内に支那醫胡兆新の名が度々見へてゐる。自分は此人自筆の小遣帳を所持してゐるので、此人のことを知りたく思ふてゐたが、大體知り得たのは自分の喜ぶところである。此人の名は振、字は新、星池と號し、姑蘇の人、程赤城の推擧で幕府に聘せられ、幕醫小川文庵、吉田長達、千賀道榮の三人は、胡の門下となつた。長崎では崇福寺に出張して日本人の診察をした。其書は見事で蜀山も迷庵も共に褒めてゐる。

以上は市河家に存する寛齋翁の書簡より得た事實の一端であるが、これに由つて市河家が書畫骨董に富んだ所以を知ることを得た。全體米庵ほど書家として多くの門人を有つたものは稀れで、門下千人もあつた中に諸侯が多かつたので、收入も多く家も裕福であつたに相違ないが、その門人の多く出來たのは寛齋翁の儒業の餘德に由るのである。家が裕福であつたから書畫古

玩も多く收藏することを得た。その一斑は小山林堂圖錄や、米庵藏筆譜などで窺ひ知ることが出來る。嘗て山陽の長子聿庵が米庵の居を訪ふてその書畫骨董の陳列を見、その模樣を巨細錄して人に寄せた長簡を見たことがあるが宛がら大金滿家の藏品の陳列にも匹敵するほどのもので、文人の藏品としては實に驚き入つたものである。又嘗つて帝室博物館に市河家が獻じた文房類を見たこともあるが皆凡物でないことを認めた。あれほど潤澤の收藏は、多分二代努力の結果で、寛齋翁が長崎で得たものが土臺で、米庵が追々蒐めて一層大をなしたものであるまいか、翁の書簡を見るにつけて、市河家の大趣味家であることも、大收藏家であることも、共に寛齋翁に淵源してゐるやうに思はれる。前にもいふたごとく、市河家は二代共諸侯に師弟の關係が繫つてゐるから、拜領品などの少からずあつたことも想像される。

越後に於ける龜田鵬齋翁の逸書

徳川期の太平時代に、江戸の文人墨客は遊歴と號し、其實は糊口のため各地を遍歴したことは著名の事實で、繁華の地ほど遍歴客が多かつた。繁華の地には自然富饒の家があり、居ながら都會の大家を迎へる譯だから、隨分文人を歡迎し、厚く遇して數日若くは數月滯在せしめ、書畫を物する人のためには、斡旋して潤筆を集めてやつたりもした。儒者などは滯在中を利用して子弟を教授せしめたり、詩文の添削をやらせたりもした。右の次第で東京の名ある學者文人で或る少數の除外あれど四方を遍歴することが幾んど通例であつた。これにより地方の文化を助けたことも少なくなかつた譯だが、文人も亦これに由つて自己の生活を助けたものである。

自分の鄕國越後は土壤が廣く、富豪も多く、新潟の如き花柳繁昌市もあつたから、殊に江戸知名の文人墨客が去來して到る處其足跡を印してゐるが、佳麗三千の銷金爐新潟があるために、折角稼ぎ溜めた潤筆を蕩盡していろ〳〵の

逸事を殘した人は少くない。江戸で大家然と大門戸を張つてゐるものでも、越後に遊歴中のことを調べて見ると所謂る旅の恥はかき棄の俚語の通り明るみへ出せない珍逸事がいろ〳〵殘されてゐて、それを後世探して見るとなかなかに興味がある。爰にはそれ等の多くの例を擧げかねるが、名高い南畫家高久靄崖の一例を擧げると、彼は越後の各地に流連し旅費に窮して江戸に歸へることが出來ず、ある屋根屋に寄寓してその未亡人の入聟となり屋根屋職らしく擬して生活したといふ奇譚もある。いろ〳〵の人の困窮談は多く新潟の花柳界に存し、往々それに關する手紙の類も存してゐるが、自分が年來心がけて搜してゐながら何も探り當らないのは、龜田鵬齋の逸事である。鵬齋は江戸で名高い學者であり、磊落豪放を以つて鳴り、詩と豪酒とはその最も得意とする所であつた。越後遊歴中の逸事として傳はつてゐるのは、僧良寛と交つて良寛の草書に服して私淑したことや、雲泉畫伯と親んで後に其人のため碑文を撰んだことや、佐渡に遊んで或る豪家に泊し、其室が今尙存在して居ることや、折に觸れて書き殘した詩文があちらこちらに存して居ることな

どは、知られてゐる遺蹟であるが、その私生活に就ては何等知れて居らぬ。支那詩人の詩句に「越女一笑三年留」とあつて、恰かも新潟のために作つたかと思はるゝ句であるが、鵬齋は事實三年越後に留まつたものである。長滯留の文人も無いでもないが、三年迄流連して此句を實行した文人は他には無い。この長い流連にあの磊落の豪酒家の私生活には隨分面白い逸事があるに相違なからうと、いつぞや物數奇に新潟で調べて見たこともあつたが、何も知ることが出來なかつた。

しかるについ二三箇月前、常に出入する書畫商がやつてきて、こんな反故があるから差上げるといふのを見ると七八尺許りの唐紙の捲りで、鵬齋の和歌が數首錄してあつて「ほうさい書之」の落款すらある。鵬齋は和歌の心得がないでもないが、滅多に書かないから、これは珍らしいと取つて見ると、意外々々全く自分の知らんとする文獻の一であつた。鵬齋には「胸中の山」と題する自畫山水はあるが、これは「胸中の祕」であつて愛人の心變りを卿ち、老人の諦らめを語り、切なる戀情を洩らし、さきの世の宿因心から浮き名が立つても構はぬ

と自白してゐる。卽ちその和歌の全文は左の如くである。

老ぬればか利こふ人もたのまれず手なれのこまも君はめでしに
とし久しくなれそめしをふなの心かはりければ
かりのよをか利の屋どりとあだにすなかりのよばかりをのが世なれば
しなの山伊久羅八重山こへぬれどまだいくらやま屋衞山のそと
我戀は久米路の川の橋ばしら見津にせかれてやつれこそすれ
さきのよにちぎりそめにしゑにしなればなどいとはめやためにたつ名は

ほうさい書之

此和歌中に解し兼ねる所もあるが、眞蹟疑ないもので、假名はどこやらに良寛の筆致らしい處も見える。又斯樣のものに印など捺さないのが寧ろ通例であるのに强ひて捺して貰つたか、關防は「墨農」の印を捺し、落款には「長興」の小印が捺してある。自分はこれを得て先づ鵬齋が越後に滯留した頃の年は幾つであつたらうと勿卒調べて見ると、六十歳頃までは、越後にゐた事實が知れ、如何さまなれそめた女に變心の生じたのも無理はないと感じ、この和歌は居

ながら東京で得たけれども、出處は越後であらうと推測をした。實は自分は新潟でいろ〳〵漁つた時こんなものが出てくるであらうと期待したのであるに却つて東京で得たのは一奇である。尙ほ妙なことには十數日經て同じ書畫商から更に鵬齋の一幅を得た。それは佛壇に掲ぐべく丁寧に表裝された竪幅だが、「南無阿彌陀佛」の六字の名號を正書して、落款には「優婆塞鵬齋書」とあつて、麴部尙書の大印が捺してあり、横に「與越妓淸川」と細書してあるので、此細書は特に私の注意を惹いた。越妓に與ふとあるからには新潟の妓に書いて與へたものに相違なく、或はそむかれた女と淸川とは何か連絡がありはせぬかといふやうな想像も起きた。由來新潟の藝娼妓に源氏名などを命じたことがないから、今淸川といふ妓を穿鑿しても恐らく分るまい。或は鵬齋が狎妓に勝手に命じた名であるかも知れんが、兎に角六字の名號は浮屠氏の書くべきもので、漢儒鵬齋の本領でないから、優婆塞などと謙遜し、特に戯印を捺してゐる。狎妓に强ひられて書いたものと思ふと、何となく情交があつたのでなからうか。兎角この二通の文獻は鵬齋の情事を語る極めて稀有のもの

でそれが仕合に二つ揃つて自分に歸したのは妙な緣因と喜び卽時の所感を錄しておく。

松浦北海に就いて

折角寄稿を請はれたが、差當り書くほどの思付が無い。然るに昨夜松浦武彦氏から松浦北海翁の五十年忌の法要を來る十日寛永寺で營む旨の案内狀に接したので、翁の事に就て聊か雜話を試み責を塞ぐことにしよう。

私は翁の生前一回も面したことが無い。ことし翁の歿後五十年といへば、私の二十七歳の時歿せられたので、機會があれば遇ふことも出來たのであるのに、毎々遺憾に思ふのは、翁は私の大すきの人であつたので、一面識を得て置きたかつた。私は翁の事蹟を特に調べたこは無いが、その逸事を聞くことを喜び、翁の著書や遺蹟を可なり稽査したこともある。但し私は老いて巨細の記憶が無いが、思ひ出るまゝを秩序も次第もなく矢鱈に語るのだから、或は思ひ違ひが無いともいへないことを前以て斷つて置く。

翁の遺蹟の存してゐるのは紀州德川家である。爰には翁が木片勸進で多く歷史的の古材を全國の知人に募り、巧みに構造した一疊敷の書齋があり、又

翁の遺著が南葵文庫に多く藏せられてゐた。私は是等を探討するため數々德川邸を訪ふた。史的木材で構へた室は他の人の企だてたのもあるがあれほど小さく、あれほど巧みに、且つ珍木材をあれほど寄せたものは無い。一疊敷の狹いところであるが、何から何まで遺憾なく調ふてゐるのには驚歎を禁じ得なかつた。翁は卓越した多方面の趣味の人であつたが、その一端はこの書齋で直ちに首肯される。この書齋に就いても「木片勸進」と題する翁自刊の寸珍本があつて、それには用材の來歷が一々記されてある。又書齋の襖には翁自刊の紀行、これも寸珍本であるが、それが貼りこまれてあつた。翁は寸珍本が好きであつたと見え、十數の紀行は皆此小形で刻されてゐる。私が一時千餘の寸珍本を蒐集したのも、翁に負ふ所があることを白狀せねばならぬ。

翁の未刊の紀行類幾十册は大抵南葵文庫に保存されてゐたが、これも度々展觀した。翁は相當畫も書いたので紀行には必ず風景のスケッチが添はつてゐた。翁は田崎草雲と親交があつて、蝦夷地の風景を己がスケッチを粉本に供し、草雲に圖させたものが二册の帖になつてゐた。それが偶然私の手に

入つたことがある。私は足利市に游んだ時草雲の門人が生存してゐたので、それに鑑定を請ふて箱書をしてもらつて、大切に珍藏したこともあつた。

翁の遺著に名高いものは一日百印百詩である。翁は賴鴨崖と江差に出遇つて、或る人の仲介で曉天より夜に入るまでに、鴨崖が百詩を詠じ翁がその詩の句を取り入れて印を刻するの文嬉を試みてそれが成功した。その結果が版にされたものが二種ある。これを見るに鴨崖が山陽の子であるだけ才氣横溢で百詩共咄嗟の作と思はれない程巧妙であるが、翁の篆刻もなか〳〵手に入つたもので、確かに作家として相當の地位を占むべきものであると感じた。翁は多藝の人であつたが篆刻は恐らく其最も長所であつたと思はれる。嘗て翁は北海道の地名を雅語で撰み、それを自から印に刻したことがあつた。私は其印影を見たことがある。印影は確か黑川眞賴翁に藏せられてゐて、眞道氏から示されたことを思ひ起すが雅語の撰び方が如何にも巧妙であつた。斯ることのあるのに、政府は何故にそれを採らず、現在の如く俗惡の地名としたか、其間の事情を詳かにしないが誠に遺憾の事である。私は其印影の模寫

を今も藏してゐる。

翁は河鍋曉齋と親交があつて、曉齋に書かせた畫の内で最も名高いのは、北海翁樹下午睡の圖で、大幅の密畫で、曉齋は九箇年を費して書いたといふが、其圖は涅槃の圖に倣つたもので、樹下午睡の翁を釋迦に擬し、それを圍繞してゐる種々のものが、翁の愛玩の骨董類である。これは一見觀者の頤を解くもので曉齋の傑作である。翁は曾つて曉齋に托して天滿宮二十五社に奉納せんとする大小の額面を揮毫させたことがある。其際曉齋が翁に差入れた證文じみた書簡が私の架中に藏してある。それには涅槃像の事にも及んでゐて興味もあるからその全文を左に收める。

貴殿事天滿宮二十五社へ各々私の揮毫仕候額面御奉納の由にて被仰付有難存候然る處もし出來不申候はば町繪師共へ被仰付私名前を書入被成候由左樣有之候共一切申分仕間敷候也依是右額面小形二圓中形三圓太宰府北野兩社の大額は二十五圓づゝ被下候約束昨年より認來候涅槃像も落成後は兆典主羅漢元信壽光幷に信實歌仙師宣屏風等被下候由實に難有仕合

に奉存候依ては月に兩度づゝ必ず參上額は小二枚中一枚相認め申候處實正也もし違約致候ば私名前にて如何樣凡繪師に被仰付奉納相成候共申分仕ましく候涅槃像出來不仕候節は兆典主元信返納仕候爲後證差入置一札如件

明治十七年十二月廿二日　　湯島四丁目二十二番地

松浦武四郎殿　　河鍋曉齋

以上書簡の文言で推測すると、曉齋は例の大酒客で人の依頼を氣に留めない習癖があるので、翁は其癖を知り若し約束を履まない時は、下手な畫家に書かせて、君の落欵を据ゑるから、承知してもらひたいと釘を打ち、約束通りに書けば、名畫を謝儀として君に贈るといふことに對し、此手紙は請け書であることが一讀してわかる。それにしても翁が贈ると約した兆殿司元信信實、師宣など皆容易ならぬ名畫であるのに、思ひ切つた割愛であることに驚かされる。翁が多方面の趣味家であつたことは種々の遺品を見ても知れるが、高い趣

味の現はれは、翁自刊の「撥雲餘興」に收められた稀覯の珍什を觀て知ることが出來る。翁の一擧一動は趣味の一擧一動であつたので、平生外出の時には必らず、澁團扇一本を腰に挿んで出かけ書畫の能力ある人には卽座に書かせた。いつぞやそれが屛風に張られたのを見たことがあるが、いろ〳〵知名の大家の筆蹟があつた。又旅行の折には寸珍の書畫帖を携へることが恒で、到る處に人の書畫を求めた。この寸珍帖若干が自分の手に落ちたこともある。

翁は旅行通だから足蹟天下に滿ち到る處に遺蹟がある。翁の遺蹟と見るべきもので長く傳はるものは、翁が上野東照宮を初め北野天滿宮、大阪天滿の天神、吉野の金峰神社、太宰府の天滿宮に大神鏡を奉納したことであらう。その鏡の裏面には北海道の全圖が鑄刻され、そこに翁の奉納の精神が籠つて居り、翁が優れた意匠家であることが知れる。いつぞや北野の天滿宮を拜した時、この奉納の大神鏡の外に、大阪毎日新聞社の木山翁が奉納した他の大鏡があつた。その裏面には擴張進展した日本地圖が刻されてゐたが、これはいふまでもなく翁の先蹤に倣つたものである。

翁は菅公崇拜の人で天滿宮へ種々奉納してゐる事蹟は前述の如くであるが、翁の逸事に人の頤を解く一笑話がある。翁は大阪にゐた頃、天神講を自宅に催して知人を招請した。天神崇拜の翁の事だから多分祕藏の菅公像を披露するであらうと、皆々袴着用で出かけると、如何さま床に一幅が掲げてあつて、それが白絹で掩はれてゐた。一同は端坐して開帳を待つてゐると、翁はシカツメらしく挨拶をした後、恭しく白絹を外すと、現はれ出たのは天滿宮の聖像とは似もつかぬ一枚の番付を幅に仕立てたものであつた。一同は呆れてよく見ると大阪の私妓の番付であつたので、一同はギャフンといふた。大阪では私娼を天神といふたので、翁は此惡戯をやつたのだ。翁は斯の如く時に諧謔を弄する人であつたらしい。翁に馬角齋といふ戯號のあるのも翁のユーモアの閃きで、馬喰町の角に住した時の號であらう。翁は蝦夷探檢を始め長く旅行を事としたに拘らず、案外私財が豐かであつたらしく、自著を出版したり、一疊敷を建築したり、種々の骨董を集めたり、古金銀貨などをも蒐めた。前に陳べた奉納の大鏡は古金銀を賣却して造つたかに記憶してゐるが、近藤

正齋は金銀圖錄を著したけれども、貨幣の實物は皆諸家から借りたので、それを返却しないとかで物議もあつたが、翁は實物を苦心して蒐めて終にそれを不朽のものとして神社に納めた。翁のやり方はなか〳〵面白い。大概の趣味家は案があつても財囊の關係でそれを實現し得ないものであるのに、翁は案ずることを着々實行して自から娛んだ。そこに多くの趣味家の及ばない所があつた。

翁は役行者の流を汲んで修驗道の人であつたから、難行苦業に心膽を錬り、深く未拓の地に入り、山野を跋渉して野營の苦勞などは意に解さなかつた。日本の交通は多く修驗の山伏に開かれた歷史を有つてゐるが、翁は恐らく此方面で長く國家に貢獻した最後の修驗者であらう。蝦夷地の具體的に闡明を得たのは翁の力である。翁は傍ら露國の事情をも窮めた。翁には自から踏査して作つた北海道大地圖があり、安政六年に出版されてゐる。外に嘉永二年刊行の蝦夷大概圖もある。是等は我國に於ける蝦夷地圖刊行の嚆矢であることを忘れてはならぬ。又他に樺太の大地圖もあるが、これは安政六年

翁の自筆に係るもので、露國との領有問題のため遂に刊行されなかつたが、翁の探檢の功は頗る大なるものがある。

凡そ修驗道の行者は鐵の如き心膽を有すると共に、器用な才能を有するものが少なくない。不毛の地に起臥して自供自足するには自から萬端の事を處理せねばならぬから、自然諸藝に通じねばならぬ。翁が百藝に通じたのも此故であらう。翁の事蹟に就て語るべきものは、澤山あるが是等は翁の傳記に讓り、爰には趣味に關することのみを記憶を辿つて聊か記すに過ぎない。

釧雲泉の事

釧雲泉は南畫の大家として知られてゐるが、自分の鄕國に來て遂に出雲崎に歿したので、越後に於ける彼の行蹟は凡そ承知してゐるが、此頃森銑三氏の文で耳寄りの一事を知つた。それは雲泉が越後在留中女に子を生ませたので、それが原因で妻と葛藤を生じ、遂に離別に及んだといふ逸事であるが、斯る消息を傳へる長文の書簡が埼玉縣の本庄の文雅の家から出てきた。この手紙に雲泉が越後三條から、本庄に於ける森田市郎右衞門、戸谷半兵衞森田助右衞門の三人連名に宛てたもので、妻は離別後本庄に立寄り、森田家に就き離別の事を告げず、かねて托してあつた荷物を持去らんとしたのが雲泉に知れ、その差押へを申述べた書狀で、その中には、

此三條にて當春鵬齋(龜田屋山稻毛、篆刻家)申聞られ、必ず僕荷物は其まゝ御地に差置候樣、示諭致くれられ其事に御座候、然處右送り申候樣子にもなく候、甚以迷惑致す事に御座候、然し古昔より兵火劫賊身を以免れ候ためし多

々有之候事故絶而とゝめ得度とも存不申候然し未其地に有之候はゞ御世話なから御勘辯可被下奉願候、或は江戸問屋等にも有之、皆様御手の屆候事ナラハ可然奉賴度候、三十年の隨筆抄錄等も有之候ナリ御憐察可被下候云々

雲泉といへば自ら高く持した高雅の人物で、宛がら仙人の如き人かと自分など幼少から思つてゐたが、矢張彼も亦人間であつたことが、この離緣沙汰で知れた。雲泉の妻は稻毛屋山の媒妁で娶つたもので名を三津といふたとある。

贋物ものがたり

前年友人湯淺半月氏が「書畫贋物ものがたり」の一書を著した時、自分も多少の助言をやつたが、此書に自分の不備を感じたのは、贋作者の傳の全然闕けてゐたことで、自分は序文に著者は何故贋物家の列傳を掲げざると不足をいふたことを想ひ出す。實は贋物家列傳を著した人はこれ迄ありとも覺えない。若しこれがあつたら鑑定の指針となならう、且つ贋作家の祕密を知ることも一興であらうと、自分自身も心がけがないでもないが、なか〳〵調べが屆かないので、今は斷念してゐる。

僞筆や贋作は惡業であるから、斯る事を爲す人は極力祕するのも當然で、隨つてその何人たるかを知るは困難であるが、古來贋作僞筆の非常に多いことから考へると、斯る惡業を爲す人は一册の列傳を編むに餘りある程多數であることは知れ切つてゐる。是等多數の人の中には相當藝術手腕のある人もゐるであらう。なんとなれば、原作に髣髴たる物を作るには、原作者に稍〻拮抗

する手腕が無ければならぬ道理である。斯る手腕の持主の中には相當の地位や名譽を有する人が無いとも限らない。斯る手腕を有し斯る位地を有する人が、何故に人を欺く惡業を敢てするのであらうか。中には無邪氣の戯れに己れの力を示すため僞作をすることもある。斯る場合の心術は決して惡しくはなく、其目的は人を欺いて自ら笑ふのに在つて、利慾に關係はないが、斯の如きは極めて稀有の事に屬し、多くの場合は利慾が纏綿する。自分に技倆があつても自分の名では重んぜられないから、他の名聲ある人の作として射利を營む……僞作贋物の不道德が起るのである。

同じく人を欺く贋作者の中でも罪の輕いのと重いのとがある。表具屋、書畫屋などの輩が贋作をするのはまだ罪は輕いが、鑑定家を以つて世に立つてゐるものが贋作をやるのは、甚だ罪が重い。彼等は筆關などといふて、審定の局に當つてゐるから、人は彼等を信じて疑はない。それに乘じて自ら僞筆を弄して人を欺くのであるからその心術の醜陋は唾棄すべきである。別して自家の僞作を正筆として自ら極めを付するに至つては、詐欺の甚しいものと

いはねばならんが、鑑定家の中にはこの詐欺漢が決して少なくない譯は、鑑定家には相當の手腕あるものが少なく無く、その鑑定を業とするために、多くの筆蹟に接する機會があり、それ〴〵の筆致や筆癖に心得があるから、贋作をなすことが尤も容易で、且つ、その技倆も甚だ優れてゐるので、鑑定家が僞筆家を兼ねてゐるものが古來少からずあるのも道理あることだ。

贋作は模倣だといへば說明はそれで盡きるやうであるが、さう簡單に濟すことが出來ない。模倣にもさま〴〵の淵源がある。傳統的の淵源に屬するものは、父子の字が似寄る、山陽の子の聿庵や三樹の書の親に酷似してゐるは何人も知る所であるが、血屬の書の似るのは强ち模倣でない。師弟の書の似るのも著しい例であるが、門人が師に親炙し常に師の書に見慣れてくると不知不識の間に段々似てくる。自然家庭には子が親に私淑し門人が師に私淑する場合は飽まで似ることを欲するから、殆んど判別のつき難い迄酷似する。親子師弟の關係でなくとも前輩を敬慕する念から前輩の書を學ぶものが世には澤山あつて、往々眞に迫るの域に達するものがある。卽ち山陽の舊里に

は山陽風の書の模倣家があり、象山の舊里松代には象山そつくりの字を書くものがあり、良寛の生れた越後には良寛の骨法に熟したものが居る。是等は本來私淑から生じたものであるけれども、餘りに模倣が巧妙であると、一轉贋作家となるの危險がある。模倣家その人は敢て世を欺くの意が無くとも、斯る藝術家は往々奸商に利用されて心ならずも贋物家に墮落することがある。これは藝禍ともいふべきで、その人は名を祕するけれども、遂には山陽の贋作家、象山、良寛の贋作家は誰某と名まで知れることになるのは、その人のために惜しまざるを得ない。

贋作は人を欺く詐術で、射利の目的である場合は最も罪の深い業だが、併し或る時代には權威者がこの作業を自から敢てしたこともある。その著名の例は、豐太閤が石田三成に内命を下して、三成の領地で古墨蹟を贋造せしめたことである。豐公は茶道を重んじた關係から、當時古墨蹟が珍重せられ、古名家の歌切れなどは千萬金の價があつた。豐公は其威力を以て諸家の珍什を捲き上げ、これを功ある武將を賞するの具とした。畢竟土地や刀劍を與へる

よりも此方が經濟だと案じたからであらうが、古墨蹟の歌切れなども高貴のものは澤山にないので、遂に贋作を餘儀なくされたのである。當時是等の贋作を與へられて有難がり、拜領物といふて子孫に傳へた大名も相當多くあるかも知れないが、内情は如斯で、大名の藏品と雖も一概に正筆といひ兼ねるのは斯る内情があるからで、三成はどんな贋物家を使つて作らせたか、その内幕を調べたら非常に面白からうと思はれる。

贋作も古今巧拙の別のあることは免かれぬ。模倣藝術の近世大いに進んだのは、寫眞其他種々科學的作用が手傳ふからで、近頃の模倣は鋭利の具眼者と雖も到底判じ兼ねる域に達してゐる。光筆版などいふものの上等のものになると、裏をめくつて見るとやつと判る位で、正面から見たり、又多少煤氣を帶び古色がつくと、到底複製と思はれないことがある。此頃長逝した安田氏方に三四年前四五の同人が會した時、氏は貫之の歌切れ二枚を出して示された。一通は正筆で一通は複製であることは知れてゐるが、さてどれがどうか精根を凝して雙方比較して相違點を發見したいと力めたが、どうしても見出

し兼ねたが、同人中白内障で失明に近い眼疾の人が探り當てたのに一驚を喫した。此人は眼で判別が出來ない代りに鼻で判斷した。彼は二通の書を仔細に嗅いでゐたが、終に一通を正筆と斷定して、一同を啞然たらしめた。如何さま正筆は時代があるから嗅げばカビ臭いに相違ない。我等はそれに氣が付かなかつた。なほその際正筆を更に檢すると紙の一隅に蟲食の跡があつた。複製家はそれを見落してか、それは模さずにあつたが、それをも模してあつたら更に我等を惑はしたであらうと、我等は初めて鼻の鑑定が眼に優るの祕訣を會得した。

自分は往年名家手簡の蒐集に沒頭したことがあり、その眞贋は大概直覺で判斷もつくが、判別に苦んだものも多少はあつた。それは佐久間象山の書簡であつた。自分が手簡蒐集に沒頭してゐることを聞き傳へて諸方から色々持ち込んで來たが、自分の其際に驚いたといふよりも寧ろ笑を禁じ得なかつたのは、象山が吉田松蔭の米艦に投ぜんとした際、松蔭を激勵した例の詩入りの象山の手紙を五通まで種々の方面から持込んできた。この手紙の原書は

京都帝大の構内尊攘堂に保存されてあり、嘗て一覽を經たこともあるので、自分は仕合せに欺かれなかつたが、五通共如何にも眞蹟らしく見えて、原書の所在を知らない人は多分だまされて今も珍藏してゐるであらうが、これを以つても世に贋物の少からずあることを推測するに難くない。

私は象山の書の眞贋を判じ兼ねる時、いつも今は故人となつた小兒科の醫宮本仲翁に相談した。翁は松代の出身で象山門下の人でもあるので、よく判じた。翁のいふのに、贋作が巧みであるので鑑定がむづかしい、しかし贋作者は臆するから、氣魄が足らない。且つ象山は長文でも流石に誤字が一つもないが、贋作者は達者に書くだけで、必ずしも原書を傍に置いて一々模倣しないから往々誤字が雜じる。これ等で眞贋を判定するより外に術はないといふたが、自分もこの教で其後は不束ながら自から判ずるやうになつた。

近年西洋風に追々コピイを重んずる風が漸く行はれ出して、田中親美などいふ巧妙な複製家が出て來た。これは贋作家と同視すべきでない。その譯は後に説くが、西村兼文といふ人が贋作界に名高い人であつた。此人は諸家

の系圖を作つたり古文書や古經を模したりして、しば〳〵好事家に一杯喰して、自ら笑つてゐるのでどこかに愛嬌もあつたが、餘りに器用であるだけ、藝禍で贋物家とされてゐる。或る時古活字で延喜の年號ある陶詩を刷行して、京都の好事家數人を一日驅け廻はつて、各家に一枚づつ賣飛したことがある。各家が稀有のものを手に入れたと吹聽すると同人の誰もが同じものを持つてゐるのでこゝに鉢合をして啞然とした笑話もあるが、併しこの僞作は支那の有識者に珍重がられて複製されるまで成功してゐる。

又曾て兼文は良辨の紺紙金泥の心經を二三通作つたことがある。その一通は三千圓の價で井上侯の手に歸してゐる。それと同じ物が往年池の端の琳琅閣に現はれたので、その價を問ふと、七圓五十錢といふので、自分は西村の僞筆と知り、强ひて三圓に價を引かして購ふたが、其時自分は琳琅閣主人にいふた。俺は今まで價を兎や角言ふたことはないが、これを强ひて減價させたのは井上侯の三千圓の千分の一に當てたい故である。自分と侯との貧富の差はそれ以上であるけれども、せめてはといふて一笑したが、この寫經は實に

巧妙に出來てゐた。紙もその時代のものであつた。恐らく寫眞を應用したことであつたらう。

以上の如き贋作の例はいろ〳〵あるけれども大略に止め、さて贋作の日本に多く出る所以を尋ねると、主として世に唯一のものを、複製のコピイを得て滿足せず、どこまでも唯一無二の其物を欲しがるので、贋作が行はれるのである。よく複製されたものは、コピイであつても眞を亂るほどであれば、それを得て樂しめばよい筈である。されば贋僞などいふ不潔不愉快な念もなく、眞に藝術を樂しむことになるので、西洋では早くから精製のコピイを作るに價を惜まない慣習があつたから、日本の如く贋物が跋扈しないのである。日本も漸くそこに氣がつき、複製のコピイを歡迎する氣運になつたから、田中親美、の如き巧妙な複製家も出て來たが、まだ〳〵贋作を一掃する氣運となるには今後どれほどの年所を要するか知れない。

日本家屋の裝飾品といへば、曰く掛幅、曰く襖、曰く額面、是等が名家の揮毫であらねばならぬと考へる間は到底贋物は絶えない。今は贋物の製造所が各

所にあつて、その輸出品が其地の大なる國産ともなつてゐるやうな有樣で、如何に邊鄙な地方でも大名ある儒者の書がなくては、家の飾となり難いと思ふ間は贋物の存在も實は止むを得ない。それが某大家の筆に倣ふといふやうな書畫が歡迎されることになればこゝに初めて贋物が影を潛めることになるであらう。私は結局コピイの發展とこれを喜ぶ風の行はれんことを切に冀望するものである。

大賀博士の蓮の研究

大賀一郎博士は植物學界の明星で、殊に蓮の研究に造詣が深い。南滿の普蘭店に蓮の實を獲得し、それが五百年の壽齡を保つてゐると考證されたことなどが、學位を博し得られた所以と曾て聞いたことがある。自分と博士の相識となつたのも、蓮の研究がその媒介をなしたのである。博士は二三年前から蓮の曼陀羅の研究を始め、先づ指を染められたのは、大隈老侯の母堂が作られた曼陀羅から始り、其織元等につき自分に質問があつたが、自分はこれにつき何等知る所がなかつたから、京都の大丸の主人下村正太郎氏に依頼して西陣に問合はせてもらつたら早速に分つた。そんな事から、博士の曼陀羅研究の結果を追々耳にしたが、中將姫で名高かい當麻曼陀羅は如何にも天平頃の古いものではあるが、唐物であつて耦絲の織物でないと判明した。併し大隈侯の母堂に先だち、蓮絲で曼陀羅を作つた例は敢て無いのではなく、博士の實驗に據ると、九州の小倉の舊藩主の菩提所にある佛像は正しく耦絲織である

といはれた。これは三幅對で隱元和尚の金字の賛があり、寛文頃の製と認められるゝもので、博士の方々に見られた耦絲曼陀羅のうちではこれが尤も時代が古いと語られた。博士は曼陀羅の織物を顯微鏡下で撮影した寫眞を幾通りか示されたので、耦絲の正體を始めて會得したのは博士のおかげであるが、博士は段々研究の歩を進め、自身耦絲織物の試作を企てられ、下谷池の端なる絲屋「同明」に作らせられた、二三古代文様を織出したつゞれ裂を示されたが、古雅掬すべきものがあつた。それに使用した耦絲も見たが、僅かに三四匁の絲を引出すに幾駄の蓮を要するので、價に積ると莫大のものであることを理解した。博士は話次、蓮花の開く時聲を發するといふ俗説を排されたが、しかし全然聲の無いわけではなく、唯人間が聞き取り得るやうな音でないといふて、一枚のレコードを出して示された。そのレコード盤は蓮の開く際花瓣の擦れ合つて微かの音を發するのを百萬倍に擴大して取つたといはれた。博士は戯れにいはれた。「觀音」は音を觀ると書くが、自分は音のヴイブレーションを寫眞に撮つたといはれ、それを見ると空白の中に横線が畫かれてゐた。其

横線こそ音の寫眞で、音を觀るとは卽ちこれであると一笑された。

因に記して置くが、大隈侯北堂の曼陀羅は大隈家では川嶋甚兵衞の織出しとものといはれてゐるが、大丸の主人に賴んで西陣で調べた結果は、川嶋でなく、伊達彌助卽ち井筒屋であることが知れた。此家は既に滅びたけれども染織界に記錄さるべき家筋である。曼陀羅を織つた人は四代目の彌助で周齋と號した。此人は相當學問の素養もあり蘭醫學の心得もあつたといふ。幕末に政綱が紊れて、西陣の地が掠奪の巷となつて滅びんとした時、彌助は身を挺して救濟の衝に當り、官廳と交渉して救助策を得たり義捐金を募つたりして西陣を助けた功績があり、又西洋の産業を進展するに就ても種々の功績があり、明治初年外國に遊んで視察を遂げ、海外輸出の織物に就き種々考案する所あり、第三回内國勸業博覽會には審査に任ぜられ、帝室技藝員、寶物取調局鑑査掛をも拜命し、大正十三年陛下(東宮時代)御成婚の時從五位の贈位を受けた。此人の洋行は墺國に博覽會のあつた時で、佐野常民に隨行し、西洋の織物機械

を購ひ歸り、これを天覽に供したこともあり、西陣に洋式機械を用ひるに至つたのは此人の功といはれてゐる。明治九年六十四歳で歿した。

石割松太郎氏の祥瑞研究

石割松太郎氏が鬼籍に入つた。友人は氏の法名を淨音院文譽松操居士と命じたのは、氏が淨瑠璃幷に操人形の研究に沒頭した、その權威者としてのメリットを法名に籠めたのである。淨といひ操といふは共にこれを語るものである。氏は早大文科の出身で吉江喬松、日高只一氏等と同期の人で、その卒業の當時自分は國書刊行會で古書の出版を經營してゐたので、氏が古書に通ずる故を以つて校正を擔當して貰つたことが交りの始めで、晩年には矢張り自分の關係してゐる稀書複製會に來り投じて、圖書の解題を作ることを擔任した。此間氏は自家出身地の堺を屋號として書店を開かれたこともあつたが、氏は大阪の毎日新聞に記者生活を送つたことが最も長かつた。氏は考證に豐かな天分があつて、大阪にある間に劇や淨瑠璃に趣味を感じ、羣書を博搜して此方面を考證的に研究し遂に操淨瑠璃の沿革等を深く檢討して、前人未發の境を拓き斯道に於て第一人者の名を博するに至つた。氏は晩年東京に

來り、母校のため德川時代文學の講座を擔當し、學徒の畏敬を博したが、操芝居の研究を筆に托して一書を著すに至らず、鬼籍に入つたのは如何にも遺憾のことであつた。

氏が生前世に出した著書は二三あるが、自分の最も敬服したのは「祥瑞の研究」の一書である。劇通として知られてゐる氏に、いはゞ場違ひともいふべき此書のあるのは、寧ろ案外で、陶器を鑑賞する人達は此書をどう見たか、陶磁器の鑑賞に名もない人が斯る書を出したので或は閑却されてゐることはあるまいか、僅かに三百部刷行したに過ぎぬと聞けば、或は陶磁界に其書名すら知らない人が多くあるのではあるまいか、私自身すら初め此書を贈られた時頗る意外に感じた。氏は陶器其他骨董に趣味を有つてゐる人でないから、斯く思ふたのも無理はないのだが、披いて見ると、陶磁界に久しく謎となつてゐることが明確に解かれてゐるのに更に驚いた。實はこれも考證の天分を豐富に惠まれた氏の業と見れば別に不思議もないのであるが、氏の趣味畑を外れた此方面に精刻の考證を悉く、幾百年間誰も解き得ざりし謎を解いたことを

考へると、氏の考證能力の非凡に敬服せざるを得ぬ。この書は曾つて大阪朝日に掲載せられ後纒めて一册としたものであるが、私はこれを近代の名著とするに躊躇するものでない。以下その梗概を掲げる。

伊勢の大口村に伊藤五郎太夫の家がある。五郎太夫の名を世襲したから、幾人も同名の人がある。足利義政時代の五郎太夫は明に入つた人で、當時の詩人李春亭が居士五郎太夫の日本に歸へるを送る詩の首句に「敬持玉帛觀天顏」とあるので、五郎太夫の身分の程が想像される。天顏を觀得る格の五郎太、それが居士といはれてゐるから、佛法者としても相當のものであるが、それが明に滯在中製磁に手を下して練習をしたと考へ得られようか、詩中には製磁に關する何等の匂ひもない。又居士五郎太夫を祥瑞とするの何等の證左もない。ただ五郎太夫といふ名だけで直ちに祥瑞とするのは速斷であつて、同じ系統に百年隔てゝ五郎太夫があり、それが祥瑞であることに思ひ到らないのは、二三圖書の誤が基をなしたのである。百年後の五郎太夫は豐公の命を受けて製磁研究の目的で渡明したもので、それには歴々たる考據があつて動

かすことが出來ないのである。卽ち石割氏の考證を要略すると、

(一)祥瑞は永正年間入明した居士五郎太夫とは同名異人である。

(二)永正の五郎太夫の一門の出身で約百年を隔てゝ出た祥瑞伊藤五郎太夫は單なる陶工である。

(三)この祥瑞五郎太夫が日本へ景德鎭の磁法を始めて傳へた。卽ち日本の瓷祖は祥瑞であつて支那傳統である。

(四)從來磁祖と考へられた朝鮮陶工李參平は鍋嶋家が爲にする所あつて、同藩の儒者武富圮南が撰んだ正しい事實に基づいた陶磁讃のあるに拘らず、朝鮮系統に屬するものとしたのは誤である。

(五)祥瑞五郎太夫の經歷は天正五年伊勢大口村に生れ、文祿三年四月(十八歳)渡明、元和二年(滯明廿三年)四十歳にして歸朝、同年朝妻に建窯染付を燒く、寛文三年五月十六日八十七歳で歿す。

考證の經緯はこゝに陳べることは出來ないが、石割氏は能ふ限りの努力をして、得らるゝ限りの文獻を涉獵してゐる。在來の傳說を否定し、百年を切り

下げて祥瑞の眞相を發揮したことは氏の功として稱せざるを得ない。是迄は祥瑞は日本人にあらず支那人である、否支那の地名だなどゝいはれたこともある。何分にも祥瑞を足利時代の人とすると年代の合はぬことがあるので、豐公時代の小堀遠州が祥瑞を支那に製磁を學ばせたといふ傳說を解し、その小堀遠州は小堀の遠祖であると窮した說を唱へた知名の人もあつた。又古祥瑞第二祥瑞と時代を分け、足利氏の五郎太夫を古祥瑞とし、天正の遠州時代祥瑞を第二祥瑞として時代の辻褄を合はせたものもあつたが、百年時代を切り下げて、前のは陶工でなく、後のが陶工祥瑞であるとなると、ピッタリ合つて、百疑みな始めて解消するのである。

軍國の讀書シーズン

秋氣漸く深く燈火親しむべき好時節が來た。讀書人は此氣節を我等のシーズンといふてゐる。この氣節は炎熱既に去つて、額上に汗浮ばず、うるさい蒼蠅の襲來もなく、團扇や扇風機を操縱する面倒も止み、未だ火爐を調へる要もなく、身體は緊張して、夏時の惰氣は一掃され、頭腦も澄んでゐる。洵に讀書の好シーズンは此時である。

夜更けて書を讀めば萬籟閒として唯耳に入るものは庭前の蟲のすだく音のみ。目に入るものは窓をのぞく澄める月のみ。この月この蟲、これぞ讀書子の好伴侶で、萬感を誘ふのもこの伴侶の媒介に因るのである。

唯獨り默坐するのみでも、このシーズンは種々の感想を誘起する。況んや會心の書を讀み、靜かに心置なく翫味檢討するに於ておやである。

元來讀書は著者と對話するやうなものである。否斯くあらねばならぬと思ふ。著者を對坐の人とすれば、そこに情味もある。著者に對して質問も出

來る。著者に說明を請ふことも出來る。そこに著者を對坐の人と見る必要がある。併し著者は口舌で受答はしないから讀書子自ら著者の位地に立つて自身で著者の思惑を忖度すれば、おのづから著者の答辯ともなり說明ともなるのである。眼光紙背に透るなどいふことも、要するに、著者の意中を忖度して誤らぬことをいふのであつて、心が落着いて澄んでゐる時に、言外の事まで摑み得ることである。兎角匆忙の際に浮き〳〵して書を讀んでも雲煙過眼だが、深夜人定まつた讀書の時こそ著者と對坐といひ得るのである。

讀書より得る收獲は必らずしも直接其書の言ふ所に因つてのみ得るのではなく、その說く所のものから類推し、或は聯想して間接に種々の考を得るのも讀書の收獲である。小說の如き娛樂の書は直接に讀書子に益を與へるものではないが、間接に種々の事を思ひ當り意外の收獲を得ることは誰しも經驗あることだ。だから書物は何等かの益を得ることを目的として讀むには及ばぬ。何にても讀めば書外に案外の收獲がある、多くの人は濫讀の弊をいふが、自分などはボンヤリ時間を空しく潰すよりも何んでも讀めと勸めるも

のである。

秋期はいつも讀書の好季だがことしの秋期ほど、人心の惰氣が一掃され極度に緊張してゐる時は無い。今や日支の戰鬪が正に頂點に達して、將士は懸命に轉戰してゐる。この戰は實に我國運を賭しての戰である。

我等は朝夕の新聞にラヂオに戰報を聞き、終日張り切つて腦中一點の弛緩がない。斯る折柄の讀書は特殊の感慨を誘ふもので、眞に得難い讀書期である。斯る折柄には自然戰爭に關する書物が多く讀まれ、實戰を前に控へて讀むから、常よりも百倍も感じが深い。苟くも戰爭や外交などに志ある人、國家を憂愛するの士は、此際讀書の材料を戰爭に採るのは至極結構である。この緊張の氣合に乘じて、日本歷史を讀み直して見るもよい。兵記軍記軍談を讀んで見るもよい。倫理宗教の書を讀むもよい。古雄の傳記を讀むもよい。必ずや我國民の麗はしい犧牲的忠誠が如何に國體に關係があるかをしみじみと看取するであらう。

更らに洋書を讀んでは、世界の文化を誇る國々が、利を爭ふ一點張りで利益

の前には條理も道德もないことが、此場合最も鮮明に最も痛切に會得し得らるるであらう。

非常の時には非常の考が起る、世界の大思想家は皆非常時に起つてゐる。四年間に亙る世界の大戰に於て交戰國が如何に種々の發明をしたか、軍事工業が如何に進歩したか、眞に驚くべきものがある。畢竟非常の必要に逼られて非常の發明のあるのは敢て怪しむに足らない。是等の發明は必ずしも讀書に由來するとはいはないが、多くの工夫の溫床が讀書であることも否めない。

想ふに戰後日本の國策は如何にすべきか、經濟、外交、文藝、工業は如何にすべきか。前途に横つて天才の檢討と起案を待つことが少くない。

知らず、讀書子の何人が是等の大案を立つるであらうか。この讀書シーズンは通常のシーズンでなく、讀書人に大なる期待を繫げるシーズンである。

言行錄を讀んで

私は今「栖鳳閑話」を讀んでゐる。これは畫家竹内栖鳳の子息逸氏が、父の言行を錄したものである。私は平素栖鳳の畫筆を愛賞してゐるものだが、實は交りがあるでもない。強て栖鳳の言行を知りたいと思ふてもゐない。しかしこの書を讀んで可なり面白く感じたのは、筆者が畫とは畑違ひながら相當の文筆を有する子息で、その說く所は敢て父を揚ぐるのが目的でもなく父を辯護するのが主旨でもなく、常に座右に倚して見たり聽いたりしたこと、或は母から聞いたことなどを思ひ出るまゝ、秩序もなく卒直に淡白に書き散らした所に興味がある。

斯る書き方は傳記などをかくとは異つて筆に拘束がないから、散漫乍ら純眞の味がある。往々筆が走つて、父の缺點や失敗や短所までも逆り出る。そこに亦天眞流露の味がある。門人などの筆は往々崇拜の念から師を揚ぐるに失するし、批評家の筆には、大概論理が伴ふ。これは實子の筆だから、以上の

失を免れて事實と觀察に誤がない。私は此種の筆錄を好む、どうせ片々たる思ひ出の記であるから纏つてはゐないが、纏つた傳記などに獲る能はざる貴いものがある。

それは多く瑣事デテールで、兎もすると、そんなことはどうでもよいと閑却され、傳記等に漏れ勝ちであるが、却てそれが本當の事をあらはし、傳記の幾百千卷よりも重きをなすことがある。是等のデテールは本人としては氣もつかず勿論自から口にせぬことであるが、而もそれが其人の性格や習癖や氣分などを知るに此上のない資料であつて、人の傳を作るに側面觀を必要とすることはいふまでもないが、是等の記載こそ多く側面を知るの好材料である。

藝苑には內弟子と唱ふる門人があつて常に他の門人に羨まれる。この內弟子の師の家庭に起臥して朝夕師に親炙し、或は散策や旅行に伴はれ、他の門人が見たり聞いたりすることの出來ないことを見聞するために、師の心持をよく呑みこんで得をする。畢竟師が隨時發する言語などで自から啓發されるからであつて、他の門人に羨まれるのも無理はないが、この書の著者は骨肉

の關係があるから、内弟子に比すると幾段好位地に居るもので、その說く所は栖鳳木人の說くよりも、要を得てゐるかにも思はれる。木人として決して口外しないことまでも洒々としてさらけ出してゐる。木人からいはせると、そんな馬鹿げたことを書くでないと顰蹙するやうなこと、或は天機を漏らし過ぎたりするやうなこともあらうが、そこに眞實もあり、資料としての貴さもあり、讀んで興味もあるので、私は此種の言行錄を讀むことを好む。

しかし私は見聞が狹いので此類のことを多く知つて居らぬ。僅かに知るのは、いつぞや佐々木信綱氏の隨筆に、その夫人の筆蹟が副はつてゐたので私の注意を惹いた。夫人の平素良人の傍に侍して、何かと良人の言動を書き留めて置かるゝ習慣があるらしく、それが一種の隨筆となつてゐる。勿論その記事は概ね良人の瑣事に屬してゐるが、良人の半面がよく描されてゐる。乃ち良人の日々の動靜や人に接する態度や、時々の感想や咳拂までとはいはんが、木人自身の氣を留めないことまでも、よく捉へて筆寫されてゐる。若しこの夫人無かりせば、多くのデテールは皆沒却するであらうに、佐々木君は仕合

の人だと思ふた。文學者にはジョンソンに於ける、ボスウェルの如き好祕書が容易に得られないとしても、文筆ある人を細君に有つべきであると感じた。

別にもう一つ親近者に書かれた言行錄に感じたことをいふと、小泉八雲が歿した時、早大の出版部で八雲に親炙した諸家に請ふて多くの追懷文を集めて出版したが、其中で最も優秀を覺えたものは未亡人の談話筆記であつた。可なり委しいものであつたが家庭の瑣事ばかりでなく、文藝の事にも及び、亡夫の面目を躍如たらしむるものがあつて確に壓卷であつた。

元來婦人は細心で男子の氣づかざる點に氣がつき、しかもその觀察が周到であり且つ鋭利である。藝術家は大抵心を斯道に集注するので、ある事柄に對しては全く放心である。隨つて其擧措は時々刻々送り去るのが通例であるが、これを掴むものは唯始終左右にあつて、忠實で且つ能力のある夫人でなければならない。

八雲夫人の如きは確に優れた祕書以上の人であることが、その談話に由つて首肯せられた。肉親の人の書いたものでも一概に重んぜられない譯で動

もすれば何か爲にする所があつたり、或は誇張があつたりするものは勿論採るに足らない。唯純眞なるものに至つては、言行錄の冠冕とするに足る。私は此種の文獻に重きを置くものである。

東京日日新聞の一萬號に際して

明治初年の新聞紙を追懷し今日の新聞紙の隆盛を考へると、眞に今昔の感に堪へない。私などは明治元年頃に小兒であつて、その頃の新聞について語る資格がないが、私の初めて觸れた新聞紙は鄕國新潟で發行した北湊新聞で、半紙三四枚の幼稚のものであつた。その新聞に、私などが英學校で外字新聞を反譯したのが掲載されたのを光榮と感じた童心を今も時々思ひ出す。これが私の新聞に觸れた初まりで、後には北湊新聞に踵いで新潟新聞の主筆となつたこともあるが、それは十數年後の事である。

慶應頃から明治の初年にかけて現れたいろ〳〵の新聞は皆半紙二ツ折の雜誌體のもので、何れも長續きがしなかつた。當時新聞の發刊を奬勵したことは政府の大官で木戸孝允が起させた新聞もあつた。前島驛遞頭が郵便宣傳のため起した新聞もあつた。報知新聞なども元は郵便報知新聞といふて、前島男の發起に係つてゐる。讀者が幼稚で新聞に使用される新語や漢語が

解るまいといふて、一册の字引を添へて出したことすらある。假名ばかりの新聞も一、二種發行されたが、それも永續しなかつた。外人ブラックの發行した新聞紙がやゝ新聞らしいものであつたが、治外法權に隱れてやゝもすると政府の惡口をつくので、政府も困つて終にブラックを買收するやうなこともあつた。その頃新聞記者の罰せられたものもあつたが、士族と平民とは取扱ひが異なつて士族は自宅に幽閉され、平民は牢屋に送らるゝやうな差別待遇があつた。自宅に禁錮されたものは、酒を飲んだり內々惡所通をするやうな暢氣なものであつた。その頃の發行部數は極めて少なく、新聞社の事務員が朝出勤の序に配達したといふ奇談もある。新聞記者も幼稚で、時々東京府廳に召喚され新聞の報道の迅速を要することや、演劇が社會教化の機關であることなどの講釋を聞かされた滑稽もあつた。觀じ來れば、この頃の新聞はお話にならないほどの幼稚のものであつた。但だ太政官日誌だけは、法令布達の唯一の機關であつたから、その體裁が其頃の新聞同樣半紙綴りの貧裝のものであつたけれども、これだけは社會も幾許か敬意を拂つた。この日誌が乃

ち今の官報の前身である。

以上の如き搖籃時代が數年續いた。貴社新聞の前身東京日日新聞は都下新聞紙の雄であつたけれども、その創刊の頃は細川といふ日本紙の片面刷りで活字を用ひず木版に彫つた整版時代すらあつた。記事といふても官報と外報と五、六の市井の記事があつたくらゐで、某町の風呂屋に手拭の遺失があるなどを報じたり、市井の記事には街上の喧嘩だの、祭禮の景況などが主なる記事であつた。この木版新聞が活版新聞となり、片側白紙新聞が今の新聞の體裁を具した四頁の新聞にまで進んだのは案外に早かつた。その原因は樣々あつたであらうが、佐賀の亂や萩や熊本の亂などが頻々と起つたので、その都度社會も新聞の必要を感じ出したので新聞の發行高も追々殖えたが、福地櫻痴が入社した頃は可なり進んでゐたと見えて、福地に幾許かの株を與へるにつき社中に議論もあつたと聞いたことがある。社株が相當であつたことを憶ふと可なり繁昌したと見える。併し日日新聞が新聞界に大手を振つたのは、政府の機關紙となつてからだと思はれる。殊に西南戰爭が起つてこの

新聞の聲價が頓に揚がつた。勿論當時の主筆なりし福地は大本營に出張しその祕書を勤むる傍ら、戰報をしきりに新聞に載せたので、東京日日の西南記事が最も精確とされ、發行部數が大いに激增し、東京日日が新聞界に雄飛するの端はこゝに開けた。私は明治八年に初めて東京に遊學し西南戰爭の時は東京大學の寄宿舍にゐたが、毎朝同窓と競爭して東京日日の戰報を貪り讀んだものだ。昨年の冬、當時福地が大本營から寄せた戰報の原稿を一枚も漏らさず立派に保存してあるのを或る書畫屋から示されて一覽したが、西南記事は悉く福地自身の筆に成つてゐることを知り、報道の精と文章の雋は偶然でないことを會得した。

東京日日と競爭の地位にある他の新聞も西南事件には皆出來得る限りを盡し、報知新聞の如きは犬養木堂を戰地にまで派し、朝野、京濱毎日などもそれ〴〵採報に力めた結果、增紙の程度に優劣はあつたが、新聞紙は劃期的に一齊に進歩したことは事實である。

當時都下の五大新聞といふのは東京日日、郵便報知、京濱毎日、朝野、曙の五紙

であつた。この時分は各社に論客が多くゐた。社說に最も重きを置き、各社社說の論爭は幾日も續き、眞に壯觀を極めた。今日と異つて隨分理論の論爭が多く、それが十數日或は一箇月も續いたことがある。新聞の月旦は論爭の優劣で定つたくらゐで、東京日日の福地、京濱毎日の沼間(守一)、報知の藤田(茂吉)、朝野の末廣(鐵腸)など、何れ劣らぬ猛者達はそれ〴〵議論體、文章體に特徵があつて、百花咲き亂るゝの觀があつた。段々民權論が沸騰してきて、新聞の論爭が一層激烈となり、東京日日はひとり政府擁護の地位に立つて、他の諸紙と戰つた。その頃主權論が論題となつて、各社は鎬を削つたが、斯る法律論になると沼間に一長があつて、流石の福地も漸く困り、我等大學の同窓で法律專攻の渡邊安積の應援を求め、幾回かその論文を掲載したことがある。我々大學生も亦新聞論爭の渦中に卷こまれ、高田半峰、亡友山田一郎、岡山兼吉諸氏と手分けをして一篇の主權論を著したこともある。それは當時丸善で出版されたが我等はわざと日本の主權所在論を避けて觸れなかつたことを今想ひ出す。

我々の大學在學時代には、政府は學生教員の政談をなすことを禁ずると共

に、その演說會に臨むことすら禁じた。我等はこれを非として、岡山兼吉、山田一郎の同窓と共に、書生の身分として元老院に解禁に關する建白をした。當時福地は政府を辯護して、我等の建白を書生論と評したと聽き、同窓の關直彥が東京日日に在社してゐるのを幸ひ、その紹介で初めて福地に見え、二、三時間日報社の樓上で論戰したことがある。福地は巧に我等の論鋩を避け勝敗なしに別れたがその頃の福地は隆々たる勢ひで、日報社は銀座第一等の大洋館で、入口に高く太政官御用の標札を掛けてゐた頃であつた。

民權論が段々盛んになると共に政府に鋒先を向けるものが多くなつたので、政府は初めて嚴密の新聞條例と讒謗律を發布した。これは我新聞歷史中最も峻烈の取締法であつて各社に大恐慌を起した。前から取締法があつたのであるが可なり大ザッパなものであつたのに、今度は水も漏さぬ周密のもので筆の緩急で平常茶飯のことも有罪となる危險があるので、都下の大新聞社は互に平生の恩怨を忘れて各社の主筆が委員となり、政府に伺書を呈することになつた。福地が各條毎に例を設けて斯樣なことは條例に觸れるや否

やと頗る周到の質義を列し、三ページ種に就ては成島柳北が擔當して、市井の人事に色々例を取り隨分苦心した伺書であつたが、政府は冷然として指令の限りにあらずとはねつけた。その伺書の草稿は日報社の條野氏が所持してゐた筈だが、今はどうなつたか、當時を知るにはよい文獻であるから、搜し出したいものである。

當時の新聞は議論と報道に重きを置き、娛樂的記事は新聞の本色を害するものとし、之を排斥することを以て寧ろ新聞の見識とした。從つて小說を載せず、繪も加へなかつた。但し娛樂を本位とする新聞は別にあつた。卽ち繪入新聞などがそれであつた。讀賣新聞などは初めから低級の新聞で無かつたが長い間政治に觸れることを避け、專ら文藝に力を注いだ。文藝界に名のある人は一時同社に輻輳し、趣味ある新聞といへばこの新聞が專賣であつたのだが、段々他の大新聞も娛樂趣味を加へることになつた。

以上は新聞の發生と、漸く生長に向つた頃の大略を擧げたに過ぎない。追々勃興した都下の諸新聞紙、地方殊に大阪に發達した二大新聞などに就ては

紙と時間が許さないので觸れることを得ないのを遺憾とする。今擱筆に臨み、搖籃期の新聞界の特徴ともいふべきことを聊か左に列擧する。

一、維新革命の際は、新聞紙が最も大切な使命を果すべき時であつたのに、新聞紙は尙襁褓の内にあつた。敢て不思議はないことだが、一寸妙に感ぜらるゝのは當時新聞に理解があり新聞を書く能力ある人は、十中の八九皆幕人であつた。隨つて薩長に味方するものが少なく、往々薩長に楯を衝いた。福地などは幕人だが、その獄に投ぜられたのは、薩長に對する筆禍であつた。新聞が漸く發達した頃でも著名の記者は皆幕人であつた。福地を始め沼間でも成島でも栗本(鋤雲)でも皆さうである。幕人には新思想の人物が多かつたのである。

一、當時の新聞紙は幼稚とはいへ、社會の木鐸を以て任じ、民衆を導くを以て務とし、苟くも世と迎合するを恥とした。彼等は燈を揭げて蒙者の先に立ち、荆棘を拂つて案内をした。その議論は低級社會の地平線を拔き敬聽すべきものが割合に多かつた。

一、當時の新聞主筆は政治家兼帶で、今の專門記者と異る者があつた。當時の政治家的記者から見ると、今の記者は一箇の技師に過ぎないであらう。その得失は別として實は斯る相違があつた。當時新聞の經營が甚だ困難であつた譯も、記者が技師でなく政治家であつたからで、經濟などは眼中に置かず、常に危道を踏んだから、どこの新聞社でも編輯部の頑張りは會計部を困らせた。

一、當時新聞事業の累をなしたものは、新聞條例であつた。此條例のために新聞社は寧日なく罪を得た。最も頻繁に起つた事件は官吏侮辱罪で、下級官吏をひやかした位のことでも罪に問はれた。まして大官をコキおろすやうな筆を揮ふと罪は重大であつた。此頃官尊民卑の餘弊がまだ濃厚で、今日の人が想像し得られないやうな甚しいことがあつた。是等のため新聞社が累されたことは並大抵でなかつた。

一、條例が新聞社に經濟上の累をなしたことは、發行停止であつた。これは一紙の新聞に罪があるとその新聞の發賣頒布を禁ずるに止まらず、一週間

二週間、甚しきは一箇月も新聞の發行を停止された。即ち一人罪あれば連座三族に及んだもので、殆んど新聞の營業を根柢より破壞する程のものであつたから、どの社でも困つたが、この禍も稀に在つたのでなく頻々と起つた。新聞紙の發達にこれがどれほどの害をなしたか、今考へても尙餘悸を覺える。

丸善の「學鐙」

丸善洋書店の機關雜誌「學鐙」が創刊四十年となるので、來四月記念號を出すにつき、私に思ひ出を書けと依賴された。私は今でも日本橋筋を散策する毎に、丸善に立寄ることが毎々だが、階下の雜貨店で文房具を購つたり、和書部で近刊書を漁つたりする位で、時には階上の喫茶店に入ることもあるが、階上の洋書を漁ることは滅多に無い。併し三十數年前の既往を追懷すると、隨分頻繁に此店を訪ふたもので、其頃は洋書の外に他のものが無く、某々圖書通の店員を相手に、いろ〳〵の書物に目を曝し半日位費したことは幾度もある。其頃は丸善は私共のよい遊び場であつた。

考へて見ると、此店と我等の關係も古いもので、まだ餘り繁昌しない頃からの馴染である。自分は十幾年早稻田大學の圖書館長であつたため、特に此店に足を運ぶ必要があつて、洋書の供給はすべて此店から受けたので、早稻田の藏書に丸善のペーパの貼付されたのがどれほどあるか知れない。私はなほ

その時より溯つて東京大學に在つた頃の事を想ひ出す。當時主權論が一時盛んに論議され、都下有力の新聞紙に互ひに力を極めて論戰したが、それに釣りこまれた我等も高田半峯、亡友山田喜之助、山田一郎、岡山兼吉などの諸友と銘々手分けをして主權論を書いたことがある。それはオーステンの說に基いたもので、實地の問題、日本の主權所在論はわざと避けて觸れなかつたが、論稿は成つても出版が出來ないので惱んだ。其際出版してあげようと厚意を寄せられたのが丸善であつた。その後我々は圖書館關係者が日本圖書館協會を組織して機關雜誌を發行する事になつて印刷費の支辨に惱んだ際も援助を與へられたのは丸善であつた。此雜誌は最初年四回刊行で、追々月刊となつたが、數年間無條件で刊行してくれられた。これは丸善が全國の圖書館に對する厚意に因るものだが、學鐙の主任記者なりし內田貢氏が協會にも關係があつたので、氏の心添へも與つて斯る仕合を得たことは言ふまでもない。丸善の此頃は旣に盛運に達した際で、內田氏の語るに聞けば、同店の廣告費の幾分を割けば圖書館雜誌の印刷費位は何んでもなく、辨じ得るといはれたこ

ともあるが、協會としては丸善に感謝を捧げねばならぬ後援であつた。

丸善もある時代には可なり經營困難であつたらしい。何んといふても洋書の需用は當時微々たるもので、帝大の教科書を西洋から取寄せて、若干の餘部にはいつも處分に困つたなどの苦情話を聞いたこともあつた。洋書店の經營困難であつた一二の例を擧げると、小野梓氏が神田で開いた東洋館書店が洋書專門で失敗したのは、他の原因もあつたのだが、經營困難も確たる一原因であつた。確か丸善に緣故のあつた、赤坂某氏が閉店後の仕末をしたことを思ひ出す。又中西屋が專門の洋書店で相當信用もあつたが、これも終には丸善に合併さるゝに至つた。恐らくこれも經營難が斯くしたのであるまいか。他人の例を引くまでもなく、私などが早稻田大學出版部で代理部を開き、洋書や教科書の販賣を試みたこともあるが、終に丸善の經營に移すの已むを得なかつたのも矢張り經營難から生じたのである。丸善それ自身も或る時代には東洋館や中西屋のやうに經營難を感じたこともあつたであらうに、よくも初志を變ぜず、洋書專門でやり通したものだ。その經路を懷ふと眞に敬

服に値する。私は大震災前ある時久方振り丸善を訪ふて洋書部に入つて見ると、一隅に幾千の小册子が堆積してあつた。何かと手に取つて見ると、それは電氣のガイド・ブックであつたので如何さま我電氣工業の進んだ反映であると感じたが、或る時代の同店にはこのガイド・ブックは僅かに一部か二部しか存しない貧弱の時もあつたのである。日本の進運につれ丸善が大をなしたことの一例である。

丸善は今全國に大學のある所在地に幾多支店を有し、何れも繁昌して、押しも押されもしない堂々たる洋書店で、日本文化に貢獻した功は實に大なるものがある。私の同店に敬服する一事は早くから工業關係の圖書を出版し、それを一の特色としてゐることである。此種の圖書は斯界に大切なものであるのに、種々の事情で出版が面倒で餘り賣行きもよくないものであるのに、目前の利害を度外に置き、他店で敢てしないものを出してゐるのを見て流石に丸善は大家だといつも感服する。

丸善の宣傳機關は「學鐙」で、近年は見ないが、久しい馴染である。新着の圖書

はすべてこれに掲げられてゐるから、苟くも洋書を購はんとするものは先づこれを一瞥せねばならんが、斯樣な宣傳雜誌は今は諸方で發行するから珍らしくもなく、毎日案頭に飛び來るものは、多く反故籠に葬られるが、其運命であるのに「學鐙」は流石に此流の雜誌の先輩で、且つ範を示したものだけあつて、「學鐙」には相當の權威があつた。といふのは新着圖書の目錄を收むるのみでなく、立派な圖書の解題があり、外國出版界の消息があり、珍籍奇書の評判があり、編纂者の論說があり、書史通の寄書もあつて、必讀の價値があり、我等も相當の尊敬を拂ひ下に置かないものであつた。これは主として書史通で且つ能文の內田氏が編輯を擔任したからであつて、この雜誌のお蔭で、外國の圖書を翫味し書史的教習を受けたものが決して少なくないと思ふてゐる。一箇商店の宣傳雜誌としては實に勿體ないものであつた。追々この雜誌に倣ふものが出てゐるけれども、當時の「學鐙」の壘を摩するほどのものは自分は未だ知らない。此雜誌が創刊四十年を經て更に陣容を改め、四月以後江湖に見えると聞き、丸善に相當の緣因ある私は喜びに堪へないので聊か追懷を錄して「學鐙」に寄す。

吉田東伍博士地名辭書編纂の思ひ出

今度冨山房が吉田東伍博士の大日本地名辭書を改版さるゝに方り、私に博士と辭書につき思ひ出を語れとの注文が出たので、忽卒記憶を辿つて懷舊談を試みますが、思ひ出づるまゝの漫談で、論次も次第もないことを御容赦下さい。

顧みるに、丁度日清戰爭の時です。吉田君は私の宅に寓して居られた。私は讀賣新聞の記者であつたが、吉田君は是非從軍記者として觀戰したいと切なる冀望があつたので、私も聊か斡旋して、軍艦橋立に搭乘を許され、親しく海戰を目睹したのです。其頃海戰も終局に近づいた頃で、吉田君は現に丁汝昌の自殺の蹟を訪ねて無事に引上げて歸られた。

そこで吉田君から、自分は生還を期さず從軍したが、幸に無事に還ることを得て見れば、何か報國の一端ともなるべき編著を企て、己れの記念ともしたいといふ話が出た。これが吉田君の地名辭書の編纂を思ひ立つた初まりで私

は君の計畫に對し直ちに贊成を表し援助を約した。後に考へるとこの約束は如何にも無謀極まるものであつた。吉田君當初の考では三年を費せば成るといふ豫算であつたが、それにしても私に何んの資力もなく何んの參考書の持合せもない。唯三四の書生を督してゐた頃で、材料は書生に寫させ、吉田君は私の食客として置けばよいといふやうな杜撰な胸算で、大膽にも何人に圖ることなく、吉田君は私の薄暗い書生部屋で筆を執り初めたが、段々經費が嵩んで、到底自分で遣り通す見據ゑがつかず、半歲位は覺束なくも自分の手で賄つたが、終に冨山房の坂本君に相談して同書店にこれを移すことになつた。こゝに漸く活路を得たが、實は三年で成功を期したのが十三年の歲月を費した程規模が段々に擴がつた。それを擴がるに任かせ、何んの苦情も曾つて言はれず、遂に大成したのは、全く坂本君の雅量に由るので、吉田君も存分の編纂をやり得たのである。

この編纂は前述のごとく、日清戰爭後に始まり、日露戰爭が終つて後完成したのである。その完成を告げた時、私は印刷された尨大の辭書を携へて、初め

て吉田君を大隈伯に紹介した。其時大隈伯は辭書を飜しながら「吉田君は學者でないからこれだけのものを遣り上げた」といはれた。卒然これを聞くと褒めたのか貶したのか惑ふやうでもあるが、自分は伯の意のある所を領して、流石は伯だ面白い讃辭だと感じた。伯の意は世の學者は實行家でないから大きな顏をしてゐてもこんなことを成し遂げ得ないと皮肉をいはれたのである。更に委しくいふと、高く標持してゐる學者は一概に自家の面目や名譽に頓着して、思ふことがあつても、周圍の論評を恐れて容易に外に發することをしない。かうでもないあゝでもないと思慮する間に歲月は遠慮なく經過して、折角の思想を腦裏に納めて墓に入るのが多いと、學者の臆病を皮肉られたのである。吉田君は後日博士の學位をかゝ得たが、其頃はまだ無名の人であつた。大隈伯が學者でないといはれたのもこの故である。

この辭書の完成を告げた時、上野の精養軒に多數の學者を會して祝宴が開かれ、吉田君幷に自分の鄕里の先輩前島男爵が祝詞を陳べられ、來賓中にも二三祝詞を述べた人があつた。私自身は當初關係をした丈に、著者に次ぐの喜

びを感じ、その所懷を辭書の序に書いた。それを簡約に申すと、世には鬱然たる大家があつて、遠く望むと如何にも偉らく見えるが、その實力如何と檢討すると、案外名もない小家に劣ることが少くない。支那は東洋に國する一大雄邦で、久しく大家とされてゐたが、一朝戰つて見ると、弱小の如く思はれた日本に苦もなく破られた。露西亞は世界に久しく恐れられた大國で、鬱然たる大家の估券を有したものだが、これも戰つて見ると案外に弱く、勝利は終に日本の手に歸した。大家といふものは必らずしも實力上の大家でなく、名もないものが寧ろ大家以上であることが二大戰役で立證された。吉田君は無名の人だがその行蹟は遙かに世の所謂大家の上に在ることはこの辭書が證明すると著者の爲に大いに氣を吐いたのであつた。

吉田君は中學教育を受けた位で、高等の學校に入つた人でない。然るに天稟の學才があつて、殊に國史に精しかつた。君に「日韓古史斷」の名著があり、地名辭書出版前に早く冨山房から出版されたが、あれなどが君の史的識見を語るの好適例である。君は常に新井白石の學識を稱揚し且つ私淑もしたが實

は種々の點に於て白石に比すべき人であつた。史學に於ては白石の壘を摩するものがあつたといふても過褒でない。「日韓古史斷」の如きは、白石の古史通よりも數歩踏み出したものである。君の史學に就ては先輩久米邦武博士が崇敬を拂つた隱れもない事實に徵しても明かで、こゝに絮說を要しない。

以上の如き史的天才を著者として「大日本地名辭書」が成つたから、不朽の名を流したのも當然である。この辭書は單なる地名の羅列でなく、各地名に史的考證のあるのが特色で、幾多千古の疑問が著者の識見に由つて各々明解を得て居ることが更らに大なる特色である。世の學者の多くは、史的疑問の解を得れば虎の子を得た如く、事々しく論文を書いて世に誇るのが常であるのに、この著者は創見を惜しげもなく各地名の注脚に傾けてゐる。卽ちこの辭書は著者の創見の記錄とも見るべきもので、ドノ頁にも著者の史的識見と創見が燦然として光輝を放つてゐる。あれだけの大著に多少の誤謬があつたとしても咎むべきでもないが、著者には確たる自信があつて、改版に際し斷じて訂正をしたことがない。

吉田君は世に稀なる博覽强記の人で、一たび寓目したことは決して忘るゝことなく、忘れ勝である古い年號なども、ハッキリ記憶してゐる。且つ君は頗る勤勉の人で、編纂十三年の長きに渉る其間早大の講壇に立つて幾何の時間を費した外には夙夜編纂に沒頭した。あれ丈の大著をどの部分でも人手を藉りたことがなく、矻々として自から筆を把つた。その草稿は幸に一頁も脫せず、皆早大の圖書館に保存されてゐるが、それを積み重ねると等身幾倍ともいふべき大部のもので、皆君の墨痕を存してゐる。君はあの大著をなすに一たびも足を擧げて實地踏査などしたことはなく、いつも机上に參謀本部の測量圖を置き、徹頭徹尾これを參考とした。毎々聞いたことだが、自分が實地踏査をやつてもこの圖の精なるに及ばぬといふた。又圖によつて山河の形勢を案じ、甲地と乙地の距離を考へ、戰記の誤謬を正したことも一再ならずある。某の戰記には甲地から乙地へ一日に攻め入つたとあるが、これ程の距離に昔の行軍が一日に達し得る筈はないなど屢々語られたこともある。なほ地名は皆漢字になつてゐるから動ともすると漢字に拘泥して種々の見解を下す

が、實は漢字に書かない古名に遡つて考へると、初めて眞解が得らるゝものだと語られたこともあつた。

この地名辭書はどの地名にも普通の地誌に無いことが織り込まれてゐる。その織り込まれた何物かが卽ち著者以外に持ち得ない特徵であつて、地名辭典は世に幾種あつても、この書が卓然として群を拔いてゐる所以である。著者は隨分圖書館あたりで地誌を漁つた。どこの國でも大槪地誌は刊行されてゐるが著者の困つたのは某々地に纏まつた地誌が缺けてゐることであつた。卽ち九州などは敵國と境界を接してゐるから、戰國時代には互ひに地誌を祕した。隨つて斯る所には精細の地誌を見ることが出來ない。四國などでも何故か土佐に纏つた地誌がなく、これには吉田君も困つた。僅かに帝大圖書館に、南路志といふ大部の寫本があつたのを、坪井博士を介して、見ることを許され、君は一兩度坪井博士の家に就て見たことがある。この南路志拜見が緣をなして、君は學位を得た。それは後段に語ることにする。

十三年の歲月を費して本書の成つた時、學界を驚かした中にも、志賀重昂氏

は熱烈の讃辭を吝まなかつた。自分は何人の讃辭よりも氏の讃辭を多とした。氏は地理の專門學者で、自身に抱負もあり、苟くも人に降る學者でなかつたが、吉田君には心醉するまでに敬意を拂つたものだ。この書の刊行されたその年であつたか、自分は一册を携へて坪井博士を訪ふて、貴下の庇蔭でこの書が完成したと謝辭を陳べた。實は謝禮の外に野心があつたのだ。その野心は他でもない。この書に依つて吉田君に博士の學位を得させたい爲であつた。私は率直に坪井博士に對してこの書を學位論文と見做すことが出來れば、貴下の御斡旋で學位を得させたいと思ふがどうだらうかといふた。坪井博士は沈思の後、よからうといはれ、博士自身推薦者となつて、文學博士會の議に問はれ、滿場一致で吉田君は文學博士の學位を贏ち得た。文學博士會は最も通過困難の會で、異論の紛起が常であるのに、何等學閥もなく、又高い學歷もない吉田君が滿場一致の推薦を得たのは眞に異數と云ふべきだが、實はそれほど諸學者が一齊にこの著者の學識を認めたからに他ならない。

筆の序に吉田君の强い記憶の一二を附記して見よう。久米博士は晩年に

語られた。吉田君に初めて會したのは「日韓古史斷」の草稿を持參して相談に見えた時であつた。その際材料となるべき或る一文を示したが、吉田君は默々としてうなづき敢て寫し取りもせず、辭し去つた。そこで妙な男だと思つたが、その後古史斷が出版されて贈られたのを飜して見ると、自分の示した資料がチャント收めてあるのに驚いたと語られた。大體歷史家は種々事件の大略の時代は諳じてゐるが、吉田君は年號は勿論何年何月といふことまで抵ね記憶してゐた。自分が曾つて鄕里に遊説を試みた時、吉田君も同伴して到る處にその地の歷史を説いた。別に手控のやうのものを携へてゐないのにその講演の委しいのに自分も舌を卷いたことがある。同行した地は鄕國であるから別して委しいのであつたかも知れないが、他縣でも同じく地理歷史に委しいと聞いて、自分は曾つて君にいつたことがある。日本全國の到る先先その地の歷史を語り歩るき得るものは天下廣しと雖も君一人であると。

あとは餘談であるが、吉田君の近親に國史に委しく相當の著述もある人で小川弘といふがあり、和學に造詣があつて曾つて音樂學校の教鞭を執つた旗

野櫻坪といふ人もあつた。吉田君の天才はその血統から來て居るとも思はれるが、玆に漏らす可らざることは、小川弘の遺著に國邑志といふ數十卷の寫本のあつたことだ。纏まつたものでもなかつたが、地名に史的考證を施した點は、地名辭書に相通ずる所があつたので、吉田君が地名辭書の編纂を心掛けたのは、一つは故人の遺業を完うせんとしたのにもあつた。勿論國邑志はあの辭書の內容に比すると九牛の一毛もないほどのものであるけれども、君の心がけの元はこの書にありといふべきである。

君の晩年は早大出版部で計畫した庶物歷史辭典の編纂を擔任して材料蒐集に年餘を費した。これも庶物を史的に考證せんとしたもので、若し脫稿すれば地名辭書と並び稱せらるゝものであつたらうが、君が筆を下さない前に病に罹り、終に逝いた。君の病症は何んであつたか、醫者の診斷を厭ふて何んと勸めても應ぜず、やつとの事に保養に出かけることになつて、自ら行先きを選んだ地が銚子で、そこに赴いて二三日たつと訃音を聞いた。旅館の傳へる所に據ると、附添ひの家族を東京に歸し、卽夜病體であるのに多量の酒を飲ん

でその夜絶命したと聽いたが、君は病の不治を思ふて窃かに決する所があつたのではあるまいかと感ぜしめた。銚子が君の終焉の地であるから、そこに終焉の碑を建てた。この終焉地に就ても地理的の話がある。君は平素利根川に大なる趣味を感じて、赤松宗旦の著した利根川圖志はその愛好の圖書であつた。利根の吐口である銚子を保養地と選んだのも、多分平生の憧憬に因るので、保養中探檢を庶幾したのであつたかも知れない。何んにしても平素憧憬の地が終焉の所となつたのは奇縁であるとも言ひ得よう。

越佐人名辭書

越佐人名辭書の出版は、我鄉土に於ける破天荒の快擧である。越佐の人物傳は從來種々出版されてゐるが、古來人名辭書の編纂を企てたものは甞て無い。必竟その事が甚だ困難であるからである。編纂は必ずしも難くないが、材料を得ることが甚だ難い。委しくいへば、材料を徵すべき文獻が甚だ乏しいからである。或る顯著の人物は從來人物傳に常に繰返されてゐるが、隱れた人物となると、殆んど尋ぬるに由ない。而かもこの隱れた方面にどんなに大切の人物が多數あるかを思はねばならぬ。或は著述があつたり、碑文があつたり、或は詩文、和歌、俳諧、繪畫等の作品を殘してゐる人は、それに由つて其人が常に人物傳に採られてゐるけれども、それは人名辭書に採るべき一部の人に過ぎない。

人名辭書に於ては古今を通じて社會全般に渉る人名を網羅せねば、人名辭書として役立たない。而して人名辭書を編纂するの困難は、この隱れた方面

を探ぐるに在るのだ。尙困難といふべきは假令ひ必要人物の名を得てもその事蹟が不分明であれば、それを採り入れることが出來ないのである。卽ち口碑に依つて或る鄕國に傳ふべき人を得たとしても、何等行蹟が具體的に知られないやうなことは事實少なくないが、それを文獻に徵することの困難は此種の編纂に當つた人の皆知る所である。到底大昔の人物の如きは國史に就て知るの外はないが、これを涉獵するには編者に相當史家的能力を要する。斯く考察し來ると從來人名辭書の編纂の企てられなかつたことは決して無理は無いが、こゝに幸ひにも村島靖雄氏を得た。氏は帝大に史學を專攻した人であつて、久しく帝國圖書館に司書官を勤め群書の涉獵に十分の經驗があつて、我新潟の圖書館長に迎へられ、且つ新潟縣史編纂の局にも當つたから、群書の涉獵には極めて便利の地位に在つたのでこの難事業を成就することを得たのである。

自分は村島君とは交が深く、會する每に辭書編纂の行程に就き苦心談を聽くのが常であつたが、實は其稿本の或る部分を見たに過ぎない。凡例に依る

と、收めた人名は三千五百の多數に上り、神代から最近に至る二千六百年に亙り、越佐出身者の外に越佐に關係ある他邦の人をも網羅し、大正十四年稿を起して編者の歿する昭和十一年迄十二年間勞作を續けたのである。若し君尙在さば編纂は未だ半途に在りといふかも知れないが、博搜の勞は想ふに餘りある。從來出版された越佐人物傳の最も詳なるものと雖も、恐らく其人名の數は此半分にも及ぶものはなからう。編者は不幸中道にして歿したけれども、此不容易の業績は永く文界に傳はるであらう。或は此編著に多少の瑕瑾があり不備があつても、それは追々補足修正の出來ることで最も難しとする基礎を成した功は實に大なりといはざるを得ぬ。我等は我鄕土に斯る大著の出版を見ることを得たのを喜ぶと共に編者の早く易簀したことを惜むの情に堪へぬ。編者に就て幾多いふべきこともあるが、今は唯編者の勞が酬ゐられたことを喜び、出版に就て種々の勞を執られた人々に厚く謝意を表するをもつて筆を擱き、これを以つて小序に代へる。

「坪内逍遙」の刊行に際して

逍遙君と自分の交(まじはり)は五十年の長きに渉り、其交は並々のものでなかつた。東京大學で机を並べた時も親しかつたが、早大時代には益々深く交はり、其間に言ふべきことも少からずあるがそれはすべて省くとして、君が熱海に居を構へてからの交りは特に忘れ難いものがある。自分は病後保養のため熱海に一週二週居つたこともあり、一年の首めには此地に赴くのが例で、其都度毎日君の莊を訪ふて、朝より正午まで應接したが、多くの場合君の文藝談を聽聞して自分の貧腦を利した。或る時は共に笻(つゑ)を曳いて梅園其他の勝區を訪ひ歩きながら君の迸り出る快談に耳を傾けた。君の談話は莊を出る時から始まり、梅園を訪ふても梅も風景もそつちのけにして君の快談は續き、無意識の間にいつとなく踵を廻らして歸路につき、君の莊に歸つても談の盡きないこともあつた。君の話題は文藝百端の事に渉り、或は近く閲讀された西洋文藝家の所説を語られたり、或は昨今推敲中の脚本の内容を語られたり、外國文學

の批評をされたりしたが話題の最も多きは君の本領とする演劇に關してゞあつた。

自分は時に君を訪ふて、數日君の莊に宿泊して、家人として取扱を受けたこともあつた。君の不眠症は此時分君を連夜惱ましたが、君は不眠を利用して思索さるゝことが常で、朝餐の食卓に於て昨夜はこんな事に考へついたなどゝ語られたこともあつた。晩食には對酌を特に愉快に感じ、深更まで君の快談を聽いた中に、君の胸中祕を漏らされたことも一再ならずあつた。勿論それは文藝上の事であつたが、種々の腹案などを聞き得たのは、多くは對酌の時であつた。自分は君の書齋に寢臥して一夜しみ〴〵感じたことは君と自分とは同窓の友人ではあるが、君に接する毎に種々の教を受けてゐるから、君は自分の師である。自分は君の門人であるのみならず、俗にいふ「内弟子」であると考へたことがあり、今もそれを忘れない。内弟子といふは師の家に寄宿してゐる門人をいふので、他の門人より餘分の教を受ける機會のあるのは内弟子で、内弟子は師の堂を窺ひ得るから早く藝にも達する、他の門人の内弟子

を美むのも此故である。自分は友人と門人と二重の資格を有したから、普通の内弟子よりも更に仕合であつた。君は自分のためとあれば、働きかけに進んで種々のことを說かれ、胸中に祕めあることでも、惜むことなく說かれた。自分はこれに由つて、尤も乏しきを感じてゐた近世文藝の大略を君に由つて識ることを得た。君は全く自分の恩人である。友人と呼ぶのは勿體ないのである。併し不肖の自分は君の最も熱心に幾十回か說かれたことを十分受け入れることが出來なかつた。それは多く演劇の方面にある。何故か自分は性來演劇に餘り趣味を感じないので、君が沸くが如く說かるゝ演劇談を聽いては頗る快味を感ずるが、さてそれをしみ〴〵受け入れて、演劇好とは成り得なかつた。君は曾つて自分にいはれた。君(自分の事)は何事にも趣味を解する人であるのに、何故に演劇にのみ趣味を持ち得ないのか、君にして若し自分と同趣味であつたならば、君の助けを藉りることが多かつたらうにと。自分は君の內弟子と自ら許しながら、其甲斐のなかつたことを自ら顧みて赧然たらざるを得ないのである。

逍遙君簀を易へて既に五年、徒らに生を偸んでゐる自分は、君の傳記を編纂するに當り、長い間の君との交游に對して、誼としてお手傳をせねばならぬのに、既に老いてそれが出來なくなつた。幸に君の門下に、おのづから其人があつて、多岐複雜なる明治文學の材料を遺憾なく蒐集整頓した柳田氏があり、文筆に長じ殊に師の藝術事跡に精通する河竹氏あつて、刻苦幾年、完備の詳傳を作り得たのは實に大慶至極で、恐らく君は莞爾として滿足さるゝことゝ思ふ。自分は此傳記のどの頁にも多少の關涉があるので、讀みもて行くと、宛がら故人の湧くが如き能辯を聽くが如き思があつて、在りし日の君を思ふの情に堪へざるものがある。

大久保湘南詩集に序す

大久保湘南は佐渡の人で幼にして詩を能くしたので人目して天才兒とした。鄉友長澤松雨湘南と刎頸の交あり。湘南の飄零函館に在るや君其才を惜んで債を贖ひ東京に延き槐南に就て學ばしむ。後隨鷗吟社を創立して、星社のため氣を吐く。湘南の詩名これより大いに揚る。余詩を解せずと雖も、亡友坂口五峯の居に數々湘南と會し、時に相携へて酒樓に登り欵晤夜を徹することあり、湘南溫藉恬淡、容貌秀麗貴公子の如く、醉へば必ず朗々詩を吟ず。吟詩は其得意とする所なりし。湘南艶體の詩を能くし巧みに綺語を弄す。嘗て思へらく、錦心繡腸、咳唾珠璣の語は湘南にして初めて許さるべきものなりと。其美聲は詩の艶麗と爭ふ、余聽く毎に魂飛ばんとす。余曾つて戯れに往々俗語を厭ふて其雅化を湘南に圖る。湘南深く考量を經ず、佳語を案出する神の如く、余をして幾回か其才藻に服せしめたり。曾て五峯余の爲に鷄血石歌の長篇を作る。推敲一旬湘南と商量して漸く成る。實に五峯集中の傑

作なり。詩成るの日余五峯に招かれ墨堤の某旗亭に會す。湘南並に印人藏六(濱村)も席に在り。湘南得意の美聲を弄し五峯の詩を三唱す。余湘南に一詩を賦せんことを請ふ。湘南諾して數日の後を約す。余五峯の招飲に答ふるため赤坂の某亭に宴を開く。五峯藏六廣業來り會して湘南ひとり來らず。圖らざりき湘南令妹の病を訪ふて忽ち惡疫に傳染し、二三日を經て其訃を聞かんとは。墨堤の會は實に袂別の會なりしなり。余此事を憶ふ毎に斷腸せずんばあらず。湘南春秋頗る富んで早世し詩壇に一才人を失ふ。洵に惋惜に堪へず。屈指すれば既に四十年に垂んとす。長澤君舊誼を忘れず、其遺詩中八百餘首を選んで刊行せんとし余に序を徵す。乃ち追憶の記を草して序に易ふ。

新潟の公園に長井雲坪の碑を見て

我郷國越後の誇とする畫家長井雲坪の碑を建る企があつて自分の拙き書が碑面に刻されて、新潟の白山公園に建設された。自分は偶〻四月の末に歸國したから、公園を訪ふて其碑を見た。自分の刻字を見て書の拙なるを耻ぢたが、碑石は堂々たるもので、背面に畫伯の略歴が刻され、斯人を紀念するには遺憾がないと心窃かに喜んだ。雲坪は新潟の隣地沼垂に生れた人で、明治の初年まで生存の人でありながら、郷國の人は其氏名すら知らなかつた。斯くいふ自分すら知らなかつたが、實に我郷國の生んだ畫家の内で斯人ほど南畫の堂に入つたものはないのである。斯人は弱冠にして早く長崎に遊び木下逸雲に就て學び、幕末には國禁を犯してフルベッキに伴はれて支那に渡り、大いに研鑽する所があつた。我北越に著名の畫家は二三に止まらないが長崎に遊んだものは一人もなく、況して南畫の本場たる支那に赴いたものは無かつた。雲坪は業成つて歸朝しても郷里には居らず、信州の長野や戸隱に住し

たので、郷人は多く斯人を知らなかつた。我等が識らざりしも亦其故であつた。雲坪は氣品の高い人で、時流に倣つて聞達を求めることを欲せず、韜晦して終生藝に遊んだ。郷人のみならず、一般趣味界にも久しく識られなかつたのも此故である。彼は信州に在る間に多くの畫を貽した。一朝それが世に現はるゝと、趣味家は愕然とした。其筆致の高雅飄逸なるを見ては、池大雅の再來となし、現代亦斯る高手あるかと三歎したが、實は彼の性格は俗流と相容れざるものがあり、其畫も亦時流に媚びる所がなかつたので、具眼者のみが專ら推重した。

雲坪の畫名が漸く顯はれるや、雲坪の傳を著はすものは曰く、彼は沼垂の貧家の子なり。家は豆腐を販ぐを業とし、彼の少年の時、毎朝豆腐を賣つて歩いた。幼少より畫を好んだので或る日蓮宗派の老婆が憐んで、其宗派の白衣を與へ、雲水流の旅行を勸めて長崎に到らしめたと。立志傳中にありさうなことを書いたものもあつたが、其説く所は皆事實に反し、彼は貧家の子でなく、豆

腐屋家業でもなく立派な醫家の子で、醫者修業に長崎へ出かけたのが、遂に好む所に走つて、木下逸雲の門下に投じたのである。自分が十年許り前歸省した時、雲坪の血屬が自分を訪ひ來つて、其肖像の寫眞を示し且つ經歷を語つたが、世間に傳へる事實に多く間違つてゐることを知つた。現に其肖像を見るに立派な若旦那で、溫雅な風采を具へ、何んとしても貧家の子とは思はれず、其氣品の高いのも生れつきであることが會得された。

雲坪の逸事で傳ふべきことが多いが、其一二をいふと、彼は頗る義理堅い性質で、師恩に對しての行動は敬服に値することがある。彼の雅號の雲の一字は師の雅號の逸雲から來て居るので、彼の用印は師が自から刻して與へたものといはれてゐる。彼は其印を尊敬して常に神棚に置き、用ひる時は一拜して其印を取り下げたといふ。曾つて師が東京に來た時、僕として隨伴すべきであつたが、生憎病氣で他の門人が隨伴したが、歸路には不幸難船の爲師は不歸の客となつた。此椿事には雲坪もひどく悲歎に暮れて、彼が晩年病を得た

時には、何んとしても服藥しないで、暗に師に殉ずるの覺悟を示したといはれてゐる。

雲坪を支那に伴つたフルベッキに就ても恩誼を感じたことは勿論だが、國禁を犯したことであるから、渡支の事は久しく祕されてゐたが、雲坪が信州で常に厄介になつてゐた某豪家に寄せた書簡には明らかにフルベッキの恩誼を稱へてゐる。亦此頃雲坪の崇拜者から頗る耳寄りの話を聞いたのは、フルベッキに伴はれて渡支の時大隈侯に謁したことが、雲坪の日誌に書かれてゐるといふ一事である。其日誌も信州の某家にあるといふが自分はそれを一見したいと思つてゐる。自分が見たのでないから遽かに信ずる譯には行かないが、大隈侯はフルベッキと親しい間柄であるから、或は雲坪を外國に伴ふに就ては一應大隈侯に相談したとも思はれる。侯はあの通り濶達の人であり、時は維新の曙光が見えてゐた頃でもあるから、侯が例の調子で、構ふことは無い連れて行けといはれたと想像することも出來る。其際多少餞別位は與

へられたとも思はれるも、大隈家には全然分つてゐない事實だが若し日誌に書かれてあるとすれば、意外の奇緣といはざるを得ぬ。

自分は雲坪の碑を見て、種々の事を想ひ出しつゝ公園内を散策した。以上錄する所は、卽ち其際の想ひ出の記に外ならない。

文墨餘滴

閑人閑居して閑筆を弄し、閑語五十則を爲す。署して文墨餘滴といふも竹頭木屑に過ぎず。皆愧存の文字にて大方に示すべきものにあらず。然るに厚顏貴社(書苑)に投ずるは、目下寄すべき適當の稿を得ざるに由るのみ。幸に恕せよ。

＊

姑蘇城外寒山寺の鐘を、千里を隔てて夜半日本に聽くは意外の事で、科學文化の庇陰でもあり又皇軍戰勝のお蔭でもある。我等は分明に聽き得たり。而かも其聲哀調を帶び、亡國を悲しむが如き概ありたり。

＊

多景の母は雨である。多雨の日本が風景に富むは偶然にあらず想ふに畫に南北あるは、雨の有無に因るともいひ得よう。北畫には峨々たる山はあれど、絕えて濕潤の氣が無い。南畫は雲烟漲り濕潤の氣滿つ。日本風景は南北何れの畫系に屬するといへば、南畫に屬すといふべき歟。

＊

外人の日本に來るもの國土の小なるを見て動もすれば輕侮の念を生じ、日本與みし易し、日本恐るるに足らずと爲す。彼等は日本の幅員を計るも、曾つて其深さを測量したるもの無し。日本の誇は土壤の廣さにあらずして其深さに在り、とは青嵐居士の曾つていふ所にて余の共鳴する所、日本の文化道德藝術等の深さは萬邦に超逸す。彼等徐ろに其深さを測り知らば、必ず驚倒するものあらん。

＊

古來征戰幾人か還ると詩人の謳ふたことと、戰場に立つものの生還を期さないのは武人の心條である。日々街頭に歡呼して出征者を送るのは、其征途を祝し出征の光榮を稱へるのであるけれど、やがて鬼となつて無言の凱旋者となることを考へると、誰か一滴の涙なきを得んや。骨肉はいふまでもなく國民も皆同樣で、送別にこれほど崇高の意義ある送別はなく、またこれほど悲痛の送別は無い。聞くならく出征者は軍服を着すると直ちに意氣轉換して

生還を期せざる決意を生ずると、これぞ愛國心の自然の發露である。彼等は出發に臨み骨肉に對し、又知己故舊に對して云く、追て靖國神社でお目にかゝらむと、何んぞ其言の崇高なる。これ卽ち彼等が神化を豫言するもので無くて何んであらう。彼等の征途に上らんとする時は卽ち神化の首途といふも不可なし、我等は出征軍人を送る時、いつも密かに合掌して敬意を拂ふを常とす。

＊

ことしの干支が寅である所から、新年の隨筆は多く寅を題とした。自分もある雜誌に寅に因んだ雜話を書いたが、其際に思ひ出さなかつた二つのエピソードがある。其一つは大阪の住友家の珍藏に、支那上代の古銅器が二十數點ある。其中で尤も珍とさるるのは、虎が人間の孩兒を抱擁してゐる銅器で左傳に虎が孩兒を哺育した事實のあるのを、其時代の餘り遠からぬ時、製作されたといふので珍器とされたもので、誠に逸品で今も眼底に存してゐる。他の一つは地名に因んだ名流の號である。紀州和歌山の城地が其形から虎臥

す山の名があるので、舊城主故德川頼倫侯は、此地名を號とされた。侯が此號を撰ばれたに就ては多少の挿話がある。若し字數の多きを厭はねば臥虎山人などといへば直ちに號ともなるが、城の一字を添へて二字號とするには臥虎が一字で無ければならぬ。侯はそれに苦心して幾日も玉篇其他の字書を翻閲さるゝと、圖らずも「麗」の一字に出會はれたので、驚喜して、卽ち麗城を號とされたが「麗」の字は恐らく文字學者も其存在を知らないであらう。

＊

古語に君子は三端を避くとあり、三端とは筆端、鋒端、舌端をさすのであるが、今日は尖端の二字が嶄新の形容語となつてゐる。君子はこれをも避けるであらう。嶄新の事には概ね危險が伴ふから。

＊

好んで居を移す人あり、上田秋成はしば〳〵居を轉じて鶉居と號した。鶉は同じ處を好まざる鳥なり、何故に住慣れた家を捨てるか。西行は「わびぬれどわが庵なれば歸るなり心やすきを思ひでにして」といふてゐるではないか。

轉居ほど不經濟のものは無い。其都度必らず若干の雜費を要す。諺に三度の移轉は火災に匹敵すと。

＊

三宅雪嶺博士が小村壽太郎侯の外交手腕を稱し、さてそれが何に因源するかを說くに迨んで、云く高利貸に長く困んで、應接も忍耐も習得した。彼の事に當つて沈毅なるは此故であると。是れ笑ふべきに似て實に一說である。雪嶺博士も嘗つて高利貸に苦勞したから此說があるのだ。

＊

高濱虛子の句に「黃葉や紅葉や村に這入りけり」とあり、これに因つて森春濤の詩を憶ひ出す、云く、三四五里路六七八家村、西有秋水澗、東有夕陽山、來自黃葉裏、身出白雲間、去自白雲裡、路出黃葉前、後略」と、虛子の句此詩と同巧、余去年晩秋奥多摩に赴く途中黃葉の村を出入して深く此詩趣を體驗した。

＊

地人を以つて傳はるあり、人地を以つて傳はるあり。高輪泉岳寺の傳はる

は赤穂義士の墓あるが故なり。高野山比叡山は空海と傳教に由つて知られ、耶馬溪は山陽の記文に由つて傳はるごとき是れ前者の例也。平氏の沒落は壇の浦を不朽の地となし、嚴島の祠は清盛を傳へ、熊本城は谷將軍を傳へ、五稜廓は榎本武揚を傳へ、旅順は乃木將軍を傳へ、淀川は豐公の寵姫を傳ふ。これ後者の例也。

夏日の快を列擧したる歌蜀山人にあり。云く「庭に水、新らしい疊、伊豫すだれ、敷寄屋縮布に色白のたぼ」と。

＊

紫陽花の色幾回も變じ定色なし。之を以つて或る人市閭にふさはしい花となす。其定節なきを譏るなり。然れども靜かに思ふに、此花の變化は人生の孩幼壯老の同じからざると一般、變化は人間生生の狀なり。變化止めば人死す。この花も其色定まる時は散る。俗謠に曰く「迷ふ紫陽花七色變る、色が定まりや花が散る」と。

蔓草「むべ」予が茶室の籬邊にあれども、日陰の故に繁茂せず、亦實を結ばず。

唯別莊にあるもの棚を架して日除けと爲すが故に、日を受けて繁茂し毎歲紅色の實を結ぶ。或る時別莊の留守番籃に入れて持來る。偶園丁庭中に在り、余に語つて曰く、此草の葉は七五三に著くのが特色と、余檢するに其言の如し。その日恰かも七五三の祝日であつた。

＊

在外の日本植民地、襁褓の干しあるを以つて直ちにそれと知ることを得。これ植民地の一光景にして尤も鄕思を動かすと目擊者語る。

楊子曰く、萬物の異なる所は生なり、同じき所は死なり。生ては賢愚貴賤あり、是れ生の異なる所なり、死しては臭腐消滅あり、是れ死の同じき所なり。十歲も死し百歲も死し仁聖も死し兇惡も死す。生なればこそ舜堯なれど死すれば皆腐骨なり。生なればこそ桀紂なれ、死すれば腐肉なり。孰れか其異なるを知らんと。人間固と平等我其死に於てこれを見る。

人間は惡を欲するものにあらずさりとて善にのみ沒頭するものにあらず、善惡の間に彷徨するもの蓋し人間の常態なり。鴨長明の自白に云く、自ら心

をはかるに善に背くにもあらず、惡を離るゝにもあらず、風前の草の靡きやすきがごとく、又浪の上の月の靜まり難きに似たりと、至言也。

辭書は文人必備のもの也。然れども淵鑑類函やエンサイクロペデヤを檢して古事を探り、說文やデクショナリーに就て奇字を案ずるは、鬼面人を嚇さんとするものにて陋甚し。服部南郭辭書を評して云く「辭書は儒者の雪隱なり、一日も無る可らず、然れども往々其臭氣に堪へず」と評し得て妙。

＊

烟管の詩、詩集に就て求むるに佳詩少なし。左の一詩較々趣致を覺ゆ。

撥餘爐火耿將無、早有晨聲響唾壺、一掬草香含馥郁、數團雲影吐糢糊
長頸烏啄君休惡、眞節靈心我亦俱、于月于花相伴去、笑他秋扇寵須臾

菅茶山が賴氏の舊里竹原の爽氣樓で山陽に示した詩がある。說明までもなく、茶山は山陽が廣島を脫走した後、自分の廉塾に置いたことがあるが、山陽意に滿たず、そこをも脫奔して、茶山を困らしたものだ。左の詩は乃ち暗に其事をいふてゐるので、興味を覺える、云く、

君將豪邁出奇謀、我衞醜狂就薄遊、憶起舊蹤同是聲、尊前一笑海山秋

起句は正しく脫走をさしたものであらう。奇謀といふてゐる所に一掬の味がある。茶山も舊事を追懷して感無量であつたに相違ない。

＊

五十嵐力博士は酒を頌して恩液、魅液、愛液などいふてゐるが、自分は更に靈液、慈液、瑤液、快液を追加したい。

物には多く附帶のものがつき纏ひ、その附帶物は不用ながら併せて求めねばならぬことがある。佳人を納るゝに連れ子のあるなどは尤も厄介の附帶物である。西洋の諺に「土地を買へば石も買ふ、肉を買へば骨も買ふ、卵を買へば殼も買ふ、唯ひとりよい酒ばかりはスタリがない」と酒の頌として新奇を感する。

酒を戒める言葉は各國にいろ〳〵あるが、實は餘り感服するほどのものが無い。但だ「海中よりも杯中に溺死する者多し」といふは流石に名言、好箇の酒箴である。

＊

都會に生活するものは田舍に居るものよりも一概に長壽であるともいへないが、早く耄しないことは確かである。それは何故かと時々疑問が起る。勿論都會地は日々夜々生活上の刺激が多いから、耄耄を許さないのは確かに原因の一に相違ないが、古人は簡單に解を與へてゐる。云く「轉ずる石は苔を生じない」と。

＊

大槻如電はおもしろい老人であつたが、惡戯で隨分人を困らしたことがある。伊原青々園氏の談に、或る夏どこかに同人の會があつた時、銘々隱し藝をやれといふ動議があつて、順番にいろ〳〵やつて、如電の番になると、坐にある素麵の大鉢を自分の頭にぶちまけたので御本人の頭から素麵が垂れ下がり、水は四邊に飛んで一同ビックリした。如電に其意味を問ふたら、文覺上人の瀧に打たれた所を擬したのだ、ドウダ荒業に感服したらうと誇つて、一座を苦笑せしめ、跡かたつけが大變であつたと。

＊

楠公訣兒の詩多くは悲哀に墮ち熱血の者なし。唯山陽の訣兒に題する詩余好んで誦す。

高帽戎衣坐訣兒、賊氛撲面慘鬚眉、丹精終有難描處、滿肚肝腸赤陸離。

榎本梁川(武揚)江戸兒氣象にて、恬澹洒落、往々諧謔を弄す。魯國公使たりし時の狂詩、一時の戲に出づと雖も、上乘の作となすに足る。

高帽巍然勅任官、威望恰作大名觀、肩書不屬薩長土、人並欲望英佛蘭、二等勳章天恩渥、五年在勤露京寒、俸金一萬三千兩、誰道全權公使難

＊

樺山將軍文相たりし日、四國の丸龜を巡視す。乃木將軍其地の師團に在り文相を迎へて兵營に宴を張る。多數將校陪してテーブルに憑り坐す。兵卒瓶を捧げ起立將校に侍す。乃木將軍號令一發侍者ビールを注ぐ。又一發將校一齊に飲む。斯の如くする數次、坐中落伍するものあり。兩將軍共に酒豪、毫も屈せずして宴を畢ると。思ふに乃木將軍は獨逸に於てビール決鬪の經

驗あるに似たり。　軍隊に其酒令を應用したるはおもしろし。

＊

銀座邊の變化を思ふと、眞に今昔の感に堪へざるものがある。今の東京朝日新聞社側の濠には明治の初年紅白の蓮花咲き亂れて美觀を呈した。當時の新聞を檢するに、東京府廳その蓮根を入札に附するの廣告を見る。

＊

自動車を驅つて市中を行く、忽ち道路修築の處に到り窮まる。數丁を迂回せざれば目的地に達するを得ず。運轉手困惑甚し。余車中竊かに「通さぬは通さうための道普請」の川柳を思ひて自ら慰む。想ふに世事これに類するもの多し。斯く覺れば恨むこともなく、禪家の所謂「日々是好日」は斯の理解より生ずる也。

＊

越山長青水長白、越人長家山水國、是れ王荊公の詩恰かも我が鄉國越後の風土を敍するが如く、時に之を誦す。亦越女一笑三年留の句も我が鄉の女を詠

ずるに似てこれを喜ぶ。

＊

自分は會心の佳書を得て家に歸へる時、入口に珍客到ると叫び家人を驚かす。實は珍客を以つて許すべきものは減多にない。但だ同鄉の警吏に毎週花卉を贈り來るものあり、余の机邊常に名花あるは此故なり。余此人を風流巡査と稱す。これも珍客也。

＊

硯銘種々あれど大概石の如き硬語多く、水雲の潤ひあるもの少し。ひとり冬心齋の研銘、詼諧を交ゆと雖も、佳銘とするに足る。

雲一縷、朝々暮々潤如許、豈待玉女披衣而後作雨耶

＊

自家の詩を自から刻し自ら賣るものあり。人これを陋となす。然れども自家の詩已れ尤もよく知り又尤もよく愛す。自から刻して賣る何んぞ病まん。六如の詩に云く、

得詩莫他視、吹索祇招嗤、天下求知己、莫如己自知。

＊

美人の半身像を詠ずる詩に、人口に膾炙するものあり。

李笠翁西施の半身像に題して云く、

半紙天香滿幅溫、捧心餘態尙堪捫、丹靑不是無完筆、寫到纖腰已斷腸。

解大紳の半身美人の題詩に云く、

千般體態百般嬌、不畫全身畫半身、可怪畫工無識見、動人情處不曾描。

陳楚南背面美人の圖詠に云く、

美人背倚玉闌干、惆悵花容一難見、幾度喚他々不轉、痴心欲掉畫圖看。

東洋の趣味は詳悉せず、想像に餘地を存する所にあり、これを洋畫の曲盡露骨なるに比して孰れ。

＊

碑を刻すもの撰文一に人の勳業德教を誇張し、唯その及ばざることを恐る。これ今の弊にして、亦古の弊なり、白居易に古碑の長篇あり、末段に云く、「爲文彼

何人、想見不筆時、但欲愚者悅、不思賢者嗤、豈獨賢者嗤、仍傳後代疑、古石蒼苔字、焉知是醜詞」と、撰文家の箴とすべし。

＊

賴山陽は長崎に遊んだこともあるから其感化で案外ハイカラの趣味があり、牛肉などを早く好んで食したらしく、歌人香川景樹に寄せた書簡を見ると、牛肉を贈つて肉は薩より參りたりとて薩摩節を錄し、耳邊に今聞き候樣の心地候といふてゐる。其薩摩節は「銀の簪だてにはさゝぬ、きりゝ前髪とめにさす」の俗謠である。亦これも手紙で知ることだが、山陽は椅子テーブルを常用したと見えて、死期の定まつた時主治醫の小石玄瑞に形見として贈つてゐる。其當時テーブルは珍らしかつたと見えて、山陽が書の手本を上げた、有栖川宮の姫君の御婚嫁の折、嫁具の內へ椅子テーブルを加へたいと特に侍臣より山陽に需めたので、山陽は新らしく製作して贈呈してゐることが手紙に見えてゐる。山陽の師の菅茶山の隨筆、「筆のすさみ」の內に、茶山がある家に招かれた時、椅子テーブルの接待を受け、ひどく困つたことが書かれてゐるのを思ひ浮

べて、以上の事實を考へるとなか〳〵に興味を覺える。

＊

山陽はあれほどの才人だが、狂詩は多く作らなかつたか、傳はるものは無い。唯細香女史に天保元年の京都の地震を報じた書簡の別啓に僅かに二首を見るのは珍とすべし。

瓦立魚鱗屋盡傾、　誰掀大塊不平鳴、　曾過播海逢狂浪、　風撼帆檣宛此聲。

狂詩紀實

搖詰頓無生心地、　銘々思付咒咀事、　今春御蔭始間合、　參宮御札挿頭寢

洛中家並普請連、　腰强左官與手傳、　地震搖罷職人搖、　一人前取二人前

＊

山陽の長子聿庵餘一はどんな相貌であつたか知らんが、父と異つて餘程の裕かな體軀であつたことだけは確かで、山陽の手紙の中に餘一の乘る轎夫は其大兵なるに苦情をいふたとあるにも想像される。

＊

鳥類の内雌雄互ひに愛し寸時離れざるものに鴛鴦あり。俳人大江丸の句に云く「おしどりよ一夜別れて戀を知れ」と、一茶は云く「放れおし一すねすねて眠りけり」と共に味ふべし。

＊

是非を知つて利害を計らざるものは學者なり。利害を知つて是非を顧みざるものは俗吏なり。學者と俗吏の時務に適せざるはこれがためのみ。

＊

山に上ぼり虎を挫くは易く、人に就て金を借りるは難し。膂力あれば猛虎を殺す敢て難からず。山を覆す膂力ありとも信なければ一錢の金を借る能はず。盜賊詐欺の絶えざる所以。

＊

名僧の禪を說く、往々例を捕鼠の猫に藉る。云く、猫の鼠を捕らんとするや、雙目凝視してまたゝかず、四足地に踞して動かず、六根順應、首尾一直、而る後發す、一擧中らざるなしと。禪を修むるにも、意、妄想を絶ち、六窓靜寂にして端坐

默究すれば、萬一を失はずと。爾り、猫に學ぶもの豈唯禪のみならんや。

＊

藝術家に奇癖のある人が多いのは敢て不思議とするに足らないが、此頃土佐出身の篆刻家壬生水石の傳を讀んで、此人が一例であることを知つた。云く、水石平生道を行くに必ず道の眞中を通り、歩數に定まりあり。豫期が狂へば更に繰返すを常とし、曲り角は必らず直角に曲り、時に直曲を誤れば、家に近づかんとしても家には入らず、引返して直角に曲つて歩武を正さゞれば家に入らざりしといふ。或る時出入の魚屋入り來る。家猫竊かに魚を奪はんとす。魚屋匆皇石を拾つて猫を撃つ。猫驚いて避く。水石笑つて敢て魚商を咎めず、唯云く、投じたる石を舊所へ復せよと。魚商百方石を捜索し漸く得て其命の如くせりと。水石の道を行く歩武に尺度あり、庭上の石を見る恰かも碁客の布石と一般、皆藝術の法度より來る。藝術に熱するもの往々此癖あり、水石は山内容堂の寵を受けたる印人なり。容堂は常に云く、日本に三癖人あり、曰く賴山陽、曰く水石と余と。

＊

時計の臟腑ともいふべき天府輪にチク〳〵廻はる齒車の一年間の延長を計ると三千五百哩になるといふが、動いて止まねば彼が如き細かな動でも此大數となる。勵精倦まざる功の大なるを見よ。

＊

石黒子爵がフィラデルフィヤに漫遊中、稅關に就て、稅務の吏員でどんな役目のものが一番高い給料取かと質した所、酒の檢査役が尤も高給であるとの答を得たといふ。どこの國でも稅を胡麻化さんため特に安い原價を附するが通慣であるが、この原價の如何に由つて稅額に幾十百萬の損失があるから、酒の檢査に高給の通人を用ひるのも當然である。酒の良否を鑑別する舌は刀を鑑別する眼と一般その鋭利は神の如きものであるが、酒を鑑する人必ずしも酒豪でなく、刀を鑑する人亦必ず劍を撃つ人でないことを知らざる可らず。

＊

石黒子爵は越後三島郡片貝の人で、こゝには富豪大塚氏の仙桃酒が藥酒と

して名高い。子爵は此家に寄宿したこともあるが、いつぞや大塚氏を訪ふた時子の筆痕のある帳面を見たことがある。子は青年の頃家塾を開かれたこともあるといふが、井上圓了博士は同村の關係から嘗て子の家塾に學んだといふことを初めて知つた。井上に甫水の號のあるのは生れ故郷浦村の浦の字を割つた名であるが、幼名を龔常といふたことなど、同窓でありながら初めて知つた。

＊

私が名僧玄賓の名を知つたのは、自分が聊か案山子に就て說をなした時、此僧に有名な案山子の和歌があるので、それで知つた位の事で、この僧の經歷などは何も知らなかつたが、五十嵐博士の平安朝文學史を讀んで、この僧が嵯峨天皇御宇に傑出した塵外僧であることを知つた。彼は頗る天子の歸依寵眷を得たが、律師に任ぜられても辭し、大僧都に任ぜられても辭した程の珍らしい隱逸僧であつた。彼が律師大僧都を拜辭した折の和歌は、江談抄に左の如く出て居る。律師拜辭の歌は、

三輪川の清き流れにあらひてし衣の袖はさらにけがさじ

大僧都を辭しては、

とつ國は山水清し事おほき君が都は住まぬまされり

と詠み都を離るゝ時に來合はせた女人等が衣を供養するのを厭ふては、

三輪川のなぎさの清き唐衣くると思ふな得つとおもはじ

彼は何もかも嫌つて、遂に田に立つ案山子までが風に搖られて手招きするのを、お前までが俺を相手にほしいのか、いやなこと〳〵と歌つたのが例の案山子の和歌である。

足引の山田のそほづ（案山子）おのれさへ我れをほしといふうれはしきこと

この案山子の歌は古今集に讀人知らずとなつてゐるが、玄賓の作と推定されてゐる。

＊

越後の或る地方では農家の結婚に、新婦の嫁具の內缺いてならないものは

石臼であつた。農家では石臼は大切の器具で、これが無ければ粉類は何によらず出來ないので、嫁具の内に重要の位置を占めた。新婦もこれを大切にして、粉を製する時は必らず自分のものを自分で使用し、他の家に粉を製する場合も石臼を貸すことをせず自身で持ち行き自身で使用する。時には各家の妻が銘々石臼を持寄り粉挽の競爭をすることもある。其時は粉挽唄を朗かに合唱して一日暮すので、其日だけは婦人の解放日で皆々これを娯みとした。粉挽唄に「イスス(石臼の方言)挽き〳〵死んだらどうする、イスス(石臼塔婆に建て〻呉れ」とあるが、此文字通り、死後石臼を墓標にした實例が澤山にある。面白い習慣だが、惜むべし今は無くなつた。

＊

自分の書齋に今富岡鐵齋の山水の長條幅を掲げてゐるが、此幅は鐵崖落款で、晩年の筆で無い。鐵齋の晩年の畫は、墨で塗り潰してゐて西洋畫と相通ずる所もあるが、自分は寧ろ鐵齋時代の作を喜ぶものである。鐵齋は世に佞ねらず己れの心の行くまゝに畫する人で、恐らく墨をふんだんに使ふのが道樂

であつたらしい。墨を惜しむ畫家は多くあるが、墨をふんだんに塗らねば氣の濟まん畫家は幼稚なものにはあつても、彼が如き大家には珍らしい。この翁を知る人の隨筆を讀んで、一逸事を得たのは、鐵齋常用の下駄には墨蘭が一面に畫してあつたといふが、これなども墨を道樂に使つて娯む現はれではあるまいか。

＊

自分は老境に入つて自然人との交りが疎になり、時に寂寞を感ずることもあるが、交りの繁劇なのも、實は清閑を妨げて餘り感心が出來ない。殊に夜分の頻々たる會は忌はしく、往々外すことすらある。兎角老境に入つては氣力が薄く、種々の壓力に堪へず、無事こそ譏りを招かず、生を全うする所以とも悟つた。韓退之が「老樹無枝葉、風霜不復侵」といふたが、老樹のみでなく、人間も老いては風霜を避けねばならぬ。これが生を全うする所以であらう。

＊

尾崎紅葉が養痾のため佐渡に渡り小木に足跡を印したのを記念せんとし

て、小木の教育會長塚原徹氏が斡旋して、好地を相し紅葉山人の句碑を立てた。その句は「外の淵の月にうかれて」と題し「月凉し橋かけたやと歌ひつゝ」の秀句であるが、此碑が成つて小木に一つ名所が出來たので、旅客や修學旅行者は必ず此碑を訪ふことになつた。塚原氏はそれにつき、旅客の休憩所を設けんと思ひ立ち、句碑の傍らに瀟洒の四阿を建築したが、それに紅葉亭の扁額を掲げんとして自分に揮毫せよと請はれた。自分は不束ながらその請に應じて直ちに拙毫を揮つたが、この頃建築と共に額も出來て、寫眞になつたのを見た。自分の拙字は言ふに足らないが、紅葉と交りのあるものは今は幾人も居らぬ。山人の遺蹟に自分が揮毫するなどは實に奇縁といはざるを得ぬ。山人は自分よりも若くして早く逝き、自分は尙生を偷んでゐることに思ひ到り、感慨に堪へないものがある。

國書刊行會の思ひ出

國書刊行會を發起したのは明治三十八年の六月頃であつた。兼ねて知る今泉定介氏が自分を訪ひ來り、未刊本の出版の必要を說き、可成廉價で是非保存を要し且つ世益にもなるものを會員組織で刊行したい。それに就ては大隈侯を總裁に推し、重野博士を會長とする陣立だが、貴兄も理事として參加されたいといふことであつた。自分に不同意は無かつたが、今泉氏は其當時書肆弘文館の顧問の位置に居たので此計畫も同館の一事業として企てたものと自分は見て取り、大隈侯や自分を、營利のために利用さるるのでは困る斯る事業は飽くまで營利の外に立つ獨立のもので無ければならぬ。勿論印刷頒布の事務は弘文館にやらせてもよしと、堅く此點を約して總裁と會長も豫定通り定り、評議員には大凡當時の學者達三十數名を包羅し、最初の評議員會を大隈邸にひらき、會名は重野博士の撰にかかり、刊行會と名づくることになつた。先づ最初の一年は出版すべきものを選んで「古今要覽稿」「玉葉」「源注餘滴」「白

石全集」「近藤正齋全集」と定め、坪内氏の提案で文藝に關する軟派の出版を編纂して十二册とし、それをも追次刊行することに決した。會員募集の結果は案外の好成績で約四千名の多きに達した。勿論會期三年間には種々變遷もあつたが、大體四千の數を保つたのは望外の事であつて、坊間の書肆はこれを見て皆驚き、必竟營利を外にした計畫であるから成功したと道理ある批評であつた。同年(三十八年)の十一月に刊行の初聲を揚げた。生れたのは古今要覽稿(第一)と近藤正齋全集(第一)であつた。續いて十二月には最も厚い藩翰譜と續藩翰譜とを出した。それが一册一圓といふ價であるから、普通書肆は愈〻驚いたのは無理もなかつた。

翌三十九年の春今泉氏は一身上の都合で會と全然關係を絶つことになり、爾來自分は單身經營の衝に當つたから、兼々の主張の如く、飽まで會を獨立のものとして書肆の牽制と利用さるることを避けた。そして杜撰の書を出してはならぬと、校正に大いに力をこめる方針を取り、編輯員も若干增加したが實は圖書の校訂には非常の苦心をした。といふのは多くの書物は寫本であ

るだけ轉寫の誤謬が多い。玉葉の如き記錄は難讀のもので、引合せに要する好書を得ることが甚だ困難で、その校正主任は矢野玄道の系統の人矢野太郎氏を煩したが、氏は頗るその頭腦を疾ましめた。いろ〳〵の書物の内にも缺本もあつた。それを完全にするにはなか〳〵の骨を折つた。東大寺要錄の缺本を醍醐の寶生院で得たことの如き、又僞書に誤られた例をいへば平語難語解といふ書を白石の著といひ傳へてゐたのでそれを白石の全集に加へんとしたが漸く僞書と覺つてそれを省いたことの如き、折角活字に組んだものを棄てたこともいろ〳〵とあつた。

豫定の出版目錄も實際に臨んで書物の配合の都合や、紙數の具合などで變更を要することもあつたので折角苦心編纂したそれを省いたり、既に活字に組んだそれすら、廢棄したこともあつた。最も繁雜に苦んだのは古今要覽稿のやうな挿圖の多いのであつた。此書だけで木版彫刻が千五百近くもあり、他にも五千九百餘の挿繪彫刻があつた。この多數の彫刻を短時間に間に合せた勞もなか〳〵

のことで、斯る出版事業は準備に相當の時間をかけて、その出來た所で始めるのが常であるのに、此會の事業は斯る豫備時間がなかつたので編輯事務の繁劇は目を廻はす程で、夏時三伏弘文館の藏二階を編輯所に充てたから、人は酷暑汗行會だと笑つたのも實は適評であつた。

第一期三年間に刊行した書目は左の如くである。

續々群書類從　一六册
燕石十種　三
新井白石全集　六
伴信友全集　五
玉葉　三
松屋筆記　三
夫木和歌集　一
太平記　神田本　一
源注餘滴　一

新群書類從　一〇册
續燕石十種　二
近藤正齋全集　三
古今要覽稿　六
高麗史　三
菅政友全集　一
同上索引　一
平家物語　長門本　一
集古十種　四

灌頂記　一帖

計　七十二册

この七十二册の中に收められた圖書が七百六十餘種、二千八百三十餘卷、頁數五萬頁、これを七十一(灌頂記を別として)册に平均すれば一册七百餘頁に當り毎月二册配本だから一箇月千四百餘頁となる。此總括字數四千五百萬本で日本の其頃の人口と略ゞ同數で、これを一列に並べると延長四十二里に及ぶ。活字のある便利の世とはいへ三年間にこれだけの出版を刊行し得たのは塙の群書類從刊行の壘を摩すといへよう。

以上書目の内、續々群書類從は、塙の續群書類從を繼ぐの意で會の編纂に係り、三百一種の書を收めてゐる。續燕石十種も正篇に倣ふて會の編纂に係り四十種の圖書が收めてある。尙目錄中の圖書に就て一二注すべきは高麗史である。これは國書ではないが、朝鮮が合邦となつた以上は、國書と見做し得るといふので刊行したが、實は此書も頗る市場で得難いしなであつたから刊行したので、重野博士は特に序を書かれた。集古十種の縮刷はなか〳〵大業

古刊目錄　書　史　一

で、繪を刻するだけでも容易でないが、幸に弘文館で縮刷してそのステレオが存してゐたから、これを應用して既定の書の印行に間に合はない時、埋め合せに發行したが、眞に助け船であつた。神田本の太平記や長門本の平家は、共に有名な珍異本で世間でのぞくことも出來ないものを採つて刊行し讀書界の渇を醫した。何分數に制限があつて採用を望んでも割愛するの已むなきものも數多くあつた。三上參次氏の提案にかゝる、江戸大觀や其他鹽尻、參考太平記、累代武鑑、看聞御記、園太曆、滿濟准后日記、續日本異稱傳、視聽草などが皆刊行の餘地を得なかつた。塙編纂の史料も出す積りであつたが、會本八九册で收まらぬために、これも割愛するに至つた。

著名の記錄類は可成出したかつたが、大切な史料となると、その出版に人の倦怠を來す恐れがあるので、實は圖書出版の祕訣として俗受けのいい物を自然採りもした。實は記錄類は謄寫するにも骨が折れるのだ。幸に哲學書院の高頭が、記錄一點張の刊行物を發行し、多くの記錄を寫させてあつたのを、書院が失敗の擧句、それを全部此會で買取つたから、謄寫の勞は省かれたのだが、

記錄の多いことは讀者が好まないために、玉葉以外のものを割愛したのは實に遺憾であつた。

此會の經營其他編纂に關して多くの學者が參加した中に、特に多くを煩はした人名を擧げると、

畠山　健　横井時彦　前田慧雲　幸田露伴
萩野由之　赤堀又次郎　黑川眞道　松井簡治
三上參次　關根正直　坪内雄藏　小杉榲邨
牧野謙次郎　大槻文彦　川田甚　矢野太郎
堀田璋左右　吉田東伍　井上頼圀

この事業の看板として岩崎家の豐川良平氏を會の監事に迎へた。大隈侯にも自分にも懇意の關係があつたから喜んで受けたが、一回も金錢上の面倒を煩はしたことは無かつた。會は三年で第一期を終つたから、自分は引退したが、まことに圓滿な退陣で、共同者たる弘文館と何等金錢上の行違は無かつた。弘文館の經營家林縫之助が好人物で書肆に通用性なる貪婪のものでな

かつたからである。自分は第一期で切り上げ、大隈侯と共に退き、後を早川純三郎に讓り第二第三期四五年繼續で種々なるものを出したが、皆第二流の圖書であつた。第二期以後の自分は會の顧問に推されたが立入つた關係は無かつた。

自分は今あらかた刊行會の業績を書いて見て當時を思ふに、會の經營は順境といひながら、三年にわたる事業で毎月二册の出版を作り出さねばならぬと極まつたことを順よくやつてのけるといふことは、なかなか難儀な仕事であつた。隨分印刷や編輯校正の事務などが澁滯して豫期の如く配本の出來かねたこともあり、終に三年に終るべきものが、一年延びたなどは褒めた話でないが、實際衝に當つて見ると、機械的の活版印刷の進行でも豫定の如くゆかず、編輯には學者が多かつたので、議論が多くて仕事が進まないこともあつた。自分は元來書物好で、いろ〳〵珍らしい書物に接し、それを版にするのだから、愉快に感じたけれども出版事業に慣れない自分は此事業で、種々の苦心經驗を得た。

此事業遂行中つく〳〵感じた事の一二を擧げると、善本の得難いことに尤も苦んだ。寫本のみ稀れにある書物は多く轉寫の誤があつて、好寫本の所在を知ることも困難であり、所在が知れても借り出すことが又困難で、たまに好寫本があつても完本でなかつたりした。玉葉の原本は九條家にあることが知れて居ても、それは同家の家寶でもあるから借り出すことは不可能であつた。又他から借り受けた書物を謄寫するのも一事業であつたが、好寫手の無かつたことも亦一難であつた。何分時代が萬年筆時代で、昔の草書などを解しない時だから、寫字生などは實にお粗末のものであつた。尚又第三難は校正方の適者を得なかつたことだ。古書を讀むには相當の學識が無ければならず、記錄などは其時代の通用語や有職故實に關することが續出するので、面倒のことになると、立派な學者を煩はす必要があつた。矢野太郎氏が記錄校正の衝に當る。其苦心のさまを目睹しては眞に同情に堪へないことがあつた。モー一難をいへば、活字にない字が頻出することで、それを補ふには木彫の字を作る外に方法は無かつたが、古今要稿などはいはゞ一種の辭典のやう

なもので、動植物の固有名詞には普通活版所に不要の難字が續出するので、此等の字を補刻するのが容易でなかつた。亦高麗史は全部漢文で字母に無い字が頗る多かつたので、これにも苦んだ。これが第四難であつた。

諸家祕藏の書を借り出すことも困難事であつたが、この點は幸ひに昔と違つて割合に樂であつたが、一つは會の信用に由つたのであらう。門外不出として嘗つて他見を許さないものも相當あつたが、それ等の本も皆借り受けることが出來た。醍醐の東大寺要錄の零本だの、神田本の太平記だの長門本の平家物語などが容易に借り出し得ないものであつた。今は圖書館風の文庫は圖書の貸し惜しみをせぬやうになつたが、此頃はまだ今日の如く自由でなかつたからそれ等の勞苦も想はざるを得ない。

德川時代には多くの叢書が出版され、塙の群書類從を始め林家が種々官版覆刻本を出した中には、支那に無くなつて日本にのみ存する佚存叢書を出したが、皆官府の力に由つたので、民間の私營で大部のこれを出したのは、我刊行會であることは何人も認めるであらう。刊行會といふ會名は今矢鱈にある

が、此會名の祖は我會であり、全集を出すことの端も我會から始まつたので、爾來叢刊の諸方に起る前驅をなしたのである。第二第三期への刊行書は漸く平凡に墜ちたが、それにしても未刊本や散亂せる多數の書を纏めた功は沒することは出來ない。

紅霞山房印話

篆刻に就て聊か理解があると看て取つた、印人楠瀬日年氏が或時自分に、印話を書いて隨筆に收めよと勸めた。自分は篆刻に趣味があるけれども、印刀を握つたこともない素人が、何が書けるかと一笑したが、日年のいふには、篆刻を業とするものゝ話は型にはまつてゐて、千篇一律であるから興味はないが、篆刻の素人觀こそ却つて眼界が廣く、何も拘泥する所がないから、却つて興味があると。

おだてに乘せられて書いて見る氣になつたが、實は二十年ばかり印を漁つた經歷の外に何物もないので自ら恥ぢたが、併しこれも自分の履歷の一端であることを思ふと、反故ともし兼ねて、遂にこの隨筆の終尾に附することゝしたのである。

自分は何んの感化で終生篆刻の趣味を有つやうになつたかを案じて見ると、家庭の感化も多少與つてゐるらしく思ふ。まだ明治とならない幕末自分が五六歳の頃江戸の篆刻家が遊歷に我鄉里に來り、長く自分の家に寄宿した

星岳といふ人があつた。あとで知つたが此人は赤坂の星ヶ岡邊に住したので此號があるのだが、僧體の丸坊主で、毎日毎日自分の父や叔父の爲に種々の印を刻し、時には紫檀の盆などにも彫刻をやつた。それを側らに見てゐて子供心に面白く感じたが、これなども童心にいくらか他日の種を蒔いたか知れんが、これよりも自分を喜ばせたものは、叔父が聊か畫の心得があるので、石に人物や花鳥などを刻して、自分に與へた。毎朝叔父の室を訪ふと、前夜彫つたものを授かるのが嬉しくつて、夜の明けるのを待ち遠に思つた位であつた。こんな事が暗々裡に他日の印趣味を培養したのかも知れない。十二三歳の頃まだ實印など不要時代に大江萬里といふ印判師が新潟で名高かつたので一二の印を刻して貰つたことがある。これなどもいくらか印趣味があつたからであらうが、萬里は印判師としてなかなか腕のあつたもので、印の輪廓に花卉の細刻をする技は敬服に値するものがあつた。併し今考へて見るに自分に印趣味を教へたものは、大學時代の同窓山田奠南であつたと思ふ。奠南は私の今の號を撰んだ友人であるが、其時或る篆刻家に賴んで二顆の印を刻

してくれた。私は今でも其印を大切にしてゐるが、此印は高田の獄に繫がれた時獄中揮毫の用に官命で獄へ差入れ、七八箇月伴侶となつた關係もあり、旁々自分の紀念品として珍重してゐる。奠南は印に趣味があつて幾十の印を有して居り、一二を贈られたこともあるが、自分に印趣味を鼓吹したことは確かで、これより段々印を玩ぶやうになつた。

自分の交つた印人は多くもないが、擧げて見れば

山本拜石　中井敬所　濱村藏六　圓山大迂
桑名鐵城　中村蘭台　蛙巢　山田寒山
川合仙廬　楠瀨日年　服部呷石

などあるに過ぎない。此内故人で最も親しく交つたものは藏六であつたが早く歿した。蛙巢は父の友人であつた。大迂は自分の圖書館に使つた吉田半迂の師であり、山田寒山は山田正平の養父であり、それぞれ相當の縁故がある。自分の友人で印趣味のあつたものは前に擧げた山田奠南の外に尾崎紅葉、坂口五峯であつた。自分が藏六や敬所と遇つたのは五峯の紹介に由るの

である。印に就ての余と五峯につき五峯餘影に余の文が收めてあるから、後段に轉載する。

自分は十年餘りも印道樂をやつて種々の印の蒐集をつとめ印譜も可なり寄せ集めたが、一たびも印刀を握つたことが無い。實は篆字を習つてゐないことも一つの原因であつた。自分の父は晩年篆書を研究して種々の字書などを作り隨分熱してゐたが、自分には影響が無かつた。自分は思へらく自分が印刀を弄してもロクなものが出來ない。寧ろ印人に懇意な關係を生じ、それと往來して自分の好むまゝ篆刻をやつて貰つて自から娛むに若くはないと。藏六と親しんだのも、そんな心持を充す爲であつたが、しかし大家格の藏六を漫りに煩す譯にも行かなかつたが、玆に自分の思ひ通り、日々の印道樂を滿す一人の印人を得た。それは吉田惠三郎といふ熊本人で圓山大迂の門下で半迂といふた。今より十數年自分が校用でしばらく關西に赴いた頃、大阪の書肆鹿田が支那から持ち歸つた書物を或る場所に陳列した。自分は逸早く誰よりも先きに赴いて一覽し、目に留まつたものは十竹齋印譜若干册であ

つた。十竹齋には書畫譜があつて、我邦人にも知れてゐる人だが、其人の自刻の印譜などは幾んと邦人に知れて居らん。しかし作を見るとなか〳〵の名手であるので、自分の食指が動き購入の豫約をした。後に好事の人が段々來場して印癖あるものは皆目を之に屬したが豫約濟といふので、多くの人を失望させたと聞いた。私が此書を携へて京都の旅舍に居ると、安田銀行の支店長である校友より吉田を紹介して來たのが此半迂で、自分は取りあへず、十竹齋を示した處、彼は驚喜してそれを披閲し、默々半日を費し食を給してもそれに頓着なくその一心を籠めて閲覽に熱心であるのに感服し、こんな篆刻家を銀行に事務を取らして置くのは惜しむべきだ。切めて自分の管理しつゝある早大の圖書館に移し、篆刻の修業をさせてはと思ふて、其事を半迂に語ると、二つ返事で諾したから、銀行とも協議して上京させたのが、此人の私に身を寄せた初まりで、圖書館では書物の標題を書く位の用さへなかつたが、自分には頗る調法の男で、毎日自分を訪れ來る毎に、自分の架中の印を出して示したり、印譜などを披き見せて、その研究に資したことは勿論、自分が若し印刀を握れ

ば試むべきことを皆此人にやらせた。圖書館のために紀念のさま〳〵の印を刻したことは勿論だが、自分のために刻した印は數百類に及んでゐる。其中には私印や藏記なども少からずあるが、古印譜の内で會心の印があるとそれを摸刻させたのも少なくない。彼は器用で畫もかき印材も造り、印の箱まで印刀で製し、追々陶印を作り、浪越といふ宮家の執事に學んで、私のために十六羅漢鈕の陶印を作つたこともある。半迂作の今存してゐるものの一斑を擧げると、

大雅の作を摸した「仍如件」の黄楊印、珊瑚印（一笑）洋印摸象形鳥石印　吉羊（羊字象形）孔子像（左右）讃黄楊印　曲亭馬琴印摸　各體篆文六顆　徐三庚摸印　十二支形象印　大隈侯銅像銘　蘭亭序全篇　玉印文天保九如心經分刻五十四顆

半迂は五寸角許の銅印を刻することが得意で或る友人のため四五顆を作つた。三條公其他二三名家に出入して篆刻を教へたこともあつた。此人は飽まで師の大迂の法を守り確かに其高足であつたが學問の素養が乏しかつ

たのは遺憾であつた。自分が大迂と往來したのも半迂の紹介に因つたのだが不幸にして早く歿した。余の印筐に完白陳曼壽、徐三庚等の名刻のあるのは實は半迂歿後の遺物で皆圓山大迂より傳來のものである。

自分が十數年印を漁つた頃を回顧すると、可なり苦心もしたが興味も亦自から其内にあつた。今思ひ出るまゝ次第もなく書きつけてみると、先づ官印二顆を得たことである。官印は最も貴重扱をされてゐるもので間違つても、骨董屋などに賣品となつて出るものでない。自分の得たのは皆維新匆々の際のものであつて、一つは自分に因縁のあるもので、自分の故郷水原に水原縣が置かれた時の官印で水原縣符信と刻した銅章であるが、印材は佐渡の初代琢齋の作で、刻は當時自分の家に寓してゐた、星岳の刀に成つてゐる。水原には戊辰の戰後先づ越後府が置かれ次いで水原縣となり、それも僅かな間で新潟縣に移つたので、變遷は走馬燈の如く急劇であつたので官印ながら散亂して同郷の好事家に藏せられたのが自分の手に入つたので、郷國の政治志料でもあるので珍重してゐる。他の一顆は「薩摩政府」と刻した銅章である。これ

は明治の或る年銀座の露店から拾ひ上げられた來歴があるので、その眞贋を正すに多少苦心をした。薩摩が藩とはいはず、外國に對し政府といふたことはある。併しこれが果して眞物か否かに多少の疑もあつた。或る人のいふのに明治初年百諭衍義を太政官から發布した時は、各藩はそれを板刻して藩内に頒布した。薩摩で出版した此書には「薩摩政府」の印が押されてあるから、それと比較して見れば眞贋は直に判明するといふのヒントを得た。態々薩摩の圖書館に在る知人に賴んで百諭衍義を貰ひ受けて檢するに、如何にも薩摩政府の印が押してあるけれども、自分の手に入れたのとは大きさが多少異なる。併し篆體が略々似てゐるので、贋物でないことは概ね分つたが、大小に差のあるのが氣になつて、印影を薩摩の圖書館へやつて問合はせたところ、刻者まで分明し大小三顆ほど同じ人の手で成つたと知らしてきた(其刻者の名は何かに書きつけて置いたが、今は記憶にない)。そこで自分の手に入れたのは三顆の一に相違ないと考へたが、それが銀座の露店に出たとすると、東京に住する人が雜品を賣却した時賣つたのに違ないと、凡その見當がつき、さて思

ひ出したのは薩摩の士岩下方平のことである。此人が佛蘭西博覽會の節薩摩の國産を携へて渡佛し、自藩を薩摩政府と稱し、出品物にも薩摩政府の印を捺したので、爰に佛國政府に疑義を生じ、日本の政府といへば德川幕府であるべきに、一國に二つ政府があるは何故ぞといふので幕府方の出張員との間にも紛議を生じたことは隱れもないことで、多分此印は岩下が携へて渡佛したものが後に紛れて賣却されたものであらうと、自分は斯る推定を下してゐるが、それ以上の考證はまだつかないけれども、恐らく當らずと雖も遠からずで、以上の如き紛議を釀した印とすれば、そこにも又興味がある。

池之端の琳琅閣舊主人の在世の頃、狩谷棭齋の藏書印と棭齋の二字印が、狩谷家の遺族が賣つたのを琳琅閣では賣品にあらずといふて、自分の坐邊の箪笥に深く藏して、座敷に上る程の顧客に時々出して示した。此二顆の印は名人藏六の刻したもので、印の趣味からいへば、さしたるものではないが、書史學者として又金石學者として名聲のある棭齋の用印である處から、印には無趣味ながら好書の人々は競つてこれを欲しがつたのも無理ではなかつた。棭

齋の藏記のある圖書は藏記のある故を以つて、三倍四倍の價があつたことは事實である。好事家はしきりにこれを射落さんと毎日詰めかけ、價の高いことは辭さぬとねだりつくものもあつたが、閣主人は頑然として價を以つては賣らぬと主張し、其内どなたかに差上ると、思はせぶりをいふて一年ばかりこれを囮につかつて顧客に見せびらかしたが、自分は別に强請もしなかつたが、或る時快よく自分に割愛して、競爭者を一齊に失望させた。自分は不忍池の某寺に說文會のあつた折、携帶して中井敬所翁の鑑定を請ひ、藏六に囑して印筐に銘を刻させ今も珍藏してゐる。閣主人が重患に罹つて入院中毎日病床に愛撫した鷄血石一函は歿後自分が購ふた。これが友人五峯に鷄血石の長篇の詩のある所以だが、自分の購ふた深意は、棭齋の遺印の割愛に酬ゐたのである。鷄血石は實は俗趣味のもので自分は敢て之を喜ばないが、閣主人の有した印材は四十餘の多きに及び、各種の昌化石を網羅してゐる觀があり、皆無刻で標本となるものであつた。自分は此印材を得て、紅霞山房を書齋の名とし今も藏六揮毫の額を掲げてゐる。只自分の赤城霞客の號のあるのは、牛込

の赤城下に住した頃の名で、此號も仿漢體に藏六の刻した小印がある。なほ鷄血石に就て一事の錄すべきことのあるのは、自分は嘗つて隨筆に五峯の鷄血石の歌を收めたことがある。其隨筆が流布の結果朝鮮在住の未知の人から二三自刻の印を寄せられたことがある。其折の書簡に近日百印を寄せるとあつたので自分は深く謝して斷はりをいふてやつた所、間もなく百顆の瓦印が小包で到着したので披いて見ると、鷄血石歌を百顆に分刻したのであるのを見て、一々檢するになか〳〵佳刻が多いので甚だ喜んだ。實は無意味な印を百顆寄せられても始末に困ると思ふて斷はつたのであるが、これなれば愛玩に足るのである。印譜まで添へてきたので、自分はこれを多としたが、此刻者は刀畔と號し刀根川附近の出身だと聞いたが、未知の人に對し、よくも百印製作の勞を取つたと自分は感心してゐる。

自分が印を漁つてゐる時分黑木欣堂が賣つたとかいふて或る人が持つて來た印は一見喜んで購ふた。それは霞樵落欵で池大雅の作で、大小二顆の內大なるは「萬物一馬」と刻し、小なるは「疎影暗香」と刻したのであるが、是は姬路の

風流太夫河合漢年の所藏で、或る僧に與へた來歷が匣背に書かれてあつて、「萬物一馬」の刻印は實に非凡の名作であるので喜んだ。濱村藏六其他の印人は此印を激賞し、大雅には傑作が二つある。北陸地方に「觀自在」の印のあるのが名高いもので、それを北方の鎭といふてゐるが、この印は東京にあるから、東方の鎭とすべきだといふた。或る人が此評を欣堂に語つた所、欣堂は手離したことを深く悔いたといふが、駟も亦及ばなかつた。自分は初め大雅は高芙蓉の友人であるから、芙蓉に學んだものであらうと思つてゐたが、段々其作を見ると、芙蓉よりも風韻氣格が高いので、芙蓉を印聖と呼ぶならば、大雅も同じ階段に置くべきだと感じた。友人萩野由之は曾つて大雅と芙蓉の印二顆を藏してゐた。大雅の印の文は「家傍青山竹徑門」と白字に刻され、芙蓉のは「竹吟石默」の四字を刻したものであつた。友人五峯が欲しがるので萩野に交渉したが、惜んで手離さなかつたが、大震災の後或る骨董商の手から自分の手に歸した。其骨董商の語るには大震災の時何も取り出す暇がなく僅かにこれのみを懷にして逃げたと語つた。此大雅の刻も名作である。

我が郷里水原で東京に名を成した二人の畫家があり一は池田孤村、一は大倉雨村であるが、前者は抱一門下にて、後者は明治年間支那に遊んで南畫家として知られた人である。此二家の遺印が散佚なしに余の手に歸したのは奇縁ともいふべく、余は郷土志料として珍重してゐるが、孤村の遺印は四十を數ふる多數のもので、それを藏めた印筐は唐もの角のすかし透の抽子つきて極めて雅致あるものである。雨村の遺印の内には徐三康の作が二顆あり、白文の印文は「伯行」朱文は「顧言」の二字である。

自分の印に關しての記は、既刊の隨筆に若干收めてあるから、それを一々こゝに轉載するを欲しないが、前掲五峯と印の交に付ては五峯歿後出版された「五峯餘影」に拙稿が收めてあるから茲に轉載する。

五峯君は餘りに物に執着のない人で、ときにその珍藏のものを欲しがる人にさつさと與へることもある豪放な人であつたが、しかし印にかけては往々猛烈な執着ぶりを示したものであつた。動もすると人の祕藏品を殆ど强奪

して行つたりするほどでこれについてつたふべき一話がある。自分の同郷の漢醫故三浦桐陰(新潟に醫業を開き詩によつて君と交はつた。いはゞ君の門下の人)はその家が歷代文藝家を出したゞけに名家の印を多く所藏してゐたので、桐陰は君の印癖あるを知り、二三の印を君に贈つたその中に、高芙蓉の刻した印が一つあつた。これは桐陰の殊に珍藏してゐたもので、君に贈るにつけても一詩を添へたといふほどであつた。「鶴鳴于九皐」といふ楕圓形の印で君はこれを得て喜ぶとゝもにまた一つ欲が出て來た。

桐陰の所藏品中、高芙蓉の刻した印が今一つあつて「滄浪」の二字を刻したものであへて自分から懇望したわけではないのに、自分に贈られた。自分は感謝したが、君は窃に食指を動かし、或るとき自分に向つて、極めて露骨に「あれはどうも吾輩の手に歸すべきものだ」と君一流の論法で希望を言ひ出したが、自分は「折角だが老友の厚意で寄せたものだから」といふて謝絶した。が、折に觸れては要求して來るのであつた。

君の冀望が熱烈であるので私も遂に根氣負をして割愛することになつた。

私は君に向つていふには、折角のお望だから差上げるが、私の爲に詩を作つて貰ひたい。その詩に就ては注文がある。それは此頃御覽に入れた三十數顆の鷄血石の印を題にして欲しい。且つ詩の趣向に就ても注文がある。私は前年新潟で咯血したことがあるが、この多數の鷄血石を得て、失ふた血を補ふて餘りあるといふ意を詩中に寓して欲しいといふた。君は欣然これを諾して面倒な注文だが、やつて見ようといはれた。それから一週間程は何事をも打棄てゝ詩作に沒頭された。丁度議會の開會中であつたが、議會を餘所にして森槐南や大久保湘南などを訪ふて相談もされた。凝り性の君の努力は一通りで無かつた。斯くして出來た長篇は、君の詩集中の壓卷と評さるゝ程の傑作で、それを私に示された時には私もひどく喜び、山陽にも咯血の詩があるが、それにも優るといふて厚く謝した。乃ち其詩は左の如くである。

雞血石歌贈市島春城

春城先生有印癖、龍文鳳篆苦搜索、玩物自比襄陽顚、博古將奪松雪席、
少時論時忤當路、文字買禍鬪雞檄、時艱蒿目三十年、一腔熱血空鬱積、

久之遂致長吉嘔、赤醬迸地眞可惜、天上將成白玉樓、人間難覓丹砂液、
有人來賣雞血紅、昌化所產其鈕百、方圓大小各態殊、或戴花冠或赤幘、
綠字鮮疑繡頸回、朱文勁見金距礫、就中一塊如峻山、山皴隱見絡紅脉、
先生獲此病霍然、摩挲日夕手不釋、紅霞滿室光熊熊（春城居赤城下題其室曰紅霞山房）邀吾誇
示連城璧、白謂曩時嘔出三斗血、滲入石膚如許赤、寸心耿耿某在斯、
歷遭塵劫長不易、吾謂先生莫乃丈人頑、彫肝斲肺亦何益、胸中磊塊今
有無、聞鷄起舞憶曩昔、不願磨厓刻姓名、唯願先生壽猶石

偖てお詫へ通りの詩が成つて、印と交換する段になつたが、君のいはるゝには無雜作に交換するのは興がない。嚴かに交換の式を行ひたいから、某日向島の中の植半に會することゝしよう。立會人として大久保湘南と濱村藏六をも招くことにすると、極めておもしろい趣向であるから、私も喜んでそれを諾し、定められた日に植半へと出かけた。その席上湘南は吟詩が得意であるから、朗々君の大作を二度迄吟誦した。私は起立して滑稽交りの卓上演說を試みた。其大意は、此夜の席を結婚の式場に擬し、誠に御念の入つた結納を賜

はり感謝に堪へん。折角の御懇望に任かせ、愛孃を差上げますが、お恥かしい事には、嫁具は何一つなく、本人を丸裸の儘で(箱にも納めない印を取上げて差上げます。お手厚の結納に對し相濟まんが御容赦を願ひたい。貴家の新郎は拙孃と緣因の深い關係があり、もとは三浦氏に同棲した間柄であるから、歸(とつぎ)ましたら定めて琴瑟相和するであらう。私は幾久しく新郎新婦を祝福すると挨拶をして、爰に授受の式を終つて宴會に移り、例のごとく談笑湧き十二分の歡を盡した。數日を經て今度は私が赤坂の三河屋へ君並に湘南藏六を招待した。其際は寺崎廣業氏にも案内した。席上君は筆を揮つて鷄血石歌を一幅に書き更らに横卷にも揮毫された。尙此席上で廣業は蘭を畫し、高い卓の上に香爐卓下に鷄血石を配した。その香爐に藏六が篆字を錄し、且つ香烟の颺る圖を書き添へた。扨て湘南が一詩を書くことになつてゐたが不幸天然痘に罹つて此日は來ることが出來なかつたが、二日ばかりの後に其訃を聞いたので驚いた。此夕べも更に深けるまで談笑して興の盡きるを知らなかつた。此印と詩と交換の宴は當時同人の間に文苑の佳話として喧傳された。

後日五峯君を介して、湘南の代りに永坂石埭氏に三河屋席上の合作に一詩を題せんことを求めたが、石埭氏が詩を案じつゝある間に藏六氏も湘南と同じ病に罹つて歿したので、石埭氏の詩は兩氏を吊ふ意が寓せられた。畫中に香烟が立上つてゐる圖もあるので、石埭氏の詩はよく折合つた佳作である。其詩に曰く、

毫端證破去來今、石瘦蘭幽感倍深、如有騷魂招欲返、一絲香繫百年心

此合作の幅と五峯君揮毫の幅とを合せて雙幅となし、家珍としてゐるが、揮毫の人は君を始め廣業、石埭藏六皆鬼籍に入つた。當時を追憶すると黯然たらざるを得ない。

五峯君逝去の後阪口家から私に形見を贈らるゝといふから、私より無心をいふて數顆の印を申受けた。其内には問題の芙蓉の二顆の印もあり、私が割愛した二三の印もあつて皆舊主に戻り、大切に記念物として珍藏してゐる。

名家の私印の追々滅びゆくのを惜んで、自分が其蒐集を心がけて十數年に

迨んだ經歷大略は余の隨筆から轉載して再錄の勞を省くことにする。

私が骨董に趣味をもち、いろいろの物を寄せ集めた頃、文房具も相當に集めたが、此部類で私が主力を置いたのは印章であつた。印章ほど多方面に趣味のあるものはない。亦これほど高雅のものはないと考へた。

勿論最初は佳材と佳刻とを主として漁つたが、往々名家の氏名雅號を刻した印に觸れることがあつた。大體他人の氏名を刻した印等は、概して印材を活かす丈が目的で、骨董商などは刻字に注意を拂はず、印面を磨して賣品とすることが幾んど通例であるが、金屬の印になると、金銀材は溶解して地金としても價はあるが、銅章は價がないから、其まゝになつてゐる。木印にも黃楊や紫檀などがあるが、これも概ね助かつてゐる。水晶印も磨りにくいので多く助かつてをる。

私は既記の如く銅印で「薩摩政府」の印と「水原縣」の印を得たことがある。薩摩が幕末に藩といはず、政府といふた事がある。水原縣は新潟縣に先だち縣

が置かれたことがあるが是は其際の官印である。又木印では水戸の支藩の守山侯の「觀濤閣」の印三顆を得たことがある。守山侯は徂徠門人で、其著に論語徵集覽があつて、此印はそれに用ひられてゐる。自分は偶然此等の印を得たのが動機で、人の私印に注意を拂ふことになつた。

思へらく、他人の私印は使用に堪へないが、されば といふて漫りに磨り潰すべきではない。例へば雪舟とか、探幽とか新井白石の印などに遭遇したとしてどうしてそれがムザムザ磨り潰されようかと。自分は斯樣に感じてから、誰の私印か知り兼ねるものでも架中に置き、徐ろに其氏名を調査すると、意外に高名の人の私印であることが知れたり、其刻者が高芙蓉の如き名手であつたりすることがあつて、後には專ら名家の私印蒐集に沒頭するに至つた。

著名な人の私印は、自分ばかりでなく他人も珍重するが、或るものを手に入れるには相當に骨を折つた。高芙蓉刻の尾藤二洲の藏書印や、書誌學者の狩谷棭齋の私印や藏書印は、他人と競爭までして手に入れたこともある。何といふても自分の常に崇信してゐる人物の用印や、自分と鄕國を同じうする藝

術家の用印等は、取りわけ自分の趣味に投じて自然に手が出る。自分の崇信してゐる人の印には、幕末の傑士川路聖謨のが全部あり、中には佐久間象山の刻したものもある。自分と郷國を同じうする名家印には卷菱湖あり、大倉雨村、池田孤村等がある。池田孤村は抱一門人で、其遺印全部數十顆が手に入つた。諺に「小人罪なく璧を抱いて罪あり。」といふ如く、印も美材であるために磨り潰される。名家の私印が長い間にどんなに多く磨り潰されたことであらうか。中には傳ふべきものも多多あつたであらうに、これを思ふと洵に惋惜に堪へない。私名印の貴きは、その材にあらずして、其氏名にあるは勿論で材の粗なるが故に、完きを得て居るのには頗る注意を要する。

日本の或時代には佳材が幾んど無かつたから、粗材の印を搜すと往々意外のものに出遇ふ。「東西遊記」の著者、春暉堂橘南谿の印や、篠崎小竹の父三島の印、高久靄厓自刻の私印、山中信天翁の自刻印などは皆粗材であるが、コンナものを拾つて活かすのは全く鑑識の力で骨董屋などの能くする所ではない。自分は粗材に古名家の遺印の多く存することに氣が付いてから、粗材のみを、

漁つたこともあるが、仇敵を搜すやうなもので、意中のものにはなかなか巡り遇はないので失望もしたが、此蒐集には實に二十年を費した。

蒐集の歳月は可なり長いが、その結果は數に於て僅かに二百四五十顆で、自慢する程のものは極めて稀である。今ざつと前に揭げた以外のものを擧げて見ると、貴族には東坊城菅原聰長、石州濱田侯松平武脩、間部松堂(閣老)、松平樂翁、牧野康哉、秋月種樹、木戸侯、土方伯、前島密男があり、學者に會澤正之、丹羽伯弘(新發田の藩儒)、重野安繹、中村正直、高橋泥舟、中島子玉、細井九皐(廣澤の子)、辻元菘庵(醫)、佐藤立軒(一齋の子)、高島秋帆、林鶯溪、淺野梅堂、藤本鐵石等があり、畫家や文人には、山本梅逸、高蒿谷、細川林谷(印人)、古川鐵畊(印人)、圓山大迂(印人)、藤田吳江、俳人鶯笠、片桐不偏齋(茶人)、永井禾原(詩人)、董堂敬義(書家)、長三洲(書家)、吳雪槎浚明の子)、田必器、河鍋曉齋、日柳燕石等があり、支那人には林則徐と說文家の吳大徵外三四名あるに過ぎない。

自分は常に思ふのに、名家の私印なるものは、宛かも其人の位牌の如きもの

で、浮屠氏の作る位牌よりも遙かに意義が深い。骨董界では名家の手澤を經たものを格外に珍重するが、名家の手澤を最も深甚に經たものといへば、恐らく其人の私印に優るものは無からう。此物が常に其人に追隨し、其作品には常に捺されて證とされ、その捺す毎に其人の指紋が鈕に附着する。作者の魂魄は宿つてこれにありとでもいひ得るであらう。

文人の習慣として、其人が歿すると遺印を棺に納めることが毎々ある。菊池溪琴の遺印はすべて棺に納めたと、菊池晩香から聞かされたこともあり、つい此頃聞いたことだが、物徂徠の印はこれまで遺族の手に存してゐたのだが、其散佚を恐れて近頃徂徠の墓に納めたといふ。これにはいろ〳〵の意味もあらうが、其人と離る可らざる關係があるから、生前通り其身邊に置くのだと解しても差支あるまい。

或ひは印を棺に納めることを惜んで、其印面に聊か刀を加へて保存することもある。是は再び使用せぬ用意からで、贋作の利用を防ぐからでもあらうが、故人の命が打ちこんであるやうなものだから、その子孫は勿論、他人に於て

もこれを粗略にしてはならない。飽くまで呵護して、永久に保存するのが故人に對する禮であらう。

文人墨客が使ひ果した敗殘の退筆ですら、鄭重に地下に埋めて筆塚を作る慣習から考へても、名家の私印は何等かの方法に據つて保護されねばならない。或は堅牢な金庫式の堂宇でも設けて、是に納めるのも一案であらう。斯る堅牢耐火の置き所があらば各家にある祖宗の印も、追々之に寄托することとなるであらう。

自分は曾て印を各方面から觀察して、其趣味を通俗的に說いた事がある。それは自分の隨筆に收めてあるから再錄しないが、印に畫趣のあることに就ては、言ひ足らぬ事があるから、こゝに補足する。云く、印は金石の最小のものである。碑石や鐘鼎などは、大きなもので其刻字は工人が作るものであるが、此小金石は字を能くする人が自身で刻するものであるから此點に於ても尊い味がある。元來篆體は象形文字であるから、其文字に畫趣がある。又刻法にも朱白があつて朱字は凸、白字は凹でおのづから畫趣があり、字の配合布置

に由つて畫趣を助長する。一例を擧げてみると、鴛鴦の二字は篆では宛ら鳥の圖であるが、此二字を上下に刻したのを見ると雌雄の鳥が抱擁してゐるかに見える。凸字はおのづから山嶽崛起の趣があり凹字は河海の趣がある。支那は流石に篆刻の本家であるだけに印面の畫趣を巧みに形容してゐるが、今一例を擧げると、或る人は印の趣致をいふて、方寸の天地に能く萬里浩蕩汪洋の勢を具へ、千山紫翠變幻の奇を備ふと頌したが、眞に其趣がある。自分は今試みに印文を藉りて印の畫趣を形容してみると、印を押した風景を霞に比して紅霞といひ、朱白の重疊を山高く水長しといひ、鴻鷗に比しては群鴻海に戯るといひ、花や蝶に比しては花舞ひ蝶飛ぶといひ、或は荒天疎林、或は蒲深く柳密或は霜林紅葉など印文それ自身が印の畫趣を形容してゐるのも一奇である。更らに長句を求めると、彩暈天に彌つて虹女飛ぶなどいふのは正しく印の形容の上乘のものである。布置の錯綜を極めたものとなると、怪山怪水尺地なく、山は湖水を侵し、水は山を齕むの趣があつて、畫と其趣を一にする。詩情畫趣を寓するものは印刻の上に出るものはあるまい。

篆刻に畫趣を覺へるやうな印は大體上乘の作だが、篆刻家が遊戯的に畫印を作ることも往々にしてあつて、一種の風韻がある。自分は曾つて大雅堂の山水を高芙蓉が刻したのを見たことがあるが、此種の印は容易に手に入らぬ、自分の架中にあるのは、金石索から模した孔子の像や、十二支の圖や、吉祥の祥字に羊の圖を刻したのがあるに過ぎない、皆半迂の作である。印譜にも餘り畫印は收めてないが、前年大阪の書店鹿田で獲た二十四番花信といふ印譜は、閨房祕戯の圖を二十四枚刻したもので珍物であつたが、それよりも清人榮五といふが刻した畫印は人物あり、禽獸あり、山水あり、樓閣あつて、中にも四五の山水が尤も妙を覺えた。畫も石に刻すると紙に畫するよりも異つた風味を感ずるものだ。

支那で印の鈕を作る工匠に名人が少なくない。併し皆無款で誰の作とも知れない。自分などは長い間鈕は無名の工人の作として彫工の名は知り難いと思ふてゐた。全體壽山石などは掘り出されると、地形上先づ福州へ運ばれる。福州で加工し鈕を作るといふから、鈕の工匠は福州人であることが想

像される。果して福州には職工も澤山ゐて、少年期から鈕の彫刻を敎はり、終生此業に從事するといふが、楠瀨日年の印材說話に據ると、名工の名が若干擧げてある。卽ち康熙以後には張鶴千楊王瓏潘子和の謝寅などがあり、其後に周尙均、徐漢、馬文、鑒司、桂海などが出で、現今では林文寶、林鏡瀾などが聞えて居るが、六十歲を越えねば精作が出來ないといはれてゐる。

日本にも印の鈕を刻したものは勿論少なくないが刻者の名が矢張り聞えて居らぬ。日本には根付が囊物に附帶して大いに行はれ、隨つて根付を刻ることが精妙の域に達した。印の鈕を彫るにも此等の名人が手を下したであらうが寧ろ精緻に失して雅味を缺き餘り成功しなかつた。鈕の趣味は寫實や精細といふよりも粗豪の處に風致の存するのを喜ぶ。此點の長處は支那人に在つて日本の工人は到底及ばぬ。唯印人が自ら鈕を作ることがあるが、それには支那作に近いものがあつて却つて雅致がある。自分の交つた印人では藏六がよく銅印の鈕を作つた。いつも墨堤の彼の居を訪ふと二階の書齋に蠟の型が並べてあつたのを目擊したが、禽獸さま〴〵の物が皆面白く出

來てゐた。自分の藏書印の鈕は牛であるが牛は殊に上手であつたかと思ふ。藏六のいふのに今は印材を得るのが面倒で、佳材を搜すに日子を要するから、自作の銅印で間に合はせてゐるとのことであつた。中村蘭臺は木印で一種獨特の鈕を作つた。大槪篆字を刻し、金箔や彩色を施したが雅味があつた。

某宮家に仕へた浪越といふ人は巧みに陶印を作つた。自分も其作二三を得て喜んだが、羅漢の鈕が最も妙を覺えたので、半迂をして就て學ばしめた。半迂の作は最初浪越のに比すると見劣りがしたが、段々上達して、遂に十六羅漢を作り上げた。それは浪越に比して遜色のないものである。

水晶印を十數顆寄せ集めて感じたことは、水晶ほど日本と支那の國民性をハッキリと現はすものはないといふことである。日本の水晶は甲斐產にせよ他の產にせよ、透明で宛ら硝子の如く、毫も曇りがなく透明であるが、支那水晶は大槪どんより曇りがあつて透徹しない。そして印刀に觸れると日本水晶はパリ〳〵とはねるが、支那のはネバリ氣がある。これ恰かも兩國民の性格を如實に現はすものであるが、篆刻家は支那水晶を喜び、篆刻に趣味のな

い邦人が日本水晶を喜ぶのは、宛ながら濁水を厭ふのと一般で、邦人はどこまでも清朗を喜ぶ。自分は印材を選ぶに寧ろ支那產を採るものである。

自分が印を漁つた頃の回顧談の内に左の樣なことがある。或る人から無款の印三顆を寄せられた。それは二方印で倪元路其他支那で有名の人の名を刻したものであつたが、皆無款だが、高芙蓉の作によく似て居るので相當の時代もあり凡作でないから、假りに芙蓉の作として架中に置いた。然るに二三年を經て趙陶齋の印譜を始めて坊間に得た。夜分蓐中で飜閱してゐると、フト目に入つたのは、自分が假りに芙蓉としてゐた三顆の印と大小も篆體も極めてよく似た印影であつた。自分はさてはと刎ね起きて印架に就き實物を搜索し初めたが、なか〳〵多くの印筐が架に滿ちてゐるので、それを搜し出すに幾んど小一時間を費し、夜間であるから檢出に困難を感じたが、到頭搜し當つて原物と印影を比較するとてつきり趙陶齋の刻と分つた時には、愉快を禁じ得なかつた。實は趙陶齋の刻印は架中に一も無かつたのを、こゝに偶然得たから喜びも亦大きかつた。

印の愛玩者は多くは支那の印に偏して、日本の印などを愛するのを低級趣味とする氣味があるが、それは謬見で、支那は印の本場であるに相違ないが、日本の古代印には日本的風味があつて頗る高級に屬するものがある。所謂倭古印と稱する古い寺院の寶印などには日本獨特の長所がある。いふまでもないが日本の古時代の官印などは、支那に倣つて大印で刻されてゐるが、其篆字は倭古體に作られ、そこに歷史的の價値がある。又各代日本篆刻家の刻した印にもそれ〴〵の時代の風味があつて、日本印史を案ずる上にも貴重のものである。それを閑却して一概に秦漢の印に心醉するなどは、淺薄なる玩味家といはざるを得ない。尙日本古印に就て、自分は久しく委しい考證を得たいと百方求めたが、遂ひに横山由清翁自筆の「日本古印攷」一冊を得た。これは町田石谷が、翁に囑して編纂せしめたもので、中井敬所の著に類似のものがあるが、この印攷を寫したものに過ぎぬのである。日本古印の攷證は、由清翁の如き古文獻博涉の人でなければ、出來難い藝當であつて、自分は珍藏してゐる。

昔の文人は大概印刻をやつた。賴山陽、貫名菘翁など一々列擧も煩しいが、

多くの文人墨客は遊歴先きで自分の印を自刻した。強ち巧みとはいへないが、おのづから一種の風韻があつて棄て難い趣がある。現時も素人畑に篆刻が流行して、師導する印社もあるが、なか〳〵侮り難い佳作がある。自分の架中にどれほど素人作があるか、差當り左の數家を擧げる。

吳　浚　明　　增山雪齋　　細井九皐　　高久靄厓
佐久間象山　　陶工道八　　田邊玄々　　山内容堂
青木木米　　山中信天　　永阪石埭

此外に池大雅や吳大徵などがある。大雅などは其作品を見ると高芙蓉よりも風韻に於て一頭地を拔いてゐる趣があり、これを素人と目すべきか否や頗る疑問である。亦吳大徵は支那近世の說文學の大家であるが、自分所藏の二顆の私印は自刻といはれてゐるが、それを見ると立派なもので相當の作家であるから、實はどれを境界線として素人と專門家を分つか甚だ難事である。前に擧げた諸家の作の內增山雪齋の刻に樂翁公の名を刻したもので象山の刻は川路聖謨のために作つたものであり、卷菱湖は余の親戚の名を刻し、山內

蓉堂は秋月種樹の號を刻し書簡も添はつてゐる。永坂石埭は余のために刻した處女作である。

曾て戯れに自分の經歴を語る印を刻して印譜を作らうと思つたことがあり、試みに架中の游印を檢して應用の出來るものを物色すると若干を得たが、それが多くは酒徒を意味するものであるのに一笑した。我經歴を語る印で特に刻させたものは、「越國世家」「長家山水國」だの、「放言居」「拙嬾窠」だの、「孔方兄有絕交書」「天許作閒人」「僕野人也」などがあり、圖書蒐集に就ては「薄富貴而厚於書」の印がある。羈旅に關しては「嘯傲烟霞」があり、「曾經滄海」の印がある。尙「小山林」「荻洲」「蓼汀」などの印は皆庭園中の名である。余が政界馳驅と併せて重患を語るものには鷄血石歌を百顆に分刻した印があり、藏書記には「子孫易酒亦可」の印があり、多く古簡を蒐集した時に雙魚堂の印を刻し、多く筆を集めた記念に不律庵の印がある。七十以後の揮毫には「春城七十以後所作」の印がある。

余諸家に囑して藏書印を刻すること數顆に及ぶも、概ね氏名を缺く。圖書は必竟流通のもので、氏名の印を捺すのは後繼者の迷惑を思ふが故だ。　中井

敬所が歿する數日前余の爲に刻した藏書印は大概磐溪の印文に倣ふたもので「得其人傳必不於子孫」とあるのは、その一例である。京都の森川竹窓は「此書不換妓」の藏書印があり、最愛の圖書に此印を捺したりと聞き、余も戯れにこれに倣ふて「此書不換酒」の印を作つたことがある。そして遂に藏六をして「子孫易酒亦可」の印を作らしめた。これはいふまでもなく「宜爾子孫」の裏を行つたもので、いくら子孫に珍重せよといふても、子孫これを守らないことを豫想すれば、寧ろ逆に酒資に換へるも差支ないと皮肉をいふ方が脫俗でもあり、おのづから警意も寓されてゐる。藏六は異なる篆體で二顆の印刻をしてくれた。それが自分の珍藏書に捺する藏書印である。

北清事變の時掠奪が行はれて、支那の皇室の貴重品が多く諸國に散した中に、日本にも種々のものが將來した。其中に乾隆皇后の御名を刻した大玉印があつた。これは六七寸四方の青玉で璃鈕であつたと記憶するが、印面には一半が漢字、一半が滿洲字で刻され、純金の覆があつたといふが、それは引き離されて、自分の見た時にはそれが無かつた。帝者の位牌として作られたもの

だから如何にも堂々たるものであつた。或る人が齎らしてきて賣りたいといふので濱村藏六に相談すると、藏六は讃岐の大西拜梅を訪ふて此事を語つた結果、大西が購ひたいといふ意を傳へてきた。持主は金と引換へでなければ原品を送り兼ねるといふので、自分が中に立つて、大西から送金の達したのを見ると、五圓の郵便爲替が百枚餘もあるので驚いた。大西の居村には銀行が無いので斯くする外に送金の法はなかつたのである。大西は印趣味のある人だから折角買つては見たが、面白くなかつたものと見えて、後に藏六に托して賣却せしめた。それを買ひ取つたものは例の怪僧アウンバラであつた。此僧は成金的の俗僧で、其印を其儘保存するとはせず、字面を磨消して己が印を鐫つてくれよと藏六に囑した。藏六は迷惑に思ふたが辭し兼ねて、磨消にも彫刻にも非常に勞して、多くの日子を費し、アウンバラに携帶の途中余の家に立寄つて示した。其時藏六はさん〴〵骨の折れたことをこぼしたが、あんな大なる玉印、殊に高貴の位牌であるものを磨りつぶすなどは罪の沙汰で、亦印人を職人扱ひにする無禮漢だと罵つたが、彼が如き印の改作を企てるは印

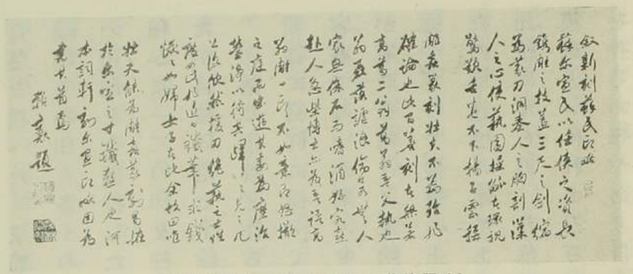
人に對する罪科であると感じた。大きな印例へば尺四方位の大印は木印であつても大工のノミなどを使はねばならぬ。眞に印人には不似合の仕事だと山本拜石が語つたこともあるが、玉印の難きはそれに幾倍するものがある。

或る時墨堤に濱村藏六を訪ふと、階上の書齋で恰かも篆刻中であつた。何をやつてゐるかと見ると、大隈伯の印を彫つてゐるので驚いた。字を書かぬ大隈さんが印刻を賴む筈はないのだ。誰の依賴かと聞くと、犬養木堂の依賴と分つて一笑した。此時分木堂は伯の代筆をやつたから印を作らせたと見える。後年侯が歿して通夜の節木堂も席に臨んだから、自分は往年の事を懷ひ出し、木堂に貴下は大隈侯の印を藏六に刻させたことがあるかといふと、木堂のいふに、君はそれを知つてゐるか。知つてゐるなら白狀するが實は二顆の印の一は大隈重信と刻し他の一顆は普通人の讀めない代筆の二字を大篆などに刻して貰ひたいと賴んだ所藏六は應じなかつたと一笑した。勿論代筆云々は話上手の木堂の戯言であるが、此折に木堂は更に語つた。大隈侯の代筆は明治時代には、重野や川田などの文章家が擔任したが段々下つて終に

自分が擔當するやうになつた。若し侯の書を明治から數十年後に渉るものを時代順に集めて見たら、觀者は必ずいふであらう。大隈侯は段々偉くなると逆比例に文と書は拙となつてゐると評するものがあらうなどいふて我等を笑はしたことがある。以上の印は大隈家に歸して居り、いつぞや遺品陳列をやつた時にその印があつたので木堂の言を思ひ出して一笑したことがある。

名刻を得ることが容易でないので初めて印譜を得て娛むより外にないと印譜の蒐集を始めたが、自分の家には一册の印譜も無かつた。但だ親族の家に家藏の趙凡夫印譜の佳本が揃つてあつたので、それが私の手に歸した。十竹齋の印譜を大阪に得たことは別項に記したが、自分の蒐集の手始は樂山堂印譜を得たことである。この印譜は二版あつて、一版は印の數が少ない。といふのは、時勢を慨する印語が多いので、世に憚かつて多少取捨する所があつたのが初版で、後に出したのが顆數も多く印語も無遠慮に激越の語を刻したものを收めてある。自分の得たのは第二版で、自分は寧ろこれを珍とした。

自分は追々汪敬淑の印譜に指を染め、飛鴻堂印譜、集古印存、漢銅印叢、錦囊印林、秋室印剩までも手に入れた。これはなか〳〵金喰ひで全部で千圓位の價を拂つた。此内多少の挿話のあるのは秋室印剩と漢銅印叢である。秋室印剩は汪敬淑が他の印譜に收め漏したものを印譜にしたもので、私印が殊に多く巾箱本であるが容易に手に入り難いものであつた。自分は特に箱を作つて、敬所に題匣して貰つたが、敬所歿後女手錄の雜記を見ると、完本を見たのはこれが始めであるといふてゐる。それほどに稀れなものと見える。漢銅印叢に就ては初め楊宇敬叔舊藏のものを得た。それが生憎上帙のみで一半は缺けてゐた。その下帙が零本で文求堂書店の書目に現はれた時は、自分は直に訪ふて見ると早や帝大の某教授に持ち去られたといふので失望したが、それが終に自分の架中に歸して定本となつたのは自分の大慶であつた。此慶びを自祝するために、一旦大學に持ち去られた本が和田萬吉博士の斡旋で余の有に歸したのを多とし盛宴を設けて和田を饗した。其後函を作つて濱村藏六に題匣を請ふた時も藏六を某酒樓に迎へた。實をいふと謝禮に托して自



〔山陽筆蘇氏印略印氏叙略（五三九頁參照）〕

娛の情を叙したのである。

古印譜の内に超然樓印賞は稀有のものだが、案外容易に手に入つた。頗る努力しても手に入らなかつたのは蘇氏印略であつた。西冷印社より近年出版した漢印譜などは大略手に入り、日本印譜は池永道雲の一刀萬象を始め鄕氏の松石山房其他凡そ著名の印譜は大概網羅し、終に自修印譜を作るに沒頭し、同人所藏の印形を輯めて數十冊に及んだが、最も骨の折れたのは、倭古印の印譜であつた。尙藏書印譜も數冊修めた。これは成るべく書物に捺しある印を切り拔いて貼りつけることをつとめたが、毀損を厭ふ書物にある藏記は已むなく映寫した。

以上の如く印影の蒐集に熱狂した時は我ながら印狂と自ら嘲つた位でいつも旅行の時は必らず、內池や

印箋を携へた。京都の古義堂仁齋の舊居を訪ふた時などは、數多き仁齋東厓蘭嵎等の印を多くの時間を費さず全部捺し終つた。賴家を訪ふた時も、山陽の遺印を全部捺した。實顆を自ら捺すことも實に愉快のものである。併し僅かに一二の印を押すために遠方の人を訪ふことは物數奇に類する氣もしたが、自修印譜七十餘冊は斯くして輯め得たのである。

印譜の模版を作ることは今は寫眞作用でやるから格別面倒でもないが、一顆毎に寫眞に撮つてジラチン版や金屬版に製して一々捺すとなるとあまり容易でないが、斯くせざれば精巧の模版は出來ない。自分の鄕人明田川政文が家產を傾けて、飛鴻堂印譜五冊全部と錦囊印林を模製したのは以上の法に據つたので、覆製の上乘のものであるが、それだけに世の賞玩を博し得なかつたのは遺憾の事であつた。支那にも複製本があるが、それは粗製でこれとは比較にならぬ。昔蘇氏印略の模刻を出版したことがある。それは高芙蓉の模刻といはれてゐるが、嘗つてその印全部を東京に齎らして來て、再版模印譜を作るの擧があり、自分も與つたので、長特一杯の模刻印を藏六の宅に親しく

見たが、全部木彫で高芙蓉が模したと思はれるものは幾許もなく、多く門人にでも刻させたものか、原印に比して頗る見劣りするものであつたが、終に第二回の模本が成つた。自分は此模本が成つて後西京の鳩居堂に山陽自筆の蘇氏印略の叙を得た。それは印人竹雲の舊藏で勾勤本に副はつてあつたから、第一回の模本に入るべくして、入れなかつたと思はれるが、あの印譜には立派な原序が澤山にあるのに、日本人の一序を加へるのは寧ろ佛頭糞で、これを除いたのは一見識であつたやうに思ふ。

鑑定は何んに就ても難事であるが、印の鑑定は其内にも難い。落欵があつても刻者の經歷の知れないものがあり、無欵のものは昔の印に甚だ多かつた。また印面に名が刻してあつてもその人は誰かゞわからず、別號など刻したものは別して分らぬ。唯作の佳否は一目辨じ得るとしても、作者とその持主が不分明であると、全く興味が無い。知名の人の名を刻した印でも動もすると僞作がある。さりとて其印は曾つてその人の書畫に捺されたことが無いとか、その人の印譜に收めて無いなどの故を以つて、直に僞作と斷ずることも出

來ない。何人でも自然常用の印があつて、幾百の印を藏してゐても、二三四五に限つて用ひる人があり、或は人から寄せられた印などで意に滿たないと用ひないことがあるから、その人が捺した例の有無を以つて眞贋を判ずる事は危險である。自分の架中に木戸公の印が三顆あるが、これは大阪の某醫家が藏してゐたもので、其來歷を質すと、もと大阪の割烹店花外にあつたのだといふてゐる。花外は木戸公が流連した家で、加賀屋といふ家名を俗として音通で花外の名を命じたのも木戸公であると聞いてゐるが、そんな關係で此家に公の印が存してゐるのは不思議はないから、自分は疑を容れず架中に置いてゐる。これなどは來歷で鑑定する一例で、名人の印が往々其親戚の家に發見されることに不思議はなく却つてそれを正しいと鑑定される。自分の知つてゐる範圍では、中井敬所翁は尤も印の鑑定を能くする人であつた。或は唯一の鑑定家であつたかも知れない。芙蓉とか虛舟とか大雅などいふ高級作家の作は、どんな印人でも鑑定をするが、敬所は極めて廣汎に涉つて、一見直ちに誰の作と判じた。あの人は長壽で大抵の作家とも交つてもゐたであらう

から、鑑定も出來るのであらう。自分は敬所の歿後、その遺愛の雜印が帝室博物館に委托されてあるのを一覽したが、其多くの印は諸家の作を改刻の際磨り潰さず、印面の處を薄くノコギリで斷つて他の石に貼りつけたものであつた。敬所は流石に鑑識があるので諸方から改刻を托された時、惜んでそれを保存したのであらう。此心掛はすべての印人にあらまほしと自分は感じたが、敬所は斯ることに由つて鑑定力を養つたのでもあらう。自分はしば〳〵不明の印を携へて敬所の教を請ひ、意外の掘り出しものもあつた。殊に敬所は印筐に題署し且つ識語を錄することが上手で、貴重の印に箱を作つた場合、其題署を煩したことも數回あるが、敬所が歿して後は鑑定を請ふ印人は全然無くなつて不便を感じることが多く、今なほ不明の印が累々として架中に存してゐる。

大震災で多くの貴重品を失つたことは惜んでも餘りあるが自分の關心したのは諸家所藏の印の消息であつた。就中鄕氏の松石山房の印はどうなつたかと、宛がら我物のごとく災後直に其消息を聞いて見ると、本宅は回祿の災

を免がれたが、別宅の藏にあつたため全部燒失したと聞いて惋惜の情に堪へなかつた。此印に就ては自分の既刊隨筆に其來歴を叙したこともあるが、我邦に於ける稀有のコレクションで、これのみは支那に誇るに足るものであつたのに、今は唯印譜を存するのみとなつたのは殘念の事である。鄕氏の印に比しては數に於ても質に於ても第二流に屬するとはいへ、支那の名印數百を藏した菊地惺堂の印も一顆殘さず亡びた。自分はその印影を幾んど全部所持して居るが菊池家にはそれすら無いと聞き悵然とした。災後記念にと焚餘の玉の關防印を貰ひ受けた。猛火を浴びたから光澤は失せても儼として存し、印面に變化もないのを見て、玉の耐火を初めて經驗した。

印話採餘

先考は幼少より書を能くせられた。卷菱湖は我が鄕土の出身であるけれども、先考の幼時は菱湖も漸く老いた頃で、先考は其門人萩原秋巖に就て學ばれた。時々江戸に淸書を送つて直しを請ふたので、其淸書は保存されてゐたが數百枚の多きものがあつた。十五六歳の書として、如何にも老熟のものであつた。明治の初年高鍋藩の舊主秋月種樹が我鄕里に遊びに來た時、私の家に四五日宿泊されたが、山陽風の書を書かれたので、一時此人の書が大いに流行し、先考も戯れに其書風に擬されたが、ある時秋月の眼に觸れて、秋月は先考に向つて「君は自分よりもよく書く、俺が揮毫を欲するものがあらば代筆してよろしい」といふて、自家の印を特に贈られた。その印は「漢高苗裔」「秋月種樹」と刻した俗にいふ下駄印であつたが、その印は獅鈕の大石印で魚腦らしい貴重の印材であつたが、書生時代に人に割愛したのは今思へば惜しいことをした。先考は晩年東京に居を移されてから、宮內省に

奉仕して辭令を書いたり、聖覽に供する寫本を書いたりされたが、その頃から篆書を學び始め、數年にして堂に入つた。篆書研究の結果として數部の字書の稿本が家に存してゐる。篆字の經卷一册は特に我が家で珍藏してゐる。曾つて亡友の碑文を金井之恭に書かせたことがある。楷書で二百字ばかりのものであつたが、先考は其拓本を見て筆畫の正しからざる字があるとて四五の字を難ぜられた。如何さま篆字の根本に溯つて考へると確かに筆畫の誤まつてゐることが理解された。昔菱湖が說文家山梨稻川に「ウソ字書き」と罵倒されて、それから說文研究を心掛けたといふが、篆字の研究が書道に如何に大切であるかが首肯される。先考が晩年一意篆字の研究に沒頭されたのも、まことに偶然でなかつた。尙どんな印人にも苦作の印が一つや二つはある。それは赤壁の賦などを一印に收めて刻するので、細刻のものであるから匆卒出來るものでない。一日數字を刻し十數日若くは數月を經て初めて成るものである。これは布字の練習などに刻苦して作るもので、人から委頼されても印人は喜ばないものだ。これには分刻

の印もあつて、長篇の詩文を數十顆に分刻するので、孝經全篇を刻したものや蒙求全部を刻したものを見たことがある。家藏には半迂の心經分刻と刀畔の鷄血石歌分刻百顆の瓦印があり、漢人の刻に係る獅鈕壽山石三寸四方に歸去來賦を全篇刻したものと、半迂の刻した蘭亭序、天保九如などがある。印人は娛んで腕自慢に刻することが多いので概して佳作である。

自分の架中に青木木米の製した磁印が一顆ある。方形の印で四方に青華の山水が畫されてある。これは頗る珍物であるが、他に西京の三浦竹泉の先代が模作した磁印が二顆ある。高さ一寸五分許の楕圓形のものだが、周邊に極密の青華山水がある。これは自分が特に竹泉に囑して作つて貰つたものだが、來歷をいふと、曾つて木米作の印が他の印と共に琳琅閣の手に入つたことがある。自分はそれを見るに及ばず人に取り去られた。其人は特に筐を作つて竹泉に題筐を請ふたことを聞き、竹泉とは懇意であるので模作を依頼したら悅んで應じた。多分鈕の山水の粉本が取つてあつたものと見える。これも無刻で竹泉共箱で余の珍藏中のものである。

自分が初度佐渡に游び眞野御陵を拜した折、順德帝遺愛の古梅の材が陵墓を守る人の家に藏してあつたのを割愛を請ひ、二三の木印を作つたことがある。内一顆は濱村藏六が順德崇禮の四字を隷體に刻したのが今架中に存してゐる。

予が往年燕京に游んだ際、瑠璃廠を屢〻訪ふて印を漁つたが、一も意に適ふものなきに失望した。僅かに玉印一箇を得たるが、それは奉天の日本人の店であつた。瑠璃廠の諸店に賣る印は、文三橋の刻銘などあれども皆贋物である。曾つて印人圓山大迂に此事を語ると大迂曰く、支那では城邊の大道に莚を敷いて印材を賣つてゐるが、此商人は流石に篆刻の技を有し印刀を弄しながら、印材を販つてゐる。文三橋の贋物は概ね此輩の僞作で、これを城隍彫と稱し、篆刻家は擯斥するといふた。

予の印狂の名が漸く同人間に喧しく、赤堀又次郎氏が一日風呂敷に包んだものを持ち來り、余に贈られた。開いて見ると、尾張大根であつた。氏は尾張の人、この大根は昔藩主に獻上する時必ず黑の檢印を捺すを例とした。

自分に贈られた大根にも黑印があつたので其贈られた所以が知れて一笑した。

又曾つて同氏から贈られたものに漢時代の模印がある。原印は「委奴國王印」と刻した金印で、それは九州邊の地中から掘り出したものといはれてゐるが、自分に贈られたのは、眞鍮の材で原印をつくり瑠鈕をも模作したもので、入章も原印そつくりであるが、誰かに刻を賴まんとして果さず其儘になつてゐる。此印箋は印界に保存されてもゐるが、材を原形の通りに模したものは珍重するに足るのである。

俳人一茶に妙な印のあるのでおもしろく感じたことがある。それは名などを刻せず、圓形の中に「之印」の二字が刻されてゐた。多分一茶の意では、名は自署してゐるから氏名印は寧ろ贅物だといふ見識から、自署の下に此印を捺し自署が即ち印文だと皮肉つたのであらうと一笑したことがある。

然るにある時偶然「書」の一字を刻した銅章を得た。一寸四方の印だが、書の一字は天平頃の古文書から寫したらしく如何にも堂々たる行書で自分は

ひどく其書に惚れこんだ。こんな印は何んの爲に刻したものか分らないが、若し一茶の手に歸したら、自署の名の下に捺する用印としたらうと思つた。自分は古人の詩を揮毫した場合、自作にあらざることを標するため、自家私印の下に之を捺することが往々にある。

幕末の印人に蒿春齋といふ勤王家があり、自分の鄉里にも來たことがあつて、其人の日誌を閲するに予の父の印を刻したことが見えて居る。此人は曾つて赤穗義士の銘々印を刻し、一幅の印譜としたことがあつて、それは稀に流布してゐる。自分の家にも一幅藏してあるが家大人はその對幅として水滸豪傑の人名印を前者と同じ體裁に捺し自筆で註されてある。この印は立原杏所の刻で、水府出身の裁判官が新潟に來た時自分の戚家丹吳氏に割愛したものである。すべて四方刻で四五十人に及んでゐるが、全部ないので、知名の篆刻家に分刻を賴んで、全璧にしたいと目論だこともあり、現に敬所其他に依賴したけれども遂に成らずに終つた。杏所は飛鳩堂印譜に枕籍して研讃を積んだ人であり、此水滸印は殊に飛鳩堂の趣を寓して

ゐる。先考の手澤に係るものでもあるから、架中の珍として什藏してゐる。

自分は印漁りの序に指を絲印にも染めて五十數顆を藏してゐる。此印は俗趣味のもので、不明の文字が多いが、鈕には棄て難い雅趣の存するものがあつて、長い間出處不明であつたが、日本製では勿論無く、支那製でもない證據には嘗つて支那に出たことがなく、却つて朝鮮に往々出るところから、今は漸く出處が朝鮮と知れた。豐太閤も此印を使用してゐるから、天正以前のものであらう。隨分日本の趣味に投ずるやう製作した跡も見えてゐる。日本の模造もあるかも知れないが、ザラに坊間にあるのは賞玩に値しない。古色のある精作を得ることは容易でないので昔は館柳灣や大阪の富豪平瀨家に百顆を藏したので誇とした。自分は幸に鵜殿某なる人が十年も苦心して集めたのを一擧して得たので、五十餘を藏してゐるが、安田善次郎氏は極力生前此印を蒐集したので、各所の珍藏が皆此人に歸し其數は千にも及んで、此人の右に出るものは無い。自分はそれを見るに迨んで、糸印蒐集を全く斷念した。

自分は往年讃岐高松の舊藩主松平頼壽伯に伴はれて高松に赴き、松平家の藏書の調べをしたことがある。各藏書に「披雲閣圖書記」の印が捺してあるが、其印が紛失したと聞いたから、自分は印影を東京に持ち歸り、吉田半迂に模刻させて、それを松平家へ贈つた。松平家では喜んで箱を作り、私が贈呈したことを錄し、爾來此模印を捺してゐる筈だ。元來松平家は水戸の親戚であるので、修史をやつた業蹟もある家柄だ。

冨山房が國民百科大辭典の編纂中、編輯主任から特に篆刻の項を余に執筆せよと頼んできた。篆刻家に相當の人もあるのに、印刀を握つたこともない自分に依頼して來たのは間違とも思つたが、同書店には淺からぬ緣故があるので、敢て辭することなく、篆刻の略史やうのものを書いて寄せたが、それは甚だ不備のもので我ながら不滿足のものであつたが、編輯部では更らに標本となる古今内外の印を集めた一箋を添へたいといふて來た。各家の愛藏に係る名印を自分の手で聚めることは頗る煩はしく到底出來兼ねるので、自分の愛玩の印三十顆ばかりを標本に充てたのは、思へば大膽の

仕業であつたが、いつ散ずるかも知れない家藏の印影を、永久國民の手にする辭書に托して不朽にしたのは偶然ながら愉快の事であつた。

自分が折に觸れて印に就て既刊隨筆に收めたことがいくらかある。參考にとその標題に併せて所錄の隨筆を左に掲げおく。

藏書印の考察　（代醉錄）
石を語る　（代醉錄）
印の趣味　（春城隨筆）
印趣味の鼓吹　（春城閑話）
鄕男の松石山房　（擁爐漫筆）
細川林谷　（文人墨客を語る）
池永道雲　（春城隨筆）
印の略史（篆刻の項）　（國民百科大辭典）

印を多數蒐めると、整理上それ〴〵の印を納める筐が必要となつてくるが、適當の箱を獲ることが、一寸面倒である。いくら骨董店を漁つても印筐

は容易に手に入らない。極めて貴重の印には特に印筐を製しもするが、種種の箱を間に合せるとなると、自然支那製の箔繪の箱が尤も調和する。何分にも重量のあるものだから、箱は堅牢を要するので、革筐が尤も重寶で、震災前には此種の筐がかなり骨董舗に存在したもので、數十顆の印は皆此革筐に納めてある。自分の架中には十數の革筐があるが、隨分選擇に骨が折れた。さて此等の革箱の總體を納める印架が無いかと、骨董店を漁つても、久しく適當のものが無かつたが、仕合に一箇適當のものを得た。それは高さ七尺幅六尺許の双方に開く扉があつて、其扉には米元章の長篇の詩が螺鈿に裝されてゐて、黑塗唐もので誠に堂々たるものである。其詩を讀んで見ると藏書を詠じたもので、書架であることが分つたが、米元章は何人も知る愛石家であるから、印架に應用しても不適當でないと、それを購ひ入れて數十の印箱を此内に納めて、整理が漸く成つた。

21592

昭和十四年十一月三日印刷
昭和十四年十一月八日發行

春城隨筆
餘生兒戯

著作權所有

定價貳圓八拾錢

著者 市島謙吉

發行者 東京市神田區神保町一丁目三番地 合資會社 冨山房 冨山房社長 坂本守正

右代表者

印刷所 東京市牛込區榎町七番地 大日本印刷株式會社 榎町工場

發行所 東京市神田區神保町一丁目三番地 合資會社 冨山房 振替東京五〇一番 電話神田(25)二一七一番 二一七八番

市嶋
大津